

スーパーロボット大戦Tー交差する運命ー

カイト・レイン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは三つの地球の命運を賭けた大いなる戦いの歴史…。

退墟と諦めが支配する黄金の時代を迎えているゴールド・アース…。

一度は平和を掴みかけたが、再び争いへと発展してしまったブルー・アース…。

廃墟化仕掛けている世界で、多くの侵略者から各地域を守り続け、平和な世を目指しているレッド・アース…。

この異なる三つの世界で…人類と地球の存在意義を懸けた戦いが始まる。

命を懸けて護るべき故郷——それは、地球（TERRA）だ。

追加参戦作品一覧

☆Ⅱ現時点でのスパロボ新規参戦

●Ⅱ機体のみ参戦

・機動戦士ガンダム 閃光のハサウェイ ●

・新機動戦記ガンダムW Endless Waltz

・機動戦士ガンダムSEED

・機動戦士ガンダムSEED DESTINY●

・劇場版 機動戦士ガンダム00 ―Awakening of

the Trailblazer―

・ガンダムEXA☆

・ガンダムビルドダイバーズ☆

・魔神英雄伝ワタル

・六神合体ゴッドマーズ

・エヴァンゲリオン新劇場版：序

・エヴァンゲリオン新劇場版：破

・エヴァンゲリオン新劇場版：Q●

・シン・エヴァンゲリオン●

・鋼鉄神ジーク

・地球防衛企業ダイ・ガード

・銀河旋風ブライガー

・機獣創世記ゾイドジェネシス

・鉄のラインバレル（原作漫画版）

・蒼穹のファフナー●

・蒼穹のファフナー HEAVEN AND EARTH

・最弱無敗の神装機竜☆

・クロスアンジュ 天使と竜の輪舞

・神無月の巫女☆

・コードギアス 反逆のルルーシュR2

・バディ・コンプレックス

・バディ・コンプレックス 完結編 ―あの空に還る未来で―

・ナイツ&マジック☆

・絶対無敵ライジンオー

・天蒼軌道アルヴアドリング☆

・機甲界ガリアン

・特命戦隊ゴースターズ☆

・銀河機攻隊 マジェスティックプリンス

- ・劇場版マジエスティックプリンス 覚醒の遺伝子☆
- ・重神機パンドーラ
- ・ガリーリー・エアフォース☆
- ・天元突破グレンラガン
- ・劇場版 天元突破グレンラガン 螺巖篇
- ・ウルトラマンオーブ☆
- ・仮面ライダージオウ☆
- ・SSSS・GRIDMAN☆
- ・スーパーヒーローージェネレーション☆

目次

男性主人公

プロローグ 再会と出会い | 1

共通ルート

第1話 クロガネと少年と夕陽の風来坊 | 10

第2話 世界を守りし戦士達 | 37

第3話 天使降臨 | 72

第4話 覚悟のカップリング | 94

スペシャルシナリオ リンクする絆 | 124

第5話 正義の代償 | 134

第6話 疾走する正義 | 168

第7話 黒の執行者 | 208

第8話 変化する想い | 239

分岐シナリオ1 | 263

新国家日本ルート

第9話 迷える再会 | 271

第10話 本当のバディと友達 | 286

第11話 覚・醒 | 308

第12話 戦・士 | 325

第13話 運・命 | 350

女性主人公

プロローグ 目覚める巨神 | 385

男性主人公 プロローグ 再会と出会い

《2年前…西暦2086年》

青い地球…。

「俺は小田切 おだぎり 拓哉 たくや…。

過去に様々な事があり、ある人体実験の被験体にされていた。

だが、今はその研究施設を抜け出し、ある人物を2人探している。

…その内の1人がこの研究施設にいるという情報を手に入れ、侵入していた。

警備員1「侵入者はどこに行った!?？」

警備員2「わかりません!監視カメラも全て、破壊されています!」

警備員1「な、何という奴だ…!探せ!ここにはあの女と…あのお方が開発したアレがあるのだぞ!」

俺は物陰に隠れながら、警備員達の話聞く。

あの女とは俺が探している人物の事だろう。

…だが、アレとは何だ…?

嫌…今考えていても仕方ない。…兎に角、一刻も早く彼女を探さない…。

俺はある部屋の前に辿り着き、扉を開く。

そこには手術台の上で両手両足を縛られ、意識を失っている少女がいた。

その少女の顔を見て、俺は安堵の気持ちになる。

…笑う事は出来ないが…。

しかし、周りを確認すると、使用を終えた注射器などが散乱している…。

俺はそれを見るたびに怒りを覚えるが、すぐに落ち着き、彼女の拘束器具を破壊し、彼女に声をかけた。

拓哉「おい、起きろ。おい」

? 「つ…んうつ…?…ヒツ!?!?」

目を覚ました少女は俺を見るなり、怯えた表情で俺から逃げようとして、手術台から転げ落ちた。

俺をこの研究施設の人間だと思っているのか…?

いや、俺を覚えていないはずがない…。彼女は…俺の…俺の…。

拓哉「落ち着け、俺は研究施設の人間ではない。小田切 拓哉だ」
名前も名乗った。

? 「小田切 拓哉、さん…? あなたもこの研究施設の被験体だったのですか…?」

…何っ…?

何故だ…何故、彼女は俺の事を覚えていない…?

…もしや…。

拓哉「お前…何も覚えていないのか…?」

? 「…はい。人体実験の影響でだと思いますが…」

人体実験の影響で記憶を失った…?

何故だ…何故、奴は…!

俺から何もかもを奪おうとする…!

? 「あの…その口ぶりですと、あなたは私の事を知っているのですか?」

拓哉「…」

知っている…嫌、知らないはずがないんだ。

…だが、記憶を失っているならば、余計な混乱は避けたい…。

拓哉「池波^{いけなみ} 夏華^{なつか}…それがお前の名だ」

夏華「池波 夏華…。私の名前…」

拓哉「夏華、俺は行く。…お前は どうする?」

夏華「…私も連れて行ってください。この様な所には…いたくありません…!」

拓哉「だったら、ついて来い」

夏華「あ…小田切 拓哉さんでしたよね…? では、リーダー…とお呼びしてもよろしいですか?」

リーダー…?

拓哉「…何故リーダーだ？」

夏華「リーダーの様な雰囲気をしているからです！」

…意味がわからない。

拓哉「勝手にしろ」

夏華「はい！勝手にします！」

この無邪気さ…。どうやら、この明るさは失わなかった様だな。

…俺とは違い。

拓哉「無駄話はこのを出てからだ。行くぞ、夏華」

俺は夏華の手を引き、部屋を後にする、が…。

警備員「見つけたぞ、侵入者だ！」

見つけたか…。

夏華「り、リーダー…！」

拓哉「問題ない」

警備員達が、拳銃を構える前に彼等の懐に入り、1人残らず、殴り飛ばした。

夏華「す、凄いです！リーダー！」

拓哉「盛り上がっている場合か。…早く行くぞ」

そう言い、夏華の手を取ろうとしたその時だった。

夏華に向けて、拳銃を構えた警備員の姿が見えた為、俺は夏華を突き飛ばし、代わりに銃弾を右腕に受ける。

何とか、仰け反り、かすらしたが…血が溢れ出てきた。

夏華「り、リーダー…！血が！」

拓哉「騒ぐな。…何ともない」

最後の警備員を気絶させ、俺は夏華の手を取り、走り出す。

…だが、不意に夏華が止まる。

拓哉「…どうした？」

夏華「少し待ってくださいね！」

夏華は自身の服の袖を破り取り、血が出ている右腕に巻き付けた。

夏華「これで血は止まると思います！それより、危ない事をしないでください！」

拓哉「…。騒ぐな、何ともない」

実際、この程度の傷、痛くも痒くもない。
俺はすぐに夏華の手を取り、走り出す。

夏華「(リーダー…痛くないのでしょうか…?)」

そんな夏華の心の疑問も知らずに俺達はある部屋に逃げ込んだ。

拓哉「…分かり切つてはいたが、警備が強化されたな…。このままでは脱出が難しい」

夏華「…?あ、あれ?リーダー。警備の人達がもういません!」
何…?

夏華に言われ、部屋の外を見てみると先ほどまでしつこい追いかけてきていた警備員達の姿がなかった。

諦めたのか…?

だが、突然、大きな爆発音と共に室内が揺れた。

夏華「キヤアツ?!?…な、何ですか?!?」

これは…外からの攻撃…?消えた警備員…という事は…。

拓哉「奴等、この研究施設を諦め、施設ごと俺達を始末するつもりか」

夏華「そ、そんな?!?」

…どうする。この施設が崩壊するのも時間の問題だ。

…何かないか?

俺はこのような所で死ぬわけにはいかない。

あいつを…奴を見つけ出すまでは…!

夏華「り、リーダー!これを見てください!」

俺は夏華の声に視線を向けると目の前にはある一機の機動兵器があつた。

見た目は赤紫の機体で目が赤い。

拓哉「これは…?見た所、モビルスーツでもビルドベースの機体でもナイトメアフレームでもないが…」

俺と夏華が目の前機の機体について考えているが、研究施設内の揺れは強くなっていく。

拓哉「…考え事をしている暇はないな。それなら…」
この機体に乗るしかない。

拓哉「夏華、この機体に乗るぞ」

夏華「え、ええっ!? この機体にですか!?」

拓哉「そうだ。この機体でこの場を脱出する」

夏華「で、ですが…扱った事もないのに…」

拓哉「迷っている時間はない。…俺はこの様な所で死ぬわけにはいかない。…夏華、選べ…この場で死ぬか、危険を冒してでも生き抜くか」

夏華「…私は…。乗ります…!リーダーと一緒にならば…怖く、ありません!」

拓哉「…ならば、いくぞ」

俺と夏華は目の前の機体のハッチを開け、俺は前、夏華は後ろの操縦席に乗った。

そして、起動する。

目の前のモニターにDESHADEという文字が現れた。

拓哉「デイ…シェイド…?」

この機体の名前か…?

夏華「リーダー!この機体のマニュアルを見つけました!」

拓哉「そうか。それならば、お前はそのマニュアルに目を通せ」

夏華「えっ…?リーダーはどうするのですか?」

拓哉「感と慣れでいく」

そう言い残し、俺はデイシェイドを動かし始めた。

研究施設の部屋を突き破り、外に出た俺達を待っていたのは数機の機体だった。

この研究施設は奴の組織の物…という事はあの機体も…。

しかし、どれも同じ見た目…骸骨の様な姿をしている。

…量産機か。

夏華「リーダー、どうするのですか!?」

拓哉「追われるのも面倒だ。…増援が来る前に周りの敵を撃墜する」

夏華「…リーダーって、前向きですね」

拓哉「…舌を噛むぞ。…それにお前は早くマニュアルを読め」

夏華「わかりました！」
俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 拓哉VS初戦闘〉

夏華「ふむふむ…」

拓哉「(ディスプレイド…夏華を探して来ただけのつもりが、この様な機体に巡り逢う事になるとは…これも何かの前触れか…?)」

夏華「なるほど、なるほど！」

拓哉「気が散る、静かに読め」

夏華「す、すみません…」

拓哉「長引かせるつもりはない…すぐに終わらせる」

俺は敵機の一機を撃墜させた。

拓哉「全て近接武装だが…何とかやれそうだ」

夏華「マニュアルの閲覧終了しました！」

…早いな。

拓哉「早かったな」

夏華「難しい文字でもスラスラと頭の中に入ってくるのですよ」

…人体実験の影響か…?

まあいい。

拓哉「それで、何と書かれていた？」

夏華「リーダー、右下にある銃のマークが書かれたレバーを引いてください」

レバー…?これか。

俺は夏華に言われた通りにレバーを引く…すると、夏華側のモニターが輝き出した。

モニターを確認すると、ディスプレイドの姿が先程と変わっている。

それに…操縦が出来なくなっている。

拓哉「夏華、どういう事だ?操縦が出来なくなっている」

夏華「これがデイスエイドの特性です。今のデイスエイドの操縦権は私にあるんです」

何…??

夏華「デイスエイドには二つの姿があります。先程リーダーが操縦していた姿がソード。…主に剣やナイフなど、近接武器を扱う事が出来ます」

デイスエイド・ソードという事か。

夏華「そして、今私が操縦している姿はデイスエイド・ガン。銃を主に使う遠距離戦闘型の姿です」

拓哉「では、デイスエイドは戦況により、その二つの姿を切り替えられるということか」

夏華「そうです!」

すると、デイスエイドの周りに数機の機体が出現した。

…増援か。

夏華「任せてください!」

夏華が操縦し、デイスエイド・ガンは動き出した。

夏華「行きます!…一網打尽のチャンスです!…ツインマシンガン並びにミサイル準備完了!」

デイスエイド・ガンは両手に二丁のマシンガンを構え、身体中からミサイルを発射する準備をする。

夏華「…マルチロツク…オールファイア!!?」

ツインマシンガンとミサイルを一斉に発射し、デイスエイド・ガンの周りの機体を一斉に撃破した。

夏華「やりました!やりましたよ、リーダー!」

拓哉「騒ぐ程のものでもない」

夏華「う…少しは褒めてくれてもいいのに…」

拓哉「浮かれる前に残りの機体を倒すぞ。アロウズやソレスタルビーイング、コロニーのガンダムに來られても面倒だ」

夏華「了解しました!」

戦闘開始だ。

〈戦闘会話 拓哉VS初戦闘〉

拓哉「邪魔をするな。俺は奴を見つかるまで死ねない…。邪魔をするのなら、ここで潰す…！」

夏華「リーダー、武が悪いと思ったら、交代してくださいね！」

拓哉「わかっている」

〈戦闘会話 夏華VS初戦闘〉

夏華「本当は撃墜したくないですけど…死ぬわけにもいかないんです！だから、私は相手になります！」

拓哉「気負いすぎるなよ、夏華。危険と判断した時は交代しろ」

夏華「了解しました！では、行きます！」

俺達は全ての敵を撃墜させた。

拓哉「進路は開かれた…行くぞ」

この場を飛び去り、俺達は撤退した…。

？「(ふふっ。あの子が小田切 拓哉…。あの方が入れ込むのもわかるわ。いつか会いましょう…敵同士として)」

俺を監視していた者がいるとも知らずに…。

しばらく飛んだ後、俺達は林の中に身を潜める事にし、デイシエイドも機能の一つのステルスモードで姿を眩ませ、俺達は降りた。

拓哉「…」

夏華「ふう。何とか逃げ切りましたね…。それにしても、リーダー…これからどうするのですか？」

拓哉「決まっている。奴を探し出し…」

夏華「探し出し…？」

拓哉「必ず…殺す」

夏華との再会、デイシエイドとの出会い……ここからが俺の本当の始まりだ。

……だが、この2年後に、俺は自身のための戦いだけでなく、三つの地球の戦いに巻き込まれるなど、この時の俺は知る由もなかった……。

共通ルート

第1話 クロガネと少年と夕陽の風来坊

―小田切 拓哉だ。

俺達がデイシエイドと出会ってから、2年が経った。

この2年…奴と奴の組織についての情報を手に入れる事はなかった。

…だが、この2年で世界の方は大きく変わった。

まず、この地球には二つの日本があった。

普通の日本だが、この日本の九州全域では50年前に起こったビルドベースと邪魔大王国の女王・妃魅禍の戦いの未発生した謎の結界：ゾーンにより、覆われてしまった。

もう一つの日本の名はエリア11…。

今から40年前にブリタニア帝国とユニオンの共同国：ブリタニア・ユニオンによって、もう一つの日本は侵略され、エリア11という名前に変えられ、日本人もイレブンと呼ばれる様になった。

話を2年間の話に戻そう。

ソレスタルビーイング、コロニーのガンダム、黒の騎士団の活躍により、トレース・クシュリナーダを旗頭にしたOZとゼクス・マーキス、改めミリアルド・ピースクラフト率いる革命組織ホワイトファンク… 独立治安維持部隊、アロウズを裏で操っていたリボンズ・アルマーク率いる、イノベイターなどの組織が壊滅…。

なお、アロウズも奴等が隠蔽してきた虐殺行為の全てが公にされ、最終的に解体に追いやられた。

世界は平和を掴んだに思われたが、ブリタニア帝国の第三皇子であったルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが世界の覇権を握り、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアは自らを王と言い放ち、パレードを開催したが、そこで謎の仮面の男、ゼロによりルルーシュ・ヴィ・ブリタニアは討たれる。

皇帝ルルーシユの死後から1年後の2087年、世界再編により地球連邦政府が誕生し、エリア11は新国家日本と名前を変更され、事実上、二つの日本が戻ってきた。

平和への道を辿りつつあった世界だが、ジャーク帝国を名乗る5次元人、界震と呼ばれる現象により発生したエネルギーが核であるフラクタルノットを形成、それが周りの物質を取り込む事で誕生したヘテロダイン、ズール皇帝率いるギシン帝国の攻撃を受けるが、それをライジンオーを所有する地球防衛組、ダイガードを所有する株式会社21世紀警備保障、そして、コスモクラッシュャー隊により、奴等の侵略を阻止された。

さらに同時刻、ナナリー・ヴィ・ブリタニアが新皇女となった新ブリタニア・ユニオンでは、ブリタニア・ユニオン内の小国であったゾギリア共和国が、国内にて新資源の「ネクトオリビウム」が発見されたことにより、周囲の「大華国」や「ロージナ連邦」といった国々を下し、領土を拡大した。

ゼロ率いる新生黒の騎士団やソレスタルビーイング、コロニーのガンダムはゾギリア共和国の領土拡大を止めようとしたが、かつての戦いのダメージが残っていた事もあってか、ゾギリア共和国が開発した機動兵器「ヴァリアンサー」の前に苦戦を強いられる。

それから1年後の2088年、さらに領土を拡大させたゾギリア共和国は大ゾギリア共和国として、君臨し、世界は大ゾギリア共和国と自由条約連合の二国家に分かれてしまう。

それに同調し、デキム・バートンがトレーズの遺児であるマリーメイア・クシユリナーダを擁して立ち上げた軍隊、マリーメイア軍が大ゾギリア共和国と手を組み、侵攻を開始する。

さらには加藤機関と呼ばれる組織も暗躍し、日本の九州では、ゲートが破られ、再び邪魔大帝国が活動を開始するがそれをビルドベースが再び対抗する。

さらに宇宙からは地球への攻撃を開始した謎の勢力、ウルガル、宇宙帝国軍に狙われる様になる。

一度は平和を掴みかけた世界は未だ、争いを忘れる事は出来なかつ

た。

…世界の危機など、俺の知った事ではないが…。

―現在、俺達は日本に向かっていった。

実は先日、北川町と呼ばれる町で巨大な竜巻が起こる事件が多発していた。

不可解なものもあるが、その竜巻の中に巨大な鳥の様な存在が確認されたという。

俺達も実際にその映像を見た。

夏華「リーダー、もう少しで日本に到着します」

拓哉「ああ」

夏華「それにしても…あの巨大な鳥の様なものは何なのでしょう…？中には邪魔大帝国のハニワ幻神という噂もあります…」

拓哉「それは確認しなければわからない。…着いたら調査を開始するぞ」

…巨大な鳥がハニワ幻神でないとしたら…あの竜巻にも奴と奴の組織が関わっている可能性がある…。

確かめないといけないな…。

俺達は日本に急いだ…。

―早瀬 浩一だ。

俺は学校で昨日の事を話していた。

降矢「いや、それにしても浩一がこんなに強いとは思わなかったよ。小学生までは病弱で大人しい奴だと思ってたのにさ」

浩一「ふくん。…だから散々俺の事を虐めてた…ってか？」

俺の言葉に降矢達はビクツとなった。

降矢「い、嫌だなあ！浩一も意地悪な事言うなよ！」

浩一「…ま。これからの何かあったらいつでもいいなよ」

降矢「はいはい。楽しみにしますよ、浩一さん！」

教師「早瀬く！ちよつといいか？」

先生に呼ばれたので俺は教室を出た。
内容は目指していた高校を推薦で行けるという話だった。
嬉しい話だ…本当にナイスな展開だぜ！
俺はフツと笑いながら、教室に入った。

―新山 理沙子です。

あたしらは先生と浩一の話しを聞いていた。

順風満帆って感じらしいね、浩一は…。

理沙子「…」

矢島「どうした、理沙子？」

理沙子「ああ…矢島…」

矢島「また浩一の事か？」

矢島はお見通しなんだね…。

理沙子「うん…浩一、どんどん変わってっちゃうから心配で…」

矢島「確かにあの事故から変わっちゃまったもんな、あいつ。…それにしても、お前…浩一の面倒が見られなくなつて、寂しいって言い方だな」

なっ…!!?

理沙子「ち、違うよ！そんなんじゃないよ！」

矢島「わかつた、わかつた。心配するな！放課後にでもお前が心配してるって伝えといてやるよ」

理沙子「だから、そんな変な意味とかで取らないでよ！」

矢島は歩き去つた…。

もう、矢島つたら…！

理沙子「そんなんじゃないんだって…多分」

あたしって…どうなんだろう…。

―小田切 拓哉だ…。

俺達は北川町に着き、デイシエイドから降りた。

夏華「ここが北川町…至つて普通の町ですね…」

拓哉「…手分けして、調査するぞ」

夏華「えっ!?? 別れるんですか!??」

拓哉「当たり前だ。…別れた時の方が効率がいい。何かあれば連絡しろ」

俺はそう言い残すとその場を歩き去った…。

夏華「あつ…! もう、どうして気付いてくれないのでしょうか…?」

―早瀬 浩一だ。

俺は矢島に呼ばれ、一緒に下校していた。

浩一「それで、何だよ、矢島。話って?」

矢島「理沙子がお前の事心配なんだってよ」

理沙子が…。

浩一「何だ、そんな事かよ…。別に心配する必要なんてないのに…」

矢島「寂しいんだろうよ。お前が変わってっちゃうのが」

浩一「迷惑なんだよなあ、そう言うの。俺が変わっちゃいけないみたいじゃないか」

矢島「まあ、そう言っただけでやるなよ。俺だってお前の変化には正直驚いて…」

へえ…。

浩一「やつと本音が出たな」

矢島「…何の事だ?」

浩一「理沙子が心配してるってのも本当なんだろうけどさ。お前も面白くないんだろう?俺が変わったのがさ。ガキの頃から自分が守って面倒見てきた奴が急に自分より強くなっちゃったからさ。それで面白くないんだろう?」

すると、矢島は俺に掴みかかってきた…。

矢島「お前…本気で言ってるのか!??俺の事は何言っただけでいい…だが、理沙子の気持ちだけは踏みにじるな!お前だっただけで気付いてるんだろ!??理沙子が幼馴染なだけでお前を…」

そこまで聞いた俺は矢島の手を払った。

浩一「…もう行くよ。降矢達と遊びに行く約束をしているんだ」

俺はそのまま立ち去ろうとする。

矢島「最低だな、お前…」

最低、か…ふん。

♪♪♪♪♪

ん…?

突然、ハーモニカのような音色が聴こえてきた…。

浩一「…気のせいか」

俺は今度こそ歩き去った…。

↓池波 夏華です！

リーダーと別れた私は調査をしていました！

夏華「…それにしても、竜巻が発生していない状態でどうやって、調査をすればいいのでしょうか…」

折角、リーダーと2人になれるチャンスだったのに…。

…もう少し探索したら、リーダーに連絡を取りましょう。

夏華「あれ…?」

私は街中で騒いでいる三人組を見つけました。

メガネをかけている人はおかしな機械を手に周囲を見渡しています。

夏華「あ、あの…!」

ナオミ「え?どうしたの?」

私が声をかけると女の人が首を傾げました。

夏華「何をしているのですか?」

シン「あの竜巻を追跡しているんですよ!」

竜巻…?!?

これは何かいい情報が手に入りそうです!

夏華「その竜巻について、色々教えてほしいです!」

ジエツタ「えっ?どうして?」

え…あ…そう言えば、怪しまれますよね…。

夏華「え、えつと…学校の自由研究の題材にしようかと思ひまして

！」

ナオミ「そつか！じゃあ、教えてあげるね！…それより私は夢野

ナオミ！こっちはジエツタ君と松戸 シン君！私達はサムシング
サーチピープル…怪奇現象追跡サイトを運営している施設チームよ」

夏華「サムシング…サーチピープル…？」

ジエツタ「通称、SSP。俺達は世界のミステリーや怪奇現象を解
明する事をモットーにネットとかに投稿をしているんだ！」

ミステリーや怪奇現象の解明をモットー…確かに今回の竜巻事件
は美味しいネタという事ですね。

シン「それに僕達はあの竜巻の中に入ったんだけどね」

…はい？

夏華「え…!?？竜巻の中ですか!?？」

見たところ、怪我をされている様子も見かけませんし…この人達…
一体…。

ジエツタ「そこで噂されていた巨大な鳥…それと巨人がいたんだ」

夏華「巨人…？竜巻の中には巨大な鳥以外にもいたんですか!?？」

シン「ええ。そして、その巨人らしき存在は巨大な鳥と戦っていた
んです」

…と言う事はつまり、巨人は巨大な鳥の間では無いと…。

ナオミ「それにね。私達は車で竜巻の中に巻き込まれたんだけど
ね。そこにある男の人が飛び込んで来たの…しかも生身で」

生身で竜巻の中に…!?？

その男の人…もしや、リーダーが探している方々の仲間では…!?？

これはリーダーに報告しなければ…！

夏華「ありがとうございます！お勉強になりました！」

ナオミ「あれ？もういいの？」

夏華「はい！お勉強、頑張ってください！」

頭を下げて、私はその場を後にしました…。

―小田切 拓哉だ…。

俺はこの町を調査していたが…進展はなかった。

そもそも竜巻が起ころなければ、調査も出来ない…。

竜巻が起ころるまで待つしかないな。

すると、通信機が鳴る。

夏華か…。

拓哉「俺だ。何かあったのか？」

夏華『先ほど、竜巻の中に入った方々と接触しました』

竜巻の中に…？

俺は夏華からサムシングサーチピープル…SSPと呼ばれるチームについて話を聞いた。

拓哉「…竜巻の中にいた巨大な鳥…それと交戦していた巨人…さらに、そのSSPと呼ばれるチームの前に現れた謎の男…」

夏華『SSPの方々は竜巻の中の映像を録画できていない様です』

拓哉「そうか…。よくやった。またかける」

夏華『ちよっ…りー…！』

夏華が何かを言いかける前に通信切った。

巨大な鳥と交戦したという巨人も気になるが…謎の男か…。

？「あの竜巻について調べない方がいい」

突然、声をかけられ、俺は振り返った。

拓哉「お前は…？」

ガイ「何、ただの風来坊だ。…お前さん、あの竜巻について、調べているんだろう？…やめておいた方がいい。生命に関わる」

拓哉「何故、その様なことがわかる？」

ガイ「…」

この男…何者だ…？

まさか…。

拓哉「SSPという奴等が見たのはお前か？」

ガイ「さあな」

俺は男の様子を伺っていると…。

降矢「で、浩一。これからどうするよ？」

浩一「…（理沙子が…俺が変わって寂しい、か…）」
降矢「浩一？」

浩一「あ、ああ…。悪いけど俺もう帰るよ」

降矢「何だよ！テンション低いぞオ？」

…この町の学生か。

騒ぎになるのも面倒だな

だが、学生達の前にフードを被った複数の人物が現れた。

浩一「!!？」

喧嘩…にしては様子が変だ。

ガイ「…」

謎の男もフードの人物達を警戒している。

浩一「何だ？あんた達…この前の連中に頼まれてもして来たか？」

すると、フード集団は学生達に襲い掛かった。

浩一「バカが！」

学生達の中心にいた少年がフード集団に攻撃をすると、フード集団の1人の顔をとらえた。

確かに顔を直撃した…だが、何故か違和感がある…。

降矢「…何か変だぞ…こいつら。だ、大丈夫なのか、浩一？」

浩一「う、うるさい！」

フード集団は着ていた服に手をかけ、投げ捨てる様に服を脱いだ。

ヒトガタ1「…」

ヒトガタ2「…」

ロボット…だと…？

浩一「なっ…!?？」

降矢「バケモンだ!!？ひいひいひいっ!!？」

先程戦っていた少年の取り巻きらしき学生達は少年を置いて、逃げ出した。

浩一「お前ら！俺を置いてくのかよ！」

ロボット達が少年に襲いかかる…。

だが、俺の前にいた男がいつの間にか少年を守る様に、ロボット達を蹴り飛ばした。

ガイ「早く逃げろ！」

浩一「あ、ありがとうございます！」

男の言葉に少年は逃げ出した。

すると、男は俺に視線を移した。

ガイ「お前さんも逃げろ！」

目立つのも面倒だ。…ここはあの男の言葉通りに去るとしよう。

頷いた俺は逃げ始めた…。

第1話 クロガネと少年と夕陽の風来坊

ー早瀬 浩一だ！

俺は突然現れた男の人に助けってもらって、ロボット達から逃げた…
が…。

何体かは追いかけて来た。

浩一「ちっ…！俺を普通のガキだと思うなよ！」

ロボット達の相手をするが…俺の攻撃が全く効かない…！

浩一「クソツ…！」

このままじゃ…！

しかし、俺の背後からロボットの一体が殴りかかって来たが…。

矢島が現れ、蹴り飛ばした。

浩一「矢島…!!? どうしてここに!!?»

矢島「話は後だ！ここはひとまず…逃げろ！」

俺と矢島は全速力で駆け出し、何とかロボット達を巻いた…。

何なんだよ、あいつら…。

矢島「ここまでこれば…大丈夫だな」

浩一「チクシヨウ…」

また…助けられるなんて…！

矢島「どうした、浩一？俺に助けられるのが、そんなに不満か？」

矢島の方は視線を移した時、俺は目を見開いた。

逃げたと思ったが…矢島の背後にあのロボット達がいたからだ。

矢島「ぐあっ！」

浩一「矢島！」

ロボットの一体に殴り飛ばされた矢島に俺は駆け寄った。

浩一「大丈夫か、矢島!!？」

矢島「…ああ。何とかな。それより…逃げろ、浩一」

矢島の言葉に俺は驚く。

矢島「俺が囷になる。その隙に逃げるんだ…！」

や、矢島…！

矢島「気にするな。昔からそうだっただろ？」

っ…！俺は…！

浩一「チクシヨウ…！何でまた助けるんだよ…！もう俺は助けて貰わなくても平気なんだよ！助けてもらったら意味ないんだよ！折角…変わったと思ったのに…強くなれたと思ったのに…！」

俺の叫び声と共に大きな音が聞こえる。

その音は強くなつていき、俺たちの目の前に巨大なロボットが現れ…俺達を襲っていたロボット達を拳で破壊した。

浩一「口、ロボット!!？」

俺達を…助けた…のか？

…っ！そうだ…コイツだ…！3年前の…あの事故のとき落ちて来たのは、人工衛星なんかじゃない！

落ちて来たのは…このロボットだ…！

ー小田切 拓哉だ。

拓哉「ロボット…？」

どの機動兵器でもスーパーロボットでもない…。

あの機体は一体…？

夏華「リーダー！」

夏華が駆け寄ってくる。

夏華「何なんですか、あのロボットは…!!??鬼の様にも見えますけ

ど…」

拓哉「…」

一体…何が起こっている…？

―夢野 ナオミだよ。

私はジュエツタ君とシン君に頼まれて、珈琲を買って、持っていこうとした時だったけど…。

ナオミ「ロボット…？一体何が起こっているの…？」

駆け足で歩く私だったが、前方不注意でスーツを着た男の人とぶつかってしまおう。

ナオミ「あつ…！す、すみません！」

ジャグラー「いえ。大丈夫です」

ナオミ「い、いや！クリーニング代を！」

ジャグラー「それにしても…嵐が来る前と言うのに…妙な事が起こりましたね」

ナオミ「そ、そうですね…早く逃げないと…！」

ジャグラー「その必要はありません」

えっ…？

ジャグラー「私達に被害は来ない…少なくともあの鬼は…」

―早瀬 浩一だ。

俺がロボットを見上げていると、複数の新たなロボット軍団が現れる。

加藤機関兵士「マキナを確認！これより、捕獲に入る！」

こ、今度は巨大ロボットが複数現れた…!!？

矢島「あいつ…あの鬼の様なロボットを狙ってるぞ…！」

そんな…！させるかよ…このロボットは俺の…！

浩一「いや…ナイスな展開じゃないか！」

矢島「浩一…!?? お前何する気だ!」

浩一「決まってるんだろ? コイツに乗って戦うんだよ!」

矢島「何…!??」

浩一「俺にはわかる! コイツは俺に乗れって言うてる…俺の力になる存在なんだ! 心配するな矢島…今度こそ、俺が守ってやるよ!」

矢島「浩一!」

矢島の制止も聞かず、俺はロボットに乗った。

浩一「何か…懐かしい感じだ…。ライン…バレル…そうか、それがお前の名前なのか? わかるぞ…俺はコイツを動かせる!」

俺はロボット…ラインバレルを起動させた。

加藤機関兵士「ファクターが搭乗しただと…!?? どうしますか!?!」

加藤機関兵士「狼狽えるな! 例え、マキナであろうと乗っているのはただのガキだ!」

浩一「フッフ…見てろよ、矢島! これが俺の力だ!」

? 「ヒトガタはラインバレルにより、破壊されました。並びにあのマキナに彼がファクターとして搭乗しました」

? 2 『分かりました、城崎さん。いざと言う時は私もできます』

? 「よろしくお願いします、森次さん」

俺は戦闘を開始した。

〈戦闘会話 浩一VS初戦闘〉

浩一「あの三機…ラインバレルより弱そうだな。おまけに三機とも同じデザインしてやがる。所謂量産型ってヤツか…だったら…。雑魚って事だ」

俺は敵のロボット達を倒していき、最後の三機も倒した。

浩一「へっ、何だよ! 他愛もないな!」

矢島「浩一…。何故そうまでして力を欲するんだ…!?? これが…これがお前の理由なのか!?? 俺には…弱い者虐めにしか見えないぞ…!」

浩一「弱い者虐めだつてエ!??冗談じゃない!!?仕掛けて来たのはこいつらだろう!??それにな、俺は別に弱い者虐めがしたくて力を欲してる訳じゃない!...わかるか?」

矢島「...!??」

浩一「お前にわかるか?力がない事で好きな人を守る事も出来ない悔しさが...!その好きな人を他の誰かが守っているのを見ている悲しさが!その他の誰かに自分すら守られている惨めさが!」

矢島「こ、浩一...俺のせい...なのか...!??」

?「全く、滅茶苦茶な戦い方だな。慢心から生まれたプライドだけで戦っている様だ」

っ...!??

突然、青いロボットが現れた。

森次「フツ、同じファクターの先輩として、教えてあげないといけないな。プライドなど仮初の自信でしかないという事を...」

浩一「青いロボット!??...さっきの量産型とは違う...ラインバレルと同じような機体が他にもあるのか!??」

森次「初めましてだな、早瀬 浩一君」

通信...!??

浩一「何なんですか、あなたは!??」

森次「森次 玲二。とある企業の一社員だよ」

浩一「...その企業の一社員が何の用ですか?」

森次「単刀直入に言おう。そのマキナ及びファクターとなった君は我が社の所有するモノである。だから、返してもらいに来た」

浩一「...マキナ?ファクター?何の事ですか?」

森次「マキナを操縦出来る特別な存在...我々はそれをファクターと呼んでいる。思い当たるフシぐらいはあるだろう?身体能力の特化や急激に攻撃的な人間になった事...そして、何よりそのマキナに乗っている事が君がファクターとなった証拠だ。あの三年前の事故の時、キミは偶然にもそのマキナのファクターになってしまったんだよ」

浩一「よくわからないな。確かにあの事故はコイツの所為だけ何故それで俺がそのファクターになるんです?」

森次「それは私が語ることはない。我が社に来れば直接社長がお話になるだろう」

聞くだけ無駄だな…。

浩一「フツ、まあ、どんなこと言っても俺はあなたの会社に行く気もなければ、コイツを返す気もありませんよ。だって、折角手に入れた力なんですからね！」

森次「仕方ない。ならば、こちらも力尽くで…」

絵美「森次さん、大変です！その付近で界震が起こります！」

森次「界震…まさか…！」

突然、辺りが揺れ出し、気がつくやうな複数の化物がいた。

…だけど、見覚えがある…コイツ等は…！

森次「ヘテロダイン…！」

浩一「ど、どういう事だ!?？ヘテロダインはダイガードが全部倒したんじゃないのかよ!?？」

森次「いや、界震は自然災害の一種として、認定された…つまりは、ヘテロダインがまた現れてもおかしくないという事だ。早瀬 浩一君、町に被害が出る前にヘテロダインを倒そう」

浩一「休戦って事ですか?…仕方ないです、わかりました。…ですが、俺達で町の人達を守りながら、戦えるんですか?」

森次「市民の避難はビートル隊が行なっているが…」

? 『心配ないよ、森次君。…専門家がきたからね』

森次「社長…専門家という事は…」

突然、ロボットが現れた…だが、そのロボットとは…。

浩一「ダ、ダイガードじゃないか！」

赤木「おうよ!ダイガード、ただいま到着だぜ！」

青山「はしゃぐなよ、赤木！」

いぶき「森次室長、こちらは株式会社21世紀警備保障、広報二課の赤木 駿介、桃井 いぶき、青山 圭一郎です!石神社長からお話をいただき、出撃しました！」

森次「ありがとうございます、広報二課の皆さん。…ヘテロダイン戦闘の専門家の腕…頼らせていただきます」

赤木「はい！そつちの君もいいか!?!?」

浩一「えっ!?!?あ、はい！」

ダイガードのパイロットの声が聞けるなんて…!
本当にナイスな展開じゃないか！

―小田切 拓哉だ。

…一体何が起こっている…?

現れた量産機を鬼の様な機体が倒したと思えば、青い機体が現れ、
今度はヘテロダイン…そして、ダイガードまで現れるとは…。

夏華など、現状を理解できていないのか、アタフタしている。

…しかし、これは好都合かも知れない。

拓哉「夏華、デিশェイドの準備を頼む。…あの戦闘に介入する」

夏華「えっ…!?!?でも、リーダーは面倒事を避けたいと…」

拓哉「少しでもあの鬼の機体と青の機体の情報が欲しい…デিশェイドに乗れば、何とか通信を拾えるかも知れない」

夏華「…わかりました！」

俺と夏華はデিশェイドの下まで走り出した…。

―早瀬 浩一だ。

俺は青い機体とダイガードと一緒にヘテロダインと戦っていた。

このままいけば勝てる…!

そう俺が確信したその時だった。

ヘテロダインの一体が戦いを見ていた矢島を発見し、矢島に接近した。

矢島「なっ…!?!?」

浩一「や、矢島！」

いぶき「彼…避難していなかったの!?!?」

青山「まずいぞ！ここからじゃ間に合わない！」

ヘテロダインが矢島に迫る…その時だった。

矢島に迫っていたヘテロダインを巨大な影が吹き飛ばした。

そこをしつかり見てみるとそこには赤紫の機体がいた…。

―小田切 拓哉だ。

俺と夏華はデイスエイドに乗り、出撃し、ヘテロダインを切り飛ばす。

夏華「な、何とか間に合いましたね！」

拓哉「…」

すると、青の機体から通信が入った。

森次「その機体のパイロット…。その機体は一体何だ？」

夏華「ど、どう答えますか、リーダー…？」

拓哉「何も話すな。…ヘテロダイン以外と戦闘の意志はないと伝えておけ」

夏華「わ、わかりました！」

森次「…！文字による通信…。こちらに対しての戦闘意志はない、か…」

いぶき「どうしましょう、森次室長？」

森次「我々とは戦闘を行わないと言っているんです。ここは彼と協力して、ヘテロダイン撃退を急ぎましょう」

浩一「そうですね」

どうやら、通じた様だな。

夏華「…攻撃してくる事はないですね！」

拓哉「攻撃して来るのが、誰であろうと邪魔をするなら、潰す…それだけだ。例えば、ヘテロダインだろうと、ダイガードであろうとな」

夏華「リーダー…」

まずはヘテロダインを倒す…情報を得るのはその後だ。

俺達は戦闘を開始した。

赤木「ヘテロダイン！何度来ようと俺達が退治してやるよ！」
いぶき「久しぶりの戦闘よ！気をつけてね、2人とも！」

青山「赤木！サポートは任せろ！」

赤木「ああ、頼むぜ！サラリーマンだって、町を守れる事は出来るんだ！」

〈戦闘会話 浩一VS初戦闘〉

浩一「つたく：邪魔しやがって！バケモノはとつとと駆除してやる！」

〈戦闘会話 森次VS初戦闘〉

森次「ヘテロダイン：。戦闘は初めてだが、資料で能力は把握済みだ。：化物に容赦はしない」

〈戦闘会話 拓哉or夏華VS初戦闘〉

夏華「リーダー、ヘテロダインの過去のデータを転送します！」

拓哉「了解。：俺の邪魔をするのなら：容赦なく潰す」

俺達はヘテロダインを倒していくと：。

突然、巨大な竜巻が発生した。

浩一「こ、今度は何だよ!?!?」

森次「最近起こっている正体不明の竜巻か：!」
遂に起こったか：。

ークレナイ ガイだ。

竜巻が起こった：今度こそ、倒す！

だが、俺がよく竜巻を見ると、竜巻に女が1人、吸い込まれていった。

：前回助けた奴等の彼女じゃないか。

また顔をつっ込んでいるのか。

俺は竜巻に突入し、巻き込まれている女を背負う。

ナオミ「またあなた!?!」

ガイ「目瞑ってな!」

俺は竜巻から逃れる為に、一度急上昇し…その後、急降下した。

その際、女から悲鳴に近い声が聞こえて来たが、俺達は問題なく、地面に着地した。

ナオミ「…」

ガイ「大丈夫か?」

ナオミ「う…うん」

すると、上空から巨大な鳥…マガバツサーが現れた。

拓哉「あれが竜巻の中の鳥の正体…?」

赤木「まるで怪獣じゃないか!」

ヘテロダインとかいう奴等と戦っているロボット達もマガバツサーの登場に驚いている様だ。

ガイ「お出ましか」

渋川「おい、君達!」

ナオミ「叔父さん!?!」

渋川「何してるんだ!早く逃げろ!」

ちようどよかった!

俺は背負っている彼女を彼に渡した。

ナオミ「ちよつと…!?!」

渋川「おい、君!」

俺は走り、何かの機械の中に入り、オーブリングを取り出した。

ガイ「ウルトラマンさん!」

オーブリング『ウルトラマン!』

まずはウルトラマンさんのカードをオーブリングにリードする。

ガイ「ティガさん!」

オーブリング『ウルトラマンティガ!』

次にウルトラマンティガさんのカードをリードする。

ガイ「光の力、お借りします!」

オーブリング『フュージョンアップ!ウルトラマンオーブ、スペシウムゼペリオン!』

俺はオーブに変身する。

オーブ「俺の名はオーブ。闇を照らして、悪を撃つ！」
俺はマガバツサーを睨む。

ナオミ「これ…よく夢に出て来る…！」

ジエツタ「キャップ！」

シン「大丈夫ですか!?!？」

ナオミ「う、うん…！」

シン「何なんですか、あれは…!?!？」

ジャグラー「ウルトラマンオーブ」

ジエツタ「ウルトラマンオーブ…？」

ジャグラー「銀河に輝く星…。光の戦士という奴だ」

ナオミ「光の…戦士…」

ー小田切 拓哉だ。

竜巻から怪鳥が現れたと思えば、今度は巨人が現れた。

青山「今度は巨人かよ!?!？」

赤木「何か、いかにも正義のヒーローって、見た目だな！」

いぶき「でも、味方かどうかはわからないわよ」

夏華「あれがSSPの方々が言っていた巨人でしようか…？」

拓哉「あの怪鳥が現れた瞬間に現れた…。お前の言う通り、あの巨人が怪鳥と交戦していたのだったら…今も怪鳥を倒す為に出て来たのかも知れない」

それにどうやら、あの巨人はヘテロダインや怪鳥の相手をする様な。

森次「あの巨人は怪獣やヘテロダインと戦う様ですね」

浩一「味方…何ですかね？」

森次「わからない。だが、彼には手伝ってもらおう。襲って来るのならば、相手をするまでだ」

戦闘再開だ。

〈戦闘会話　オーブVSヘテロダイ〉

オーブ「ヘテロダイン…。お前達も怪獣と一緒になら、俺が倒してやる！」

〈戦闘会話　赤木VSマガバツサー〉

いぶき「まさか、怪獣と戦う事になるなんて…！」

青山「相手の強さは計り知れないんだ！無茶だけはするなよ！」

赤木「おう！ヘテロダインじゃなくても、みんなを困らせるなら、俺達が相手になってやるぜ！」

〈戦闘会話　浩一VSマガバツサー〉

浩一「相手が誰であっても、悪なら、俺の敵だ！怪獣！正義の味方が成敗してやる！」

〈戦闘会話　森次VSマガバツサー〉

森次「ヘテロダインの次は怪獣か。火を吐く大怪獣は倒してやろう」

〈戦闘会話　オーブVSマガバツサー〉

オーブ「風の魔王獣、マガバツサー。今度こそ、ケリをつけてやる！」

〈戦闘会話　拓哉or夏華VSマガバツサー〉

夏華「あれが巨大な鳥の正体ですか…」

拓哉「ハニワ幻神ではなく、怪獣だったとはな。（だが、少なくとも奴の仕業ではないな）」

マガバツサー「ギヤアアアアアッ!!？」

俺達はヘテロダインを全て倒し、怪獣も、巨人の攻撃で、怪獣は爆散した。

オーブ「…シェアッ！」

巨人は飛び去った…。

いぶき「飛び去っちゃった…」

青山「一体何だったんだ…？あの巨人…」

浩一「では…やりましようか、森次さん！」

森次「まだやる気なのか、早瀬 浩一君」

浩一…？それにこの声…あの時の学生か。

浩一「当たり前でしょう！」

鬼のロボットが青のロボットに攻撃を仕掛けるが、青のロボットは攻撃を受け流す。

青山「室長！」

森次「心配ありません。ここは私に…。早瀬、君にひとつ聞こう。手に入れた力をキミはどうするつもりだ？」

浩一「正義です！俺は正義の味方になるですよ！」

森次「だが、君の行為はただの暴力にしか見えないが？」

浩一「そうですか？なら、その暴力で…あなたを叩き潰してあげましょう」

矢島「どうして何だよ、浩一…！」

赤木「暴力をしている時点で正義なんてないんだぞ！」

…力に呑まれている…。

このままでは、危険だな。

森次「なるほど、いかにも中学生らしい発想だ。…それならば、本物の暴力を教えてあげよう」

浩一「えっ…!!？」

青のロボットは鬼のロボットに攻撃を仕掛けた…。

森次「さあ、行こう。本物の暴力を教えてあげよう」

青のロボットは両手に持った4本の太刀で鬼のロボットを滅多刺しにした後、バックに装備されていたバインダーの様なモノで鬼のロボットを囲んだ。

森次「…」

その後…バインダーの中でどの様な攻撃が行われたかはわからない

いが、バインダーが戻った時には鬼のロボットには大量の太刀が突き刺されていた。

浩一「こ、殺される……！」

その攻撃を受けて、鬼のロボットは大ダメージを受ける。

浩一「グアアアッ！」

青山「こ、これは……！」

浩一「ああ、あああああつ……！」

矢島「や、やめてくれ！このままじゃ、中の浩一が死んでしまう！」

森次「……」

学生の友人らしき少年が叫ぶが、青のロボットの攻撃は止まらない。

赤木「お、おい！やり過ぎだぞ！」

いぶき「室長……！」

浩一「(こ、殺される……)！」

夏華「このままでは、あのロボットのパイロットの方が……！」

拓哉「……」

あの鬼のロボットのパイロットがどうなろうと俺の知った事ではない……。

知った事ではないのだが……。

浩一「う、あ……あああああつ……！」

拓哉「……！」

いつの間にか俺の身体が動いてしまい、持っていたソードを青のロボットに向けて投げてしまう。

森次「……！」

青のロボットはデイスエイド・ソードの攻撃を太刀で弾き、こちらを向く。

夏華「リ、リーダー……!?!？」

森次「……」

拓哉「……」

俺達は機体越しに睨み合う。

その間に大ダメージを受けていた鬼のロボットのダメージが回復

していく。

赤木「な、何だ、あれ!?!」

青山「機体のダメージが回復していく…!?!」

自己再生機能を持っているのか…?

森次「マキナの自己修復機能…だが、それにしても速度が速すぎる…」

すると、青のロボットに通信が入った。

絵美『森次さん!直ちに作戦を中止、撤退してください!』

森次「…捕獲指示が出ていたはずですが?」

絵美『はい。ですが今、社長直々に撤退命令が出されたんです。ダイガードのパイロットの皆さんもお話があるので、撤退してください!』

森次「…了解しました。ダイガードと共に撤収します。よろしいです…?」

いぶき「はい!」

どうやら、撤退する様だな…。

だが、青の機体がデイスエイドの方を向き、通信を送って来た。

森次「赤紫の機体のパイロット…。君も随分な正義の味方の様な」

拓哉「…」

俺が正義の味方…?

そんな事ない。…俺に正義など必要ないのだからな。

森次「…尚も答えないか」

そのまま、青のロボットとダイガードは撤退した。

拓哉「夏華、俺達も撤退だ」

夏華「りよ、了解しました!」

デイスエイドも動かして、俺達もその場を撤退した…。

―石神 邦生だよ。

緒川「社長、よろしいんですか?ラインバレルを回収できるチャン

スでしたのに…」

石神「いいさ。あのマキナから引き出せる情報は限られているからね。むしろあの少年を遊ばせた方が新たな情報を引き出せる可能性が高い。それに…その方が面白い」

緒川「わかりました。では、監視体制を強化していただく様、手配しておきます」

石神「ああ…それと、城崎君が戻ったら、ここに呼んでくれ」

ークレナイ ガイだ。

…どうやら、戦闘は終わった様だな。

俺はマガバツサーのマガクリスタルにオーブリンクを通す。

すると、マガクリスタルは崩壊して、一枚のカードが出てきた。

カードを掴んだ俺はそのカードを見つめる。

ガイ「マガバツサーを封印していたのは、ウルトラマンメビウスさんの力でしたか！お疲れ様です！」

…つと、俺が変身の為に入っていた機械から何か出て来たな…つて

…！

写真かよ…！

ま、まずいな…！

俺は写真を取り出そうとしたが、なかなか、取れない…。

ガイ「ちよっ…硬っ…！」

な、何とか取れたな…。

ガイ「ふう、あつぶね〜」

こんな物、誰かに見られると俺があの人だとバレてしまう…。

ナオミ「あの…！」

ん…あいつらか。

ガイ「みんな！怪我はなかったか？」

ナオミ「大丈夫…！それよりまこれ、あなたのもでしょ？」

彼女が手渡して来たのはオーブニカだった…。

落としていたのか…！

ガイ「…！ありがとう…大事な物なんだ」

ナオミ「私達の方こそ…助けてくれて、ありがとう！」
ガイ「…じゃあな」

俺はオーブニカをしまい、その場を立ち去ろうとする。
ジエツタ「ちよつと待ってよ、お兄さん！」

ガイ「どうせ地球は丸いんだ…。またそのうち、何処かで会えるだろ。…あばよ！」

俺は夕陽の中、オーブニカを吹きながら、歩き出した。
ナオミ「…」

ジエツタ「キャップ、どうかした？」

ナオミ「あの曲…どこかで聞いた事があるのよね…」
何だか…懐かしい曲…。

―早瀬 浩一だ。

俺はラインバレルから降りた。

浩一「…」

矢島「こ、浩一！大丈夫なのか!?!」

浩一「何ともないよ。それにしてももうちよつとだったのになく。まあ、でも、いきなりの戦闘で三機も撃墜して、ヘテロダインや怪獣とも戦えたんだから、初戦としては合格かな」

矢島「…」

浩一「あく腹減ったあ！さっさと家へ帰りますか！」

矢島「浩一…」

俺は足を早めた…今の顔を見せない為にも…。
だって俺は…負けた悔しさと涙目を流していたのだから…。
だが、泣き声はラインバレルの跳躍音にかき消され、聞こえなかった。

この日…俺は踏み越えた境界の向こうで打ちのめされた…。

―小田切 拓哉だ。

…何故だ…何故、俺はあの鬼のロボットを守る様な真似をした…？

奴を助ける必要などなかったはずだ。

何故…？

それにしても…。

拓哉「おい、いい加減その目障りな笑顔をやめろ」

夏華「失礼ですね!?…?…そんな事よりも私は嬉しいんです!リーダーが…誰かを守る為に動いた事が!」

…誰かを守る…か…。

拓哉「勘違いするな。あの機体についてまだ知りたい事があった…ただ、それだけだ」

苦し紛れな言い訳だなど自分自身で思ってしまった…。

だが、そうしておこう。

拓哉「それに…俺の中に正義の心などない。あるのは…復讐のみだ…!」

今の俺に正義などに意味はない…。

奴を殺せるならば、正義など邪魔なだけだ…!

第2話 世界を守りし戦士達

「小田切 拓哉だ。」

「前回の戦いの翌日…。」

「俺達はまだ北川町に滞在していた。」

拓哉「ウルトラマンオーブ…?」

夏華「はい。ネットにあの巨人の名前がウルトラマンオーブだと出回っています」

ウルトラマンオーブか…。

夏華「ウルトラマンオーブは何者なのでしょう?あの怪獣とヘテロダインを倒してすぐに、飛び去ってしまいましたか…」

拓哉「わからない。…だが、人間の天敵であるヘテロダインや怪獣と戦う所を見て、あのウルトラマンオーブは人間の敵ではない様に見える。…現に街を気にして戦う素振りは何度か見せていた」

夏華「そうでしたね…。それに凄く格好良かったです!」

夏華が目を輝かせながら、ウルトラマンオーブの活躍のニュースを見ている。

ウルトラマンオーブもそうだが、あの鬼の様なロボット…確か、パイロットの名は、早瀬 浩一だったな…。

あの制服はこの町にある翼学園中学校の制服だ…。

つまり、そこに行けば、早瀬 浩一に会えるという事か。

…だが、あの青のロボットについても気になる。

何故、奴がダイガードと接触していたのか…。

奴の後ろの組織がそこまで巨大な組織という事か…?

拓哉「夏華」

夏華「はい、どうかしましたか、リーダー…?」

拓哉「俺はあの青のロボットについて調べる。お前は早瀬 浩一について調べる」

夏華「早瀬 浩一という方は確か…中学生でしたよね?どう調べるのですか?」

拓哉「…心配ない」

俺は夏華にある物を手渡した。

夏華「…これは？」

拓哉「翼学園中学の制服だ。…これを着て、学園に潜入しろ」

夏華「…えっ!??こ、これを何処で入手したのですか!??」

拓哉「…あの女に事情を説明し、渡された」

夏華「あの女…何者なのですか…?まあ、わかりました。登校は今日からですね。…行ってきます」

そう言い、夏華は俺に背を向けた。

拓哉「…夏華、学園生活を楽しめ」

夏華「えっ…!??」

俺のボソリと呟いた言葉に夏華は勢い良く振り向いたが、既に俺の姿はそこにはなかった…。

夏華「リーダー…」

少し歩いた後、俺はある人物に連絡する。

翼学園中学の制服を俺達に提供した者だ。

拓哉「夏華には生徒手帳を含め、渡した。…だが、一日で情報操作をするとはな」

?『へへ〜!あたし凄いでしょ?それにしても拓哉も格好いい事言うね!学園生活を楽しめ、か!』

拓哉「からかわれるのは好きじゃない。…奴の居場所は？」

?『まだ掴めないね。みんなに隠れて、ヴェーダの情報を見るけど、その人の情報は得られないの』

拓哉「そうか、引き続き頼む。ネーナ・トリニティ…」

ネーナ『まっかせて!』

そう言い残し、俺はネーナ・トリニティとの通信を切った…。

拓哉「…俺は…奴を殺す事と夏華の幸せ…どちらを優先させるべきなんだ…?」

俺は歩き始めた…。

―森次 玲二だ。

私と石神社長、緒川秘書、そして山下は昨日に協力してもらった株式会社21世紀警備保障、広報二課の方々と話をしていた。

石神「ようこそ、広報二課の皆さん。私はJUDAコーポレーション社長の石神 邦生です。こちらは社長秘書の緒川 結衣君です」

緒川「よろしく願います」

石神「そして、こっちは…」

森次「JUDAコーポレーション室長…森次 玲二です。あの青のロボット…ヴァーダントのファクターをやっています」

山下「僕は山下 サトル。ハインド・カインドのファクターです。前回の戦闘の時は別任務をこなしていたので、不参加でした」

大杉「では、こちらからも…私は広報二課の課長の大杉 春男です」

横沢「課長補佐の横沢 晋也です。そして、こちらが課のメンバーです」

大山「大山 紀子です。よろしく願います」

中原「中原 千秋です！」

谷川「谷川 風花です！よろしくしてます！」

入江「入江 静香です。以後お見知り置きを」

石塚「石塚 智美です。それと、こちらが田口 友朗と伊集院 博考です」

田口「よろしく願います」

伊集院「初めまして」

大杉「そしてこちらがダイガードのパイロット達です！」

赤木「ダイガード、操縦担当の赤木 駿介です！よろしく願います！」

青山「同じく、エンジニアの青山 圭一郎です」

いぶき「同じく、ナビゲーターの桃井 いぶきです」

森次「前日の戦闘…参加いただきありがとうございます！」

赤木「市民のみんなを守るなら、当然ですよ！」

石神「これからは手を取り合っていきましょう！」

大杉「こちらこそ、よろしく願います」

社長と大杉課長は握手をした。

青山「そう言えば、前日の戦闘の時に指揮していた女の子がいたと思うのですが、その方は？」

緒川「彼女なら、今監視対象の監視中です」

いぶき「あのラインバレルというマキナのフアクターですね」

大山「確か、早瀬 浩一君でしたね」

青山「活発な坊主だったが、あの機体修復にも驚いたぜ…」

赤木「俺はあのウルトラマンオーブって、ヒーローが気になるぜ！」

石神「ほう、まだ状態も不明な彼をヒーローと呼ぶのですか」

谷川「赤木君らしいね」

森次「…」

俺がラインバレルに攻撃を加えたあの時…赤紫の機体は俺の攻撃を止めようとした…。

あの機体のパイロット…早瀬 浩一の友人なのか…？

いや、そもそもラインバレルのフアクターが彼だという事は知らないはずだ。

山下「森次さん、あの赤紫の機体の事が気になるんですか？」

森次「ああ。あの状況であまり問いただす事は出来なかったが、あの機体のパイロットは敵なのか、味方なのか…」

山下「て、敵に決まっていますよ！だって、森次さんの邪魔をしようとしたんですよ！」

赤木「でも、もしかしたら、攻撃を止めようと動いたかも知れませんが…」

森次「私もそれについて考えたが…まだ結論は出ていない」

石神「あの機体については、こちらでも調査を進めておこう。何かわかれば、君に伝えよう」

森次「ありがとうございます。それよりも社長、そろそろではないですか？」

石神「うん？…そうだね」

大杉「何かあるのですか？」

石神「今日は社会科見学で陽昇学園、5年3組の生徒達が来るので

すよ」

赤木「5年3組って事は…仁達がですか!?!」

山下「そう言えば、皆さんは地球防衛組の彼等と一緒に戦ったんでしたね」

いぶき「ええ。確かに彼等は子供だけど、彼等の勇氣には私達も何度も助けられたわ」

青山「特に仁は赤木を子供にした様な奴だからな」

赤木「そう言う青山は飛鳥とそっくりだったな!」

中原「では…」

いぶき「え…吼児君と私がそっくりだと言いたいのか?」

赤木&青山「それはないですな」

いぶき「分かってはいたけど、失礼ね、あなた達!」

これは賑やかになりそうだ。

―池波 夏華です!

私は翼学園中学校に転校生として入りました!

それにしても転校生は私だけでなく…。

絵美「今日から、この学校に転校してきました。城崎 絵美です」

城崎 絵美さん…美しい方です…。

そして、私も自己紹介の番が回ってきました。

夏華「え、えつと…池波 夏華です!…理由があつて、今まで学校へは行けてなくて、皆さんを頼ってしまうかも知れませんが、よろしくお願いします!」

私が頭を下げると拍手が巻き起こりました。

そして、城崎さんの方へ視線を移すと、彼女は早瀬君をチラリと見た後、私にクスツと笑いかけました。

これが…学校…。

つて…リーダーから頼まれていた調査も進めなければなりませんね!

―早瀬 浩一だ。

城崎さん：何処かであつたような気がする…。

それにしても城崎と同じタイミングで転校してきた池波さん…。
礼儀正しくて、男子から物凄い人気があるみたいだな。

つというか時折、城崎さんと池波さんの両方から視線を感じる…何
なんだ…？

：昼休みになり、俺は矢島から逃げる様に屋上に来た。

：馬鹿だよなア、俺…。マキナやフアクターって奴が何なのか知ろ
うともしないであんなロボットに乗っちゃまうんだから…。

フアクターとかマキナとか…何なんだよ、一体…これからどうす
りやいいんだよ…。

夏華「何してるんですか？」

早瀬「うわあつ…!!？」

い、池波さん…!!？」

浩一「池波さん…!!？どうしてここに!!？」

夏華「早瀬さんが浮かない顔をしていたので、心配になって、つい
てきてしまいました」

浩一「浮かない顔…俺してた？」

夏華「はい。新山さんや矢島さんも心配していましたよ」

理沙子と矢島が…。

夏華「それにお昼まだですよ？一緒に食べましょう！」

浩一「…いいよ、俺は。池波さんは教室のみんなと食べなよ」

夏華「いいえ！私は早瀬さんと食べたいんです！」

えっ…？

浩一「い、池波さん…。それって…」

すると、屋上に複数の奴等が来た。

降矢「よお、浩一。もう転校生の池波さんとイチャついてんのか？」

夏華「ふ、降矢さん達…？どうしたんですか…？」

降矢「何、浩一に話があるだけだよ」

浩一「…降矢達か…。何の用だよ？」

降矢「浩一：お前調子乗りすぎなんだよ！」

降矢の取り巻きが一斉に俺に襲い掛かった。

夏華「早瀬さん！」

降矢「お前がいくら強くなつたつて流石にこの人数相手じゃ…」

浩一「心配ないよ、池波さん」

俺は向かつてきた奴等を1人残らず、蹴散らした。

浩一「お前ら如きが何人来ようが相手になるわけねえだろうが！」

そして、俺は降矢も殴り飛ばし…地面に蹲った降矢を何度も蹴る。

降矢「ぐあつ…！」

…そうだ。俺は強いんだ。何もあんなロボットや連中達とわざわざ関わっていく必要もないんだ！

マキナとかファクターなんて関係ない！

そうだ！これでいいんだ！普通の生活を送るだけなら、俺は最強なんだ！

―城崎 絵美です。

私は早瀬 浩一君を監視していました…。

絵美「はい…はい…特に問題はありません。ただの喧嘩です。ですが、主観的情報を言うなら…彼は最低です」

何処が正義なの？

あんなものただの暴力よ…。

それにしても…。

夏華「も、もうやめてください！」

浩一「…！」

夏華「確かに攻撃を仕掛けてきた降矢さん達も悪いです…でも、やり過ぎです！」

浩一「…俺は…」

池波さんの言葉を聞いて、早瀬君は俯きました。

…池波 夏華さん…。

今日、早瀬君を監視していて、分かった事は私と同じ様にチラホラと早瀬君を見ていた事…。

そして、先程も早瀬君に自ら、関わっていた…。

彼女：何者なの…？

まさか、彼女は加藤機関のスパイ…？

…いや、考えすぎかな。

現に今、彼女は早瀬君の行為に涙を流しているし…。

…やっぱり、考過ぎよね。

―小田切 拓哉だ。

俺は青のロボットについて、調査をしていた。

…少なくとも奴はこの町にいるはずだ…。

だが、何処の組織に所属しているんだ…？

すると、子供の泣き声が聞こえ、ある公園に入ると車椅子に乗った少女が立てない体で必死に、木の枝に引っかかっていた風船を取ろうとしていた。

側で泣いている子供の風船を取ろうとしているのか。

…それにしてもあの車椅子に乗った少女…何処かで…。

車椅子に乗っているの、風船に届くはずもなく、バランスを崩した少女は前に倒れそうになる…だが、俺が何とか、少女を支え、木の枝にかかっていた風船を取り、子供に手渡すと子供は笑顔で感謝の言葉を述べ、その場を走り去った。

そして、風船を取ろうとした少女の顔を見ると、俺は軽く驚いた。

…！ナナリー・ヴィ・ブリタニア…。

ナナリー「支えていただきありがとうございます。あなたのおかげで風船を取る事も出来ました」

拓哉「…取れもしないのに、助けようとしな方がいい」

ナナリー「え…」

俺の言葉にナナリー・ヴィ・ブリタニアは俯く様に舌を向くが、すぐに顔を上げた。

ナナリー「ですが、ジツとは出来ません！例え、不可能だとしても、動く事が大事なのです！」

彼女の迷いのない瞳を見て、俺は驚く。

拓哉「…そうか。その志を忘れないでいれば、お前は間違える事はない」

「そう言い残し、俺は立ち去った…。」

ジノ「あ…こんな所にいました！勝手にされたら、困りますよ！皇女様」

ナナリー「すみません、ジノさん。困っている子がいたので、助けをいたんです」

ジノ「流石は皇女様ですね。お優しいですね！」

ナナリー「…でも、実際は助けられましたか…」

ジノ「え…？」

ナナリー「…そろそろ行きましょう」

ジノ「…はい。スザ…じゃなかった、ゼロもお待ちしていますよ！」

ナナリー「はい！」

暫く歩いた俺はあるメダルを見つける。

拓哉「メダル…？」

奇妙なメダルだな…。

見た事もない。

…誰かの落とし物か。

取り敢えず、持つておこうと俺はメダルをポケットの中に入れ、再び歩き出した…。

―日向 仁だ！

俺達、地球防衛組は社会見学に来ていた。

…だけど、今、それどころじゃない事件に襲われていたんだ！

あきら「おい、仁！やっぱり、何処にもねえぞ！」

飛鳥「どうして大事なメダルを落とすんだよ！」

仁「俺だって、ワザと無くしたわけじゃねえよ！」

マリア「ちよつと！喧嘩してる場合じゃないでしょ！」

ゆう「そうだよ。早くメダルを探さない！」

吼児「でも…この広い町でメダル一枚を探すのは…」

ヨツパー「確かに…骨が折れそうだよ」

篠田先生「申し訳ありません、石神社長…。お待ちせしてしまつて…」

石神「いいえ、良いんですよ。何なら、我々もメダルの搜索を始めましょうか？」

篠田先生「い、いえ！…流石にそこまでしてしまうのは…」

勉「うーん、ライジンコマンドーの反応もこちら辺を示しているのですが…」

ポテト「とにかく、メダルを早く見つけないと！」

仁「言われなくても分かつてるよ、そんな事！」

メダルをなくして、どうしようかと悩んでいた俺達の元に、黒いフードを被つた男の人が歩いてきた。

―小田切 拓哉だ。

何やら騒がしいと思い、俺は騒がしい方に足を進めと見ると、小学

生ぐらいの子供達がメダルがないと、叫んでいた。

…メダル…まさか、先ほど拾つたこれか…？

俺は子供達の下に近づき、声をかけた。
拓哉「いきなり、すまない。…メダルという言葉が聞こえたのだ
が…」

ひろし「そうだけど、お兄さん僕達に何か用？」

拓哉「…先程、道端でこのメダルを拾つたのだが…」

俺は先ほど拾つたメダルを彼等に見せた。

クツキー「あ！それ！」

きらら「私達のメダルだ！」

…やはり、そうだったか。

美紀「ほんとだ！」

拓哉「そうだったか」

俺は先ほどに一番騒いでいた少年にメダルを渡した。

仁「ありがとう！兄ちゃん！」

篠田先生「本当にありがとうございました！…何か、お礼を…」

拓哉「感謝される程の事はしていない」

石神「へえ、君…なかなか良い子だね」

…そう言えば、ここは…JUDAか。

確か、大手医療器具メーカー…だったな。

石神「君、JUDAで働いてみる気はないかなア？」

拓哉「…悪いが、俺はやる事がある」

まさか、勧誘されるとは…面倒になる前にこの場を立ち去るとするか。

俺が歩き出そうとしたその時、JUDAの社内から1人の男が出てきた。

森次「社長、社内の準備が出来ました」

石神「そうかい？ありがとう、森次君。…彼等の問題も解決したみたいだし、社会見学を始めようじゃないか」

…！森次だと…？

確か…早瀬 浩一という男がその様な名を…。それにこの声は…間違いない。

拓哉「…」

森次「…何か？」

拓哉「…いや、何でもない」

俺はその場を歩き去った。

森次「…」

石神「どうかしたのかい、森次君？」

森次「いえ、何でもありません。(あの少年…何か引つかかる…)」

JUDAを後にした俺は公園のベンチに座り込んだ。

あの森次という男はJUDAから出て来た…。

つまり、JUDAには何かあるという事だ…。

…だが、どう調べる…？

流石に社内を調べるのは骨が折れる。

…考えても無駄か…。
少し休むとするか…。

ガイ「無事だったか、お前さん」

…この男は…。

拓哉「お前…」

ガイ「あの後、無事に逃げ切れた様だな」

風来坊の男…。

ガイ「お前さんもラムネを飲むか？」

拓哉「…いらぬ」

ガイ「冷たいな。…少しは明るくしないと幸せが逃げるぜ？」

拓哉「…俺に幸せなど必要ない」

ガイ「若いのに暗い事を言うなよ。…少しでも笑ったらどうだ？」

拓哉「…笑えない」

ガイ「…何？それはどういう…」

風来坊の男が俺に聞いたただそうとした時だった。

突然、大きなビルが音を立て、地面に沈んだ。

拓哉「…！」

ガイ「何だ…？…まさか…」

…。
風来坊の男が何かに気づいたのか、走り出し、俺もその後を追った

…。
その現場に着くと、警官やビートル隊達が来ていた。

俺と風来坊の男は大きな穴を覗き込む。

拓哉「…深い穴だな…崩れるのではなく、ビルがこの穴の中へへと
引き込まれた…という事か」

ガイ「…今度は土の魔王獣か」

拓哉「…？」

土の魔王獣…？

…？
それに今回という事は前回のあの怪鳥についても知っているのか

…？
渋谷「おい、君達！」

魔王獣という言葉葉を風来坊の男に問おうとした時にビートル隊の

男に声をかけられた。

渋谷「ここは立ち入り禁止だ。危ないから、下がっていなさい」

ガイ「いつも地球の為にお勤めご苦労様です」

…言う言葉はそれではないだろう。

渋谷「ああ、それではご丁寧にどうも」

俺はビートル隊の男の反応に呆れ、ため息を吐こうとしたその時、近くのビルがまた沈み出した。

…またか。

渋谷「おいおい、何ってこったこりや!?!?」

ガイ「…!」

風来坊の男が突然、走り出し、俺も走り出した。

渋谷「お、おい待て、君達!…おい!」

ビートル隊の男の制止を聞かず、俺は風来坊の男の後を追っていたが、突然何かに吹き飛ばされた。

…ある理由で痛みを感じなかったが、俺は地面に倒れ、すぐに立ち上がると、そこには紫の服を着た男が立っていた。

拓哉「…何者だ?」

?「名乗るつもりはない。…あの男には関わらないでもらおう。騒がれるのは我々も困るのでな」

拓哉「…何:?:? 貴様、奴の何を知っている?」

?「意見は求めん」

男が手をかざした瞬間に謎の男の姿が消えていた。

何:?:?

消えた:?:だと:?:?

:?:何がどうなっている:?:?

すると、通信機が鳴った。

夏華か。:?:そう言えば、もう放課後か。

拓哉「夏華か。学園生活はどうだ?」

夏華「新しい事が沢山あって、楽しかったです!」

拓哉「調査の方は?」

夏華「早瀬 浩一さんを一日見て来ましたが、至って普通の方でし

た。：喧嘩が物凄く強い以外は』

そう言えば、あの時もロボットに恐れず立ち向かっていたな。

夏華『今からクラスで親睦会があるので、お帰りするのはまだ時間がかかります。：そう言えば、リーダーの方はどうでした？』

拓哉「：青のロボットのパイロットはJUDAコーポレーションの社員だった」

夏華『JUDAコーポレーション：!??大手医療器具メーカーではないですか!』

拓哉「ああ。相手が相手だ。：調査をどの様に進めるか悩んでいた所だ」

夏華『そうですか：あ、先生がおっしゃっていたのですが、ビルが沈んでいると言うのは本当ですか!??』

拓哉「ああ、その現場もみて来た：。とにかく、今は早瀬 浩一に集中しろ」

夏華『わ、わかりました：』

俺は通信を切った。

：今からあの風来坊の男を追うのは難しいな：。

ークレナイ ガイだ。

何とか、あの少年を巻く事は出来たか。

俺はあるビルの中に入って、オーブニカを吹きながら、歩くとある男の姿が見えた。

? 「相変わらず酷いメロディーだ。折角のムードが台無しだ」

ガイ「ジャグラー：。お前さんといういいムードになる気なんて：更々ない」

そして、俺達は戦闘を始めた。

ジャグラー「運命の再会だぞ?随分と荒っぽい挨拶だな」

ガイ「今度は土の魔王獣か!」

ジャグラー「この星の生命など、全て土ぐれに返してやる」

ジャグラーはダークリングに怪獣のカードをリードして、怪獣の力

が地面の中にへと入って行った。

ガイ「どんなに魔王獣を復活させようとしても…これ俺がぶっ倒す！」

ジャグラ「フハハハハッ！格好いいね。…まあ、せいぜい頑張れよ」

ジャグラは立ち去ろうとし、俺はその後を追おうとしたが、地響きと爆発音が聞こえ、外に出ると…複数の戦闘機とロボットが町に現れた…。

第2話 世界を守りし戦士達

ー小田切 拓哉だ。

あの複数の戦闘機…ギシン帝国の残党か。だが、共に暴れているのは…邪悪獣…？地球防衛組が全て倒したはずだが…。

ー日向 仁だ！

あれは、ギシン帝国の戦闘機！

それに…どうして、邪悪獣もいるんだ…？

マリア「あれはギシン帝国の戦闘機…残党がいたのね！」

飛鳥「一緒にいるのは邪悪獣か…？」

大介「そんな…どうして邪悪獣が…？」

吼児「もしかして…ベルゼブ達が…？」

仁「そんなわけあるかよ！ベルゼブ達は俺達の事をわかってくれたじゃないか！」

あきら「じゃあ、何で邪悪獣がまた出て来たんだよ…？」

勉「…もしかすれば、地球に残ったアークダーマをギシン帝国が回収し、利用しているのでは、ないですか？」

ラブ「そんなことができるの…？」

勉「はつきりとはわかりませんが…！」

仁「何だつていい！ベルゼブ達の所為にしようとしたギシン帝国の奴等は許さねえ！ライジンオーでケチョンケチョンにしてやる！」

マリア「落ち着きなさい、仁！そもそもライジンオーで戦うには学校に戻らないとダメでしょ…！」

仁「あ…そうだった！どうすりやいいんだよ！」

石神「…お困りの様だねエ。緒川君、我々も彼等に協力しようじゃないか」

緒川「え…ですが、社長…それをしてしまえば…」

石神「責任は私が取るよ。…さて、地球防衛組の諸君。…我々、JUDAには君達全員を乗せられる程の巨大ロケットがあるんだが…」

飛鳥「JUDAにどうしてそんなものが…？」

石神「うーん、私達が正義の味方…だからなア？」

ときえ「正義の味方…」

ひでのり「これで学校まで行けるんですか…！」

石神「もちろん」

仁「…行こう」

篠田先生「仁…!??ダメだ、危険すぎる！」

仁「危険な事なんて…今まで沢山あったじゃないか、篠田先生…」

俺は、JUDAのみんなを信じる！」

篠田先生「仁…」

飛鳥「無駄ですよ、篠田先生。こう言い出した仁は聞きませんから」

吼児「そうだね！それに邪悪獣を見逃せないし！」

マリア「私たち全員、仁と同じ考えです！」

篠田先生「…わかった。お前達が決めた事なら、やり通せ！だが、危険だとわかったら、力尽くまで止めるぞ！」

仁「ありがとう、先生！」

篠田先生「お願いします、社長！」

石神「君達の身の安全も必ず、保証しよう」

飛鳥「でも、俺達が戻っている間に町が…」

石神「それも心配ないよ。…緒川君、森次君と山下君に出撃をお願い

いしてくれないか？」

緒川「…いえ、もう室長達は出撃しましたよ」

石神「ほう、それはいい事だネエ」

―森次 玲二だ。

私と山下はヴァーダントとハインド・カインドで出撃した。

森次「勝手な出撃をしまい、申し訳ありません、社長」

山下「でも、ジツとは出来なかつたんですよ！」

石神『いや、いい判断だよ、2人とも。それにダイガードも来てくれたみたいだよ』

ダイガードが現れた。

赤木「ダイガード、到着！」

青山「ギシン帝国の残党に邪悪獣…！どう言う状況何だ!?？」

森次「それは私も気になっていました。…どうして、ギシン帝国が邪悪獣を使役しているのか」

すると、ギシン帝国の戦闘機から通信がきた。

ギシン星「驚いたか、地球人！我々は5次元人のジャークパワーを解析し、ジャークパワー照射機を開発したのだ！これでアークダーマを邪悪獣にする事が可能となった！」

赤木「なんて奴等だ！」

？「そうだな。見逃すわけにはいかないな！」

現れたのは戦闘機…それもあの戦闘機は…。

青山「コスモクラッシャー…って事はクラッシャー隊か！」

ケンジ「久しぶりだな、広報二課のみんな」

アキラ「相変わらず、頑張っている様だね！」

いぶき「はい、お久しぶりですね！」

ロゼ「ダイガードも健在ね」

赤木「ロゼもいるのか！」

ナオト「つと…見た事もないロボットもいるな」

ケンジ「ああ、だが味方の様だ。(JUDAコーポレーション…。大

塚長官の仰っていた人達というのは彼らの事か…）タケル！」

今度はロボットが現れた…ゴッドマーズか。

タケル「ギシン帝国…！地球破壊をまだ諦めていないのか！」

赤木「ゴッドマーズ…タケルか！」

タケル「お久しぶりです、赤木さん！」

赤木「そう言えば、ゴッドマーズの反陽子爆弾を取り除いたんだっ
たな？」

タケル「はい！強化した俺の超能力をエネルギーとしている為、ガ
イヤーも初めからゴッドマーズに合体させる事が出来る様になりま
した！」

いぶき「頼もしいわね！」

すると、JUDAからロケットが発射された。

アキラ「JUDAコーポレーションからロケットが発射された…!!
？」

森次「ご心配ありません。あのロケットには地球防衛組の少年達が
乗っています」

タケル「仁君達が…!!？」

山下「少ししたら、ライジンオーに乗って、ここに来るっス！」

ナオト「へえ、それは心強いじゃねえか！」

ケンジ「JUDAコーポレーションの方々…後でお話をお聞きしま
すよ？」

森次「わかりました。でも今は、この場を乗り切りましょう」

赤木「そうですね！」

…？この反応は…。

ミカ「二つの熱源反応が感知しました！…これは…ナイトメアフ
レームです！」

現れたのは二機のナイトメアフレームだった。

ジノ「コスモクラッシャーや株式会社21世紀警備保障の皆さん、
我々もお手伝いします！」

森次「トリスタン…。黒の騎士団ですね。…ですが…」

あの黒い機体…どう見てもランスロットの様に見えるが…。

ジノ「ご心配ありません。このナイトメアフレームはランスロット・アルビオンゼロ…。新生黒の騎士団のCEO：ゼロの乗る新たなナイトメアフレームです」

スザク「コスモクラツシャー並びに株式会社21世紀警備保障の諸君。私達も君達に協力しよう」

山下「どうしてここにゼロ達がいるんスか!?!」

スザク「ナナリー皇女がこの町で対談をなされていたのです。ナナリー皇女はこの場から避難したが、彼女の希望により、我々も出撃したいぶき「助かります、ゼロ」

ジノ「うまく言ったな、ゼロの演技も上手くなったんじゃないか、スザク?」

スザク「ああ、ありがとうジノ…。でも、今は…!」ジノ、彼等を援護するぞ!」

ジノ「了解!」

ケンジ「では、ゼロ。指揮は任せたぞ」

スザク「良かろう。全機、ギシン帝国並びに邪悪獣の対処に当たれ!」

拓哉「(また青のロボット…。そして、新たな黄色のロボット、あれもJUDAのロボットか…)」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 タケルVS初戦闘〉

タケル「ズール皇帝と皇帝ワルーサを倒した今でもギシン帝国は活動を続けている…。それならば、俺もゴッドマーズと一緒に戦い続ける! いくぞ、ゴッドマーズ!」

〈戦闘会話 ケンジVS初戦闘〉

ミカ「敵、接近して来ました!」

アキラ「準備はできていますよ、隊長!」

ロゼ「私達は…何度でも地球を守ってみせるわ!」

ナオト「一体残らず、撃ち落としてやる！」
ケンジ「うむ、ではいくぞ！」

〈戦闘会話 赤木VS初戦闘〉

青山「つたく…ギシン帝国の残党もしつこいな！」

いぶき「それに邪悪獣を従えているなんて…！」

赤木「相手が誰だろうと俺達のやる事は変わらねえ！ダイガードもまだまだやれるってところを見せてやる！」

〈戦闘会話 森次VS初戦闘〉

森次「懲りていない様だな。人間が怖い生き物という事を再認識させる必要がある。悪いが、手加減はしないぞ」

〈戦闘会話 山下VS初戦闘〉

森下「侵略者はさっさと倒す！加藤機関の相手で忙しいんだから、お前達に構っている時間はないんスよ！」

〈戦闘会話 スザクVS初戦闘〉

スザク「(ルルーシユ、君が作ってくれた平和への道は僕が必ず、未来へつなげてみせる…！枢木 スザクではなく、ゼロとして…！)」

〈戦闘会話 ジノVS初戦闘〉

ジノ「いくぜ、ギシン帝国の残党に邪悪獣！ツツジ台って、場所での任務についてるカレンには負けてられないからな！やってやるぜ！」

ー早瀬 浩一だ。

あの青のロボット…森次って人か…！

それにコスモクラツシャー隊と黒の騎士団まで現れるなんて…！

ここは俺も…！

で、でも…またラインバレルに乗ったら、俺は…！

理沙子「何してるの、浩一！早く逃げるよ！」

浩一「あ、ああ。…あれ？」

池波さん…何処に行つたんだ…？

絵美「…」

と、兎に角逃げるか…！

―森次 玲二だ。

流石はヘテロダイナやギシン帝国から地球を守つた人達だ…。

敵がどんどんと減つていく…。

赤木「このまま行けば、勝てるぜ！」

いぶき「っ…！複数の熱源反応…来るわ！」

現れたのは…複数のハニワ幻神か…！

タケル「ハニワ幻神！」

ナオト「ハニワ幻神まで来るなんて、どうなつてんだよ…？」

ケンジ「文句を言つてる暇があるなら、一体でも多くの敵を倒せ！」

山下「でも、このままでは町にも被害が！」

すると、ハニワ幻神の数体は何者かに倒される。

青山「こ、今度は何だ…？」

ミカ「この反応は…戦闘機…?!?!」

現れたのは三機の戦闘機だった。

柳生「皆さん、こちらはビルドベースから派遣されたビルドエン

ジェル隊です！私は隊長の柳生 充子です！司令からの命で部下の

早乙女 門子、身堂 竜子と共に援護いたします！」

ケンジ「助かります。…それにしても、ジグの姿が見えませんが

…」

身堂「申し訳ありません、もう時期来ます」

また戦闘機が現れた…。

つばき「遅れて申し訳ありません！ビッグシューターただいま、到

着しました！」

鏡「直ちに戦闘へ参加します…剣児！」

剣児「おう！待ちくたびれたぜ！いくぜ、雷鋼馬！」

ビッグシューターからバイクが飛び出て来た。

まさか、彼が…。

鏡「つばき！」

つばき「ええ！ジグパーツ：シュート!!？」

ビッグシューターから複数のパーツが発射される。

剣児「やるぜ！ビルド、アーツプ！」

バイクに乗っていた少年が拳と拳をぶつけ合うとバイクは変形し、ビッグシューターから発射されたパーツと一つになり、合体していき…鋼鉄ジグへとなる。

剣児「鋼鉄…ジイイグツ!!？」

鋼鉄ジグ…邪魔大帝国の対抗するためにビルドベースが作り上げたロボットか…。

剣児「鋼鉄ジグ、見参だぜ！」

赤木「相変わらず、格好よく決めてくれるぜ！」

タケル「お前もジグも健在のようだな、剣児！」

剣児「久しぶりだな、赤木さん！タケル！俺が来たからにはもう安心だぜ！」

つばき「ちよつと、剣児！」

鏡「調子に乗るのは勝手だが、無茶をするなよ」

剣児「わかってるって！よっしゃあ、いくぜ！」

柳生「改めて、ビルドエンジェル隊ならびに鋼鉄ジグとビッグシューターが援護します！」

山下「鋼鉄ジグか…。なんか格好いいっすね！」

スザク「感謝する、柳生隊長。では、各機…敵勢力の鎮圧に入る！」

この乱戦…まだ何か来るのか…？

ー小田切 拓哉だ。

クラッシャー隊に新生黒の騎士団、さらにビルドベースの部隊か…。

後、地球防衛組と広報二課…。

何故、JUDAを中心にこれだけのスーパーロボットの組織が…。

夏華「リーダー!」

夏華…?

拓哉「夏華か…」

夏華「…リーダー…戦いにいかないんですか?」

何…??

拓哉「何故戦いに行く必要がある?…俺には関係のない事だ」

夏華「確かに…リーダーには果たすべき事があります…。ですが、その果たすべき事は人の生命よりも重要な事なんですか?」

拓哉「…何が言いたい…?」

夏華「私は…この町の人達を助けたいです!…この町には、翼学園
中学の皆さんがいます!…今日初めて会った方々でしたが…皆さん、
いい人ばかりでした!」

夏華…。

夏華「そんな皆さんを…私は助けたいです!これって、我儘ですか
!?!?人の生命を助けたいと思う事は我儘何ですか!?!?」

…。

涙で俺に訴えてくる夏華の決意の眼差しを見て、俺の何かが折れ
た。

拓哉「何度も言わせるな。お前がどう思おうとこの町の人間がどう
なろうと俺には関係ない」

夏華「っ…」

拓哉「…だが、目の前で生命が散るのは後味が悪い」

夏華「…え…?」

拓哉「…夏華、決意は満点だが、涙で減点だな」

俺は夏華の涙を拭い、歩き出した。

拓哉「何をしている?早く、デイシエイドの下へ行くぞ」

夏華「リーダー…!はい!」

俺達はデイシエイドの下へと急いだ…。

―森次 玲二だ。

この反応…彼等が来たか。

現れたのはライジンオーだった。

仁「みんな、ごめん！地球防衛組、ただいま到着だぜ！」

飛鳥「って…何だか、凄い状況になってないか!?？」

吼児「僕達がロボットで飛び去る時にゴッドマーズやダイガードは見えただけど、ナイトメアフレームやジークまでいるよ！」

マリア『それにハニワ幻神も…!』

スザク「ライジンオー…地球防衛組か」

剣児「仁達、久しぶりだな！」

仁「おう！剣児兄ちゃん！ここからは俺達も手伝うぜ！」

柳生「よろしくね、地球防衛組のみんな！」

赤木「これだけの猛者が揃ってれば、負ける気はしねえぜ！」

ジノ「っ…！ゼロ！避難場所の翼学園中学に複数の熱源反応が！」

スザク「何だと…!?？」

しまった…！伏兵か…！

翼学園中学の周りに複数のハニワ幻神が現れた。

―早瀬 浩一だ。

学校の周りに複数のハニワ幻神が…！

理沙子「ハ、ハニワ幻神…!?？」

絵美「まさか、伏兵…!?？」

矢島「あいつら…ここを狙ってる！」

浩一「クソツ…！（もう迷ってる場合じゃねえ…！ラインバレルを呼ばないと…！）」

矢島「…！浩一、お前…！」

浩一「来い、ラインバ…！」

俺がラインバレルの名を叫ぼうとしたその時…周りの数体が爆発し、赤紫のロボットが現れた…。

「小田切 拓哉だ。」

俺達はデイスエイドに乗り、翼学園中学を攻撃しようとしていたハニワ幻神の数体を倒した。

浩一「あ、あのロボットは…」

夏華「…ふう、何とか間に合いましたね」

どうやら、早瀬 浩一は戦わない様だな。すると、青のロボットから通信が入った。

森次「…また君か。何者だ？」

森次という男が俺に問いかけて来た。

拓哉「夏華、音声通信を開け」

夏華「えっ…?!? いいのですか?!?」

拓哉「邪魔をするのならば、潰す。だが、面倒事を避けるためだ」

夏華「わかりました!」

夏華は音声通信を開いた。

拓哉「名は名乗れない。…だが、こちらに戦闘の意志はない」

いぶき「今回は答えた…?!?」

森次「名を名乗れない理由は？」

拓哉「こちらにも事情がある」

スザク「君が敵ではないという証拠は？」

拓哉「ない。敵かどうかの判断はお前達の好きにすればいい。…だが、俺の敵となるなら、容赦はしない」

剣児「へえ、言うじゃねえか!」

仁「挑発してんのかよ!」

タケル「お、落ち着くんだ、2人とも!」

山下「でも、信じられないツスよ!」

ジノ「それに向こうも喧嘩腰で気に入らねえしよ!」

ケンジ「先程の口振りだと、我々が攻撃しなければ、君も我々の敵にならないと言う事か？」

拓哉「そう言っている」

森次「…」

青山「どうするんです、室長？」

森次「…素性は分からないが、今回は音声だけでも、通信をして来たところを見ると、少しでも我々を信用してくれたという事でしょう。私は彼を信じてもいいと思います」

いぶき「私達も異論はありません！」

鏡「こちらもです」

ケンジ「いいだろう」

マリア『そうですね…少なくとも悪い人ではなさそうですし』

スザク「今は味方が多い方がいい。…では、協力してもらえるかな？」

拓哉「…勝手にやるだけだ」

音声通信を切る。

夏華「うまく行きましたね！」

拓哉「だが、警戒だけは怠るな。背後から撃たれては面倒だ」

夏華「了解しました！」

俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 剣児VS初戦闘〉

剣児「ギシン帝国の残党に邪悪獣、それからハニワ幻神か…。へっ！何が来ようと俺とジীগを止められる奴はいねえ！片っ端からかかって来やがれ！」

〈戦闘会話 鏡VS初戦闘〉

つばき「鏡君、敵が来るわ！」

鏡「ああ、わかった！ビッグシューターがただの援護機だと思うなよ！」

〈戦闘会話 柳生VS初戦闘〉

門子「オラオラ、暴れまくるぜ！」

身堂「ふっ、いいぐらいの乱戦だね」

柳生「ええ、そうね。…じゃあ…ビルドエンジェル隊、攻撃開始！」

〈戦闘会話 仁VS初戦闘〉

マリア『三人とも、バクリユウオーは前回の戦闘で修理中よ！』

飛鳥「ゴッドライジンオーにはなれないって事だな…！」

仁「へっ！ゴッドライジンオーになれないからって、負ける俺達じゃないぜ！」

吼児「うん！仁君、戦闘の準備はバッチリだよ！」

仁「わかったぜ、吼児！ライジンオーの力…受けやがれ！」

〈戦闘会話 森次VS初戦闘〉

森次「（赤紫のロボットのパイロット…声質から子供なのか…？それと、あの声…何処かで聞いた事がある様な気がする…）」

〈戦闘会話 拓哉or夏華VS初戦闘〉

夏華「ギシン帝国に邪悪獣、それからハニワ幻神…どれも世界を脅かす存在です！」

拓哉「世界の危機など知った事ではない。…誰が相手であろうと俺の邪魔をするのなら、潰すだけだ」

敵を倒しつつあった俺達…。

だが、突然地響きが起こった…。

ー夢野 ナオミよ。

私はバイトをしていたら、町にギシン帝国の戦闘機や邪悪獣、邪魔大帝国のハニワ幻神が現れて、町は大パニックになっていたの。

私も逃げている途中…。

ジェッタとシン君は避難し始めているみたいだし…。

すると、私はある人物の後ろ姿を見て、足を止める。

スーツを着た…そう、前回の怪獣出現の時にあの巨人をウルトラマ

ンオーブと口にした男の人…。

男の人は街がパニックになっているというのに、焦りもせず ゆっくりと歩いていく。

…あの人を追えば、何かわかるかも…。

そう思い、私は男の人の後をつけていると、あるビルの暗がりにもで来た。

すると、男の人が何かの機械にカードをかざして、地面に力を送っているのを見た。

ジャグラー「…ゴモラ」

何してるのか分からないけど…。

何かの手掛かりになるわね…！

そう思い、私はスマホでこの光景を録画しようとしたその時、ジエツタから電話がかかって来てしまう。

ジエツタ『キヤップ、今何してんだよ！早く逃げないとヤバイぞ！』

…何て、タイミンクの悪い…！

バレたかな…？

そう思い、再び、覗き込むとそこには男の人の姿がなかった。

…その代わりに…。

ナオミ「ツ…！」

ジャグラー「やあ、お嬢さん。またお会いできましたね」

いつの間に背後に…!!?」

ナオミ「あなた…ここで何してるの…？」

ジャグラー「…恋は矛盾に満ちている。謎が多いほど…危険が多いほど惹かれ、虜になっていく。まるでこの世界そのものだ」

男の人が私の首を絞めようとしたその時だった。

ガイ「おい」

ジャグラー「…」

え…。

ガイ「そいつを離せ」

風来坊の人…！

ナオミ「あ、あなた…！どうしてここに…!!?」

ガイ「…！土の魔王獣が目覚める…！」

ナオミ「魔王獣…!?!？」

ガイ「そいつが目覚めれば、地上の全てが土に飲み込まれ、消滅する…！」

な、何を言っているの…!?!？

ナオミ「…あ、あなた達…一体何者なの…？」

ガイ「…この世界には知らない方が幸せな事もある」

ナオミ「幸せなんていい！真実が知りたいの！」

ジャグラー「お嬢さん、続きははずれ。夜明けのコーヒーを飲みながら」

そこまで聞くと私は投げ飛ばされ、気を失った…。

ークレナイ ガイだ。

俺はジャグラーに投げ飛ばされた女をキヤツチするが、女は気を失っていた。

ジャグラー…！

ジャグラー「かつてウルトラ戦士に封印された土の魔王獣、マガグランドキング…。この怪獣達のパワーを喰らい…悠久の眠りから目覚めよ！」

封印が破られたのか…！

ジャグラー「お前の吹くメロデーよりもっといい音色を聴かせてやる。…魔王獣の雄叫びを!!？」

怪しめの笑みを浮かべながら、ジャグラーは姿を消した。

俺は気を失った彼女を背負い、崩れるビルから脱出した。

ガイ「…たく、手間のかかる奴だ」

彼女を壁に立てかけ、俺は走り出した…。

ージエツタだよ。

俺とシンさんはキャップと連絡が途絶えたのを不思議と思い、探している、気を失っているキャップを見つけた。

ジエッタ「キャップ！大丈夫!?？」

キャップの肩を揺るとキャップは目を覚ました。

ナオミ「あれ…私…?」

すると、辺りに地響きが起こり、地面から、巨大な怪獣が現れた…。

―小田切 拓哉だ。

マガブランドキング「グオオオオオツ!!?」

地中から怪獣が現れた…?

ナオト「こ、今度は何だよ!?？」

門子「何だ、ありや!?？」

飛鳥「邪悪獣…じゃないな…!」

剣児「ハニワ幻神でもねえぞ!」

前回の怪鳥は風の…竜巻から現れた…。

そして、今度は土の中から…まさか…!

拓哉「土の…魔王獣…!」

夏華「え…!??土の魔王獣って…!??」

この状態…まさか。

ガイ「光の力、お借りします!」

オーブリング『フュージョンアップ!ウルトラマンオーブ、スペシ

ウムゼペリオン!」

光が出現すると、その光から巨人…ウルトラマンオーブが現れた。

ナオミ「あれは…!」

ジエッタ「ウルトラマンオーブ!」

オーブ「俺の名はオーブ!闇を照らして、悪を撃つ!」

やはり…ウルトラマンオーブが現れた…。

吼児「あれ…ニュースでやってた!」

夏華「ウルトラマンオーブです!」

タケル「彼が…ウルトラマンオーブ…」

剣児「俺達を助けに来てくれたのか？」
鏡「分かん。だが、俺達には敵意を感じない」
スザク「…彼が何者かは分からないが、彼と協力しよう」
森次「そうだな。ひとまずはこの町の死守だ」
戦闘再開だ…。

〈戦闘会話 オーブVS初戦闘〉

オーブ「魔王獣以外の相手か…。地球を狙うというなら、俺が相手になってやる！」

ウルトラマンオーブが怪獣に攻撃を仕掛けたが…。
ウルトラマンオーブの攻撃が跳ね返されてしまう。

オーブ「シュツ…!?？」

つばき「オーブの攻撃が跳ね返された…!?？」

ジノ「何て硬い装甲だよ！」

さらに怪獣は胴体からビーム光線を放った。

オーブ「ッ…!!」

ウルトラマンオーブはそれを避けると背後にあったビルに直撃し、ビルに穴が空いた。

身堂「ビルに穴が空いた…!?？」

仁「なんて威力だよ!?？」

青山「あんなもん受けたら、一たまりもないぞ！」

だが、怪獣は尚もビーム光線を発射する。

オーブはそれを避けると背後にあったビルにあたる…が、先程とは違った。

何と、ビルが光線を弾いた。

…あのビル…。

ガラス張りだ…。

そういう事か。

オーブ「…!!」

ウルトラマンオーブも気づいたのか、怪獣の光線を待ち構え、怪獣は光線を放つ。

それに対し、ウルトラマンオーブはバリアを張り、光線を防ぐ。だが、怪獣は全身にエネルギーを蓄積させる。

…させるか。

森次「やらせはしない」

デイチェイド・ソードと青のロボットの攻撃で怪獣はエネルギーを蓄積するのを止めてしまう。

今だぞ、ウルトラマンオーブ。

俺の視線に気づいたのか、ウルトラマンオーブはうなずき、怪獣の光線を弾き返し、光線は怪獣に直撃し、装甲はボロボロになった。

シン「そうか！最強のレーザーと最強の装甲は両立できない！矛盾です！」

赤木「今なら、攻撃が通るぜ！」

スザク「畳み掛けるぞ！」

反撃開始だ。

〈戦闘会話　タケルorケンジVSマガグランドキング〉

アキラ「倒すなら、今ですよ、隊長！」

ケンジ「そうだな！だが、油断だけはするなよ！」

タケル「了解！怪獣は倒す！」

〈戦闘会話　剣児or鏡or柳生VSマガグランドキング〉

鏡「怪獣だろうとハニワ幻神だろうとやる事は変わらない」

柳生「そういう事！みんな、行くわよ！」

剣児「よっしゃあ！こっからはこっちの番だぜ！」

〈戦闘会話　赤木VSマガグランドキング〉

赤木「町の人達を困らせやがって…！俺達が成敗してやるから、覚悟しろよ！」

〈戦闘会話 森次 or 山下 VS マガグランドキング〉

山下「森次さん、援護します！」

森次「頼む。先程の傷付近を狙っていく…！」

〈戦闘会話 スザク or ジノ VS マガグランドキング〉

ジノ「敵の動きは鈍い！連携していくぜ、スザク！」

スザク「ああ！ルルーシユの夢見た世界にお前達は必要ない！」

〈戦闘会話 仁 VS マガグランドキング〉

仁「掛かってこい、怪獣！お前らを倒すのも俺たち、地球防衛組の使命だ！」

〈戦闘会話 オーブ VS マガグランドキング〉

オーブ「土の魔王獣…！魔王獣は俺が全て倒す！」

〈戦闘会話 拓哉 or 夏華 VS マガグランドキング〉

夏華「リーダー…土の魔王獣とは何の事ですか？」

拓哉「気にしなくてもいい。俺の勘違いだ。（魔王獣…以前現れたあの怪鳥も魔王獣の一種だとすれば…。ウルトラマンオーブとあの風来坊の男…何か関わりがあるのか…？）」

ウルトラマンオーブの攻撃で怪獣は爆発した。

全ての敵を倒した俺達…。

すると、ウルトラマンオーブは俺達を見回し、グッドポーズを向ける。

…ありがとう、という事か…？

グッドポーズを向けた後、ウルトラマンオーブは飛び去った。

ジエッタ「ありがとう！ウルトラマンオーブ！」

ジャグラー「(マガグランドキングのカード入手…)俺からも礼を言うぜ。ウルトラマンオーブ」

拓哉「夏華、俺達も撤退するぞ」

夏華「は、はい！」

俺達は撤退した…。

剣児「行っちゃまいやがった…」

森次「(何故だ…何故か引つかかる…)」

石神『森次君、いろいろ考える事もあるだろうけど、皆さんをJUD A社内に案内してもらえるかなア?』

森次「わかりました…」

クレナイ ガイだ。

俺はマガクリスタルにオーブリングをかざすとマガクリスタルは破壊され、一枚のカードが現れた。

俺はそのカード…ウルトラマンタロウさんのカードを掴む。

ガイ「やはり、封印していたのは、ウルトラマンタロウさんの力でしたか!お疲れ様です!」

そして、俺は今まで手に入れたウルトラマンさん、ウルトラマンティガさん、ウルトラマンメビウスさんのカードも取り出し、手に取った。

ガイ「これから、お世話になります!」

先輩方のカードをしまうと、そこにあの女達が来た。

ジエッタ「あ!あの風来坊!」

またか…。

俺は立ち去ろうとしたが…。

ナオミ「待って!教えて…あなた、何か知っているんでしょ?」

ガイ「言ったはずだ。知らない方が幸せな事もある」

ナオミ「それでも知りたいの!…この世界の裏で何が起きているのか…」

ガイ「ひとつだけ教えてやる。…俺の名は、ガイ…。クレナイ ガイだ」

それだけ言い残し、俺は歩き去った…。

「小田切 拓哉だ。」

「先頭から離脱した俺達…。」

夏華「疲れましたね…。」

拓哉「…。」

夏華「それよりも…ありがとうございました、リーダー。お願いを…聞いていただいて…。」

拓哉「勘違いするな。助けたつもりはない」

夏華「素直じゃないですね…。」

「すると、通信が来た。」

拓哉「俺だ」

ネーナ『拓哉！ヴェーダから情報を得たんだけど、大変だよ！』

何だ…？

拓哉「何があった？」

ネーナ『モンゴルにある太陽光発電施設で…拓哉が探している人物を見かけたという情報が入ったよ！』

拓哉「ツ…！」

奴が…モンゴルにいる可能性がある…！

今度こそ逃さないぞ…！

必ず見つけ出して…殺してやるツ!!？

第3話 天使降臨

「石神 邦生だよ。」

JUDAコーポレーション、株式会社21世紀警備保障の広報二課、コスモクラッシュャー隊、ビルドベース、地球防衛組の代表者が社長室に集まった。

と言つてもコスモクラッシュャー隊の大塚長官、ビルドベースの珠城美和司令、地球防衛組の白鳥 マリア君並びに彼等の保護者の篠田先生は通信でだけどねエ。

あ、ちなみにゼロ君達黒の騎士団はナナリー皇女の護衛に戻つてこの場にはいない。

石神「皆さん、お集まりいただき誠にありがとうございます。まず、私はJUDAコーポレーションの社長、石神 邦生です」

大塚「初めまして、石神社長。：それでですが、JUDAコーポレーションについてお話を聞かせていただいてもよろしいでしょうか？」

石神「はい。皆さんもご存知の通り、我々、JUDAは民間の医療機器メーカーです。：ですが、それは表向きの姿であり、本当の姿は政府と協力して、マキナと呼ばれる存在の回収を行っているのです」

美和「そのマキナというのは何ですか？」

石神「未知の技術によつて、開発された兵器で、それを操縦できる特別な存在がファクターです」

マリア「じゃあ…！」

石神「そう、森次君や山下君の機体もマキナであり、彼らもファクター…そして…」

大杉「現在JUDAの監視対象である早瀬 浩一君…彼もファクターでラインバレルもそのマキナの一種という事ですか…」

石神「その通りです。：そして、皆さんに集まっていたいたのは他でもない。我々、JUDAに協力して欲しいのです」

美和「つまり、マキナ回収を手伝えと？」

大塚「ちなみに、マキナは全て何機存在するんですか？」

石神「現段階では11体と認識しています」

篠田先生『11体…』

マリア『今、私達の知るマキナは早瀬 浩一さんのラインバレル、森次さんのヴァーダント、山下さんのハインド・カインドですね』

石神「森次君や山下君以外にも後一体、マキナがいますが、ファクター共々、今は別の任務についています。いずれ、合流できるでしょう」

…さてと、話す事は話したが…どうかな。

美和『わかりました。ビルドベースはJUDAに協力します』

大塚『コスモクラツシャー隊も協力しましょう』

大杉『我々、広報二課も引き続き、お手伝いをさせていただきます』
これでビルドベース、コスモクラツシャー隊、広報二課の協力は得られた…後は…。

マリア『ひとつお聞きしたい事があるのですが…マキナ回収を行っているのはJUDAだけですか？』

石神「いい質問だね、白鳥 マリア君。…マキナを狙っているのは我々だけでなく、加藤機関もマキナを狙っています」

美和『加藤機関…!?』

大塚『世界の裏で暗躍する日本最古の秘密結社…』

大杉「つまり、マキナを回収するという事は加藤機関との戦闘もあり得ると言う事ですね…」

「流石に小学生の地球防衛組からの協力は難しいかなア？」

マリア『…わかりました。私達、地球防衛組も協力します』

お？

石神「ありがとう。…篠田先生もよろしいですか？」

篠田先生『本来なら、子供達に人間同士の戦争を経験させる事は一教師としては反対なのですが…こいつらは言い出したら、聞きません…。ですから、こいつらのやりたい様にやらせます。…ですが、こいつらに危険が及ぶと言うのなら、私は無理矢理にでも協力を断念させますがよろしいですか？』

石神「構いません。何より、子供達の未来が一番大切ですからね。」

：勿論、我々JUDAも邪悪獣、ギシン帝国の残党、邪魔大帝国への対処もご協力します」

美和『了解しました』

大塚『彼等をよろしくお願いします』

こうして、会議は終わった…。

―森次 玲二だ。

石神社長から、JUDAはビルドベース、コスモクラッシャー隊、株式会社21世紀警備保障の広報二課、地球防衛組と協力する事になったと聞かされ、各パイロット達は格納庫に集まり、自己紹介を始める。まずは私と山下、そしてダイガードのメンバーの紹介が終わる。

次にコスモクラッシャー隊の紹介が始まる。

ケンジ「初めまして、私はコスモクラッシャー隊長の飛鳥 ケンジです」

ナオト「俺は伊集院 ナオト。コスモクラッシャーの射撃及びアタッカーを担当している」

アキラ「僕は木曾 アキラです。コスモクラッシャーのサブやメカニックを担当しています」

ミカ「日向 ミカです。コスモクラッシャーのリーダーなど索敵を担当しています」

タケル「ガイヤー、ならびにゴッドマーズのパイロット、明神 タケルです。よろしくお願いします！」

仁「タケル兄ちゃんの超能力が強くなったなんて驚いたぜ！」

剣児「それに爆弾も取り除かれたんだろ？これで安心して戦えるな」

タケル「ああ。それを気にしていた線もあつたが、これからも俺も全力で戦う」

柳生「次は私達ですね。私は柳生 充子。…こちらは部下の早乙女 門子、身堂 竜子です」

門子「おうよ！」

身堂「よろしくお願いします」

鏡「俺はビッグシューターのメインパイロットを務めている美角鏡です」

つばき「同じく、ビッグシューターのサブを務め、ジグパーツの射出とオペレーターを担当しています」

剣児「草薙 剣児だ！鋼鉄ジグのパイロットだ！」

山下「あの鋼鉄ジグのパイロットが自分と然程歳が変わらないなんて、驚いたツス」

剣児「歳は関係ねえよ。まあ、よろしくな！」

仁「日向 仁だ！剣王のパイロットでライジンオーのメインパイロットだ！」

飛鳥「月城 飛鳥です。鳳王のパイロットでライジンオーの飛行及び姿勢制御を担当しています」

吼児「星山 吼児です！獣王のパイロットでライジンオーのパワー制御と武器操作を担当しています！」

仁「ここにいない地球防衛組のみんな共々よろしく頼むぜ！」

森次「君達のような子供がジャーク帝国からこの地球を守ったとはな」

赤木「室長、仁達は子供だからって甘く見ない方がいいですよ！」

仁「そうだぜ、森次さん！」

森次「ふつ、それはすまない。…ならば、私は君達を子供と見ず、1人の人間と見よう。だが、その分厳しめで行くからな」

仁「望む所だぜ！」

剣児「そう言えば、バクリユウオーはどうしたんだよ？」

飛鳥「バクリユウオーは過去の戦闘のダメージが大き過ぎて、修理中です」

ナオト「確かにバクリユウオーには無理しちまっていた所があったからな」

ケンジ「だが、ゴッドライジンオーになれずとも地球防衛組は健在…流星と言えよう」

吼児「タケルさんはファイナルゴッドマーズは使えるんですか？」
タケル「使えるけど、超能力の消費が激しいからあまりの事態じゃないと使わないな」

剣児「まあ、これだけの猛者が揃えば、何も怖い事はないぜ！」
つばき「もう、油断しないの！」

森次「では、皆さん。少し、連携訓練を取りたいのでよろしいですか？」

私の言葉に皆は頷いた…。

―池波 夏華です。

今日の夜には私達はモンゴルに向かいます…。

学校の方は家庭の事情でしばらくお休みすると言いました。

浩一「池波さん」

夏華「早瀬さん…」

早瀬さんが話しかけてきました。

浩一「家の事情でしばらく休むんだよな？…その、頑張れよ」

夏華「…！はい！」

早瀬さんから応援されて、私は嬉しい気持ちに包まれました！

すると、城崎さんが私の前に立ちました。

絵美「池波さん、少しお話ししたい事があります。屋上へ来ていただけますか？」

夏華「わかりました！」

私は城崎さんと一緒に屋上へ来ました。

夏華「それで…お話とは何ですか、城崎さん？」

絵美「前回のギシン帝国の残党などが現れた時、あなたは、どこへ行っていたのですか？」

…い、いない事に気づかれていたんですね…！

夏華「か、家族が心配で家に帰っていました！」

絵美「誰にも伝えずに…ですか？」

夏華「そ、その…」

ど、どうしよう…?!?

絵美「池波さん…あなた、加藤機関のスパイですか？」

加藤機関…?!?

世界の影で暗躍する悪の組織…。

どうして、城崎さんがそのことを…?!?

絵美「どうなんですか、教えてください」

夏華「…私が加藤機関だと何かまずい事があるのですか？」

絵美「…」

夏華「…。私は加藤機関何かではありません。…勝手にいなくなつた事は謝ります。…ですが、家族が危険になれば、いてもたってもいられなくなるのは事実です…！」

絵美「…！そ、そう…ですか。すみません、疑ったりなどして…：ふ、ふう…。」

疑われた時は強気に接しろ…リーダーの教えがお役に立ちました…。

夏華「いえ！…あ、私もお聞きしたいことがあります！」

絵美「はい、何でしょう？」

夏華「城崎さんって…早瀬さんの事が好きなのですか？」

絵美「は…？」

夏華「転校してきた日からずっと、早瀬さんを見ていたのでもしかしたらと思っていたので！」

絵美「…いえ、彼は最低ですから」

最低…？

夏華「…確かにやり過ぎで最低の所もあります。ですが、彼には優しい心があります」

絵美「(優しい心…)」

夏華「どうやら、私の勘違いの様でしたね！すみません！」

そんな私を見て、城崎さんはクスリと笑いました。

絵美「おかしな方ですね、あなたは」

夏華「よく言われます！」

絵美「あの…夏華さんとお呼びしてもよろしいでしょうか？」
夏華「勿論です！では、私も絵美さんと呼ばせていただきますね！」
私達は笑い合った後、教室に戻りました…。
リーダー、私にも名前で呼び合える友達が出来ました！

ー小田切 拓哉だ。

俺はネーナ・トリニティと通信を行なっていた。

ネーナ『拓哉って、本当に優しいよね。復讐の相手がいるって言うているのに、夏華ちゃんを最後の学校に行かせるなんて！』

拓哉「手続きなどが面倒なだけだ」

ネーナ『そうだ！モンゴルには彼と向かう予定だから！』

拓哉「彼…？…小楯 衛か…？」

ネーナ『そう！彼には例の探査機の破片を調べてもらおうと思ってね！』

拓哉「過去に廃船となったはずの木星探査機の、エウロパが突如として、地球圏へ戻ってきた…」

ネーナ『うん。連邦軍のガデラーザって、モバイルアーマーが破壊したけど、その破片は地球の至る所に落下した…。でも、不自然は事があるんだよね』

拓哉「不自然な事…？」

ネーナ『その落下した破片なんだけどね…。どれも燃え尽きずに地面に落下したの』

…何？

ネーナ『それに…その破片、何か動いているみたいなの』

拓哉「動いている…？破片がか？」

俺の言葉にネーナ・トリニティは頷く。

破片の中に宇宙生物が混ざっている…？

いや、それならば、大気圏で燃え尽きている筈だ…。

拓哉「確かに気になる…。モンゴルに着き次第、ついでに調べる」

ネーナ『お願いね!』

俺は通信を切った。

過去に廃船となったはずのエウロパの帰還…そして、燃え尽きずに地上で移動する破片、か…。

すると、ハーモニカのメロディが聞こえる。

拓哉「…」

心地いい音色だ…。

一体誰が…。

ガイ「お前さんも音楽とかをゆつくり聞いたりするんだな」
風来坊の男…。

拓哉「先程のハーモニカはお前が吹いたものか?」

ガイ「そうだが?」

拓哉「…もう少し聞かせてくれ」

俺の言葉に頷いた男はハーモニカを吹き始める。

この優しくて…そして、何処か切ないメロディ…。

だが、ハーモニカを吹いている時の風来坊の男の表情は悲しそうだった。

そして、吹き終わる。

ガイ「どうだった?」

拓哉「…いい音色だった。…お前、名前は?」

ガイ「クレナイ ガイだ。…お前は?」

拓哉「小田切 拓哉…」

ガイ「そうか、拓哉…。また会おうぜ」

そう言い残し、クレナイ ガイは歩き去った…。

…魔王獣という存在を聞き忘れてしまった…。

夏華「リーダー!」

夏華が駆け寄ってきた。

拓哉「学校は終わったのか?」

夏華「はい!それですわね!今日、友達が出来たんです!」
…。

拓哉「…夏華。お前がここに残りたいのなら、無理に俺についてく

る必要はない」

夏華「…怒りますよ、リーダー。私はあの時からリーダーといつまでも一緒にいると決めたんです！何処までもリーダーにお付き合います！」

拓哉「…後悔するぞ」

夏華「私は後悔した事を後悔する性格なので！」

俺達はステルス状態にしたディシエイドに乗り込み、飛び去った…。

―刹那・F・セイエイだ。

俺達は地球に落ちたというエウロパの破片について、調べていた。ラッセ「地上に降りる…？」

ロックオン「地上に落ちた破片が脳量子波の高い人間を襲っているって情報…本当に信じるのか？」

フェルト「ヴェーダからの確定情報です」

刹那「それが本当なら、仲間が危険だ」

スメラギ「ミレイナ、アレルヤとコンタクトをお願い」

ミレイナ「了解です！」

刹那「…小型艇を頼む」

ロックオン「はいはい。付き合うぜ、刹那」

スメラギ「翔子にも連絡を取って」

フェルト「わかりました！」

ミレイナ「…！ダメです！コンタクト、取れません！」

刹那「…急ごう」

ロックオン「オーライ！」

俺達は小型艇に乗り、地上に急いだ…。

―小田切 拓哉だ。

これ光景は…あの時の…!

俺が…僕だった時のあの時の事件…!

拓哉「ど、どうしてなの…? どうしてこんな事するの!?」

? 「どうして…? 理由なんて必要か?」

僕の目の前のあの人が…2人に…僕のお父さんとお母さんに拳銃を突き付けた。

拓哉の父「拓哉、逃げろ!」

拓哉の母「あなたは生きて!…生きて、あの子を守ってあげて!」

? 「煩いなあ…。もういいから、死んでよ」

拓哉「や、やめっ…!」

僕の制止も聞かずにこの人はお父さんとお母さんに発砲し…お父さんとお母さんは血を流して、倒れた…。

拓哉「あ、あああああつ…! お、お父さん…! お母さん…! 何で… どうして殺したの!?」

? 「だからあ…殺すのに理由なんて必要ないって…さして…」

そして…あの人の視線は…彼女に向いた…。

幼馴染の…理緒に…!

理緒「もう、やめて…!」

? 「やめると言われて、やめる人はいないよ。…そうだなあ…理緒。君が僕とずっと一緒にいてくれたら、考えなくもないよ」

それを聞いて、理緒が僕を見る。

恐怖で涙を流しているはずが、僕を見るなり、笑顔を作った。

拓哉「理緒…!?」

理緒「私が好きなのは拓哉…あなたじゃない! 例え、どんな事されても…あなたとなんて一緒にいないわ!」

? 「そっか…。なら…」

理緒の解答にウンザリした顔をしたあの人は理緒の額に銃口を当てた。

拓哉「や、やめてよ…! お願いだから…理緒だけは殺さないで!」
? 「いやだ」

あの人は引き金に手をかけた。

拓哉「理緒！」

理緒「拓哉…大好きだよ！」

笑顔で俺を見ながら、そう言い放つと同時に…銃声が鳴り響き…理緒は血を流して倒れた…。

拓哉「り…理緒…?!?理緒…理緒!!?」

僕は血を流して倒れた理緒に駆け寄った。

拓哉「理緒…!理緒!ウアアアアアツ!!?」

?「…馬鹿な女だよ。本当に…さてと、拓哉」

今度は奴は僕に銃口を向けた…。

拓哉「許さない…!お前だけは…許さない…!絶対に殺してやる…!」

?「殺す、か。いいねえ!…だが、お前には…僕の実験材料になつてもらおうよ」

それと銃声だけを聞き、僕は気を失った…。

拓哉「ツ…!」

俺は勢い良く目を覚ます。

夢…だったのか…。

息を整えつつ、後ろの席で眠る夏華を見た。

…俺にはもう夏華しかない。

何があっても夏華だけは守ってみせる…!

モンゴルの目的地に着くまでまだ時間がある…。

もう一眠りしよう。

ーアレルヤ・ハプティズムだよ。

僕とマリーは旅の途中で、今はモンゴルに来ていた。

実はマリーが何かの気配を感じ、ここへ来たいと言いついたんだ。

アレルヤ「太陽光受信基地から送電停止…それがそんなにも気になるのかい、マリー?」

マリー「ええ、何だか…妙な胸騒ぎがして…。ごめんなさい、私のわがままに付き合わせてしまつて…」

アレルヤ「いいさ。たまには寄り道も悪くない」

…だが、その胸騒ぎ…何か気になる…。

ー小田切 拓哉だ。

俺達はモンゴルの太陽光受信基地についた。

着いたのだが…。

拓哉「…夏華、起きろ。着いたぞ」

夏華「ふみゆう…もう食べられませんか…」

拓哉「…おい」

俺は指で夏華の頬を何度か押すと…。

夏華は俺の指に噛み付いてきた。

夏華「ハムハムハム…」

拓哉「…いい加減に…起きろ」

夏華「うひゃっ!?」

その後、デイシエイド内に夏華の悲鳴が響いた…。

夏華を起こし、デイシエイドから降りた俺達は基地内に入る。

夏華「むく。デコピンするなんて酷いです!」

拓哉「起きないお前が悪い」

それよりも…ここに奴の情報が…。

夏華「それにしても、リーダー…。人の気配が全くしませんね」

言われてみれば、そうだな…。

だが、基地の中の廊下を曲がった所で俺達は人を見つけたのだが…。

その人を見て、俺達は言葉を失った。

拓哉「ツ…!」

夏華「な、何なんですか…これ!?」

倒れている男の身体からは金属の様な物が出ている。

まるで金属に寄生されているみたいだった。

夏華「リ、リーダー…これは一体…!!?」

アレルヤ「こ、これは…!!?」

マリー「…ツ!!?」

声が聞こえ、俺達は振り返ると1人の男と女がいた。

服装的にこの基地の人間ではないな。

アレルヤ「君達…ここで何をしているんだ?この人のこれは…!!?
?」

拓哉「わからない。俺達も今、ここに来たばかりだ」

マリー「変電施設がなくなっているの。…何かわかる?」

夏華「そ、それも…」

すると、俺達にライトが照らされた。

よく見るとトラックの一台がこちらに向けて、急発進してきた。

俺は夏華を、男は女を押し倒して、トラックの突進を回避する。

そのままトラックは壁に激突し、故障して止まったが…。

驚くべき事は運転手がいらない事、勝手に動いたという事だ。

夏華「う、運転手がいません!」

アレルヤ「え、遠隔操作…!!?」

拓哉「それにしては妙だ。…遠隔操作ならば、激突前に止まるはず
…」

だが、考えている暇もなく、複数のトラックやヘリが俺達に向けて、
動き出してきた。

それとどれも無人で…。

アレルヤ「ひとまず逃げよう!」

俺は男の言葉に従い、遅い来る無人機から逃げ始めた…。

第3話 天使降臨

俺と夏華は男と女と分かれて、逃げたが…。

何と、無人機の全ては俺達の方に来ず、男達の方へ向かった。

拓哉「何…?」

夏華「ど、どうして私達の方には来ないのでしょか…?!?」

だが、男達は何とか、無人機から逃れ続けるが…中には壊れたはずのトラックが元通りに修復されたりしている。

…これはただ事ではないぞ。

さらに無人機達は女の方へ向かっていく。

アレルヤ「どうしてマリィの方に?!?」

ハレルヤ『(決まってるんだろ。マリィの脳量子波に群がってきてんだよ)』

アレルヤ「ハレルヤ…どうして君が…?!?」

ハレルヤ『(ウダウダ言ってる暇はねえ。身体を借りるぜ、相棒!)』

アレルヤ「グッ…!」

すると、トラックは方向転換をして、男に襲い掛かる。

マリィ「…!ハレルヤ!」

ハレルヤ「やっぱりな…。俺の脳量子波に群がって来やがった!」

あの男…先程とは性格が変わっている…。

そして、男は次々と無人機の突進をかわして、破壊していく。

あの男…人間なのか…?

すると、基地周辺に複数のGN—Xが現れる。

夏華「連邦軍のモビルスーツです!助かりました!」

拓哉「…いや、違う」

俺の言葉通り、複数のGN—Xは俺達に向けて、撃ってきた。

マリィ「撃ってきた…?!?」

ハレルヤ「まさか、あいつ等もかよ…!」

…デイシエイドを呼んだが、これでは間に合わない…。

再び、俺たちに向けて、ビームライフルを構えるが…その内の一機に向けて、紫の機体が現れ、突進で吹き飛ばした。

あれは…あの男が来たか。

衛「大丈夫?!?拓哉さん、夏華ちゃん!」

拓哉「小楯 衛か」

夏華「衛さん!ナイスタイミングです!」

小楯 衛…。

2年ほど前に出会ったファフナーと呼ばれる機体に乗った少年だ。どうやら、俺達の世界とは別の世界から来た様だ。

機体名、マークフュンフと共にこの世界にたどり着き、俺達が保護し、協力関係にある。

アレルヤ「あれは…ファフナー…!?？」

マリィ「翔子ちゃんのマークゼクス以外にもファフナーがいたなんて…」

この2人…ファフナーの事を知っているのか？

いや、考えていても仕方がない。

丁度、デイシエイドも来た。

アレルヤ「あれはモビルスーツ…いや、違う！」

マリィ「あなた達…何者なの？」

拓哉「死にたくなければ、避難している」

俺と夏華はデイシエイドに乗り込んだ。

拓哉「いけるか、小楯 衛？」

衛「はい！いつでも行けますよ！」

夏華「では、援護お願いしますよ、ゴウバインさん！」

衛「もう僕はゴウバインじゃないよ、夏華ちゃん。…でも、僕は小楯

衛として戦います！」

戦闘開始だ…。

〈戦闘会話 衛VS初戦闘〉

衛「この世界に来て、2年が経つけど…まだ僕の世界へ帰る手段は見つかっていない…。だったら、この世界で戦い抜くだけだ！」

〈戦闘会話 拓哉or夏華VS初戦闘〉

夏華「ど、どうして連邦軍が私達に攻撃を…!?？」

拓哉「いや、あれも俺達を襲ったトラックと同じ、無人機だ」

夏華「モ、モビルスーツまで勝手に動き出すとは…過去に使われて

いたモビルドールでしょうか…？」

拓哉「それはわからない。…だが、奴等は俺の邪魔をした…潰す」

戦闘開始から数分後…。

さらにGN-Xの増援が現れた。

衛「増援…!?？」

拓哉「統率が取れている…無人機にしては妙過ぎる…」

夏華「こ、このままではキリがありません！」

最悪の場合、撤退も視野に入れなくてはいけない…。

だが、ここで退けば、あの2人に危険が…。

…何を言っている…？

あの2人がどうなろうと俺の知った事ではないはず…。

夏華「リーダー、更なる増援も考えられます！どうしますか!?？」

拓哉「…」

俺は思考を回し、この状況をどうするかを悩んでいると…目の前のGN-Xが突然、爆発した。

いや…この攻撃…狙撃か…？

現れたのは緑のガンダム…。

それにあの太陽炉に粒子の色…。

ソレスタルビーイングのガンダムか。

ロックオン「悪いなあー。休暇は終わりだそうだ」

アレルヤ「ロックオン！」

ロックオン「トレミー、アレルヤ達を発見したぜ」

今度は戦艦が現れる。

ラッセ「2人とも、無事の様だな！」

フェルト「良かった…」

スメラギ「2人とも、早く乗って！」

アレルヤ「みんな…はい！」

2人は戦艦に乗った。

ミレイナ「ハプティズムさんとパーファシーさんを収容しました

！」

フェルト「マークゼクス、来ました！」

今度は白の…フアフナーか…？」

翔子「すみません、マークゼクス…ただいま到着しました！」

ロックオン「謝る必要はねえぜ、翔子。十分間に合ったんだからよ！」

スメラギ「刹那もこっちに向かっていているわ。ロックオンと翔子はここにいる敵を倒して！」

ロックオン「オーライ！…だが、あのGN-Xと戦っている二機はなんだ？」

衛「あれは…マークゼクス!??も、もしかして…羽佐間なの!??」

翔子「その声…小楯君!??どうして、小楯君がここに!??」

衛「羽佐間こそ！」

ラッセ「何だ、知り合いなのか、翔子？」

翔子「はい！友達です！」

ミレイナ「もう一機は何者です？」

拓哉「ソレスタルビーイング…俺達は敵ではない」

スメラギ「質問に答えて。あなた達は何者なの？」

拓哉「今は話をしていない場合ではないはずだ」

スメラギ「そうね。わかったわ…。(あの機体…ズクが日本で見たと同じ赤紫の機体ね…)ロックオン、翔子！彼等と協力して、敵の殲滅を！」

ロックオン「オーライ！サバーニヤ、ロックオン・ストラトス！目標を乱れ撃つ！」

翔子「わかりました！マークゼクス、羽佐間 翔子！目標に向けて、飛翔します！」

衛「羽佐間が…生きていた…！」

拓哉「ソレスタルビーイングと連携する。いくぞ」

夏華「はい！」

戦闘再開だ。

〈戦闘会話　ロックオンVS初戦闘〉

ロックオン「何体群がって、来ようが俺の射線に入った時点で、お前らは負けるんだよ！乱れ撃つぜ！」

〈戦闘会話　スメラギVS初戦闘〉

ラッセ「砲撃の準備、いつでもできてるぜ！」

ミレイナ「ミレイナも準備OKです！」

フェルト「スメラギさん！」

スメラギ「ええ…トレミー、攻撃開始！」

〈戦闘会話　翔子VS初戦闘〉

翔子「小楯君と…やっと知ってる人と会えた…！ソレスタルビーイングの人達の技術で私の身体は治ったの…。だから、元の世界に戻るまで死ねない！」

〈戦闘会話　衛VS初戦闘〉

衛「羽佐間が生きてた…！一騎や遠見達が聞いたら、驚くぞ…！…そして、甲洋も…。これは余計に元の世界に帰らないと！」

〈戦闘会話　拓哉or夏華VS初戦闘〉

夏華「まさか、ソレスタルビーイングの方々と一緒に戦う事になるとは…。それにしても本当の太陽炉は綺麗ですね！」

拓哉「ソレスタルビーイング…。武力により、戦争を根絶しようとした組織…。力は…人を殺めるにまで必要な物なのか…？そんなもの為に父さんや母さん…理緒は…！誰であろうと…邪魔をするのは許さない…！」

突然、一機のガンダムが現れた。

衛「ガンダム…!?!？」

翔子「大丈夫だよ、あのガンダムは味方だから」
ロックオン「よう、刹那！遅かったな」

刹那「ルイス・ハレヴィの護衛に時間がかった。戦線に参加する。
アレルヤ達は？」

フェルト「もう、收容しているよ」

刹那「了解。刹那・F・セイエイ、ダブルオークアンタフルセイバー
…目標を駆逐する」

戦闘再開だ…。

〈戦闘会話 刹那VS初戦闘〉

刹那「あのリボンズそっくりの存在…そして、あのモビルスーツから発せられる声の様なモノ…一体なんだ…？何かを俺達に伝えようとしているのか…？」

俺達は敵を全滅させた…。

ミレイナ「敵機、全滅です！」

フェルト「現時点では増援はありません」

スメラギ「でも、また出てこられるのも困るわね。各機を收容して！赤紫の機体のパイロットも良いわね？」

…敵機に後を追われても面倒だ。

拓哉「ああ」

俺達はソレスタルビーイングの戦艦に收容された…。

そして、俺達は戦艦の艦橋らしき場所まで招かれた。

ミレイナ「ハプティズムさん！ピースさん！お久しぶりです！」

アレルヤ「随分、雰囲気が変わったね、ミレイナ」

マリー「その髪型、とても似合っているわ！」

ミレイナ「大人の女に脱皮中です！」

アレルヤ「フェルトも久しぶりだね」

フェルト「うん…。あ、2人とも、おかえりなさい！怪我はない、刹那？」

刹那「ああ」

スメラギ「刹那、クロスロード君達は？」

刹那「連邦政府の対応で脳量子波遮断施設に移動した」

スメラギ「流石は新政府、良い対応ね」

刹那「それより頼んでいた件だが…」

スメラギ「あ、その事なんだけど…」

ロックオン「…その前に状況を整理しないか？」

スメラギ「そうね…」

翔子「久しぶりだね、小楯君！」

衛「うん！羽佐間…無事で良かったよ！…そう言えば、病気はどうしたの？」

翔子「この世界に来た時にソレスタルビーイングの人達に治してもらったの」

衛「そっか。本当に良かった…！」

ラッセ「嬉しそうだな、翔子の奴」

イアン「元の世界の知り合い…それも友人に会えたんだ。あの反応は当然だろ」

ロックオン「…問題はあいつ等だな」

夏華は珍しそうに艦内を見渡す。

夏華「す、凄いです！戦艦の中なんて、初めて入りました！凄いですよ、リーダー！」

拓哉「…はしゃぐな」

スメラギ「(スザクから聞いていたけど…そのパイロットがこんな子供だったなんて…)」

そして、俺はこの艦の責任者を見る。

拓哉「…助けてくれた事には感謝する。俺は小田切 拓哉。…こっちは池波 夏華…。あの機体、デイスエイドのパイロットだ」

スメラギ「私は戦術予報士のスメラギ・李・ノリエガよ。…じゃあ、拓哉と夏華…。どうしてあなた達はあそこにいたの？」

拓哉「…俺達はある人物を探している。…あの基地にその探している人物がいるという情報を得て、あの場に訪れ、あの事件に巻き込ま

れた」

スメラギ「…では、あなたも詳しい事はわからないのね？」

拓哉「そう言っている」

刹那「何故、ある人物を探している？」

拓哉「…お前達には関係ない」

ラッセ「企業秘密って事か」

拓哉「…」

スメラギ「…では、お願いがあるのだけど…暫くでいいから、私達に協力してくれない？」

何…？

スメラギ「今の世界、少しでも戦える力を持つ人には手伝って欲しいの」

拓哉「断る」

ロックオン「随分即答だな」

拓哉「…この世界がどうなろうと俺の知った事ではない」

マリィ「…ちよつと、聞き捨てならないわね、その言葉…！」

アレルヤ「マリィ…。君もこの世界に生きているはずだよ」

拓哉「俺にはやるべき事がある」

刹那「それがある人物を探す事か？」

拓哉「…お前達には関係ないと言っている」

ロックオン「これじゃあ、いつまで経っても平行線だな…」

夏華「…その人を見つけ出して、殺すのですよね？」

…夏華…。

翔子「えっ…!?？」

スメラギ「殺すですって…!?？」

拓哉「夏華、余計な事を言うな」

夏華「リーダーでは、いつまで経っても話が進みません！私達はあ
る人を探して、リーダーがそのある人を殺す為に動いています！」

衛「僕も初めて聞いた…」

刹那「つまり、お前は復讐の為に戦っているのか？」

拓哉「…」

スメラギ「…じゃあ、取り引きよ。あなたが私達に協力してくれるなら、情報を提供するわ。…どう？」

拓哉「…」

夏華「リーダー…」

拓哉「…いいだろう」

俺の言葉に夏華は驚いたが、それに構わず話し続ける。

拓哉「…勘違いするな。お前達の仲間になるつもりはない。…助けてもらった借りを返して、情報を得る為だ」

ラッセ「借りを返すって…意外に義理堅い奴なんだな」

拓哉「夏華、お前も構わないな？」

夏華「私はリーダーの決定に従うだけです！」

スメラギ「拓哉、夏華、いつまでかはわからないけど、よろしくね！」

拓哉「…」

夏華「はい！スメラギさん！」

スメラギ「それじゃあ、一時間後に今回についての話をブリーフィングルームで話をするわ」

この後、俺と夏華は俺達の仮の自室を与えられ、少し休む事にした…。

第4話 覚悟のカップリング

―小田切 拓哉だ。

もう少しでブリーフィングルームに集まる時間か…。

俺と夏華は廊下で外を眺めていた…。

刹那「拓哉」

拓哉「刹那・F・セイエイ…」

刹那「一つ聞きたい。…お前は何故、ある人物を殺そうとする？」

拓哉「…話す必要はない」

夏華「…そう言えば、私も聞いてませんね。聞かせてくださいよ、リーダー！」

拓哉「話すことでもない」

夏華「むっ…!!いいから話してください!」

拓哉「…奴は…俺の両親と…俺が好きだった女を殺した…」

刹那「…!」

夏華「えっ…!?」

拓哉「…」

俺はそのまま立ち去った…。

―池波 夏華です。

まさか、リーダーの復讐の始まりがそのような残酷な事だったとは

…。

夏華「リ、リーダー!」

刹那「両親や好意を寄せていた女性を殺された…」

夏華「私…不謹慎過ぎましたね…」

フェルト「そんな事ないよ」

…フェルトさんが来ました。

フェルト「夏華は拓哉の事を心配して聞いたんでしょ?優しいんだね」

夏華「フェルトさん…」

刹那「…」

フェルト「…刹那、どうかした？何か感じたんでしょ？」

刹那「…わからない」

そのまま、刹那さんも立ち去ってしまいました…。

スメラギ「拓哉と刹那…無口と無愛想なのはそっくりね」

フェルト「スメラギさん…」

スメラギ「刹那の事が気になるのね？」

フェルト「何だか、怖いんです…。刹那がイノベイターになってから、出会った頃の彼に戻ってしまった様で…。誰にも心を開かなかつたあの頃に…」

スメラギ「変革した自分に戸惑っているのよ。…その能力にも。…私達とは違う自分を強く意識しているのよ」

フェルト「私…刹那に何をしてあげれば…」

スメラギ「彼を、想って上げて」

フェルト「彼を…想う…？」

スメラギ「そう。それがわかり合う為に必要な事。例えすれ違つたとしても、想い続けなければ、その気持ちは相手には届かない。強い想いが人と人を繋いでいく。本当の意味でわかり合う為に」
想い続ける…。

スメラギ「彼への想い…無くさないでね」

フェルト「…はい！」

夏華「スメラギさん…何だか、お母様みたいです」

スメラギ「夏華も…拓哉の事、想ってあげてね」

夏華「わかりました！」

リーダーを想い続ける…。

それは、私にしかできない事…！

リーダーは…私が支えます…！

―小田切 拓哉だ。

俺達はプロレマイオスのブリーフィングルームに集まった…。

スメラギ「刹那が目撃したりボンズ・アルマーク。その人物の正体は130年ほど前に行われた木星探査計画の乗組員だったわ。：フェルト」

フェルト・グレイスが機械を操作すると、目の前にあるモニターが映し出された。

フェルト「木星探査計画は裏でGNドライブの開発も進めています。リボンズタイプのイノベイドがいても、おかしくはありません」

刹那「それが…金属異性体に取り込まれた…」

ロックオン「うん…そう考えた方がいいだろうな」

衛「人間を…取り込む…」

翔子「まるで…フェストウムみたい…」

イアン「フェストウムつてのは、翔子達の世界で戦っていた異性体の事だよな？」

衛「はい。自分たち以外の種族に同化していく存在…それがフェストウムです」

アレルヤ「じゃあ…君達と同じ様にフェストウムがこの世界に来たという事かい？」

翔子「いえ、私達の知る同化現象とは全く違います。そもそもフェストウムは身体の99%が珪素で構成されたシリコン生命体だと認識されているんです」

夏華「では、あの金属異性体はこの世界の異性体…という事になりますね」

スメラギ「ヴェーダの情報でもあの基地以外でも同じ様な被害が出ているらしいわ」

アレルヤ「異性体の目的は…一体何なのでしょうか？」

スメラギ「…わからないわ。そもそも意志があるかどうかもわかっていないのに…。ただ、連邦政府はあの金属異性体の事をELSと呼ぶ事にした様よ」

マリィ「ELS…？」

拓哉「地球外変異性金属体の英訳：Extraterrestrial Livingmetal Shapeshifterの頭文

字を取ったものらしい」

スメラギ「拓哉…どうしてあなたがその事を？」

拓哉「ブリーフィング前に協力者から聞いた」

ロックオン「へえ、そりゃ優秀な協力者だな」

拓哉「…」

ロックオン「仲間の事を褒められているのにもう少し嬉しそうな顔をしろよ」

拓哉「仲間などではない。…単なる協力者だ」

ラッセ「それにしても、お前の笑った所見た事ないな。…もう少し、顔を柔らかくしたらどうだ？」

難しい事を言う…。

夏華「あ、あの…リーダーは…」

拓哉「構わない、夏華。…俺と夏華はかつて…人体実験の被験体にされていたんだ」

アレルヤ「人体実験…!?？」

刹那「何の目的の人体実験だ？」

拓哉「詳しい事は俺もわからない。…ただ、人間に隠された新たな力を呼び覚ます…その様な事を言っていた様な気がする…」

ラッセ「気がするって…」

拓哉「様々な薬などを投与され、俺も意識が朦朧としていた…」
マリー「…」

拓哉「だが、俺と夏華は人体実験により、通常の人間よりも優れた力を手に入れた」

フェルト「優れた力…？」

夏華「私は高い狙撃能力又は射撃能力…そして、どの様な難しい言葉や本でもすぐに理解できてしまう理解能力…これが向上しました」

拓哉「俺は聴覚と視覚が強化され、身体能力も向上した。…だが、得られたのはメリットではなく、デメリットも存在する」

スメラギ「そのデメリットというのは？」

拓哉「夏華は…かつての記憶を失った」

夏華「…」

そう、かつての俺達との記憶も…。

拓哉「そして俺は味覚と…」

そう言い切り、俺はナイフを取り出し…腕に刺した。

血が溢れ、ナイフを伝って、地面に血が落ちる。

夏華「リ、リーダー!?!」

拓哉「…見ての通り、俺には痛覚がない。…ナイフでどれだけ刺されようと銃で撃ち抜かれようと、痛みを感じない。…だが、脳が激しく揺れたりすると、気を失ってしまうがな。そして…」

まだあるのかとこの場にいる夏華以外の者は俺を見続ける。

拓哉「…俺には喜の感情も消失した」

刹那「…!」

イアン「喜の感情が消失だと!?!」

衛「それが拓哉さんの言っていた笑わないのではなく、笑えない…って言葉の意味…」

拓哉「これも人体実験の影響だ。…俺の中に残っているのは怒りと悲しみの感情だけ…。だから、お前達がどれだけ嬉しい事や笑う事があっても俺は笑う事が出来ない」

マリー「そ、そんな…」

拓哉「俺は…半分生きて、半分死んでいる…。ただの抜け殻だ」

夏華「リーダー…」

この場が沈黙に包まれる…。

すると、通信が入り、フェルト・グレイスが応答する。

フェルト「スメラギさん。ゼロから通信が入りました」

スメラギ「繋いで」

フェルト・グレイスが通信を繋ぐとゼロが移った。

ゼロ『ミス・スメラギ、E L Sの件でお忙しいところすまないが、お伝えしたい事がある』

スメラギ「どうしたの、ゼロ?」

ゼロ『先程、自由条約連合の秘密研究施設がゾギリア軍に襲われた』

アレルヤ「自由条約連合の秘密研究施設…?」

ゼロ『自由条約連合が極秘で開発していた試作ヴァリアンサーが』

あつた場所だ。ゾギリア軍はそれを狙い、襲撃したのであろう』

スメラギ「それで：試作機は？」

ゼロ『試作機の2機にパイロットが搭乗し、カップリングシステムという力のおかげで、ゾギリア軍を撤退させた』

ロックオン「ん？じゃあ、何も問題ないんじゃないのか？」

ゼロ『そうとも限らない』

刹那「再び、ゾギリア軍がその施設を襲撃に来る可能性があるという事か」

ゼロ『そうだ。それにより、ナナリー皇女の命で私とジノ、それとプリベンターのエージェントは自由条約連合の支援に向かう事になった。そこでソレスタルビーイングのあなた達にも協力を要請したい』

スメラギ「わかったわ、ゼロ。すぐにそちらへ向かうわ」

ゼロ『感謝する…。それとその時の戦闘で70年前の過去から来たという少年が新型ヴァリアンサーの試作機で戦闘を行ったと聞いた』

翔子「70年前の過去、ですか：？」

ゼロ『本当かどうかはわからないが、シグナスの艦長である倉光艦長達が彼に聞いているようだ。私も着き次第彼に会おうと思つていゝる』

スメラギ「その彼の名前は？」

ゼロ『渡瀬 青葉と言つていた。：では、続きは合流した後で』
そう言い残し、ゼロは通信を切つた：。

ラッセ「70年前の過去からタイムスリップか：。別の世界から来た翔子や衛でさえも驚きものなのにな」

ミレイナ「カップリングシステムとは何なのでしょうか？」

スメラギ「それは行つてみればわかるわ。拓哉達もそれでいいわね？」

拓哉「構わない」

こうしてプロトレマイオスは自由条約連合の秘密研究施設へ向かつた：。

ーゼロことスザクだよ。

ソレスタルビーイングと通信を終えた僕は次にプリベンターの指揮官であるレデイ・アンと話をしていた。

ゼロ「協力、感謝する、レデイ・アン」

レデイ『あなたには世話になったからな。…それよりも今は仮面を外してもいいんじゃないか、スザク?』

僕は仮面を外した。

レデイ『随分とゼロらしくなったな』

スザク「ルルーシュに比べれば、まだまだですよ。…現にゾギリア軍の侵略を食い止められませんでしたし」

レデイ『あの時は様々な戦闘でこちらの戦力がかなり低下していた。…お前のせいじゃない』

スザク「そう言っていただけで、安心します。後、ソレスタルビーイングにも協力要請を出しました」

レデイ『彼等なら、必ず協力してくれると思った。…こちらからはカトルとノインを向かわせた』

スザク「ありがとうございます」

レデイ『世界の平和の為だ。その為なら、私達は協力を惜しまない…それではな』

レデイ・アンは通信を切った…。

…世界の平和の為、か…。

ルルーシュ…僕はゼロとしての責務を全うできているのかな…?
僕は仮面をつけて、倉光艦長の所へ急いだ…。

ーエルヴィラ・ヒルよ。

私は今、シグナス内でフェルミ先生と通信をしていた。

フェルミ「…では、カップリングシステムの実戦での使用の目処が立ったと?」

エルヴィラ「ええ…。」

フェルミ「どうした、エルヴィラ君？そんな顔を見ると小じわが増えるぞ」

エルヴィラ「…」

フェルミ「いつもの冗談にも乗ってこないとなると、深刻な状況のようだね」

エルヴィラ「確かにシステムの起動には成功しましたが、あまりにも未知の部分が多すぎて…」

フェルミ「そういう時には、目の前で起きた事があるがままに受け止める事から始めよう。理論が事実を追いかける事になっても良いじゃないか」

エルヴィラ「先生…」

フェルミ「何はともあれ、君の開発したコックピットシステムを組み込み、カップリングシステムは完成した。そのデータを送ってもらった事でより完成度の高いカップリング機体も開発できよう」

エルヴィラ「これで戦局は変わるのでしょうか…」

フェルミ「そう信じて、今日まで戦って来たんだらう？」

エルヴィラ「はい」

フェルミ「では、再会の日を楽しみにしているぞ。達者でな、エルヴィラ君」

通信を切った私は軽く息を吐いた。

エルヴィラ「あるがままを受け止める…か…。そうは言うけど…。(渡瀬 青葉君…。70年前から来たという彼…。どう受け止めれば良いというの…。)」

―渡瀬 青葉だ。

俺は今、未来の世界にいた。

2014年の時代で謎のロボットに襲われて…。そして、それを…弓原 雛に助けられた…。

でも、俺と雛は謎のロボットごと、金色の渦の様なものに入って…。そして、俺が目を覚ますと、ルクシオンの中にいて…。この2088年

の時代にへと来た。

あの時は仕方なく戦ったけど…。

そして、俺はシグナスという戦艦の艦長室にいて、艦長達から話を聞いた。

青葉「今が… 2088年…」

レーネ「そうだ」

青葉「日本は… 世界は、この74年の間にどうなっちまったんだ…」

レーネ「現在、日本と合衆国日本という二つの日本は自由条約連合に加盟しており、この艦もその所属だ」

自由条約連合… か…。

レーネ「連合は一昨年から、大ゾギリヤ共和国と戦争状態にあり、戦況は厳しい状態にある」

青葉「それが… 未来の世界…」

ディオ「また、それか」

ディオ…！

青葉「まだ信じてくれないのかよ、ディオ！俺は2014年の日本から来たんだ！」

ディオ「人を気安く名前で呼ぶな」

青葉「でも、ディオなんだろう？」

ディオ「お前にそう呼ばれる筋合いはない」

青葉「だって雛が…！」

倉光「そこまでにしよう。えくと… 渡瀬 青葉君…」

青葉「はい」

倉光「君の話は、なかなか信じがたいものだが、事実は小説より奇なり… という言葉もある。こちらも取り込み中でね。君の話は追って検討するのでまずは休息を取ってくれたまえ」

青葉「あ… はい…」

倉光「では、ディオ…。当面、彼の事は、君とコンラッド大尉に任せるから」

ディオ「自分にですか？」

… 何で嫌そうな顔するんだよ。

倉光「君と彼はバディだからね」

ディオ「… あれは緊急避難です。では、隼鷹・ディオ・ウエイン
バード少尉…。渡瀬 青葉を連行します」

… はあ!?!?

青葉「連行って…！」

ディオ「自分の立場をわきまえろ」

青葉「1つだけ聞かせてくれ、ディオ。お前… 弓原 雛っていう
子を知らないか？ 髪の毛の長い子で…」

ディオ「知らない」

青葉「… そうか」

ディオ「では、行くぞ…。失礼します」

ディオに連れられ、俺は艦長室を後にした…。

― 倉光 源吾だよ。

僕と少佐、エルヴィラ先生はディオと渡瀬 青葉君を見送った後、
彼について話し合う。

倉光「… どう思う、彼の事？」

エルヴィラ「ルクシオンのコックピット内に彼の所持品が落ちてい
ましたが…。それらは全て70年前に存在したものです。とはい
え、模造が可能なものも多く、言葉を信じるのは無理があります。何
しろ、時間旅行… ですから」

倉光「そうだよ。僕も簡単に信じる事は出来ないよ」

レーネ「渡瀬 青葉について、いかがいたします？」

倉光「僕等を救ってくれたヒーローなんだけど、ルクシオンの事を
知られてしまったのはちょっと困ったね…。となれば、ルクシオン
とブラディオンを本部基地に移送するまでは、付き合ってもらわな
いだろう」

レーネ「妥当な判断だと思います」

倉光「だが、もし彼が本当に過去から来たのなら、人権にも配慮し

なくてはならない。出発まで、まだ時間がかかるのなら、その間に彼にも最低限の事は学んでもらおう。ついでにエルヴィラ先生にもお願いしたい事があるのだけど・・・」

エルヴィラ「私にですか・・・？」

倉光「うん、実は・・・」

ゼロ「失礼する」

ゼロ君とジノ・ヴァインベルグ君が入って来た・・・。

倉光「初めまして、ゼロ君。・・・この度はありがとうございます」

ゼロ「礼には及ばない。自由条約連合のヴァリアンサーがあるからこそ、ゾギリア軍の全侵略を防いでいるのだからな」

ジノ「実際、ヴァリアンサーの性能には驚かされますからね。・・・それも前回の戦闘の時に見させていたただいた二機の新機ヴァリアンサーのあの性能・・・素晴らしいですね」

エルヴィラ「ルクシオンとブラディオンの事？」

ゼロ「あの時の二機之力・・・普通のものではなかったが・・・あれはいつたい？」

レーネ「すまないが、それを機密事項でそれはお教えする事は出来ない」

ジノ「機密事項って・・・それはないんじゃないですか！俺達だって、そちらに協力を・・・」

ゼロ「よせ、ジノ」

ジノ「だけど・・・！」

ゼロ「我々はあくまで協力者に過ぎない。彼等の秘密事項にまで踏み込む必要はない。すまない、倉光艦長」

倉光「こちらもすまないね。何せ上の人が黙っているとうるさいんだ」

ゼロ「それと、勝手ながら、プリベンターとソレスタルビーイングにも協力要請を出させてもらった」

レーネ「プリベンターはともかく、ソレスタルビーイングだと・・・！！？」

エルヴィラ「彼等・・・まだ活動を続けていたの？」

ゼロ「連邦軍が再編された後でも彼等は影でテロなどの行為を鎮圧している」

倉光「まさに影のヒーローだね」

ゼロ「それより、倉光艦長の仰っていた未来から来たという少年は何処に？」

倉光「あー、渡瀬 青葉君の事かな？彼なら、部下と共に休んでもらっているよ」

ゼロ「彼に会ってもいいか？」

倉光「それは構わないよ」

ゼロ「では、失礼する」

ゼロ君達は部屋を出た…。

新生黒の騎士団にプリベントー、それからソレスタルビーイングか…。

何か、とてつもない事が起こる様な気がするね…。

ー渡瀬 青葉だ！

俺は奈須 まゆかちゃんにこの時代の戦争などを聞いた後、シグナスの中を案内されていた。

まゆか「青葉さん、この時代について、理解してもらえましたか？」

青葉「うん、唐突過ぎてビックリしたけど、まゆかちゃんの説明が分かりやすかったから、わかったよ。それにしても、まゆかちゃんって、凄いな。俺とそんなに変わらない歳なのに、物知りで」

まゆか「こう見えても技術担当ですからね。戦史も勉強しています」

青葉「まゆかちゃんは偉い人なの？」

まゆか「ほんとは技術士官のエルヴィラさんのアシスタントなんですけどね」

青葉「という事は、あの…ヴァリアンサー？って、ロボットについても詳しいの？」

まゆか「はい、それなりには。…それにしても、青葉さん… 70年近く前から来たのにヴァリアンサーの存在にはあんまり驚いてま

せんね」

青葉「雛が乗っていたからな」

まゆか「雛…？女の子の名前…お付き合いなされている人ですか！？」

青葉「そ、そんなんじゃないよ！」

雛は彼女じゃなくて…その…！

リー「70年近く前から来たなんて突飛な事を言っていたが、そういう所は普通の人間だな」

リー「とりあえず、君がシグナスを救ってくれたのは事実だ。礼を言う。俺はリー・コンラッド大尉。シグナスのヴァリアンサー隊の隊長だ」

ヤール「俺はヤール・ドウラン中尉。いつまでの付き合いか、わからんがよろしくな」

青葉「は、はい…よろしくお願いします！リーさん、ヤールさん！」
リー「君には暮らしにくい時代だと思うが、何かあったら、俺達に言ってくれ」

青葉「ありがとうございます！」

まゆか「では、青葉さん。お次は格納庫へ行きましょう」

俺はまゆかちゃんに連れられて、格納庫の前に来た。

まゆか「そうだ。青葉さんが言っていた雛…という方は何者なんですか？」

青葉「…同じクラスの弓原 雛…。未来から来たみたいで、俺のこの時代に送った子だよ。…雛はどうなったんだろうか…」

まゆか「…もし、青葉さんが嘘をついていないんだとしたら…」

青葉「したら…!?!？」

まゆか「夢、ですかね…」

青葉「えっ…し、信じてくれてないのかよ…」

俺はため息を吐きながら、格納庫に入り、目の前に一機のヴァリアンサーが見えた。

青葉「これは…」

まゆか「これが青葉さんが乗って、戦ったヴァリアンサー…ルクシ

オンです」

青葉「ルクシオン…」

…あれ？

青葉「俺が乗っていたヴァリアンサーとは違う…？」

まゆか「だって、試作機ですから、他にはありませんよ。今、エルヴィラさんが青葉さん用にデータを書き換えています」

青葉「データ？俺の？」

まゆか「カツプリング用のヴァリアンサーはパイロット毎にデータを書き換えているんです。次に乗る時は青葉さんのフィットしていると思いますよ」

青葉「え…またこれに乗るの!?？」

まゆか「え？乗らないんですか!?？あれ…？じゃあ、なんで…データを書き換えようと…」

青葉「俺…また戦う事になるのか…？」

ディオ「何をしている？」

この声は…ディオ…！

青葉「ディオ！」

ディオ「名前で呼ぶな。…奈須伍長、この場は機密指定を受けている。艦内を民間人が歩く事を禁止されているはずだ」

まゆか「わ、私…エルヴィラさんに頼まれて、青葉さんに艦の案内を…」

青葉「まゆかちゃんは悪くないだろ！何で俺に直接言わないんだよ！」

ディオ「軍人でない者に軍規を守れとは言わない」

青葉「軍人は女の子を責めるのかよ!?？」

ディオ「奈須伍長は軍人だ」

こいつ…！

まゆか「あ、あの…2人とも！」

ゼロ「取り込み中の所、すまない」

ん？仮面をつけた人と金髪の男の人が来た…？

まゆか「く、黒の騎士団の…！」

ディオ「ゼロ…!?？」

青葉「…誰だ？」

まゆか「先程、話したではないですか！反逆の皇帝、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアを討ち取った英雄で、新生黒の騎士団のCEOのゼロさんです！」

ディオ「何故、あなたがここに？」

ゼロ「渡瀬 青葉君とは君かな？」

青葉「あ、はい。…えっと、俺に何の用ですか？」

ゼロ「倉光艦長から聞いたが、君は70年近く前の過去から来たのだな？」

青葉「そ、そうなんですよ！」

ディオ「ゼロ、こいつの言葉を真に受けない方がいいですよ」

青葉「何だと!?？」

ゼロ「信じる信じないの前に…私は彼が嘘をついている様に見えるい。そもそも、この世界には我々の知らない事もある」

ジノ「現に5次元人などいるからな」

ディオ「…俺は信じる事は出来ませんね」

ゼロ「それはあくまで君の考えだ」

ディオ「…」

どうして信じてくれないんだよ…！

そんな話をしていると、警報が鳴った。

まゆか「これは…敵襲!?？」

ディオ「ゾギリアか…！」

すると、リーさんとヤールさんが来た。

ヤール「どうやら、こっちの離脱より、向こうの奇襲の方が早かった様だな…！」

リー「ディオ、ヤール！出撃の準備だ！」

ディオ「了解！」

ゼロ「ジノ、我々も出よう」

ジノ「はい！」

リー「君はどうするんだ？」

青葉「お、俺は…」

リー「俺達は行くが、君はこの部屋にいればいい。それなりの安全は保証される。扉は、ここを押せば開く。だけど、艦の中は広いから迷子に注意しろよ」

青葉「はい…」

まゆか「では、青葉さん…。また後ほど」

リーさん達は走って行った。

青葉「みんな…。行っちゃまった…。また、戦いになるのか…」

俺は…どうすればいいんだ…？

第4話 覚悟のカップリング

ーゼロこと枢木 スザクだよ。

シグナスが発進した。

アネツサ「ゾギリア軍、来ます！」

ゾギリア軍のヴァリアンサー部隊が出現した。

倉光「想定以上にゾギリアの仕掛けが早いと思っただけど、彼なら、それも納得だよ」

ジノ「彼…？」

倉光「敵の指揮官機…。あれはアルフリード・ガラントのものだよ」

レーネ「ゾギリアのエース…！」

倉光「彼は油断ならない男だ…。ヴァリアンサー部隊に出撃の指示を！」

アネツサ「了解です！」

ゼロ「我々も出るぞ！」

僕達が出撃して、シグナスからもブラディオンとベリルコマンダーが出撃した。

アルフリード「出てきたか。新型の片方は出てきていないか。…そ

れに黒の騎士団のナイトメア・フレームまでいるのか。彼等に対してはどうしますか、マルガレタ特務武官殿」

マルガレタ『何者であろうと連合の味方となるなら、我々ゾギリアの敵です。連合と共に相手をしてください』

アルフリード「了解しました」

来るか…！

アネツサ「艦長、この付近に二機の熱源体が…！」

レーネ「ゾギリアの増援か！」

いや、どうやら来てくれたようだね。

現れたのはガンダムサンドロック改とトールラスが現れた。

ノイン「こちらはプリベンター所属のルクレツィア・ノインとカト

ル・ラバーバ・ウイナーだ。要請に従い、そちらを援護する」

倉光「感謝します。プリベンター…それもコロニーのガンダムが味

方してくれるのは心強いです」

ノイン「…との事らしいぞ、カトル」

カトル「僕はそこまで大きな人間ではないですが…誰かを救えるな

ら、戦います！」

スザク「その純粋さが心強いのだ、カトル」

カトル「ゼロの方が一番心強いですよ！」

アルフリード「プリベンターのモビルスーツにコロニーのガンダム

も彼等につくか…ならば、彼等も撃墜する！」

リー「問答無用で来るか！」

スザク「来るぞ、倉光艦長！」

倉光「ああ、わかっているよ！各機、戦闘開始！」

戦闘開始だ！

〈戦闘開始　カトルVS初戦闘〉

カトル「ゾギリアとの戦いの後…みんなとは連絡が付かない…。みんな、世界の為に戦っていると思うんだ…だからこそ、僕も世界のために戦う！」

〈戦闘開始 ノインVS初戦闘〉

ノイン「私は死ぬつもりはない。あの人に…ゼクスに再び会うため…そして、平和を取り戻す為にな！」

〈戦闘開始 スザクVS初戦闘〉

スザク「ゾギリア…。あの時は遅れを取ったが、今度は負けない！ゼロとして…今度こそ、平和な世界を取り戻してみせる！」

〈戦闘開始 ジノVS初戦闘〉

ジノ「来いよ、ゾギリア！あの時の俺とは一味も二味も違うから、覚悟しておけよ！」

〈戦闘開始 デイオVS初戦闘〉

デイオ「ゾギリア…！戦果を広げるお前達の好きにはさせない！今度こそ…俺が…！」

〈戦闘開始 リーVS初戦闘〉

ヤール「敵さんが来るぜ！」
リー「そのようだな…。よし、ヤール！デイオに負けずにやるぞ！」

〈戦闘開始 倉光VS初戦闘〉

アネツサ「敵機がシグナスの射線状に入りました！」
レーネ「艦長！」

倉光「ああ。僕達は負けるつもりはないよ。…シグナス、攻撃開始！」

戦闘開始から数分後の事だった…。

アネツサ「艦長、戦艦が一隻向かってくる反応があります！」
現れたのは…プトレマイオスだった…。

「小田切 拓哉だ…。」

「どうやら、自由条約連合の施設はゾギリア軍の攻撃を受けていた様だな」

スザク「来てくれたか、ソレスタルビーイング！」

スメラギ「遅くなって、ごめんなさいね」

ラッセ「だが、まあ…何とか間に合った様だな」

フェルト「各機、出撃してください！」

俺達は出撃した…。

カトル「ソレスタルビーイングのみんな！久しぶりだね！」

アレルヤ「カトルもね」

ロックオン「ここからは俺達も参加するぜ！」

刹那「了解、ゾギリアを鎮圧する」

拓哉「…」

スザク「(日本で見た赤紫の機体…。スメラギさんが言っていた事は本当だったのか)」

倉光「感謝します、ソレスタルビーイング。何せ、戦力はこちらが不足していますから」

夏華「何せ、世界のほとんどを取り込んだゾギリア軍が相手ですからね…」

スメラギ「みんな、あくまでも目的は連合の新型ヴァリアンサーの死守よ！」

拓哉「その邪魔をするゾギリアを潰す…それだけだ」

衛「拓哉さんらしいですね」

夏華「(リーダーを想い続ける…。たとえば、世界が敵に回っても、私はリーダーの味方です…！)」

戦闘開始だ…。

〈戦闘会話 刹那VS初戦闘〉

刹那「ゾギリア…戦争行為を続けると言うのなら、俺達は何度でも

武力介入をする…。ガンダムと共に！」

〈戦闘会話　ロックオンVS初戦闘〉

ロックオン「ダメージを受けていた俺達に勝ったからって、調子に乗るんじゃないぞ、ゾギリア！戦争を続けるんだったら、俺達が相手だ！」

〈戦闘会話　アレルヤVS初戦闘〉

アレルヤ「マリィ、ごめんね…また戦う事になって…」

ピーリス「いいえ、ここで戦わなければ、ゾギリアの攻撃で多くの人達の生命が失われるわ」

アレルヤ「マリィ…。わかった。アレルヤ・ハプティズム、ソーマ・ピーリス…ゾギリアの迎撃に入る！」

〈戦闘会話　スメラギVS初戦闘〉

スメラギ「ゾギリアの進行をここで食い止めなければ…！戦争がいつまでも終わらない！いくわよ、みんな！」

〈戦闘会話　翔子VS初戦闘〉

翔子「ELSの事もあるのに…人間同士で争い合っている場合じゃないんですよ！ゾギリアが誰かを傷つけると言うのなら、私も戦うわ！」

〈戦闘会話　衛VS初戦闘〉

衛「人と人が戦い合うなんて、間違っているよ！僕が絶対に止める！」

〈戦闘会話　拓哉or夏華VS初戦闘〉

夏華「ゾギリアのヴァリアンサー…動きが素早いです…！」

拓哉「ならば、動きを読めばいいだけの話だ。素早さを捉える」

やはり、ゾギリアの戦力は面倒だ…。

―渡瀬 青葉だ。

俺は一度、部屋に戻ったが、いてもたってもいられずに格納庫に戻ってきた。

まゆか「青葉さん！」

青葉「よう… まゆかちゃん」

まゆか「今は戦闘中なんですよ。それなのに格納庫なんかに来て」
青葉「そう言うまゆかちゃんは何してるの？」

まゆか「ルクシオンの最終調整です」

青葉「ルクシオンの…」

すると、攻撃を受けたのか、シグナスが揺れた。

まゆか「きゃあっ！」

青葉「まゆかちゃん！」

ドン「若いの！ぼさつとしているなら、部屋に行ってる！」

青葉「お、俺の事？」

ドン「ああ、そうだ…。と言っても、今日の敵の場合、部屋にこもっていても危険かも知れんがな」

すると、倉光艦長から通信が入った。

倉光『ドン整備長、ちよつといいかな？』

ドン「おう、艦長。戦闘中に何の用だ？」

倉光『そこにいるなら、丁度いい。青葉君も聞いてくれ』

青葉「俺も？」

一体…何だ…？

―小田切 拓哉だ。

俺達はゾギリアの猛攻に苦戦していた…。

フェルト「新たな敵機を感じ！」

アネツサ「シグナスに急速接近しています！」

レーネ「伏兵か！」

倉光「やはり、来るか」

くつ、2機のゾギリア増援だと…!??

倉光「アネツサちゃん、デリオを戻して」

アネツサ「ブラディオンはシグナスの援護を！急いでください！」

デリオ「了解！」

ロツクオン「来るぞ！」

デリオ「敵の方が速いか…！」

アレルヤ「このままでは、シグナスがやられてしまう！」

ピーリス「だけど、この数じゃ援護に回れない…！」

刹那「待て、何か出て来る」

シグナスから出て来たのは… 白いヴァリアンサー…？

デリオ「ルクシオン…！渡瀬 青葉か！」

倉光「青葉君… 再び民間人の君を頼る事になってしまつて本当にすまない。とは言え、四の五の言つてられない状況でね。僕等の艦を救うには、君に戦つてもらうしかないんだ」

青葉「いえ… 俺だつてこんな所で死ぬわけにはいかないから…！（でも、やっぱ怖えなあ…）」

エルヴィラ「青葉君！あなたは、この前のカップリングで既にデリオの操縦知識を共有したわ！問題なく飛べるはずよ！」

青葉「問題ないって… 簡単に言われても…！」

デリオ「出来ないのなら、引っ込んでいろ！」

青葉「誰が出来ないって言った！」

ルクシオンという機体はブラディオンという機体の横に並んだな…。

ビゾン「出て来たな、新型の片割れ！昨日の借りを返すぞ！」

青葉「やるぞ、デリオ！」

まゆか「ルクシオン、ブラディオン、互いのセブンスコード受信範囲内です！」

エルヴィラ「プロポージング！」

ルクシオンとブラディオンは紫のヴァリアンサーに攻撃を仕掛け

た。

青葉「これが俺の役目なら…！コネクティブ・デイオ！」

デイオ「アクセプション！俺の指示に従え！」

青葉「やるぞ！やるんだ！」

デイオ「これで決める…！」

青葉・デイオ「うおおおおおっ！！？」

ルクシオンとブラディオンの合体攻撃で敵ヴァリアンサーを斬り裂いた。

ビゾン「これが連合の新型の力か…！」

あのスピードは一体…？

ラーシャ「ビゾン！」

タルジム「なんてスピードだ、あいつ等！」

倉光「すごいもんだね、あれ…！」

ジノ「やるな、あいつ等！」

スザク「これで問題はないな、青葉」

エルヴィラ「カップリング機なら、当然の事です。2機の機体のパイロットを含んだ、全てのポテンシャルを共有するのがカップリングシステムです。リンケージにより、パイロットは脳だけでなく、すべての感覚をも遅延劣化ゼロで共有しあい…！」

それが…あの二機のヴァリアンサーに搭載されているカップリングシステム…。

エルヴィラ「互いのヴァリアンサーの能力を級数的に高め合います。ゾギリアのパイロットは今、通常の技術限界をはるかに超えたヴァリアンサーを目前にしているのです！」

衛「よ、よくわからないけど…凄いシステム、って事だよね！」

アルフリード「あの速度、あのパワー…！連合のヴァリアンサーの技術を見誤ったのか…！」

ビゾン「中佐！自分ももう1度、仕掛けます！」

アルフリード「待て、ビゾン…！新型2機を引っ張り出せば、作戦の第一段階は成功だ。まずは態勢を立て直せ！」

ビゾン「…了解です」

二機は態勢を立て直した。

翔子「敵のヴァリアンサーにダメージを与えましたよ！」

スザク「やはり、あのカツプリングとかいうのが連合の秘密兵器らしい」

スメラギ「あの2機を軸にして戦えば、何とかなるわ！」

ディオ「行くぞ」

青葉「行くぞって…」

ディオ「その機体に乗った以上、お前にはゾギリアを叩く義務がある」

青葉「わかったよ！」

ビゾン「新型め…！これまでの借りを返してやる！やるぞ、ヒナ！準備はいいな！」

ヒナ「いつでもいいわ」

ビゾン&ヒナ「ゾギリアの敵に死を…！」

俺達は戦闘を再開した…。

〈戦闘会話 青葉VS初戦闘〉

青葉「元の時代に帰る方法なんて、わかっていない…。だからこそ、生きて、雛に会って…元の世界に帰るまで、俺は死ねないんだよ！」

〈戦闘会話 青葉VSヒナ〉

青葉「こいつ…早い！」

ヒナ「お父様…祖国ゾギリアのため、私の手で連合の新型を叩きます！」

〈戦闘会話 デイオVSヒナ〉

ディオ「高機動タイプか…。だが、このブラディオンならば！」

ヒナ「連合の新型…！こいつを野放しにしているのは、祖国ゾギリアが危険に晒される事になる…！」

ルクシオンはゾギリアのピンクの機体にダメージを与えた。

ヒナ「まだフォルトナは戦える…！」

倉光「気をつけるんだ。あのピンクの機体、こちらに突っ込んでくるよ」

レーネ「回頭、急げ！」

青葉「シグナスは…やらせない！」

ピンクの機体がシグナスに接近したが、それをルクシオンが攻撃して防いだ。

青葉「まずい！コックピットに当たった!?？」

ヒナ「くっ…！ハッチが吹き飛んだか！」

青葉「雛！そこにいるのは、雛なのか!?？」

ルクシオンはピンクの機体を掴んでいた…。

ルクシオンのパイロット…敵のパイロットのことを知っているのか…？

ヒナ「は、離せ…！」

青葉「俺だ、雛！今、顔を見せる！」

あの男…一体何を…？

アネツサ「ルクシオン、コックピット開放処理、開始！」

デイオ「貴様、戦闘中に何をしている!?？」

青葉「雛が…雛がいるんだ！」

ヒナ「連合のパイロット…！何故、私の名前を…!?？」

青葉「俺だよ！渡瀬 青葉だ！」

ヒナ「青葉…？」

青葉「そうだ！青葉だ！今、そっちに行く！」

ヒナ「近寄るな！お前はゾギリアの敵だ！」

そう言うと、ピンクの機体はルクシオンから離れた。

ヒナ「ヒナ・リヤザン、撤退します…！」

青葉「雛！」

撤退したか…。

レーネ「敵に情けをかけたのか…!?？」

倉光「どうかな…。彼は相手を敵だと思っていないんじゃない

か…？」

ビゾン「貴様…！よくもヒナを！」

青葉「(雛…どうして…)」

ディオ「貴様…！さっきの真似はなんだ!?？」

青葉「…」

ディオ「おい！戦えるのか!?？」

青葉「…大丈夫だ。(あれは…絶対に雛だった…！それを確かめるためにも俺は死ねない…！)」

〈戦闘会話 青葉VSビゾン〉

ビゾン「何なんだ、こいつは…！操縦技術はともかく、状況判断はまるでシロウトではないか！」

青葉「そうだよ！俺はシロウトだよ！だけどな！俺の事を信じて、俺を送り出してくれた人達の為にも、やらなきゃならないんだよ！」

〈戦闘会話 デイオVSビゾン〉

ビゾン「白いやつとの連携攻撃が厄介ならば、片方ずつ潰すだけだ！」

ディオ「いい判断だ…！だが、その相手に俺とブラディオンを選んだのは迂闊だったな！言っておく…！奴の乗るルクシオンと俺の乗るブラディオンを同じだと思うな！」

ブラディオンの攻撃で敵ヴァリアンサーにダメージを与えた…。

ビゾン「新型め…！一度ならず二度までも…！次の機会には、俺とヒナの借り、纏めて返してやるぞ！」

敵ヴァリアンサーは撤退した…。

っ…！デイシェイドのリーダーに反応…！
という事は…！

俺達の前に数機の骸骨の機体が現れた。

ヤール「な、何だあいつ等!?!」

ディオ「骸骨…!?!」

青葉「あれもゾギリアのヴァリアンサーか?」

エルヴィラ「ゾギリアにも新型機がある情報なんて聞いてないわよ!」

レーネ「では、あれは…」

すると、骸骨の機体は俺達やゾギリア軍にも撃ってきた。

カトル「撃ってきた…!?!」

ノイン「だが、ゾギリアにも攻撃を仕掛けたぞ!」

タルジム「何なんだよ、あいつ等!?!」

アルフリード「連合の機体ではない様だが…」

ラーシヤ「どうしますか、中佐?」

アルフリード「攻撃してきたのならば、奴等もゾギリアの敵と言えよう。連合と共に倒す」

ジノ「ゾギリアの奴等…お構いなしに来るみたいだな!」

拓哉「…あちらから来るとは手間が省けた」

翔子「え…」

夏華「リーダー、あの機体は私達が初めて出会った時に襲ってきた機体ですよね?」

拓哉「ああ。…見たところ、無人機の様だが、関係ない。…奴等を破壊し、残骸を調べる」

夏華「わかりました!」

スメラギ「拓哉、あの機体の事を知っているの?」

拓哉「詳しくは知らない。…だが、俺が探している奴の物だという事は知っている」

スザク「話は後で聞かせてもらう。今は対処を急ごう」

戦闘再開だ…。

〈戦闘会話 拓哉 or 夏華 VS 無人機〉

夏華「どうして彼等はここで仕掛けてきたのでしょうか…?」

拓哉「そんな事知った事ではない。奴等を潰し、情報を得る…それ以外の事には興味はない」

俺達は骸骨の機体を全て、破壊した…。

夏華「骸骨の機体を全て撃墜しました！」

拓哉「調べるのは後だ…。まずはゾギリアを潰す」

夏華「意外です…。リーダーなら、真つ先に期待の残骸を調べるのかと思いました…」

〈戦闘会話 青葉VSアルフリード〉

アルフリード「機体の性能は素晴らしい物だが、パイロットの腕がそこまでではな」

青葉「言ったな！あんたが指揮官だろうが、俺は負けねえからな！」

〈戦闘会話 デイオVSアルフリード〉

アルフリード「新型機は鹵獲させてもらう」

デイオ「それは俺とブラディオンを倒してから言うんだな、アルフリード・ガラント…！」

〈戦闘会話 拓哉or夏華VSアルフリード〉

夏華「ゾギリアの指揮官機が来ます！」

拓哉「他のヴァリアンサーとは動きが違うが…捕らえられないものではない」

アルフリード「(行政局が危険視している赤紫の機体…どれ程のものか、試してやる)」

俺達はゾギリアの指揮官機にダメージを与えた…。

アルフリード「鹵獲には失敗したが…新型機の性能を再び、見る事が出来た。それだけでもいいでしょう」

敵指揮官機は撤退した…。

全ての敵を足し終えた俺達…。

青葉「な、何とか勝てた…！」

倉光「(あのアルフリード・ガラントにしてはずいぶん早い引き際だったね)」

スザク「増援はないな。…後は…」

俺は、デイシエイドを骸骨の機体の残骸の下まで移動させた。

夏華「よかった…！これで心置きなく調べる事が出来ますね！」

拓哉「回収するぞ」

すると、機体の残骸が音を立て始めた。

何だこれは…！

刹那「…！2人とも、そこから離れろ！」

刹那・F・セイエイの言葉を聞き、俺達は反射的に動く、機体の残骸は一機残らず、粉々に爆散した。

ロックオン「おいおい…爆散しやがったぞ！」

ピーリス「今になって、残骸が爆発したの…？」

スメラギ「いえ…恐らく、遠隔操作で爆散させたのだと思うわ。…

秘密を知られない様に…」

衛「爆散させようとするれば、いつでも出来た…。でも、拓哉さん達が回収しようとした時に爆散させたという事は…」

拓哉「…！」

倉光「彼等を期待させて、あえて爆散させたという事だね」

拓哉「奴は…あいつは…！どこまで俺を嘲笑えば気が済むんだアツ!!?」

翔子「た、拓哉さん…!?」

夏華「リーダー…」

俺達はそれぞれの艦にへと戻った…。

戻った後、俺と夏華、スメラギ・李・ノリエガはシグナスという戦艦の艦長室にへと来ていた…。

そこには黒の騎士団のゼロとプリベンターのエージェントもいる。

倉光「改めて、はじめまして：僕はこのシグナスの艦長、倉光 源吾です」

スメラギ「ソレスタルビーイングの戦術予報士、スメラギです」

倉光「この度は支援していただきありがとうございます」

スメラギ「いいえ、ゾギリアの戦争行為には私達も見逃せませんから」

ゼロ「こちらとて、あの新型機があらうと戦力に差がある事は変わりはない」

ノイン「倉光艦長、これからどうするのですか？」

倉光「後ろ盾を作ろうと思うんだ」

夏華「後ろ盾：？」

倉光「うん。日本のJUDAコーポレーションという会社から手を組まないかという通信が来たんだ」

ゼロ「ほう：」

スメラギ「JUDAなら、信用はできます」

レーネ「どうしてそんなことがわかるのですか？」

スメラギ「私達もJUDAとはコネクションがあるのです」

倉光「それなら、心強い。：それで、あなた方はどうしますか？」

ノイン「プリベンターは引き続き、あなた達にご協力します」

ゼロ「我々も同じ意見だ」

スメラギ「ソレスタルビーイングもお手伝いします。そろそろJUDAにも向かおうと思っていましたので。：拓哉達は？」

拓哉「奴についての情報は得られなかったからな：。引き続き、お前達と行動を共にする」

倉光「助かります。これからもよろしくお願いします」

こうして、俺達は日本へ向かう事になった：。

スペシャルシナリオ リンクする絆

―池波 夏華です！

私は今、ミレイナさんとアネツサさんとお茶の時間を楽しんでいます！

アネツサ「それにしても…まゆか、うまくやってるかな？」

夏華「え？うまくってどういう事ですか？」

確か、まゆかさんは、青葉さんと一緒に街を探索していると思いますが…。

ミレイナ「あれ？池波さん、気づかないんです？」

アネツサ「まゆかね、多分だけど青葉の事、結構気にしている様よ」
気にしている…？

夏華「それって…まゆかさんは青葉さんを異性として意識しているという事ですか？」

ミレイナ「正解です！」

アネツサ「まゆか、青葉がこの時代に来てから、ずっと付きつきりだからね」

…成る程。

夏華「そう言えば、フェルトさんは刹那さんの事を想っているのですよね？」

ミレイナ「はいです！」

アネツサ「そう言うミレイナはどなの？」

ミレイナ「わ、私は…アーデさんの事が…」

アネツサ「アーデさん？」

夏華「ソレスタルビーイングの方でしょうか？」

ミレイナ「はい。今はヴェーダの中に居て、会う事は出来ませんが…。ロセツテイさんはどうです？」

アネツサ「私は、断然ディオよ！」

あ…何となくわかっていました。

夏華「本当にアネツサさんはイケメンさんが大好きですね！」

アネツサ「夏華はどうなの？」

夏華「へっ…？」

ミレイナ「小田切さんの事、どう思っているのですか？」

夏華「えっ…えっ!? わ、私は…その…！」

アネツサ「拓哉さん、人を寄せ付けない雰囲気とかあるけど…顔は格好いいし、クールだから、モテると思うわよ」

夏華「…リーダーには…ずっと想い続けている人がいます」

アネツサ「復讐の相手に殺された女の人ね…」

夏華「リーダーの心には…今でも彼女はいると思います。…だから、私は…」

ミレイナ「だからって、逃げるんですか？」

夏華「え…」

アネツサ「恋は人生の勝負よ！ 例え、拓哉さんの心の中に殺された人への想いが残っていても、夏華はその想いを吹き飛ばせばいいの！」

夏華「想いを…吹き飛ばす…」

そうですね…。

少しでも、私も事も想ってくれる様になればいいのですよね…。

夏華「ありがとうございます！ 私、頑張ります！」

アネツサ「そのいきよ！」

ミレイナ「応援するです！」

この想い…決して諦めません！

例え、辛い道のりでも！

―渡瀬 青葉だ。

俺はまゆかちやんと一緒に74年後の街を見回っていた。

俺が友達とよくバスケした場所…学校…そして、俺の家があった場所…。

全部、変わっていた。

中には戦争によって、崩壊していたところもある。

まゆか「光の渦？」

青葉「そう。俺はそこに入って、パツと光った後、気づけば、この時代にいたんだ」

まゆか「あの時の戦闘中にその様なものの反応はありませんでしたか？」

青葉「そつか…。ねえ、まゆかちゃん。…ゾギリアって遠いんだよね？」

まゆか「え？まあ…遠いですね。海の間うですから…どうしてですか？」

青葉「…やっぱり、雛にあつて聞いてみるしかないと思つてさ」

まゆか「雛つて…え！ゾギリアに行くつて事ですか!?!？」

青葉「ダメかな？」

まゆか「当たり前じゃないですか！ゾギリアは敵国ですよ！青葉さんは前の戦闘で顔を見られているかもしれない。もし、見られていたら、拘束されて、殺されるかもしれないですよ！」

青葉「…そつか。そうだよね！今は戦争中だもんね！何言つてんだろ、俺…」

まゆか「青葉さん…」

青葉「俺…戦うよ、これからも」

まゆか「え…」

青葉「戦争は好きにはなれない。…でも、その戦争で誰かが傷つく所は見たくないんだ。…だから、戦う。元の時代に戻るかどうかはわからないけど…生きる為、雛に会う為…そして、この時代に生きる人達を守る為…俺は出来る戦いをするよ！俺に…出来るかな？」

まゆか「あ、青葉さん…はい、出来ます！だって、青葉さんは…私達の救世主なんですから！」

青葉「救世主つて…大袈裟だよ！」

俺とまゆかちゃんは笑い合う。

だが、そこに見知った姿が目に入る。

よく見ると拓哉さんだった。

夕陽が見える展望台のベンチに座り込み、拓哉さんは夕陽を眺めて

いた…。

―小田切 拓哉だ…。

俺はかつて、理緒とよく遊んでいた展望台に来ていた…。

懐かしいな…ここには良く、理緒とこの夕陽が見えるまで遊んだものだ…。

その夕陽を見て、俺は悔しくなり、拳を強く握り締める。

青葉「拓哉さん？」

声が聞こえ、振り返ると渡瀬 青葉と奈須 まゆかがいた。

拓哉「渡瀬 青葉…奈須 まゆか…」

青葉「こんな所で何してるんですか？」

拓哉「お前には関係ない」

青葉「教えてくれてもいいじゃないですか」

まゆか「あ、青葉さん…プライベートに関わる事なので…」

青葉「あ…す、すみません…！」

拓哉「別に…構わない」

俺は小さくため息を吐いた後、再び、夕陽を眺めながら、口を開いた。

拓哉「ここには…好意を寄せていた幼馴染とよくきていた」

青葉「確か…その人…殺されたんですよね？」

渡瀬 青葉の言葉に俺は頷く。

拓哉「あいつが…理緒が死んだのは俺のせいだ…。俺が無力なばかりにあいつは死んだ」

青葉「(理緒…それが拓哉さんの殺された女の人の名前…)」

まゆか「そんな…拓哉さんのせいでは…！」

奈須 まゆかが何かを言おうとしたが、言い止まる。

拓哉「…それよりもこの時代の妹には会えたのか？」

青葉「いえ…会ったところであいつはもう年寄りだし…多分、信じてもらえません」

俺はそうかと口にし、息を吐いた。

青葉「あの…拓哉さんには兄弟とかつていたんですか？」

拓哉「…妹が、一人…いた」

青葉「その妹は今どこに？」

拓哉「俺と同じく、人体実験の被験体にされ…死んだ」

まゆか「えっ…?!？」

青葉「そんな…!」

拓哉「実際に死んだ所は見えていない。…途中で妹は別の施設へ移されたからな。…だが、人体実験の時、いつも妹は隣で俺に助けを求めていた…俺は何も出来なかった…。兄として俺は何も…!」

俺は拳を強く握り締める。

青葉「拓哉さん…」

拓哉「だから、力を手に入れた俺は…今度こそあいつを殺す。…仇を取る為にも…そして、これ以上、俺の様な人間を作らない為にも…!」

俺は勢い良く、立ち上がる。

拓哉「感情的になつて、すまない。…そろそろ俺は戻る。お前達は…どうする?」

青葉「俺達も戻ります」

こうして俺達はシグナスの下へ戻った…。

すると、警報が鳴り響く。

俺達はすぐさま、艦長室へ急ぐ。

青葉「艦長、何があったんですか?!？」

倉光「街に前回の戦闘で見た骸骨の機体が複数出現したんだよ」

拓哉「…!」

青葉「骸骨の機体って…!」

拓哉「俺は行くぞ。…今度こそ、奴の情報を得る」

青葉「お、俺も…!」

倉光「残念だけど、出られるのはデイスエイドだけだよ」

青葉「どうしてですか?!？」

エルヴィラ「日本に向けて、ほとんどの機体を調整しているの。今出せるのは調整を終えたデイスエイドだけなのよ」

青葉「そ、そうですか…」

すると、夏華が走って来た。

夏華「皆さん！骸骨の機体が現れた場所に次元の歪曲が起こりました！」

エルヴィラ「次元の歪曲…!?？」

空間が…歪んだと言う事か…？

何が起きるか、わからないが、俺達は出撃を急いだ…。

スペシャルシナリオ リンクする絆

↓南雲 一鷹だ！

俺とアリスはルド・グロリアとの戦いの後、平和に暮らしていたはずだったのだが…。

突然、目の前が光ったと思えば、見知らぬ場所にいて、さらにラッシュボードに乗っていた。

アリス「か、一鷹さん…ここはどこなのでしょう…?」

一鷹「わからない…。地球なのは確かだけど…」

それに辺りを見渡すと、骸骨の様な機体が数体、ラッシュボードの周りにいた。

一鷹「あんな、ロボット…見た事ないな」

俺は骸骨の様な機体に通信を送る。

一鷹「すみません、ここはどう言う場所か教えてもらってもいいですか？」

だが、骸骨の様な機体は俺達に攻撃して来た。

アリス「一鷹さん、大変です！攻撃して来ました！」

一鷹「見りゃわかる！…くそッ！何で話を聞いてくれないんだよ！」

アリス「…解析、完了しました。あの機体全ては無人機です！」

無人機…!?..?

一鷹「通りで話を通じないわけだな…！攻撃してくるんなら、仕方ねえ！アリス、行くぜ！」

アリス「はい！いきましよう、一鷹さん！」
俺達は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話 一鷹VS初戦闘〉

アリス「一鷹さん、モード・アーキオーニス以外の武装の準備は全く、問題ありません！」

一鷹「悠兄さん達やストレイバードがいないからな。…だが、負けるつもりはねえ！ここが見知らぬ場所なら、尚更な！」

一体の敵機を倒していると、さらに数体、骸骨の様な機体が出現した。

アリス「増援が現れました！」

一鷹「キリがねえ！どうすりやいいんだよ！」

また、機体の反応…!!?

増援かよ…！

現れたのは赤紫の機体だった…。

―小田切 拓哉だ…。

俺と夏華はデイシエイドに乗り、出撃すると、複数の骸骨の機体とそれと戦う鳥の様な機体が出た。

夏華「また骸骨の機体があります…それに鳥の様な機体もいますね」

拓哉「次元歪曲が治まっている…」

夏華「あの鳥の様な機体…骸骨の機体と戦っている様ですが…」
奴等の味方ではないのは、確かだな。

すると、鳥の様な機体から、通信が入って来た。

一鷹「パイロットがいるなら、応答してください！俺は南雲 一鷹…このロボットの名前はラッシュバードです！俺達はこの骸骨の様な機体に襲われています！」

拓哉「夏華、音声通信を開け」

夏華「はい！」

夏華が音声通信を開き、話し出す。

夏華「こちらは池波 夏華と小田切 拓哉さんです！あなた方はその骸骨の機体のお仲間ですか？」

アリス「いえ、敵です！」

拓哉「ならば、骸骨の機体を撃破する。…ついてくるなら、勝手にしろ」

一鷹「ありがとうございます！お言葉に甘えて、勝手に援護させてもらいます！」

夏華「リーダー、今度こそ、情報を得られるチャンスですよ！」

拓哉「わかっている。…今度こそ、逃がさない…！」

戦闘開始だ。

〈戦闘会話 一鷹VS初戦闘〉

アリス「お話を通じる方達で良かったですね、一鷹さん！」

一鷹「おう！とつとと終わらせて、あの人達に詳しい話を聞かせ！」

〈戦闘会話 拓哉or夏華VS初戦闘〉

夏華「今度は逃しません！」

拓哉「俺は必ず奴を殺す…。そして、その後俺は…」いや、考えるのは後だ…潰す…！」

骸骨の機体を全て撃墜した俺達だが…。

夏華「リーダー、機体の残骸の回収を…！」

拓哉「…いや、不可能のようだ」

そう、骸骨の機体の残骸は、跡形もなく、消滅した…。

夏華「そ、そんな…！」

また、奴の手の中で踊らされたのか…！

一鷹「…あ、あの…」

そう言えば、奴等の対処をどうすべきか……。だが、そこへ倉光 源吾から通信が入った。

倉光『拓哉君、悪いけど彼等をシグナスへ案内してもらえないかな？』

拓哉「…何故だ？」

倉光『次元歪曲が起こった時、そのロボットが突然現れたって、アネツサちゃんが言うんだ。…彼等から話を聞きたいんだよね』

拓哉「…了解。…その機体のパイロット、お前達に会いたいという人間がいる。着いて来てもらえるか？」

一鷹「あ、はい！わかりました！」

俺達は鳥の様な機体…ラツシユバードと共に、シグナスへ帰艦した…。

そして、パイロット二人を艦長室へ案内し、彼等から話しを聞く。

倉光「…話を纏めるに南雲 一鷹君、アリスさん…君達はLOTUSという部隊の一員と戦い、世界の敵を倒した後、平穩に暮らしていたんだね？」

一鷹「はい。ですが、突然目の前が真っ白になったと思ったら、アリスと一緒にラツシユバードに乗っていました」

エルヴィラ「つまり、彼等は…」

拓哉「こことは別の世界の人間…」

倉光「翔子ちゃんや衛君の前例もあるからね。…あまり、驚かないけど…」

まゆか「それにアリスさんがアンドロイドなんて…」

アリス「それにしても…カトルさんとノインさんもこの世界に来ていたんですね！」

カトル「え…？」

ノイン「…私達と君達は初対面のはずだが？」

一鷹「はい!?？何言ってるんですか!?？」

スメラギ「2人の事を知っているの…?？どういう事…?？」

拓哉「…パラレルワールド…」

夏華「パラレルワールド…?」

エルヴィラ「世界は無数にあり、同姓同名の人間が違う人生を歩んでいるというあれの事?」

拓哉「そうとしか考えられない」

アリス「では、ここにいるのは私達の知っているノインさん達ではない、という事ですね」

倉光「一鷹君、アリスさん…これからのこと、どうするのかな?」

一鷹「…皆さんと一緒に戦わせてもらってもいいですか?元の世界へ戻る手立ても見つかっていませんし…俺達だけで行動するのも危険だと思っんです」

倉光「うん、ここで会ったのも何かの縁だしね。これからよろしくね、一鷹君、アリスさん」

一鷹「はい、よろしくお願いします!」

南雲 一鷹「…何故、この男達がこの世界にきたのかはわからないが、俺の敵にはならないだろう…。」

第5話 正義の代償

「カトル・ラバーバ・ウイナーです。

僕は今、ラシードと通信を行っていました。

カトル「ああ、今、僕達は、日本のJUDAコーポレーションに向かっている」

ラシード『大丈夫ですか、カトル様？本当は我々もお従えしたい所ですが…』

カトル「心配してくれてありがとう、ラシード。でも、大丈夫だよ。ノインさんやソレスタルビーイングのみんなもいるから。…それよりもウイングゼロの修復はどうなってる？」

ラシード『まだ時間がかかりますね…。エピオンとの戦いとゾギリアとの戦いで受けたダメージは相当なものですから』

カトル「そうか…」

ラシード『それと…部下を使って調べたのですが…ドリアン外務次官が何者かに誘拐されました』

カトル「なっ…!?？リリーナさんが!?…一体誰が…まさかっ！」

ラシード『恐らくはマリーメイア軍かと…』

という事は少なくともヒイロが動いている可能性があるね…。

カトル「そうになると、余計にウイングゼロの修復を急いでくれ、ラシード」

ラシード『了解しました。カトル様もお気をつけて』

ボクは通信を切った…。

リリーナさんが拐われた…。

これをヒイロが黙って見ているはずがない…。

みんな…一体何をしているのかな…？

「小田切 拓哉だ。」

俺達はシグナスの格納庫にいた。

青葉「今から向かうJUDAコーポレーションって、どんな会社なんですか？」

ディオ「大手の医療器具メーカーと聞いているが…」

リー「それは表向きで実は社長さんが加藤機関に対抗する為に作り出した組織だそうだ」

アレルヤ「加藤機関…世界の裏で暗躍する秘密結社だね」

ヤール「成る程なあ…。つまり、艦長はその後ろ盾を掴もうってワケか」

ロックオン「それもそうだが、それだけじゃない様だぜ」

ジノ「どういう事です？」

ノイン「加藤機関はゾギリア軍と手を組んでいる可能性がある」

ディオ「…！」

青葉「敵同士がですか？」

衛「だから、敵同士が手を組むなら、こつちも手を組もうって考えたんですね」

翔子「でも…確か、ゾギリア軍はマリーメリア軍とも同盟を結んでいましたよね？」

ロックオン「ホント、厄介な話だぜ」

ゾギリア軍、マリーメリア軍、加藤機関…その三組織の同盟が世界にどれほどの恐怖を呼ぶのか…。

一鷹「この世界にもJUDAやビルドベースがあるんだなあ」

夏華「その口ぶりですと一鷹さんの世界にもあるのですか？」

アリス「はい。皆さん、LOTUSの一員です！」

夏華「話を聞く限り、凄い規模の組織なのですわね！」

一鷹「(この世界の森次さん達…どんな方に過ごしているのかな…。それに浩一も…)」

夏華「では、戦いの行く末を一鷹さん達は知っているのではないですか？」

一鷹「いや…実は所々の戦いの記憶が欠落しているんだよな…」
アリス「はい。私もメモリーには異常はないのですが…」

夏華「そ、そうなんですか!?!」

拓哉「…そもそも、南雲 一鷹達の世界の歴史が俺達の世界の歴史と同じとは限らない。…そちらの世界で死んだ人間がこちらでは生き残っているというケースも考えられる…」

夏華「な、成る程…」

ゼロ「今から、向かう北川町に謎の怪奇現象が起こっている様だ」
ゼロが歩いてくる…。

刹那「怪奇現象?」

ゼロ「水道から出る水が臭くなっている」

青葉「…はい?」

ディオ「水が臭くなっている…?」

ヤール「いや、どういう事だよ」

何が起きている…?

ークレナイ ガイだ。

俺は銭湯で風呂に入る為に、水上臭くなっている原因である、場所に来ると、そこには巨大に池に入る魔王獣の姿があった。

ガイ「やはり…魔王獣、マガジャツパ…。大自然を風呂代わりか。おい、お前!ちゃんと掛け湯してから入れ! マナー違反もいい所だぞ!」

すると、マガジャツパは攻撃して来た。

俺はそれを避け続けるが、オーブリングを落としてしまう。

急いでオーブリングを拾おうとしたが、先に拾う者がいた。

…ジャグラーだ。

ジャグラー「随分と不甲斐ないな。大切な物なんだろう? 取り返してみろよ…こいつを。昔のお前自身で」

ガイ「…昔も今も…俺は俺さ」

ジャグラー「格好いいなあ。他のウルトラマンの力を借りなければ変身出来ない男は」

俺はジャグラーに殴りかかったが、ジャグラーはそれを避ける。

ジャグラー「俺は本気のお前とやり合いたいんだ」

ガイ「疲れる奴だな！」

右ストリートを浴びせるが、防がれる。

ジャグラー「こんなもんか？今のお前は？」

ガイ「…！」

俺は蹴りを繰り返して、何とかオーブリングを取り返す。

だが、目の前にジャグラーの姿はなく、背後に気配を感じた。

ジャグラー「完全には錆び付いてない様だな」

そのまま、ジャグラーは姿を消し、俺は歩き去ったマガジャツパを
追いかけた…。

―森次 玲二だ。

私は社長に呼び出され、社長室に入った。

森次「失礼します」

石神「よく来てくれたね」

森次「何でしょうか？」

石神「森次君、あのラインバレルだけど、やっぱり回収しちやっ
てくれない？」

森次「様子を観察するのでは？」

石神「だって、しばらく遊ばせてあげようって思ったけど、彼、全
然行動しないんだもん」

石神「ここ数日間、城崎君からの報告にも変化は見られないし…と
いうワケで、二度手間取らせるようで悪いんだけどさ、よろしく頼む
よ」

森次「わかりました。コスモクラッシャー隊等にも手伝っていただ
きますか？」

石神「勿論、手伝ってもらおうよ。彼等には既に話をつけているから」
緒川「社長、自由条約連合の倉光艦長から通信を頂きました。日本

への到着はもう暫くかかるかと」

石神「急がないから大丈夫だよ。…それよりも、緒川君…水が腐っている件はどうなっているのかな？」

緒川「現在、調査中です」

石神「うーん、次から次に問題が起こるねエ」

原因は不明だが…確かに、ここ最近謎の問題が多いな…。

ー早瀬 浩一だ。

突然、雨が降って来て、俺はずぶ濡れになっていた。

浩一「チクシヨク、天気予報見とくんだったな…」

矢島「浩一…」

浩一「…？矢島…」

矢島「ケリをつけよう、浩一」

本気なんだな…矢島…！

第5話 正義の代償、それは命

俺と矢島は公園に来ていた。

矢島「ぐっ！」

俺に殴り飛ばされた矢島は地面に倒れる。

矢島「ハア…ハア…」

浩一「どういうつもりだ、矢島？お前じゃ俺には勝てないって言うただらうが」

矢島「…だから、それを証明してもらいたいんだよ。…お前にもう俺が必要ないってさ！」

浩一「いいよ。お前が望むなら、格の違いを叩き込んでやるよ」
俺は矢島を蹴り飛ばす。

浩一「無駄だよ。お前は俺に勝てない」

だが、ふらつく身体で矢島は尚も立ち上がる。

浩一「…！」

クソツ…何だよ、この感じ…！俺はこいつに勝ちたかったんじゃないのか？

？俺はこいつより強くなりたかったんじゃないのか？

なのに、何で殴るたびに嫌な気分になっていくんだよ！！？

浩一「もうやめろ！無駄だって言ってるのがわからないのかよ！！？」

矢島「…この前お前に言われて気付いたんだ…。俺の中にある汚いモノに…」

浩一「…？」

矢島「俺は誰かに褒められたくて、誰かの気を引こうとしてお前を守ってただけなんだよ…。お前の想いも気付かずにな」

浩一「……」

矢島…。

矢島「俺はただの卑怯者だよ…。だからさ、結局、理沙子は俺に振り向いちゃくれなかったよ」

浩一「…なんでいまさらそんな事言うんだよ。俺はずっとお前が…」

矢島「正義の味方とでも思ってたか？だから俺が目障りで仕方なかったのか？…安心しろ浩一。俺はそんなモノじゃない。好きな女の前で良い格好したかっただけのどこにでもいるただのガキだ」

浩一「矢島、お前…」

矢島「悪かった、浩一…」

降り続ける雨の中、握手を求める矢島を見て、今まで俺の中にあつたモヤモヤが崩れ去った。

全く…こいつには敵わないな…。

俺もそれに答えるように、手を差しだそうとした瞬間の事だった。

矢島「!!？」

上空から何かが降って来て、爆音と衝撃が俺達の周辺を襲った…。俺は衝撃で軽く吹き飛ばされたが、すぐに立ち上がり、降って来たモノを見上げる。

浩一「また新しい、マキナ…!!？」

ハグレマキナ「ラインバレルの破壊、ファクターの排除。…ラインバレルの破壊、ファクターの排除」

浩一「もう…関わらないって決めたのに…！どうしてこうなるんだよ!?？畜生！どうすればいいんだよ、俺は!!？」

矢島「浩一…」

浩一「…！矢島…どこだ!?？」

矢島「声を頼りに俺は振り返る。」

矢島「いいか、浩一…。大切なのは《どうすればいいか》じゃない」

浩一「矢…」

矢島「お前がどうしたいかだ」

振り返った先に矢島がいた…。

だが、その矢島の姿に俺は目を見開いた。

先程の衝撃で吹き飛んだ鉄筋コンクリートが矢島の身体を貫いていた。

浩一「矢、島…？」

俺は状況が飲み込めず、ただただ、震えていた。

矢島「が…はあっ…！」

浩一「矢島ア!!？嘘だろオ、矢島ア!!?!」

吐血する矢島を見て、俺は矢島に駆け寄ると、矢島は俺の方を持つ。

ハグレマキナ『ファクターの排除!!?!ファクターの排除!!?!』

背後ではマキナが武器を構えている。

だが、俺は見ることも出来ず、矢島の心配をしている。

矢島「せつかく…手に入れた力なんだろう？…なら…正しい事に使ってくれ…。あの日、お前が俺に言ったコト…思い出してくれよ」

マキナから無数の銃弾が俺達に向けて、放たれる。

浩一「矢島!？」

矢島「…気にするな…」

矢島は俺を押し飛ばす。

矢島「昔から、そうだっただろ？」

その言葉を最後にマキナの銃弾が矢島に直撃し、爆散した…。

あいつの右腕がこちらに飛んできた…。

ハグレマキナ「フアクター排除失敗。フアクター排除失敗」

浩一「いまさら謝んなよ…今更あんな事言うなよ…。今更…！
俺の脳裏に、あの頃の記憶が蘇った…。

矢島「将来の夢かあ…。俺ん家は母ちゃんと妹しかいないから、金持ちになって家建ててやりたいなア。んで、お前は？」

浩一「えつと…僕は…矢島君みたいに強くなりたい」

矢島「へ？強くなつてどうすんだよ？」

浩一「…矢島君や理沙子ちゃんが僕にしてくれるように、僕も弱い人や困つてる人を助けたいんだ」

矢島「それがお前の将来の夢？何か正義の味方みたいだな」

浩一「…やっぱり小学四年でそんなの幼稚だよね」

矢島「いや！浩一らしくていいと思うぞ」

浩一「ホントに？」

矢島「うん」

あの頃の…矢島の笑った顔が…！

俺の夢を信じてくれたあいつの顔が…！

なあ、矢島…。

それでもオレ、お前みたいになりたかったんだよ。

俺は矢島の右腕を抱きながら、泣き叫んだ。

それと同時に上空から何が飛来し、持っていた刀でマキナを切り裂いた。

…そこへ複数のロボットが現れた。

山下「何だよ!?？まだ浩一フアクターも乗ってないのに、何で攻撃できるんだよオレ!?？」

森次「…」

「大切なのはどうすればいいかじゃない…。

「お前がどうしたいかだ。」

矢島「俺は…俺はアツ…！」

浩一「俺は…俺はアイツを…殺したい!!?」
俺はマキナを睨み付ける。

浩一「…殺してやる…! お前だけは絶対に…殺してやる!!?」
俺はラインバレルに乗り込んだ…。

―森次 玲二だ。

私達はラインバレルの異常に戸惑いを隠せないでいた。

ケンジ「森次室長、マキナは人間に危害を加えられないように造られている…だから君達フアクターが必要…だと言っていたな?」

森次「ええ、そうです」

いぶき「それなら、どうしてラインバレルはフアクターの搭乗前に攻撃したんですか?」

森次「ラインバレルが正常で、あのハグレマキナにフアクターが搭乗していないという可能性もある」

鏡「つまり、ラインバレルか、ハグレマキナのどちらかが異常、という事ですね」

剣児「兎に角、あいつらをどうにかしようぜ!」

森次「そうだな」

すると、早瀬 浩一が気づいたのか、通信で叫んできた。

浩一「お前等…邪魔するな!!?」

仁「邪魔するなつて…そんな戦い方じゃ、町の人達に被害が出るだろ!」

浩一「知るか!俺はこいつを殺せばいい!」

タケル「憎しみに囚われている…!」

山下「どうするんですか、森次さん!?!?」

森次「仕方ない…。各機、ラインバレルとハグレマキナへの攻撃に当たれ!」

私達は戦闘を開始した…。

戦闘から数分後の事だった。

浩一「うおおおおおっ!!?」

ラインバレル「何というめちやくちやな攻撃だ…!」

赤木「あいつ…あんな戦い方をしたら、街に被害が出るぞ!」

ナオト「まずいな…まだ民間人の避難は終わってないんだろ!!?」

アキラ「というか、突然の事過ぎて、対処が遅れているよ!」

ミカ「…!レーダーに複数の反応が!」

現れたのは…複数のゾギリア軍のヴァリアンサー、マリーメリア軍のモビルスーツ、そして、アルマだった。

柳生「マリーメリア軍のモビルスーツにゾギリア軍のヴァリアン

サー…!!?それと…あれは何…!!?」

森次「アルマ…加藤機関か…!」

つばき「アルマ…?」

森次「アルマは量産型のマキナのコピーだ」

青山「それにしても…マリーメリア軍とゾギリア軍、それから加藤機関の3大勢力が手を組んでいたのは本当だったんだな…!」

ユリアンヌ「その通りよ。JUDAと他の皆さん!」

山下「あんた…加藤機関のメンバーツスか?」

ユリアンヌ「そうよ。加藤機関七番隊隊長、ユリアンヌ・フェイスフルよ。よろしくね、坊や達♪」

身堂「加藤機関も本腰を入れて来たという事か…!」

門子「てめえ等もラインバレルやそのマキナを狙いに来たってワケかよ!」

ユリアンヌ「まあ、そういう事よ。じゃあ、行くわよ、ヒナちゃん」

ヒナ「は、はい…!」

ユリアンヌ「そう気負いすぎないで。折角の身の潔白を晴らすチャンスなんだから…私も協力するから、ね?」

ヒナ「ありがとうございます、ユリアンヌさん!」

吼児「暴れてるラインバレルとハグレマキナに加えて、ゾギリア軍

やマリーメリア軍に加藤機関まで……！こんなので僕達、勝てるの？！」

仁「弱気になるな、吼児！」

飛鳥「……！まだ何が来るぞ！」

現れたのは二隻の戦艦……。

いや、二隻とも知っている……。

―小田切 拓哉だ……。

日本に着いた俺達が見たのは既に戦闘状態にある北川町だった。

スメラギ「すでに戦闘状態のようですね」

倉光「僕は自由条約連合の倉光 源吾大佐です。JUDAの皆さんの支援に参りました」

森次「ご支援、ありがとうございます、倉光大佐。……挨拶を済ませたい所ですが、見ての通りの状況なので、お話は後でよろしいですか？」

倉光「構いません。では、各機に出撃要請を」

レーネ「はい、各機、出撃！」

俺達は出撃した……。

一鷹「(JUDAのみんなやビルドベースのみんな……それから、あのラインバレル……。って、ペインキラーはいないのか……?)」

ロックオン「ついていきなり戦闘に出会すなんて、ついてないな、俺達も」

衛「言っても仕方ないですよ、ロックオンさん」

アレルヤ「そうだね。それに懐かしい顔ぶれもあるし」

タケル「皆さん、お久しぶりです！」

仁「ギシン帝国や五次元人、ヘテロダインとの戦い以来だな！」

赤木「元氣そうでよかったよ！」

カトル「皆さんもまだ戦われていたんですね」

飛鳥「はい！僕達にはまだまだやる事があるので！」

ケンジ「地球の平和を守る事が我々の使命だからな」

スメラギ「みんな、話は後にしましょう」

夏華「ラインバレル…という事は早瀬さんが…」

拓哉「…」

森次「(赤紫のロボット…まさか、ソレスタルビーイングと共にいたとはな…)」

ユリアンヌ「あらあら、面倒な人達も来ちゃったわね」

ディオ「ゾギリアにマリーメイヤ軍…！」

リー「やはり、三勢力が手を組んでいたのは本当の事だったんだな！」

青葉「あのヴァリアンサーは…！」

ヒナ「新型の白いやつか…！」

青葉「聞いてくれ、雛！俺だ！渡瀬 青葉だ！」

ディオ「貴様！また勝手をするつもりか!?？」

青葉「そうじゃない、ディオ！あれには雛が乗っているんだ！」

ディオ「言っただけはさ！俺の足を引っ張るなど！俺は…何としてでもゾギリアを倒さなければ、ならないんだ！」

青葉「ディオ…」

倉光「2人共喧嘩は後にして」

レーネ「今がどう言う時か、考えろ！」

ディオ「…もうしわけありません」

ヒナ「お前を倒し、私は身の潔白を証明する！」

青葉「身の、潔白…？それって、どういう…」

ノイン「後にしろ、青葉！今は奴等を止める！」

青葉「は、はい…！」

浩一「チツ…！面倒なのが増えやがって…！だが、関係ねえ！奴は…あいつだけは殺す！」

戦闘開始だ。

〈戦闘会話 カトルVS初戦闘〉

カトル「こんなにも早く、彼等と戦う事になるなんて…！（それにリリーナ様の居場所も気になる…うまく、聞き出せればいいけど…

！」

〈戦闘会話 ノインVS初戦闘〉

ノイン「マリーメリア軍も面倒な奴等と手を組んだな……！だが、私は退く気はないぞ！」

〈戦闘会話 タケルVS初戦闘〉

タケル「怪獣にギルギロ帝国の残党……それから邪魔大帝国にウルガル……この様な敵がいるのに人間同士で戦いあっている場合じゃないんだぞ！分からないのなら、俺達が止めてやる！」

〈戦闘会話 剣児VS初戦闘〉

剣児「人間相手でも分からずやなら、容赦しねえ！怖いんだったら、とつと脱出しろよな！」

〈戦闘会話 赤木VS初戦闘〉

赤木「やめてくれ！今は人間同士で戦いあっている場合じゃないのがわからないのか！」

青山「……言っても無駄な様だぜ、赤木」

赤木「くそつ！地球を狙う敵なら他にもいるんだ！お前達ばかりに構っている場合じゃねえんだよ！」

〈戦闘会話 森次VS初戦闘〉

森次「(加藤機関は何故、マリーメリア軍やゾギリアと手を組んだ……？奴等にマキナ回収を手伝わせているのか……？)考えていても仕方がない……今はこの場を乗り切る事を考えよう」

〈戦闘会話 山下VS初戦闘〉

山下「相手が加藤機関だろうとゾギリアだろうとマリーメリア軍だろうと関係ない！敵なら、容赦しないだけッス！」

〈戦闘会話　スザクVS初戦闘〉

スザク「(あまりにも同盟を結ぶのが早過ぎる…。この三勢力…何を企んでいる…?)」

〈戦闘会話　青葉VS初戦闘〉

青葉「くそツ、退けよ！俺は雛に会わなければならないんだ！こんな所で立ち止まっている場合じゃねえんだよ！」

〈戦闘会話　ディオVS初戦闘〉

ディオ「ゾギリアめ…！さらに被害を拡大させるつもりか…！お前達だけは決して許さない！」

〈戦闘会話　仁VS初戦闘〉

飛鳥「ややこしい状態だが…行けるな、仁？」

仁「当たり前だぜ！本当は戦争なんてしたくねえ…だが、俺達は止める事を目的に戦うぞ！」

〈戦闘会話　拓哉or夏華VS初戦闘〉

夏華「これまでにない乱戦…戦いは長引きそうです！」

拓哉「長引かせるつもりはない。(まさか、この三勢力に奴が関わっているのか…？いや、まずは情報を得る事が先決か)」

〈戦闘会話　青葉VSヒナ〉

ヒナ「白いの…！今度こそ、お前を倒す！」

青葉「待ってくれ、雛！俺はお前と戦う気はないんだ！」

ヒナ「私はお前の事を知らない！訳の分からない事を口走るな！」
青葉「くそツ…！何でなんだよ、雛…！」

〈戦闘会話　ディオVSヒナ〉

ヒナ「ゾギリアの多くの兵の生命を奪ったお前達は許さない！」

ディオ「ふざけるな…！仕掛けて来たのは貴様達だ！許さないのは

こちらの台詞だ！」

〈戦闘会話 浩一VSヒナ〉

ヒナ「ラインバレル……！捕獲してみせる！」

浩一「邪魔してんじゃねえ！ゾギリアだろうが、何だろうが……邪魔するなら、潰す！」

ヒナ「……！な、何なのこの人の気迫……!?でも、負けるわけにはいかない……私を後押ししてくれたビゾンやアルフリード中佐の為に……！」

ルクシオンの攻撃で、敵のヴァリアンサーにダメージを与えた……。

ヒナ「くっ……！疑惑を晴らすためにも戦果を挙げる必要があったのに……！」

青葉「待ってくれ、雛！俺がわからないのか!?？」

ヒナ「黙れ！馴れ馴れしく人の名前を呼ぶな！お前のせいで私は有らぬ嫌疑をかけられたのだぞ！」

青葉「嫌疑……？」

ヒナ「私はお前など知らない！連合の兵士であるお前は敵以外の何者でもない！此処がどこであろうと連合は我々ゾギリアの敵だ！それを忘れるな！」

敵のヴァリアンサーは撤退したか……。

青葉「雛！」

ディオ「今は戦闘中だ！それ以上の勝手な真似は許さんぞ！」

青葉「…… わかったよ」

ジノ「お、案外簡単に引き下がったな」

ヤール「敵前逃亡は銃殺だから、びびったのか、青葉？」

青葉「…… そうじゃないです。ディオが行くなと言ったからです」

ディオ「お前……」

青葉「俺が雛に本当の事を聞きたいのと同じくらい、ディオがゾギリアを許せないってのがわかったからな……。バデイのあいつの思いを踏みにじって、自分勝手は出来ねえ……」

倉光「ほう…」

スザク「(あの2人…いいバディになりつつあるね)」

ディオ「…わかってているなら、いい。戦線に復帰しろ」

青葉「ああ…。(雛…。お前やゾギリアは、こんな状況でも戦うつていうのかよ…)」

〈戦闘会話 森次VSユリアンヌ〉

ユリアンヌ「成る程。あなたがJUDAの中樞の1人なのね」

森次「お前には聞きたい事がある。戦意を削り落とし、話を聞かせてもらう」

ユリアンヌ「あら、怖い人ね…。でも、大人しく削り落とされるつもりはないわよ」

森次「ならば、力尽くでいかせてもらう」

〈戦闘会話 山下VSユリアンヌ〉

ユリアンヌ「坊やは家に帰って、ママに甘えなさい」

山下「舐めるなよ！僕だって、ハインドのフアクターだ…お前等には負けない！」

〈戦闘会話 青葉VSユリアンヌ〉

ユリアンヌ「あなたね、ヒナちゃんを困らせる子は」

青葉「雛を…困らせる…？」

ユリアンヌ「ヒナちゃんが可愛いのはわかるけど…無理矢理って言うのは女としては見てもらえないわね」

青葉「何言ってるかわかんねえよ！兎に角、悪い奴なら、俺がとつちめてやるよ！」

〈戦闘会話 浩一VSユリアンヌ〉

浩一「お前…何なんだよ！」

ユリアンヌ「何って、加藤機関よ。あなたのそのラインバレルも頂

きに来たの」

浩一「後にしやがれ！俺はあのマキナを殺さないといけないんだ！」

ユリアンヌ「私は待つのは嫌いなよ。…だから、あなたの相手をするわ」

浩一「後にしろって…言っているだろうが!!？」

ユリアンヌ・フェイスフルという女が乗るアルマに俺達はダメージを与えた…。

ユリアンヌ「ふうん、この力…少し厄介ね。いいわ、データも軽く取れたし、ここは退くとしましようか。じゃあね♪」

敵アルマは撤退した…。

刹那「これで残るはラインバレルとハグレマキナのみ…！」

ハグレマキナは潰す…だが、ラインバレルは…。

ー夢野 ナオミだよ。

私達は怪獣が現れたという湖に来たわ。

でも、もう怪獣が町の付近まで…！

渋谷「くそツ、ダメだ…！もう町に入る…！ナオミちゃん達はここまでだ。避難するんだ！」

ナオミ「何言ってるのよ！私達だって、商売だもん！スクープを取り戻さないとこのままじゃ、赤字だし…！」

渋谷「だが、町にも今、ロボット同士の戦いが…！」

ジェッタ「スクープだけの問題じゃない！そりや時にはバカやって、怪獣出現を面白おかしく記事にしてるけど…俺達はどうやって追跡取材して、リアルタイムで更新したら、炎上してでも拡散さえすれば、1分や1秒でも怪獣から避難できるかもしれないだろう！それに…銭湯の平和を取り戻して、綺麗さっぱり洗い流したいだろ…！」

ジェッタ…。

そうだね…！

ナオミ「私達じゃ進行は食い止められなくても…この方法なら、被害を抑えられるかもしれないわ！行きましよう！」

シン「はい！」

渋谷「しようがないな！」

私達は怪獣を追いかけ始めた…。

ークレナイ ガイだ。

あいつら…またここにいやがったのか。

ガイ「ふっ…銭湯の平和と来たか」

さて、俺も負けてられないな…！

だが、そこへ紫の服を着た男が歩いて来た。

？「水の魔王獣を倒しに行くのか？クレナイ ガイ…。いや、ウルトラマンオーブ」

ガイ「…何者だ？」

スウォルツ「俺の名はスウォルツ…。この時代には用があつてな。たまたまお前に会いに来ただけだ。…だが、お前の邪魔をするのも面白い」

アナザーデイケイドウオツチ『デイケイド…！』

スウォルツという男が時計の様なモノを身体に埋め込むとスウォルツは異形の姿へと変わった。

アナザーデイケイド「ジャグラーには悪いが…ここで痛めつけてやる」

ガイ「お前…ジャグラーの事を知っているのか！」

アナザーデイケイド「答える義理はない」

怪物から光弾が放たれ、俺は身構えたが、本を持った青年が何かの力で光弾を全て弾き飛ばした。

アナザーデイケイド「ん…？」

ガイ「あんたは…!?？」

ウオズ「私の事などどうだっていい…。クレナイ ガイ君。君はマ

ガジャツパを倒すんだ。…彼は私に任せてくれ」

ガイ「…わかった。ありがとな！」

俺はその場を走り去った…。

ーウオズだ。

アナザーデイケイド「これはこれは…ウオズではないか。お前もこの時代にいたとはな」

ウオズ「スウォルツ…。我が魔王が倒したはずだが…蘇っていたとは」

アナザーデイケイド「時空の歪みの影響だ。…だが、これで漸く始める事ができる」

ウオズ「何を始めるかは知らないが…邪魔はさせてもらおう」

ウオズミライドウオツチ『ウオズ！』

ビヨンドライバー『アクション！』

ウオズ「変身」

ビヨンドライバー『投影！フューチャータイム！スゴイ！ジダイ！

ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

私は仮面ライダーに変身する。

アナザーデイケイド「常盤 ソウゴがいない今…私に勝てるという事なのか？」

ウオズ「忘れていないかい？私は我が魔王、一の配下だという事を…」

アナザーデイケイド「…ふっ。今日の所は退いてやろう…」

ウオズ「逃げる気か？」

アナザーデイケイド「俺も忙しいのだよ。…何せ、この時代…いや、この世界に存在する叛逆の魔王の器を手に入れなければならないからな」

ウオズ「叛逆の魔王の器…!?？それは一体…！」

アナザーデイケイド「意見は求めん」

そのまま、アナザーデイケイドは消えた…。

私は変身を解除し、先程までアナザーデイケイドがいた場所を見た。

反逆の魔王の器：スウォルツはそれを狙っている…。

ウオズ「…一刻も早く、我が魔王とゲイツ君達を見つけなければ…」

私は我が魔王達搜索を再開した…。

ー小田切 拓哉だ…。

敵アルマが撤退した時だった…。

突然、怪獣が現れた。

山下「ま、また怪獣かよ!?？」

翔子「このタイミングで現れるなんて…!」

フェルト「あの怪獣から凄まじい異臭が立ち込めています!」

リー「まさか…水が腐る原因はあいつか!?？」

ジノ「おいおい…一度に問題が起こりすぎじゃないか!?？」

水が腐る…。

水の…魔王獣…?

という事は…。

ガイ「ウルトラマンさん! テイガさん! 光の力、お借りします!」

オーブリング『フュージョンアップ! ウルトラマンオーブ、スペシ

ウムゼペリオン!』

光と共にウルトラマンオーブが現れた。

オーブ「俺の名はオーブ。闇を照らして、悪を撃つ!」

スザク「ウルトラマンオーブ…!?？」

刹那「あれが…ウルトラマンオーブ…!」

青葉「凄え! 格好いいぜ!」

ディオ「あの怪獣の出現と同時に出来たという事は…」

森次「あの怪獣を倒す為に現れた様だな」

…だが、ラインバレルやハグレマキナにも警戒している…。

何か迷いの様なものも見えるが…。

浩一「次から次へと…何でもいいから、とつとあいつを殺す!」

剣児「あいつ…怪獣は知らんぷりかよ！」

スメラギ「兎に角、みんなはウルトラマンオーブと協力して！」

倉光「これ以上、被害を出さない様に敵を倒すんだ！」

戦闘再開だ…。

〈戦闘会話　オーブVS初戦闘〉

オーブ「(何故、人間同士はお互いを傷つけるんだ…？これでは、俺が魔王獣を倒した所で…彼女の様な犠牲者が出てしまう…。それに、俺はまた…人間を…傷つける事になってしまうのか…？)」

〈戦闘会話　オーブVSマガジャツパ〉

オーブ「グツ…！なんて臭さだ…！だが、ここで退くワケにはいかない！銭湯の平和を守る為にもな！」

〈戦闘会話　拓哉or夏華VSマガジャツパ〉

夏華「水に浸かると水が臭くなる…。ふ、不潔です！」

拓哉「…水の魔王獣、か…。(この近くにいるのか…？クレナイガ
イ…？)」

オーブは怪獣の体臭や攻撃に苦戦していた。

オーブ「グツ…！」

怪獣に蹴り飛ばされ、オーブは地面に倒れた。

仁「オーブ！」

吼児「匂いがオーブには直接聞いちゃうんだ！」

夏華「このままでは、オーブが！」

拓哉「…！」

俺はデイシエイドを動かし、オーブに追撃を掛けようとしていた怪獣にダメージを与える。

オーブ「…!?？」

拓哉「…体制を立て直せ、ウルトラマンオーブ…！」

すると、オーブは頷いた。

ガイ「だったら…この力で！」

オーブの身体が光り出した…？

ガイ「タロウさん！」

オーブリング『ウルトラマンタロウ！』

ガイ「メビウスさん！」

オーブリング『ウルトラマンメビウス！』

ガイ「熱いやつ、頼みます！」

オーブリング『フュージョンアップ！ウルトラマンオーブ、バーン
マイト！』

オーブ「シエアアツ！」

光が炎に変わり、その中から、姿が変わったウルトラマンオーブが
現れる。

シン「オーブの姿が変わりましたよ！」

ジエツタ「何か、かっけえ！」

衛「派生変身…?!？」

ヤール「まんま、ヒーローじゃねえか！」

夏華「か、格好いいです！カッコ良すぎます！」

拓哉「耳元で騒ぐな」

オーブ「紅に燃えるぜ！」

反撃開始という事か…。

〈戦闘会話　オーブVSマガジャツパ〉

オーブ「今度はさつき様にはいかないぜ！（それにしても…あの赤
紫のロボットのパイロットが…あいつとはな）…まあいい！俺に触れ
ると…火傷するぜ！」

ウルトラマンオーブの攻撃で怪獣は爆発した…。

仁「やったぜ、ウルトラマンオーブ！」

ハグレマキナ「…！」

ハグレマキナがウルトラマンオーブに攻撃した…。

オーブ「どうやら、挑んでくるみたいだな！（だが、あのロボットにもパイロットが…いや、町を救う為…そして、パイロットを助ける為にやるしかない！）」

後はハグレマキナとラインバレルだけだ…。

〈戦闘会話　浩一VSハグレマキナ〉

ハグレマキナ「ラインバレルの破壊！ファクターの排除！」

浩一「ガタガタうるせえんだよ…！お前だけは許さねえ…！絶対に殺してやる！矢島の仇のお前だけはな!!？」

〈戦闘会話　森次VSハグレマキナ〉

ハグレマキナ「ラインバレルの破壊！ファクターの排除！」

森次「悪いがどちらの破壊も排除させない。（調べでは、中にはファクターがいる…。万一の時は私が責任を取る。…だから、最悪の場合はファクター事倒させてもらおうぞ！）」

〈戦闘会話　山下VSハグレマキナ〉

ハグレマキナ「ラインバレルの破壊！ファクターの排除！」

山下「ラインバレルの所には行かせない！お前の相手はこの僕だ！」

〈戦闘会話　オーブVSハグレマキナ〉

ハグレマキナ「ラインバレルの破壊！ファクターの排除！」

オーブ「どうしてあのロボットを狙ってるかは知らねえが…そんな事させるかよ！」

俺達はハグレマキナにダメージを与えた…。

ハグレマキナ「…！」

飛鳥「マキナの動きが止まったぞ！」

森次「山下、今だ！バレットアームを…！」

山下「は、はい！」

浩一「や、やめろオ！そいつだけは…そいつだけは俺が！」

ハインドが攻撃を仕掛けた…。

山下「そこだっ！バレットアーム！」

ハインドのバレットアームの攻撃で、ハグレマキナは吹き飛ぶ。

ハグレマキナ「グ、ギギ…」

さらにヴァーダントが追撃をかけた。

森次「山下、後は私が引き受ける。本物の暴力を教えてやろう」

ヴァーダントは刀でハグレマキナを滅多刺しにする。

ハグレマキナ「失敗…失、敗…失…」

ヴァーダントの攻撃にハグレマキナは軽く爆発する…。

浩一「あ、ああっ…！」

ハグレマキナ「ライン、バレルの…破、壊…！ファ、クターの…」

ハグレマキナは爆発した…。

浩一「…な、何してくれてんだ…！そいつは矢島の…俺の仇だったんだぞ！」

夏華「や、矢島さんの仇…!?も、もしかして矢島さんは…！」

浩一「せめて…せめて、仇ぐらいは討つてやりたかったのに…それをよくも…！よくも、邪魔しやがってエエエツ!!？」

何だこの力は…!??

森次「…!??何だ、この反応…ヴァーダントが怯えているのか!?？」

山下「森次さん！ハインドの様子もおかしくなってるツス！」

オーブ「一体…何が起こっているんだ!?？」

浩一「許さねエ…！お前ら全員、矢島の仇同然だ！叩き潰してやる！」

一鷹「お、おいこれって…!?？」

ラインバレルが動き出した…!??

浩一「よくも…よくも矢島の仇をオオオオツ！」

動き出したラインバレルの形状が変化する。

ビーム砲を取り出し、それをビームサーベル状に形成する。

浩一「うおあああああつ!!?」

そして、それを俺達に向けて、振り下ろした。

ラインバレルの放った攻撃は俺達だけでなく、町全体にも被害を及ぼす。

ナオミ「きやあつ!」

渋谷「危ねえ!」

オーブ「シユアツ!」

民間人に被害が出ない様にオーブが守った様だ。だが、俺達への被害も相当なものだった。

拓哉「ツ…!」

剣兎「あ、あいつ…!滅茶苦茶しやがる…!」

刹那「あれが、ラインバレルの力なのか…!」

山下「ぐっ…!な、何て威力だよ!」

森次「まさかこれ程とは…!まともに喰らえばひとたまりもないぞ!」

吼児「で、でもどうすれば…!」

倉光「これはもう手段を選んでいる暇はないよ!全機、ラインバレルを何としてでも止め、町への被害を抑えるんだ!」

浩一「ハア…ハア…!次は…外さない!」

青葉「あいつ…またあれを撃つ気かよ!!?」

赤木「撃たれる前に何としてでも止めるぞ!」

戦闘再開だ。

〈戦闘会話 刹那VS浩一〉

浩一「ソレスタルビーイングのガンダム…!やっぱり、お前等はテロリストだ!」

刹那「怒りに…憎しみに飲み込まれている…!止めてやる…!俺達とガンダムが!」

〈戦闘会話　タケルVS浩一〉

浩一「ゴッドマーズが何で俺の邪魔をすんだよ！」

タケル「今の君は憎しみに囚われているだけだ！心を強く持て…さもないと君の心が…！」

〈戦闘会話　剣児VS浩一〉

剣児「ダチを失って悲しい気持ちはわかる！だけどな！関係のないこの町の奴等まで巻き込んでんじゃねえよ！」

浩一「うるさい、鋼鉄ジグ！邪魔するってんなら、お前も！」

剣児「いいぜ、来いよ中坊！喧嘩売るなら、容赦しねえぞ！」

〈戦闘会話　赤木VS浩一〉

浩一「ダイガード…！何でだよ…！何で！あんた等は正義の味方じゃなかったのかよ！」

赤木「正義の味方だ！だからこそ、君を止めるんだ！いくぞ、ラインバレル！サラリーマンでもお前を止める事は出来るって教えてやる！」

〈戦闘会話　森次VS浩一〉

浩一「…あんた森次とか言ってたなア…。なんでオレの邪魔をするんだよ?!？」

森次「フツ…。私から見れば、君も立派に我々の邪魔をしているのだが？（…ファクターとして覚醒したとはいえ、前回と太刀筋が違い過ぎる…。これでは、まるで別人だ…！）」

〈戦闘会話　山下VS浩一〉

浩一「よくも…よくも邪魔しやがってエ！お前ら、絶対に…！」

山下「お前、いい加減にしろよ！そう言うのを逆恨みって言うんだよー！」

〈戦闘会話　スザクVS浩一〉

浩一「許さない…！許さないぞ、ゼロ！」

スザク「早瀬 浩一君…君を憎しみから解放しよう（このままでは彼の心は崩壊する…そんな事、させるわけにはいかない！）」

〈戦闘会話 青葉VS浩一〉

浩一「何なんだよ、お前！何で邪魔したんだよ！」

青葉「お前こそ何なんだよ！力手に入れたからって、町で馬鹿みたいに暴れやがって！被害が出る事も考えないで正義の味方になんかなれると思うなよ！」

〈戦闘会話 仁VS浩一〉

飛鳥「仁、ラインバレルを止めるぞ！」

浩一「ライジンオー…ガキだからって、容赦はしねえぞ！」

仁「望む所だぜ！小学生に負けてる様じゃ、アンタもまだまだだつてところを教えてやる！」

〈戦闘会話 オーブVS浩一〉

浩一「何がウルトラマンオーブだ！矢島の仇を倒したお前も…俺の仇だ！」

オーブ「闇に飲み込まれるな！俺が必ず救い出してやるから、待つていろ！」

〈戦闘会話 一鷹VS浩一〉

一鷹「おい、やめろよ浩一！バカやってないで正気に戻れ！」

浩一「うるさい！何なんだよ、お前は！気安く名前で呼ぶんじゃねえよ！」

アリス「一鷹さん…」

一鷹「また暴走しやがって…！こうなったら、力尽くで目を覚まさせてやる！」

〈戦闘会話 拓哉or夏華VS浩一〉

夏華 「早瀬さん、もうやめてください！」

浩一 「黙れ！お前等だけは殺してやる！」

夏華 「私の声も届かないなんて…！」

拓哉 「…邪魔をするなら、潰す」

夏華 「リーダー！」

拓哉 「だが、無駄な生命を散らすつもりはない。…最悪の場合は潰すがな。だから、止めるぞ、ラインバレルを」

夏華 「はい！」

俺達はラインバレルにダメージを与えた…。

浩一 「グアアアアアアアツ！チ、畜生…畜生！」

ラインバレルがハインドに急接近した…。

山下 「うわあつ！コ、コイツ…！」

森次 「山下…！」

いぶき 「まずいわ！彼は完全に正気を失ってる！」

柳生 「このままでは山下君が！」

浩一 「うおおおおおっ！」

森次 「クツ…！」

ヴァーダントが動き出した。

アレルヤ 「ダメだ、間に合わない！」

拓哉 「夏華…！」

夏華 「…！はい！」

デイシエイドはガンモードになり、イグニッションマグナムでラインバレルを撃ち抜いた。

浩一 「グツ…!?？」

翔子 「ラインバレルの体制が崩れました！」

拓哉 「行け、森次 玲二…！」

森次 「…ああ…！」

ヴァーダントは体制を立て直しているラインバレルに攻撃を仕掛けた…。

森次 「間に合えええつ!!?リミッターを解除してやろう…！」

ヴァーダントはラインバレルを何度も串刺しにし、バインダーで囲み、その中でも突き刺す。

浩一「うあああああつ!!?」

そして、バインダーを解除したと同時にラインバレルは吹き飛んだ。

浩一「ぐ、あ…!」

ラインバレルは停止した…。

森次「ハア…ハア…」

山下「も、森次さん…」

浩一「ご、ごめんな…矢島…こんなカッコ悪い奴でさ…。でも、俺は…それでも俺は…」

ーお前みたいになりたかったんだよ。

止まったか…。

フェルト「ラインバレルの…停止を確認しました」

倉光「ふう…。何とかなつたね」

青葉「いや…。パイロットは無事なんですか!?!」

森次「問題ない。気を失ってはいるが、生きている」

オーブ「…シエアツ!」

ウルトラマンオーブは飛び去っていった…。

吼児「あ…」

タケル「また飛んで行ってしまった…」

拓哉「…」

森次「皆さん、一度JUDA本社へ来てもらえますか？」

倉光「わかったよ。スメラギ戦術予報士もいいですか？」

スメラギ「構いません」

俺達はそれぞれの艦へ戻り、JUDAへと入った…。

ー石神 邦生だよ。

ラインバレル…実に素晴らしいじゃないか。…。あの赤紫の機体

…デイシエイドだったかな？あれもなかなか…。それに、ウルトラマンオーブか…。フフフ、面白い事尽くしだよ！そして、どうやら俺の予想は当たっていたようだ…。

とはいえ、ラインバレルは制御できていないね…。まずはまあ、ファクターの精神状態に任せるとしようか。

ウルトラマンオーブは…人間を傷つける事が余程嫌いな様だねエ…。

ークレナイ ガイだ。

俺はいつもの通り、マガクリスタルにオーブリングを翳し、カードを手を取った。

ガイ「コイツはウルトラマンジャックさんの力でしたか。お疲れ様です！よろしくお願いします！」

さてと…銭湯にでも行くか！

…今回、俺は人の乗るロボットと戦ったんだよな…。

？『(ガイ…)』

ツ…！ナターシャ…。

お、俺は…！

ージャグラス・ジャグラード。

俺はマガジャツパのカードを入手する。

ジャグラード「最後の一枚もこの調子で頼むぜ…ウルトラマンオーブ」

スウォルツ「順調そうではないか。ジャグラード」

ジャグラード「スウォルツ…。あなたに一つ聞きたい…。どうして、ガイを攻撃した？」

スウォルツ「何、少し見てみたくなったのだよ。ウルトラマンオーブという存在を…」

ジャグラード「…あまり、勝手をされては俺の計画にも狂いが生じる」

スウォルツ「それはすまない。…所で例の件はどうなっている？」
ジャグラ「まだ発見できていない。何しろ、あの魔女でさえも捜索途中らしいからな」

スウォルツ「そうか。引き続き頼む。…どうやら、俺の敵もこの世界に來始めた。…常盤 ソウゴと接触する日も遠くはない」

ジャグラ「安心しろ。このこと赤き地球の境界は分厚い…いくら、元クオーツアアのウオズでも、簡単には越えられない」

スウォルツ「そうか。では、再開しよう。…反逆の魔王の器を探しに…」

―小田切 拓哉だ。

俺達はJUDAの社長室にいた…。

石神「JUDAへようこそ、皆さん！私は社長の石神 邦生です！」

倉光「自由条約連合の倉光です。今度ともよろしくお願いします」

石神「こちらこそよろしくお願いします！」

石神 邦生と倉光 源吾が紹介しあっている所で俺達もそれぞれ顔合わせをしていた。

タケル「久しぶりだな、みんな！」

ナオト「ギシン帝国との戦いの時は世話になったぜ」

ロックオン「地球を守るためだ。関係ねえよ」

赤木「カトル…他のガンダムのパイロットのみんなはどこに行ったんだ？」

カトル「わかりません…。ゾギリアとの戦いの後、みんな…散り散りになってしまいましたから…」

青山「そうか…」

剣児「なあ、お前…過去から來たんだって？」

青葉「え…あ、はい！」

剣児「そう頑なんなよ！これから一緒に戦う仲間なんだ！頑張ろうぜ、青葉！」

青葉「はい、剣児さん！」

仁「兄ちゃん、あん時、メダルを拾ってくれた兄ちゃんじゃないか！」

拓哉「…」

夏華「リーダー、地球防衛組の方々とお知り合いだったんですか？」

飛鳥「仁が落としたメダルを拾って、渡してくれたんです」

吼児「本当にありがとうございます！ございました！それに、僕達は二度も助けられたんですね！」

拓哉「…助けたつもりはない…」

衛「素直じゃないなあ。拓哉さんは」

俺は小楯 衛を軽く睨むと、彼はビクリと動き、苦笑した。

石神「まさか、君達が我々と共に戦ってくれるとはね！」

拓哉「…ずっとではない」

石神「復讐、か…」

森次「小田切」

森次 玲二が来た…。

森次「今回の手助けも感謝する。おかげで山下を助ける事が出来た」

山下「本当にありがとうございました！」

拓哉「…見捨てるのは後味が悪かっただけだ」

森次「ほう、復讐心に駆られていると言っても、お前の心の奥底には微かな正義が残っている様だな」

拓哉「…俺に正義などない…」

森次「…まあ、いい。これからもよろしく頼むぞ、小田切」

拓哉「…」

すると、1人の少女が入って来た。

絵美「皆さん、初めまして！私は城崎…」

夏華「絵美さん!?!」

絵美「え…夏華さん!?!」

…知り合いか？

石神「あれ？2人とも知り合いだったの？」

絵美「が、学校での…ご友人です」

夏華「まさか、絵美さんがJUDAの方とは…。私はあの赤紫の機体：ディシエイドのパイロットの1人なんです！」

絵美「そ、そうだったんですか！では、やはり…早瀬 浩一を監視するため？」

拓哉「…それは俺が言った事だ」

絵美「実は…私は彼女が加藤機関のスパイだと思ってしまい…」

夏華「そんな事もありましたね！」

石神「クラスメイトなら、丁度いいじゃないか。城崎君、池波君と一緒に今後も早瀬君の監視を続けてくれないかな？…小田切君はいかな？」

拓哉「…夏華が決める事だ」

夏華「では…よろしくお願いしますね、絵美さん！」

絵美「ええ。ご友人なのでから、敬語なしでいきましょう」

夏華「うん！わかったよ、絵美さん！」

絵美「こちらこそ、よろしくね…夏華さん」

友人、か…。

一鷹「嬉しそうですね」

拓哉「俺は笑えない」

アリス「でも、拓哉さんから出る雰囲気は嬉しさの感情が出ています」

拓哉「…勝手に言っている」

俺はアリスから顔を背けた。

剣児「なあ、お前…別世界の俺達と知り合いなんだろう？お前の世界の俺達はどうだ？邪魔大帝国を壊滅させたのか？」

一鷹「…実は、所々で記憶の欠落があつて…そこまでは覚えていないです」

山下「そうなのか…」

剣児「まあ、未来を知っちゃったら、楽しくなくなるからな。…よろしくな、一鷹！」

一鷹「こちらこそ！」

南雲 一鷹と草薙 剣児は握手をした…。

―加藤 久嵩だ。

広い室内に我々はいた…。

マサキ「ラインバレルの破壊は失敗、アルマ隊も壊滅し、こちらのマキナも奪われた形になりましたが？」

加藤「あれだけの情報を得られれば十分だ。それに比べれば、イカレたマキナを奪われたぐらい、どうという事はない」

陸「キヒヒ…。それにしてもゾギリア軍から派遣されたあの女の子…使いものになりませんねエ」

沢渡「おいおい、陸。初めてであの成果はなかなかだと思っぜ？」

陸「キヒヒ…。沢渡さんも甘いですねエ…。やはりここは司令に信頼されている僕が行くべきでしたよ…」

加藤「陸か…」

陸「次はあの女の子に見せてあげますよ…。僕のやり方をねエ…。信頼、か…。陸よ、お前は本当に信頼されてるのかな？」

加藤「…まあいい、次は頼むぞ、陸。それよりせつかくココまで来たんだ。ウチの連中にも見せてやろう…浮上！」

私の合図と共に、巨大な戦艦…シャングリラが海の中から現れた。先頭には、大量のアルマが乗っている。

加藤「諸君、よく見ておくがいい。あれがJ U D A、我々の敵だ」
私が出たのと同時に、一つ一つのアルマがJ U D Aの方向へ顔を向ける。シャングリラはやがて、夜の闇へと消えて行った…。

第6話 疾走する正義

「早瀬 浩一だ…。」

俺は暗闇の中にいた…。

そして、俺の前には…死んだはずの矢島の姿が…。

矢島「どうした、浩一」

浩一「矢島！お前…生きて…！」

生きていたんだな…！

矢島「なんだア？暗い顔して」

浩一「あの…俺…。お前に…」

矢島「そんなトコ座り込んでないで…ホラ！」

矢島は手を差し伸べ、俺は震える手で掴もうとする。

だが、突然、矢島の姿が歪んだ。

浩一「！」

瞬間、俺の目の前は爆発し、ごろり、と矢島の生首が転がった。

浩一「あ…ああ…！」

目の前に、倒されたはずのハグレマキナがいた。

浩一「矢島アアアア!!？」

…そこで、意識は途切れた。

浩一「ウアアアアアアツ!!？」

俺は目を覚まし、勢いよく、起き上がった。

浩一「ハア…ハア…！」

夢…だったのか…？

俺は息を整えながら、周りを見渡した。

浩一「何だよ…。どこだよ…ここ…？」

呆然とする俺だったが、そこへ1人の女の人が入って来た。

緒川「あ、やっと気が付いたみたい…」

女の人は顔を赤くしながら、俺の下を見る。

緒川「ご…ごめんね…」

え…？

って…!

俺は下を向き、自分が今、どのような状況であるかを確認した。

浩一「ほわあああゝあゝあゝあゝ…!!?」

俺の情けない叫び声は建物内に響いた…。

―小田切 拓哉だ…。

俺と夏華は外に出ていた…。

…城崎 絵美も一緒だ。

夏華「ねえねえ絵美さん!今度はあつちを見に行こうよ!」

絵美「わかったから、引っ張らないで!」

城崎 絵美が協力者となり、夏華は嬉しそうな表情を見せている。それにしても…今日はものすごく暑い…異常気象とも言えるほどに…。

気温は40度近くを越えている。

拓哉「…そろそろ何処かで涼みに行くか」

俺達は夏華達を連れ、どこかへ涼みに向かった…。

―早瀬 浩一だ。

俺は目覚めた後、とある企業の社長秘書である緒川 結衣さんに案内され、社長室に入ると…。

クラツカーの音が聞こえ、俺の前には男の人が立っていた。

石神「ようこそ!我がJUDAへ!早瀬 浩一君!!?」

え…。

石神「そして私が我がJUDAコーポレーション社長の石神 邦生だ!」

…この人が社長…。

浩一「…貴方が森次って人が言ってた社長ですか…」

石神「おお、流石だ。話が早いじゃないか。さ、キミの為にちらし寿司作ったんだよ。食べて食べて!」

浩一「全部…。貴方の仕業だったんだな…？」

石神「キミがフアクターだと確認する為に手荒な真似をした事は謝っておくよ」

社長サンの言い方に俺は齒軋りをする。

石神「3年前に起きたラインバレルの落下事故により、キミはフアクターになってしまった…。しかしキミはフアクターになる事で得た。身体能力の特化のみに気付いた」

…。

石神「表向きは優等生を演じ、裏ではその力で不良どもを束ねて…。まあ、好き放題うまくやってきたワケだ」

浩一「そうだよ…。全て、上手くいってたんだ。それを、アンタが…！」

石神「それは違うな」

…!??な、何…!???

石神「私が関わらなくてもキミはいずれ大きな責任を負うハメになったよ。今回の事もそうだ。散々暴れた拳句にビーム兵器と飛行ユニットの過剰使用によるエネルギー切れで自滅…。幸い死傷者が出なかったからいいもののどれだけ多くの人に迷惑をかけたと思う?そんな事一度も考えた事ないよなア?キミは手に入れた力の本質を理解しようとしなないもんなア?」

…お、俺は…!

石神「つまりキミは自分で思うほど賢い人間じゃないんだよ。でなきや…自分の大切な友人を死なせたりなんかしないよ」

…!

俺はその言葉に我慢できなくなり、社長に殴りかかった。

しかし、最も簡単に受け止められてしまう。

浩一「!??」

石神「言われた先からこの行動…。全くわかってないみたいだねエ。キミのこの短絡的な行動こそがキミの友人を殺したんだよ」

浩一「…!くっ…!畜生…何でこんな事に…。確かに俺は力が欲しかった…でも、こんな状況は望んでなかった…!大体なんであの事故

で俺がラインバレルのファクターになるんですか!?!?」

石神「ファクターになるには大きく分けて二通りある。一つは対象マキナの固有ナノマシンの移植によるもの」

浩一「…」

石神「もう一つは…対象マキナによって殺される事だ」

対象マキナに…殺される…!?!?

浩一「マキナに…殺される!?!?」

石神「キミの場合はね。後者何だよ」

浩一「俺が…殺された…!?!?」

石神「そう、キミはラインバレルによって殺された…。つまり、3年前のあの日、キミは一度死んでるんだよ」

俺が…死んでいた…!?!?

石神「いいかい? 本来、マキナ達は、それ単体では人間に危害を加えられぬよう造られている…。では、そうであるハズのマキナが誤って人に危害を加え、死に至らしめた場合、どうすると思う?」

そんな事、わかるワケ…!

石神「マキナに架せられた絶対的な制約、つまり、『人間に危害を加えない』を遵守するため、マキナは再生能力を持つ自らの固有ナノマシンを与えるコトで殺めてしまった人間を蘇生させる。…まあ、要するにキミはラインバレルと命を共有したって事だよ」

浩一「ラインバレルと…命を共有した?」

石神「その結果、ナノマシンの影響により、キミは強靱な肉体を得た。そしてマキナは自らのファクターとなった人間に随従する…と、まあこれが機械因子論ってワケだ」

浩一「…マキナって一体なんなんですか? あんた達は何のためにマキナなんか造ったんですか…!?!?」

石神「そんなコト知らないよオ、誰が造ったかも分からないしさア」
浩一「え?」

石神「ラインバレルと同じ! マキナ達は突然現れたんだよ。誰が何のために造り、どんな目的でこの世界に現れたのか…だから、それらを知るために我が社は政府や連邦軍と協力して、現存する11体のマ

キナの全回収を主目的にしてるワケ」

浩一「あんなのが11体もいるのかよ…」

石神「…まあ説明はこの辺にしておこう。一度に解ろうとしても大変だからね。そして早瀬浩一君…単刀直入に言おう、我々の計画に協力して欲しい」

協力だって…!!?」

―小田切 拓哉だ。

俺達は何処かの店で涼もうとしたが、何処も人がいっぱいデロクに入れる店がなかった。

拓哉「…これは何処に行っても無駄だな」

夏華「そうですね〜」

最悪、JUDA社に戻るしかないな…。

そう思っていた俺達の横をある少女達が横切る。

マコト「ほらあ、姫子！早くしないと遅れちゃうよ〜！」

姫子「ま、待ってよ、マコちゃん〜！暑いから走らないでよー！」

彼女達の制服…乙橘学園のモノか…。

絵美「拓哉さん、どうかしましたか？」

拓哉「なんでもない」

俺達は今後どうするかを話し合う事にした…。

―早瀬 浩一だ。

社長からの手伝え宣言に俺は驚く。

浩一「マキナを集めるのを手伝えって事ですか…!!?」

石神「何もタダで協力しろなんて言わないよ。確かキミは森次クンとやり合った時に正義の味方になるとか言ってたよねエ。でも正義っていうのはさあ、『悪』や倒すべき敵が存在して初めて成り立つモノだ。かつてのソレスタルビーイングとアロウズの様だね。だからさ、キミが我々に協力してくれるなら」

そう言うと、社長はキーボードを操作すると俺の周りにモニターが表示される。

浩一「!!?」

石神「我々はキミに、敵を与えてあげよう」

浩一「コレは…一体…?」

石神「彼らは日本最古の秘密結社『加藤機関』：我々と同様にマキナを持ち、よからぬコトを企てているタチの悪い連中さ。そして何より、キミとラインバレルを狙い、キミの友人を殺した張本人達だ」

こいつらが…矢島を…!

すると、扉がノックされた。

石神「森次君達かい?」

浩一「森次!?」

森次「失礼します」

すると、四人の人物が入ってきた。

石神「よおし、取り敢えず、JUDAメンバーだけは全員揃ったね」

浩一「…だけ…?」

石神「ああ、実は他にも様々な人達に協力してもらっているんだよ…：そうか。

だから、コスモクラッシュ隊やダイガード達がいたのか…。

石神「紹介しよう、彼等もキミと同じファクターだよ。まず、彼が森次玲二君」

森次「生身で会うのは初めてだな。改めてよろしく」

石神「そして彼が山下サトル君だ」

山下「どくも」

浩一「…」

俺が彼等を怪訝の表情で睨んでいると、一人の少年が話しかけてきた。

イズナ「あつ、あの…」

石神「お?」

イズナ「はじめましてっ！僕、遠藤イズナです！今日早瀬さんに会

えるの、すごく楽しみにしてました!!?」

…? 何コイツ…。

イズナ「…え、えっと…それでこちらが僕の姉の…」
姉…?

コイツ等双子なのか…。

シズナ「はじめまして、姉の遠藤シズナです」

笑顔で言い寄って来る彼女。

だが、そのせいで俺は警戒を緩めてしまう。

浩一「ど…どうも」

挨拶をしている瞬間、彼女の蹴りが俺の急所に直撃した。

浩一「痛… つつてええええええつ!!?」

俺はあまりの痛みにもその場に蹲る。

浩一「いきなり何すんだ…」

シズナ「あんた!!? 舐めんのも大概にしときや!!?」

な、何がだよ…!!?」

シズナ「友達の敵討ちかなんか知らんが散々暴れよつて迷惑千万や!!? ウチらは遊びでフアクターやってるんじゃない!!? プロとしてやっとなるんや!!?」

イズナ「何するんだ、姉さん!!?」

浩一「んだとお!!?」

シズナ「完全にフアクターの面汚しや! あんた、もっぺん死んどくかあ!!?」

イズナ「ちよつと姉さんやめなつて! …早瀬さん、ホントにごめんなさい」

シズナ「こらっイズナ! 何でこんなヘタレに謝ってんねや!!?」

イズナ「だって酷いよお〜!」

…一体何なんだよ…。

石神「なあシズナあ〜、そのエネルギーはこの後のためにとつときなよお〜」

山下「この後つて…シズナ達出動するんスか?」

イズナ「はい、街付近にマキナの反応があつたんです」

シズナ「で、どつかのアホが森次さん達のマキナをボロボロにしたさかい、ウチらだけで回収に向かうワケや！他の人等の機体もそれぞれで修理中やからな！」

浩一「…」

森次「そうか…。我々以外にもマキナを持った存在が明らかになつたんだ。くれぐれも用心しろよ」

シズナ「心配あらへんよ、森次さん！」

双子の姉はちっち…と指を振り言う。

シズナ「ウチ等のディスプレイなら、安全かつ迅速に一網打尽や!!

?戦いは常に美しくスマートやないと…」

何だコイツ…。

オホホ…と腹の立つ笑いを見せて来る彼女に俺は苛つく。

すると、部屋内に警報が響いた。

石神「どうしたんだい？」

緒川「しゃ、社長！街上空に謎の火の玉が現れました！」

火の玉…?

緒川さんが操作するとモニターが表示され、そこには太陽とは違う、火の玉が街の上空にあった。

何だ、あれは…!?!?

ー小田切 拓哉だ。

JUDA社へ戻ろうとしていた俺達…。

だが、突然、街の上空に巨大な火の玉が出現した。

夏華「何ですか…アレ!?!?」

絵美「太陽が落下してきた…というワケではなさそうですね…!」
すると、そこへウルトラマンオーブも現れた。

夏華「ウルトラマンオーブです！」

あの火の玉を止めるつもりか…!

ウルトラマンオーブは上空を飛び、火の玉の目の前までいくと手から水を発射し、火の玉に浴びせた。

それを眺めていた俺達の横に一人の女と二人の男が駆けつけて来

る。

ジエッタ「凄えな、オーブ！手から水も出るのかよ！」

：男の一人の手にはビデオカメラ…？

すると、夏華が俺の手を引っ張る。

夏華「(リーダー、あの人達がSSPの方々です)」

成る程な…。

ウルトラマンオーブの出した水…。

しかし、それでは火の玉の火は消える事はなかった。

それを見たウルトラマンオーブは今度は巨大な光輪を作り出し、火の玉に投げた。

：だが、火の玉はそれすらも粉々に弾いた。

夏華「何という強度…！」

次にオーブが取った行動は火の玉の周りを凄まじい速さで回り、複数の残像を作り出す。

そして、その複数の残像が必殺光線を放った。

四方八方から放たれた光線は確実に火の玉を捕らえた…だが…。

逆に火の玉は炎を増すだけだった。

そして、ウルトラマンオーブの胸のタイマーの様なモノが鳴り出す。

エネルギー切れが近いのか…！

すると、ウルトラマンオーブ一度地上に着地と同時に勢い良く、地面を蹴り火の玉に向かい、光のバリアを張り、火の玉に突撃する。

そして、そのまま火の玉ごとウルトラマンオーブは空高く上がっていく。

シン「成る程！地上から遠ざける作戦ですね！」

ジエッタ「おー！そのまま宇宙の果てまで持っていけー！」

だが、これ程の熱気だ…。

それを間近で感じているウルトラマンオーブの体力の限界も近い…！

ウルトラマンオーブと火の玉が空に消えた…。

と、思えば何か炎纏い落下してきた。

あれは…ウルトラマンオーブ…!??
ウルトラマンオーブはそのまま地上に音を立てて落下してしまっ
た…。

夏華「そ、そんな…オーブが…!」

俺はいてもたっても居られず、走り出した。

夏華「リーダー!」

拓哉「城崎 絵美! 夏華達を連れて、先に戻れ!」

そう言い残し、俺はウルトラマンオーブが落下したであろう場所へ
急いだ。

俺の後にSSPの奴等も追ってきたが…。

ー早瀬 浩一だ。

ウルトラマンオーブが…落下した…!??

森次「ウルトラマンオーブには活動制限があったとは思ったが…ま
さか、目の当たりにするとは」

石神「よくし、オーブの事も気がかりだけど…無事顔合わせも済ん
だ事だし、早瀬くん…。キミ、今日のところはもう帰りなさい。緒川
君、送ってあげて」

浩一「…いいですよ、1人で帰れますから」

石神「そう…。じゃあ、良い返事期待してるよ」

浩一「約束なんてしてませんから」

そう言い残し、俺は部屋から出た…。

ー石神 邦生だよ。

うくん、これはまた厄介な相手だね。

まあ、もしもの時の為に彼等に連絡を入れようか!

私は携帯を取り出し、通話をかける。

三コールぐらいで相手が出た。

?「どうかしましたか、石神社長?」

石神「うん、実はね。彼から満足のいく返答を貰えなかったんだ。

…だから、後の事をよろしく頼めるかなア？」
？「了解しました」

そして、通話が切れた。

…彼等なら大丈夫だろう。

情け無用のJ9ならね…。

それよりもウルトラマンオーブが落下した場所に調査隊を送り込まないかねエ…。

ークレナイ ガイだ…。

俺はオーブとなって、火の玉を宇宙へ押し飛ばそうとしたが、エネルギーが尽き、地上に落下してしまう。

ガイ「グッ…！ガハッ…！ジャグラ…！」

ボロボロになった俺の下にジャグラが現れる。

ジャグラ「何をしている？こんなモノじゃないはずだ」

ガイ「グッ…アアアッ…！」

そう呟き、俺の腕を踏みつけた。

ジャグラ「お前は選ばれ戦士なんだ。…なあ？光の戦士」

ジャグラは俺を無理やり立たせる。

ジャグラ「どうした？もう少し楽しませてくれ…」

そう呟き、俺を投げ捨て、俺はビルに直撃し、そのまま落下した。

ジャグラ「あまり時間はないぞ」

そのままジャグラは煙の中に消えた…。

ー小田切 拓哉だ。

俺はウルトラマンオーブが落下したであろう場所に来た…。

だが、ウルトラマンオーブの姿はなく…変わりに近くにあの風来坊の男が倒れていた。

拓哉「…！」

俺は彼に駆け寄る。

すると、SSPの奴等も追い付いたのか、俺達の下に駆け寄った。

ナオミ「ガイさん!?!?」

ジエツタ「ちよ、大丈夫!?!?ガイさん!」

シン「何があつたのですか!?!?」

メガネをかけた男が俺に事情を尋ねて来る。

拓哉「わからない。此処に倒れていた」

渋川「おい!お前達もいたか!」

そこへ、ビートル隊の制服を着た男が走ってきた。

渋川「つて…ガイ君じゃないか!」

ナオミ「反応がないの!」

渋川「何っ…!?!?」

男が風来坊の男の安否を確認する。

渋川「…大丈夫だ!脈はある!おい、君も手伝つてくれ!」

断る必要がないので俺はうなずき、彼等と共に風来坊の男を運んだ…。

―早瀬 浩一だ。

俺は今、帰宅の最中だった。

街では今、ウルトラマンオーブの落下や謎の火の玉の出現でバタバタしている。

そんな事にも目もくれず俺は歩いていると…。

?「君が早瀬 浩一君…かな?」

浩一「え?」

俺は顔を上げるとそこには三人の男の人と一人の女の人が立っていた。

浩一「そ、そうですが…」

アイザック「そうか…ならば!」

突然、男の人の一人が電子ムチの様なモノで俺に殴りかかってきた。

俺は何とか回避し、彼等を睨む。

浩一「一体何なんだよ、あんた等は!?!?」

ボウイー「ほう、なかなか威勢のいいお子様だ事！」

お町「勇ましい子は嫌いじゃないわ！」

アイザック「早瀬 浩一君。君を石神社長へ協力させる」

キッド「大人四人だが、悪く思わないでくれよ！」

浩一「ケツ！あの社長：結局脅してくるのかよ！」

キッド「じゃあ、始めるとしますか！」

っと、男の人の一人が銃を構えたが…。

？「何してるんだ!?!？」

そこへ乙橘学園の制服を着た男の人が駆けつけた。

ソウマ「アンタ達：彼に何をするつもりだ？」

乙橘学園の人は男達を睨む。

ボウイー「あらら、見られちゃったね」

お町「どうするの？」

アイザック「仕方ない。一度退くぞ」

キッド「OK」

そして、部が悪くなつたのか、男達は走り去つた…。

ソウマ「危ない所だったな…。大丈夫か？」

浩一「は、はい…。ありがとうございます」

ソウマ「いやいや。気をつけて帰れよ！」

そう言い残して、乙橘学園の人はバイクに乗り、走り去つた…。

もう、何が何だか、わからねえよ…!!

悔し顔をしながら、俺は帰宅を急いだ…。

ー小田切 拓哉だ。

俺とSSPの奴等は風来坊の男を病院に連れて行こうとしたが、あの気温の高さに倒れる者も多く、何処の病院も入れないでいた。

その為、SSPの住処で彼を休ませる事となった。

ナオミ「酷い汗ね…」

シン「やっぱり、何処の病院もいっぱいですわね…」

ナオミ「そつか：じゃあ、やっぱり、此処で休ませるしかないわね」

…と夢野 ナオミがクレナイ ガイの額に置いていたタオルを直そうと触れると…。

ナオミ「熱っ!?!?熱、熱っ!?!?」

余りの熱さにタオルをジエツタや松戸 シン達の方へ投げてしまい、彼等も熱さで跪いて、またタオルを投げ、タオルは俺の顔面に直撃する。

…何故、そうなる。

ジエツタ「…えつと、熱くないの…?」

拓哉「何ともない」

顔面に直撃したのに何も示さない俺に彼等はははは、と乾いた笑いを見せる。

すると、風来坊の男…クレナイ ガイが目を覚ました。

ガイ「…ここは…?」

ナオミ「あ、起きた!?!?大丈夫!?!?貴方はね、街で倒れていたのよ!」

ガイ「…そうか。俺はアイツと戦って…」

やはり、この男は…。

寝返りを打った彼だが、またもや気を失ってしまう。

ジエツタ「また寝ちやつたな…」

ナオミ「…よし、私、熱に効く何かを買って来るわ」

ジエツタ「じゃあ、俺も行くよ!」

シン「僕も行きます!」

SSPの面々が立ち上がり、俺を見た。

ナオミ「…拓哉君。ガイさんをお願いできる?」

拓哉「…構わない」

ナオミ「じゃあ…よろしくね!」

そう言い残し、三人はオフィスを出た…。

見ず知らない俺を残すとは…警戒が低い奴等だな。

俺は魘されているクレナイ ガイを見た。

ガイ「うつ…ナター…シャ…」

ナターシャ…?

クレナイ　ガイと親しい者の名か…？

ガイ「俺は…守れ…なかった…」

拓哉「…！」

コイツも…大切な者を守れなかったのか…。

俺は理緒を失った時の事を思い出し、拳を握った…。

第6話　疾走する正義

―遠藤シズナや。

ウチはイズナと一緒にデイスリーブに乗って、街の近くにある海を
搜索中や。

シズナ「反応からして、随分と陸に近いトコにおるんやなア。今ま
で見つからなかったのが奇跡やね」

すると、反応があったんか、音が鳴る。

イズナ「…あ、姉さん！反応が近くなってきたよ」

シズナ「よっしゃ、この辺やな…」

反応のする場所へデイスリーブが近づいた瞬間…。

いきなり、海から槍が飛んできた！

シズナ「な、何や…？」

すると、大量のアルマ部隊と2機の別のアルマが現れた。

イズナ「ま、まさか…！コイツ等、マキナじゃなくて、アルマ…？」

？「キヒヒ…その通りですよ」

シズナ「誰や…？」

陸「キヒヒ…。初めまして、僕は加藤機関八番隊隊長、王政陸です」

沢渡「そして俺は加藤機関四番隊隊長、沢渡拓郎！」

敵幹部って事かいな…！

イズナ「加藤機関…！これは罠だったんだ…！どうしよう、姉さん
…？」

シズナ「心配せんでいい、イズナ！ウチ等とデイスリーブなら負け

へん！」

沢渡「へえ、随分な自信じゃねえか…。だったら、相手をしてやるぜ！」

シズナ「上等や！アンタからこそ、体中バラバラにしたるわ!!？」

陸「キヒヒ…いいんですかあ？」

イズナ「え…」

もう一機を見ると何と武装を北川町に向けていた。

陸「貴女達が僕達を傷つけければ、僕はこの町を攻撃しますよお？」
な、何やて…!!？」

イズナ「そ、そんな…！」

シズナ「何て卑怯な奴や！」

陸「キヒヒ…。これも想像出来なかった君たちの愚かさにあるんですよ！さあ、彼女達を痛めつけてしまいなさい！」

敵アルマ達は戦闘態勢を取りおった…！

イズナ「ね、姉さん…！」

シズナ「しょうがない…！イズナ、何とか堪えるで！」

ウチ等は我慢比べを始めた…。

〈戦闘会話 シズナVS初戦闘〉

シズナ「イズナ…此処は、耐えて耐えて、耐えまくるんや！そして、勝機が見えたら、エゲツないもんを打ち込んだれ！」

イズナ「わかったよ、姉さん…！」

何とか堪えれてるけど…このままやとジリ貧や…！

沢渡「なかなかやるじゃねえか！だがな、多勢に無勢なんだよ！」
デイスリーブはアルマ部隊に囲まれ、一斉攻撃を受けてもうた。

シズナ「ぐうっ！」

あ、あかん…！

これじゃあ、いくらデイスリーブでも…！

―池波 夏華です。

JUDAへ戻ってきた私と絵美ちゃんはアルマ部隊の攻撃を受けてしまっているディスプレイを見て、歯を食いしばっていました。

山下「シズナ！イズナ！」

夏華「このままではイズナさん達が…！」

森次「しかし、今の我々にはまだ何も出来ない。我々の機体はまだ修理中だ」

絵美「他の方々も一度戻っているので、間に合うかどうか…！」

石神「…仕方がない、正義の味方さんに頼んでみますか…！」

石神社長は受話器に手をかけました…。

―早瀬 浩一だ。

俺は帰宅しようとしたが、学校に来ていた…。

そして教室に入り、矢島の机を見る。

そこには花瓶に入った花が置かれていた。

浩一「矢島…！」

理沙子「こ、浩一…!?？」

理沙子…。

彼女は俺が来た事に笑みを浮かべたが、すぐに悲しい表情になる。

理沙子「…この数日、何処にいたの？」

浩一「そつか…。あれから数日経ってたんだな…！」

理沙子「浩一が来るかもしれないから毎日待ってたんだよ！浩一のおじさんとおばさん、凄く心配してたんだから…あの事故で矢島、死んじやったんだよ」

浩一「…知ってる」

理沙子「お葬式も終わっちゃったよ」

浩一「親から聞いたよ…！」

理沙子「何も思わないの？何も感じないの？いつまでそんな風にし

てるの!?!」

浩一「そんな風って何だよ!?!」

理沙子「あたしだっていつまでも浩一の事だけ構ってられないんだよオ!?!?」

…!

理沙子のその叫びを聞いて、俺は立ち上がり、理沙子に詰め寄り…。

浩一「何も知らないクセに…! 大体誰が構ってくれて頼んだんだよ!?!?」

彼女を壁に押し付けた。

浩一「構って欲しいのは理沙子の方だろ!!?」

息を切らしながら、理沙子を睨む。

だが、彼女は目を逸らし…。

理沙子「そうやってカツコつけたって、今の浩一凄くカツコ悪いんだから…」

浩一「何だと!?!?」

すると、理沙子は俺の顔に指を刺した。

理沙子「鼻血、出てるんだけど…」

………え?

鼻を触って確認してみると、確かに鼻血が出ていた。

…嫌、そういう状況じゃないだろ。

理沙子「プツ! あははははっ!」

浩一「な、何笑ってんだよ!?!?」

理沙子「だって構って欲しいのは理沙子の方だろ!、とか言つて鼻血出してるんだもん!」

コイツは…!

浩一「お前、人の事おちよくって…」

鼻血を必死に止めようとした俺を頭に腕を回し…理沙子は俺を抱き寄せた。

理沙子「もうやめようよ。無理して強がってもしょうがないよ…。本当の浩一のままでもいいじゃない。それで誰も浩一を認めてくれなくても…あたしが認めてあげるから」

理沙子…。

浩一「…離せよ。鼻血で制服…汚れるぞ」

理沙子「気にしないよ」

俺はゆっくりと腕を動かし、理沙子を抱き返そうとした…。

だが、そこで携帯の着信が鳴る。

何だよ、こんな時に…！

携帯を取り出し、見ると着信は非通知になっていた。

浩一「…誰だよ…。はい、もしもし」

通話に出ると…。

石神「あ、正義の味方さんですかア？」

携帯から石神社長の声が聞こえてきた。

石神「早速で悪いんだけど、キミにお願いしたいコトがあるんだよねエ」

浩一「…なんですか、お願いしたい事って…？」

石神「さっき紹介した双子のイズナとシズナなんだけどさあ。今、例の加藤機関の罠にハマっちゃってマズい状況でね、是非キミに助けに行ってもらいたいんだよ」

浩一「なんで俺が…」

石神「今、コクピット内と衛星からの映像送るから、ちよつと見てちよつだいよ」

携帯に映像が送られ、それを見る俺。

イズナ「うわあああああつ!!？」

シズナ「きやあああああつ!!？」

浩一「…!」

二人とも…!

石神「かなりマズい状況でしょう？多分このままじゃ2人とも死んじゃうかもなあ。本当だったら森次君か山下君、ソレスタルビーイングとかの人達に行ってもらおうとこだけど…。ほら、キミが暴れた件で彼らの機体がまだ動かせないんだよ。一応、フルスロットルで直してる所なだけど。それにまだ他の人達も間に合わないし…。だから今、動けるのはラインバレルしかないんだよねエ」

浩一「こ、今度は脅しですか!?!」

石神「何言ってるんの、これは脅しなんかじゃないよ…」

浩一「…?」

脅しじゃなかったら何だった…!

石神「切実な願いだ」

それを聞いて、俺の中の何かが弾ける。

そして、俺はやり場のない怒りを浮かべている。

バカが…! 散々デカい口叩いといて…何やられてんだよ!?!?

浩一「悪い理沙子! 先に帰っててくれ!」

理沙子「え!?!? ちよつと、浩一!?!? どうしたのよ!?!?」

理沙子の声も耳に入らず、俺は学校の屋上にまで来た。

そして、アイツの名前を叫ぶ。

浩一「来いっ! ラインバレル!!?」

俺の叫びに応える様にアイツが落下してきた…。

―遠藤 シズナや。

敵の猛攻を喰らって、デイスリーブは戦闘不能近くまで追い込まれた。

イズナ「うあつ!」

シズナ「くっ…!」

攻撃さえ出来れば…こんな奴等に負けへんのに…!

イズナ「ダメだ姉さん!…これじゃ動けないよ!!?」

シズナ「クソツ…。ウチ等はプロなんや…それがこないなトコで…!

沢渡「よく分かんねエなア、プロって何のプロだよ!?!?」

シズナ「お前らみたいなマキナ使っしてしようもないコトするヤツを…ぶっ潰すプロや!!?」

沢渡「ほう…なるほどなア」

そう言うと、近くのビルに槍を突き立てた。

シズナ「なっ…何してんねや! お前等の目的はウチ等やる!?!?」

イズナ「卑怯ですよ！こつちが動けない状態なのに……！」

沢渡「どうした？俺をぶっ潰すんじゃないやなかったのか？早くしないと、この工場の奴ら全員死んじゃうぞ」

シズナ「やめろ…頼むさかい…やめて…」

沢渡「残念だが…それは聞けねえなア!!？」

敵のマキナがビルを突き刺そうとする…。

そこに何か舞い降りて、敵マキナ達を斬りつけながら、地面に着地した。

沢渡「…来たなア。二本角オ！」

舞い降りてきたのはラインバレルやった…。

―早瀬 浩一だ。

俺はラインバレルに乗り、戦場に立つと敵を斬り伏せた。

そして、敵を睨む。

イズナ「早瀬君！来てくれたんですね！」

浩一「お前等無事か!!？」

シズナ「何しに来たんや、このヘタレが!!？また敵討ちにこだわって、ウチ等の邪魔しに来たんか!!？」

浩一「そうじゃない!!？…社長にお前達がやられてる映像見せられて…。そしたら胸がザワザワして、頭ん中が熱くなってきた…。多分、俺は、お前達を助けたいんだと思う…だから…。だから、お前達も答えろ!!？お前達は、俺にどうして欲しい!!？」

シズナ「…あいつ…関係無い人まで殺そうとしたんや…それに、このままじゃウチ等も…」

イズナ「姉さん…」

あの勝気な態度を取っていたシズナが目には涙を浮かべていた。

シズナ「…だから…。頼む、早瀬…！あいつ等をやっつけて、ウチ等を助けてくれ…」

シズナの頼みを聞いたラインバレルの瞳が輝く。

浩一「これでハッキリした…。俺がどうしたいのか、何をすべきな

のか…」

俺とラインバレルは戦闘態勢に入った。

浩一「俺はお前達を助けるため、連中を叩き潰す！後は俺に任せろ！！？」

陸「キヒヒ…。確かに格好いいですが…何か忘れていませんか？」

浩一「何…？」

沢渡「そう言えばそうだなア」

陸「貴方達は手を出してしまったのですよ…それはこの街がどうなつてもよろしいと言う事ですね！」

シズナ「ツ…！」

イズナ「そ、そうだった…！」

浩一「そんな事…させるかよ！」

ラインバレルは動き、街を攻撃しようとしたアルマに攻撃を仕掛けようとした。

陸「キヒヒ！もう遅いのですよ！自らの行いを悔みなさい！」

そう言い、街に攻撃しようとした…。

だが、銃撃が放たれ、それを受けて敵アルマが怯んだ事によって、攻撃の手が止まる。

沢渡「な、何!?？」

陸「だ、誰だ！」

？「自らの行いを悔やむ、か…。その言葉、そのまま返そう」

現れたのは…車…？

沢渡「車…だと…？」

ボウイー「命中！俺ちゃん、流石！」

お町「もう、酷い事をする人達ね！」

沢渡「お前等、何者だ!?？」

キッド「簡単に名乗ると思っているのか？」

陸「キヒヒ！誰であろうと関係ありません。所詮、車如きで僕達を倒す事は出来ないのですから！」

アイザック「ほう、随分な自信だな。ならば、見せてやろう…ボウイー！」

ボウイー「はいよ！ブライ・シンクロン・アルファ！」
車は何と、巨大化して飛行機になった。

シズナ「く、車が飛行機に変形しおった!?？」

イズナ「それだけじゃないよ、姉さん！巨大化してる！」

キッド「まだまだ、こんなもんじゃないさ！」

アイザック「行くぞ！ブライ・シンクロン・マキシム！」

すると、今度は飛行機が巨大ロボットに変形した。

陸「こ、今度はロボットになった!?？」

沢渡「嫌、待て…？聞いた事があるぞ…確か…ブライガー…情け無用のJ9か！」

ボウイー「ご名答！俺ちゃん達も有名になったもんだねえ！」

アイザック「さつき振りだな、早瀬 浩一君」

浩一「あ、あんた達…さつき、俺を襲った人達じゃないか！」

キッド「あの時は悪かったな。でも、それが本当のお前なんだな？」

お町「ふふん、こっちもこっちでいいわねえ！」

浩一「何だつていい！あんた達は味方つて事でいいんだな!?？」

キッド「もちろん！お前の覚悟に負けてられないからな！」

イズナ「皆さん！森次さん達や他の方々も来ました！」

そう、JUDAのマキナ達や他の機体達も現れた。

森次「無事か、二人とも？」

シズナ「これぐらい、何ともあらへんよ！」

山下「どうやら、大丈夫そうツスね！」

剣児「ジューグも完全復活だぜ！」

赤木「おい、加藤機関！今度はこっちの番だぜ！」

刹那「紛争介入を開始する！」

青葉「つて…ラインバレルがいるじゃねえか！」

浩一「…」

ディオ「大丈夫なんですか？また暴れられでもしたら…」

浩一「あの時はごめん…。でも、もう俺は大丈夫だ！俺は…もう自分を見失わない！」

森次「フツ…」

一鷹「浩一…」

シズナ「早瀬の言葉はウチが保証するから大丈夫や！」

タケル「確かにもう彼からは憎しみの感情が消えている」

スザク「では、早瀬 浩一君。共に加藤機関を倒そう」

浩一「ああ！」

カトル「そこにいるのは…ブライガー…。J9の皆さんですね」

ノイン「カーメン・カーメンとの戦いの後、お前達は宇宙の果てに

向かったと聞いたが…」

アイザック「すまないが、話は後にしよう」

キツド「そうだな。今はあの小悪党を倒そうぜ！」

沢渡「チツ…！調子に乗るなよ、テメエ等！」

陸「僕達の恐怖を教えてあげますよ！」

俺達が戦おうとしていると…。

空からウルトラマンオーブが押し返した巨大な火の玉が落下して
きた。

仁「あれって、オーブが押し返した火の玉じゃねえか！」

飛鳥「また戻って来たのか！」

火の玉は火炎弾を放ち、俺達や加藤機関ごと街を襲う。

ナオト「くっ…！滅茶苦茶じゃねえかよ！」

アキラ「このままじゃ、街が燃やし尽くされちゃうよ！」

沢渡「あの野郎…調子に乗りやがってエ！」

陸「気をつけてください、沢渡さん！あの熱量…触れればアルマで

も保ちませんよ！」

あんな火の玉…どうすりゃいいんだよ!?!?

―小田切 拓哉だ。

火の玉が落下してきたか…！

ナオミ「折角オーブが押し返したのに…！」

ガイ「…また、来たのか…！」

気づくとクレナイ ガイが目を覚ましていた。

ナオミ「ガイさん!?!もう起きて大丈夫なの!?!」

ガイ「…ああ」

クレナイ ガイは俺を見る。

俺も奴を見ていると、SSPの奴等が動き出していった。

それに何か服のようなモノを俺とクレナイ ガイに投げつけた。

拓哉「…?」

ガイ「何だこれは?」

ナオミ「シン君が開発してくれた防火スーツよ。それを着て、地下室に避難していて!あそこなら水や食料もあるから!」

拓哉「お前達は何をするつもりだ?」

ジエツタ「世紀のスクープを撮りに行くんだよ!」

ガイ「ダメだ!危険過ぎる!」

クレナイ ガイの言う通りだ。

一般市民である彼女達では危険過ぎる。

ナオミ「大丈夫!あんな炎、私達の情熱で吹っ飛ばしてやるわよ!」
非科学的だな…。

ガイ「吹っ飛ばす…?そうか…!」

…何かを思いついた様だな。

ナオミ「ナムシングサーチピール…出動!」

防火スーツに身を包み、彼女達はオフィスを後にした…。

ガイ「…アイツ等!」

拓哉「…生命知らずだな」

ガイ「全くだな…。お前さんはどうする?」

拓哉「…用事が出来た。もう行く。…夏華、デイシエイドを俺の指定する場所まで持ってきてくれ」

夏華『了解しました!』

ガイ「やはり、お前さんは…」

俺もオフィスから出ようとしたが、立ち止まり、振り返ってクレナイ ガイを見た。

拓哉「待っている」

ガイ「…!」

そう言い残し、俺はオフィスから出て、降りて来たデイシエイドに乗り込んだ…。

「クレナイ ガイだ。」

「待っている、か…。」

「ガイ「つたく、面白い奴だな！」」

俺はオーブリングを取り出し、変身プロセスに入った…。

「小田切 拓哉だ。」

火の玉が火炎弾を放ち続ける中、デイシエイドは現れた。

「ジノ「デイシエイド…？拓哉達か！」」

「拓哉「遅れてすまない」」

「衛「まだ大丈夫ですよ！」」

「夏華「早瀬さん！」」

「浩一「その声…池波さん!? どうして!?？」」

夏華「話は後にしましょう！今は加藤機関やあの火の玉をどうにかしなければ…！」

「浩一「あ、ああ…！」」

「門子「けどよ！どうするんだよ、アレ!?？」」

「拓哉「…心配ない。…来たか」」

ウルトラマンオーブが赤の姿で現れた。

「吼児「ウルトラマンオーブだ！」」

「翔子「生きていたのね！」」

「オーブ「行くぜ、魔王獣！今度の俺はちよつとばかり違うぜ！」」

ポーズを取るオーブに火の玉は火炎弾を放った。

しかし、デイシエイドが火炎弾の全てを斬り裂いた。

「オーブは俺達を見ると頷く。」

「オーブ「お前の炎を吹き飛ばしてやる！ストビュームバースト！」」
オーブの放った火炎弾が火の玉に直撃し、辺りには爆風が起こった。

た。

ジャグラー「ほう、爆風消化の要領か…」

シン「爆風消化とは考えましたね…!」

ナオミ「爆風消化?」

シン「強力な爆風で相手の炎を吹き飛ばしたんですよ!」

これがアイツの考えか…。

火の玉が消えるとそこには赤い怪獣…マガパンドンが現れた。

ロックオン「あれが火の玉の正体か!」

赤木「姿が見えれば、こっちのモンだぜ!」

スザク「各機、ウルトラマンオーブと協力し、加藤機関並びに怪獣の対処に当たれ!」

沢渡「意気がるなよ!怪獣ごとテメエ等をぶっ倒してやるよ!」

浩一「それはこっちの台詞だ!行くぞ!」

オーブ「今度こそ…勝ってみせる!」

戦闘開始だ…。

〈戦闘会話 キッドVS初戦闘〉

ボウイー「何時でも準備万端よ!」

お町「じゃあ、いきましよう、キッドちゃん!」

キッド「了解だ、お町!」

アイザック「では、小悪党どもに我々、J9の力を見せるとしよう
!行くぞ、みんな!」

キッド「イエイ!」

〈戦闘会話 浩一VS初戦闘〉

浩一「(矢島…俺は戦うよ。俺がしたい事…正しい事…誰かを救う
為…正義の味方になる為に!)」

〈戦闘会話 シズナVS初戦闘〉

シズナ「さつきはよくもやってくれたな！此処からはウチ等の反撃やで！イズナ！」

イズナ「わかっているよ、姉さん！いこう、デイスイープ！」

〈戦闘会話　オーブVS初戦闘〉

オーブ「人間は傷つけない…。だが、その人間が人間を傷つけるのならば…俺が止める…！もう、ナターシャの様な人を増やさない為にも！」

〈戦闘会話　拓哉or夏華VS初戦闘〉

夏華「リーダー！遅れた分を取り返しましょう！」

拓哉「わかっている。（大切なモノ…今はもう一つしかないがな）」

〈戦闘会話　刹那VS陸〉

陸「ソ、ソレスタルビーイングのガンダムと言えど僕の想像力の前には無力なのです！」

刹那「貴様は歪んでいる…！多くの人間の生命を無残に奪い、人質に取った貴様は俺が断ち切る！」

〈戦闘会話　タケルVS陸〉

タケル「多くの人の生命を弄ぶお前達の行為は許されたモノじゃない！」

陸「これも戦略の一手と言つて欲しいですね」

タケル「俺の超能力をもって…お前を止めてやる！」

〈戦闘会話　剣児VS陸〉

陸「邪魔大帝国と戦う鋼鉄ジグ…！私の邪魔をしない事です！」
剣児「俺はテメエみたいな卑怯な野郎が大嫌いなんだよ！覚悟しやがれよ、想像野郎！」

〈戦闘会話　スザクVS陸〉

陸「仮面の救世主ゼロ…。僕の想像力は貴方の戦略を凌駕するのですよ！」

スザク「ならば…更にお前の想像力を凌駕してやろう…私の技量で！」

〈戦闘会話 赤木VS陸〉

陸「そんなオンボロで何ができると言うのですか？」

赤木「煩え！ダイガードがオンボロかどうか…その身で味わいやがれ！」

〈戦闘会話 青葉VS陸〉

陸「カップリングシステム…興味深いモノですね…」

青葉「人質を取るなんて…お前それでも人間かよ!?!？」

陸「なるほど、貴方も想像力が低いですね」

青葉「想像力とか知るかよ！ 兎に角悪党は俺が倒してやる！」

〈戦闘会話 仁VS陸〉

陸「お子様如きに僕の想像力は理解できないだろうね」

吼児「あ、あの人を言っているの…!?!？」

仁「知った事かよ！悪い事をしているなら、止める…それが俺達地球防衛組だ！」

〈戦闘会話 一鷹VS陸〉

陸「さあ、僕の想像力に恐れ慄くのですよ！」

アリス「あの…一鷹さん？加藤機関にあの様な方はいらっしやいましたか？」

一鷹「あ…確かいたけど俺達とは直接戦っていない様な…。まあ、何だっさいい！倒すだけだ！」

〈戦闘会話 キッドVS陸〉

陸「貴方達の所為で計画が台無しです！」

お町「あら？想定外の事も入れて計算するのが計画よん？」
アイザック「つまり、お前の想像力は足りていないと言う事だ」
陸「僕の想像力が足りていない…？そんな事はない！」
キッド「どつちだつて構わないさ。お前が敵…そして、俺達はお前の様な小悪党を許さない情け無用なんだよ！」

〈戦闘会話 浩一VS陸〉

陸「格好をつけても所詮は素人…僕の敵ではないですよ！」

浩一「へえ？それなら試してみるか…？俺とラインバレルの力を！」

陸「いいでしょう。僕の想像力の前に地に伏しなさい！」

浩一「地に伏すのがどつちか、教えてやるよ！」

〈戦闘会話 オーブVS陸〉

陸「ヒ、ヒイツ…!!?ウルトラマンオーブが相手だなんて、聞いてませんよ!!?」

オーブ「多くの生命を奪う奴は許さない！その機体を止めてやるぜ！」

〈戦闘会話 拓哉or夏華VS陸〉

夏華「貴方は…そんな卑怯な真似をして恥ずかしくないのですか!!?」

陸「卑怯？フン、それもらつきようも大好物ですよ！」

拓哉「奴に何を言っても無駄だ…。潰す」

〈戦闘会話 シズナVS沢渡or陸〉

シズナ「さつきはよくも痛めつけてくれたな！もう許さへんで！」

陸「ヒヒ、別に貴女の許しなど必要ないのですよ」

沢渡「そう言うこつた！それにどの道お前等じゃ、俺達には勝てねえよ！」

シズナ「その自信…ウチ等がぶつ壊したる！」

イズナ「貴方達に…恐怖を刻みます！」

〈戦闘会話 沢渡or陸VSマガパンドン〉

陸「あ、あの怪獣…何という熱さなのですか!?？」

沢渡「怯えてんじやねえよ、陸！所詮は生き物に変わりねえ！だつたら、対処法もあるってもんだ！」

ブライガーはヤオヨロズにダメージを与えた…。

陸「ヒイヒイイツ!?？ここは逃げるしかありません！」

ヤオヨロズは撤退した…。

沢渡「陸！」

キッド「仲間は退いちまったぜ？」

沢渡「舐めるな！お前等なんざ、俺が叩き潰してやるよ！」

浩一「いいぜ！かかってこい！」

〈戦闘会話 キッドVS沢渡〉

沢渡「お前等がどれだけ情け無用か…見せてみやがれ！」

アイザック「ならば、望み通り見せてやろう！」

キッド「だが、俺達はその名の通り、容赦はしないから、そこら辺は覚えておけよ！」

〈戦闘会話 浩一VS沢渡〉

沢渡「行くぜ、二本角！ここでテメエを終わらせてやるよオツ！」

浩一「終わるのはお前の方だ！いくぜ、悪党！今の俺は誰にも負ける気がしないんだよ！」

〈戦闘会話 オーブVS沢渡〉

沢渡「正義のヒーロー様が相手か！楽しみになってきたぜ！」

オーブ「好戦的な人間…！アイツを止めないとならないな！」

〈戦闘会話 拓哉 or 夏華 VS 沢渡〉

沢渡「お前が最近妙な動きを見せてる機体か！どれ程の腕か試してやるぜ！」

夏華「私は戦いを楽しむ趣味は持っていません！」

拓哉「お前達が何をしようと俺の知った事ではない…。だが、相手になるのなら潰す」

〈戦闘会話 刹那 VS 沢渡〉

沢渡「ソレスタルビーイングのガンダム！テロリスト達が正義の味方気取りかよ！」

刹那「俺達は戦争根絶を目標とした組織…。そして、加藤機関は争いを生み出す組織だ！対象と認定する！」

〈戦闘会話 タケル VS 沢渡〉

沢渡「ギシン帝国から地球を守ったゴッドマーズか！相手にとっては不足はねえな！」

タケル「多くの生命を蝕むお前達もギシン帝国と同じだ！生命を守る為、お前達の相手になってやる！」

〈戦闘会話 剣児 VS 沢渡〉

沢渡「邪魔大帝国と戦う鋼鉄ジークのパイロットがテメエみたいなガキだったとは…。笑わせるじゃねえか！」

剣児「俺を挑発してるなら、乗ってやるよ！けどな…。バラバラにされても文句言うなよ！」

〈戦闘会話 スザク VS 沢渡〉

沢渡「ほらほら、テメエの腕を見せてみやがれよ、ゼロ様よ！」

スザク「良いだろう。だが、後悔してももう遅いぞ、加藤機関！」

〈戦闘会話 赤木 VS 沢渡〉

沢渡「俺はヘテロダイクンよりちよつとばかし厄介な存在だぜ？」

いぶき「残念。貴女の様な人なら何人か相手をしてきた事があるのよ」

赤木「そう言う事だ、加藤機関！サラリーマンの意地ってモノを見せてやるよ！」

〈戦闘会話 青葉VS沢渡〉

沢渡「何だ、何だア？ゾギリアの奴等を圧倒した新型ヴァリアンサーのパイロットはまるっきりの素人じゃねえか！」

青葉「だからなんだよ！此処から上手くなっていけば良いだろうが！後、お前を見逃すつもりもないから覚えておけよ！」

〈戦闘会話 仁VS沢渡〉

沢渡「ジャーク帝国を倒したぐらいで意気がるなよ、地球防衛組のガキどもが！」

飛鳥「おい、仁。どうやら俺達も舐められているみたいだぞ」

仁「だつたらあの悪い大人に教えてやろうぜ！地球防衛組とライジンオーの力をな！」

〈戦闘会話 一鷹VS沢渡〉

沢渡「コイツ：俺の動きが分かっているのか？」

一鷹「微かだが、アンタとも何度か戦った記憶があるんだよ！それを活かしてやってやるぞ！」

ラインバレルはイダテンにダメージを与えた…。

沢渡「畜生！覚えてやがれよ、テメエ等！次は必ずぶつ殺すからな！」

イダテンは撤退した…。

ボウイー「あらあら、退き方も下手な子悪党だこと」

浩一「これで加藤機関を追っ払った…後は！」

キッド「ああ、あの灼熱怪獣だけだ！」

〈戦闘会話　オーブVSマガパンドン〉

オーブ「さつきはよくもやってくれたな！今度は俺の炎で焼き尽くしてやるぜ！」

〈戦闘会話　拓哉or夏華VSマガパンドン〉

夏華「顔が二つあるなんて…少し可愛いです！」

拓哉「惚れるな…。オーブの前に俺の相手をしてもらおう、火の魔王獣」

オーブの攻撃でマガパンドンは爆発した…。

アネツサ「怪獣の撃破を確認！」

ナオト「ふう…何とかなったか」

ミカ「囚われていた人達もビートル隊によって無事救出された様です」

仁「一応一件落着だな！」

オーブ「…」

オーブが俺達を見回すとグッドポーズを見せた後、飛んでいってしまっ…。

山下「また飛んでいってしまいましたね」

森次「彼にも何度も助けられているな」

石神『森次君。みんなを連れて帰還してくれ。勿論、J9のみんなも一緒にね』

アイザック「了解しました、石神社長」

俺達はそれぞれ帰還した…。

ークレナイ　ガイド。

俺はいつもの通りマガクリスタルにオーブリングを掲げるとマガクリスタルは壊れ、一枚のカードが出現した。

ガイ「おお！マガパンドンを封印していたのはウルトラマンゼロさんの力でしたか！お疲れ様です！」

カードをしまった俺はある場所へ歩き出した…。

ー小田切 拓哉だ。

俺達はJUDAの社長室に集まり話をしていた。

石神「それじゃあ、こちらは今日からみんなと一緒に戦う事になったJ9のみんなだよ！」

アイザック「知っている者もいるが、アイザック・ゴドノフ…かみそり・アイザックと呼ばれている。これからよろしく頼む」

キッド「木戸 丈太郎だ…ブラスター・キッドだ！よろしくな！」
ボウイー「ステイブーン・ボウイー、飛ばし屋・ボウイーって言われてる！よろしくね！」

お町「マチコ・ヴァレンシア…エンジェル・お町よ！よろしくね♪」
J9のメンバー達がそれぞれ自己紹介を済ませます。

すると、早瀬 浩一が入ってきた。

浩一「…なんでこんなモノ着なきゃいけないんだよ？」

緒川「ウチの会社はスーツ着用が決まりなのよ」

浩一「それじゃ俺がここの仲間になったみたいで嫌だなア…」

夏華「でも、似合っていますよ！早瀬さん！」

石神「ちなみにそれは特注で何十万もするからね」

…このスーツにどれだけの金をかけているんだ…？

夏華「それより本当にこのまま帰るんですか？せつかく社長が早瀬さんの初勝利のお祝いするって言ったのに…」

浩一「俺だって受験や何やらで忙しいんだよ」

…お祝いが流しソーメンという謎の仕様だな。

アイザック「早瀬 浩一君、確かに君は最初、その手に入れた力を無責任に使い、友達を失った…。でも、今の君は間違いなく大勢の命を守ったんだ」

キッド「だから浩一、もうそろそろいいんじゃないか？」

浩一「え…？」

キッド「その友達と向き合って、線香の一本でも上げてこいよ」

浩一「…」

話していると、遠藤 シズナと遠藤 イズナが声をかけてきた。

イズナ「姉さん、今さら隠れてどうするんだよ」

シズナ「う…うるさいなア…」

イズナ「ほらっ、姉さんっ！」

シズナ「ちよつ、ちよつと…つて早瀬…」

遠藤 イズナは笑顔を浮かべているが、遠藤 シズナは困惑している。

浩一「なんだア?!? また股間蹴っ飛ばすつもりかよ!!?」

…そんな事があったのか？

シズナ「その…今日はありがとう…」

浩一「あ、ああ…いや、その、なんだ…。そ、そっくういやお前ら本当にそっくりだよなあ」

シズナ「…双子だから当たり前や！」

アホか!と声を荒げる遠藤 シズナ。

浩一「だったらシズナは女なんだし、弟と区別するくらいの努力しなきゃ」

シズナ「え…」

そう言うのと早瀬 浩一は着けていたネクタイピンを取り、遠藤 シ

ズナ：ではなく遠藤イズナの肩に手を乗せた。

イズナ「あの…僕、イズナですけど…」

…ワザと間違えたのか？

シズナ「早瀬エ！お前ワザと間違つて…」

怒っている遠藤 シズナの髪に、早瀬 浩一がネクタイピンを着けた。

シズナ「え…？」

浩一「ほら、これで少しはシズナって判りやすくなっただろ？」

山下「カツコつけちゃって、そのネクタイピンも特注なんだよ」

夏華「似合っていますよ、シズナさん！」

シズナ「よ…よよ…余計なお世話やーっつっ!!」

あまりの恥ずかしさに遠藤 シズナは走り去った…。

イズナ「ね、姉さん!」

そんな彼女を優しげな表情で見送った早瀬 浩一はJUDAを後にした…。

石神「仕方ない。じゃあ彼抜きで流しソーメンパーティーを…」

拓哉「すまない、俺も席を外す」

夏華「リーダー…?」

石神「お?何か用事かな?」

拓哉「そんなモノだ。すぐに戻る…先に初めている」

そう言い残し、俺は社長室を後にした…。

青葉「拓哉さん…なんか少し変わったよな」

ディオ「…何処がだ?」

スメラギ「確かに、前じゃすぐに戻るとかすまないとか絶対に言わなかったのにね」

ロツクオン「まあ、こんだけの人間と関わればあいつだって変わるだろうよ」

刹那「変わる…変革、か…」

夏華「(リーダーのウルトラマンオーブへの協力が積極的でした…。何かあるのですね、絶対…)」

ージャグラス・ジャグラーだ。

俺はオーブが倒したマガパンドンのカードを入手する。

ジャグラー「光と闇…風、土、水…それから火…。これで全ての魔王獣の力が手に入った…。後は闇の王を復活させるだけだ」

スウォルツ「求めていた力は全て手に入れた様だな」

スウォルツと…ああ、アイツか。

ジャグラー「ああ、後は闇の王さえ復活させる事が出来れば、チエツクメイドだ」

? 「ほう、その様な紙切れで何が出来ると言うのかな?」

ジャグラー「魔王獣の力を悟れないとはお前もまだまだだな…エンブリヲ」

エンブリヲ「何だと…?!?」

ジャグラー「愛する女に振られ、ボロボロにされたお前は滑稽だな。最後のお前はスウォルツに助けてもらっただけに過ぎないのにな」

エンブリヲ「き、貴様っ…!」

スウォルツ「やめろ、二人とも。…エンブリヲ、お前は引き続き、魔王の器を探せ。さて、ジャグラー…我々は闇の王の封じられた場所を探すでしょう…」

俺達はそれぞれ動き出した…。

↓早瀬 浩一だ。

JUDAを後にしたその夜…。

俺は矢島が死んだ…あの場所に来ていた。

浩一「もう数日前の事何だよなア…」

紗季「浩一…君?」

浩一「…紗季ちゃん」

そこへ矢島の妹…紗季ちゃんが来た。

俺は話を紗季ちゃんに聞く。

浩一「…そっか。じゃあ、毎日ここに来てるんだね」

紗季「時間があるとい…ね。でも浩一君が来てくれて安心した」

浩一「…」

紗季「心配だったんだあ。お通夜にも来てなかったし…それに、中学入ってからお兄ちゃんとギクシヤクしてるみたいだったから」

浩一「俺がいけないんだ…。俺がバカだったから…。矢島の言つて

た事はいつも正しかったのに俺はそれを聞こうとしなかった。最後まで信じてくれたのに俺はそれに応えようとしなかった…。今更こんな事言っただけ遅い事はわかってる…。でも、俺は今矢島に応えたくて仕方ないんだ」

コレが後悔なんだな…。

紗季「全然遅く無いと思うよ」

え…？

紗季「浩一君が今そうしたいって思うなら、それはきつと正しい事だと私は思うから。それに…大切なのは今浩一君が」どうしたいかなんだから。きつと…お兄ちゃんだったからこう言ってたと思う。今更じゃなくて今からでいいって」

そうか…そう、だよな…。

浩一「…うん。ありがとう」

この先如何なるかなんてわからない。

…でも、俺は変わる…。

少しでいいから、ゆつくりと…。

―小田切 拓哉だ。

俺はある公園に着き、ベンチに座っていた…。すると…。

ガイ「よう、やっぱりいたな」

クレナイ ガイがアイスクャンディを頬張りながら、歩いてきていた。

そして、もう一つ取り出し俺に投げ渡す。

俺は無言でアイスクャンディを食べ始めた。

ガイ「今日は色々世話になったな、拓哉」

拓哉「借りを返したただけだ。事実、お前には何度も助けられていた。ウルトラマンオーブ」

ガイ「ふっ、お前さんがあのロボットのパイロットだったとは…やっぱり世界は広いな」

アイスキャンディを食べ終えた俺は立ち上がる。

拓哉「安心しろ。お前の正体を話すつもりはない。…だが、一つだけ条件がある」

ガイ「何だ？」

拓哉「お前のハーモニカの音色を聞かせろ」

俺の要求にクレナイ　ガイはお安い御用だと言い、ハーモニカを吹き始めた。

優しくくて心地いい…しかし何処か寂しげのメロディーが公園内に響き渡る。

そして、吹き終えたクレナイ　ガイはハーモニカをしまう。

拓哉「やはりそのハーモニカの音色はいい。…そろそろ戻る。パーティーを開いている奴等がいるのでな」

ガイ「そうか。またな」

俺達はそれぞれ背を向けて歩き始めた…。

第7話 黒の執行者

―池波 夏華です。

私は今、絵美さんと一緒に学校の花壇を手入れしていました。

絵美「…これでいいのかな」

夏華「恐らくそれで大丈夫だと思いますよ」

絵美さんってお花が好きなんですね！

浩一「その花壇さア。管理してた先生がいなくなつてから誰も面倒見なくてさ」

絵美「…!（早瀬 浩一…!）」

夏華「あ、早瀬さん!こんにちは!」

浩一「ああ、こんにちは、池波。…まあ、それにしてもこんな校舎裏に花壇を造るのがそもその間違いなんだろうけどね」

絵美さんは何も答えません…どうしたのでしょうか…?

浩一「ねえ、君は転校生の城崎だろ?俺同じクラスの早瀬」

絵美「…」

浩一「…あのさア、実はずっと気になつてた事があつてさ。俺達つて…どつかで会つた事無い?」

夏華「えっ…!!?」

早瀬さんと絵美さんが会つた事がある…?

浩一「最初見た時何か初めてって感じがしなかつた…ていうか…」

絵美「あの…私、さつきから無視してるのがわかりませんか?」

浩一「え!!?」

夏華「え、絵美さん…!!?」

無視つて…早瀬さんを!!?

絵美「私は貴方のような粗暴な人間とコミュニケーションを取りたくないんです!行きましよう、夏華さん」

夏華「え、あ、あの…!すみません、早瀬さん!」

私の制止も聞かずに絵美さんはコツコツと先に歩いて行つてしまつたので私は早瀬さんにお辞儀をして、絵美さんの後を追いました…。

浩一「俺が…粗暴…？初めて言われたそんな事…」

―小田切 拓哉だ。

俺達はシグナスのシミュレーションルームにいた。

ディオ「だから、何度も言っているだろうが。さっきのシミュレーターでもあったが、ああいう局面は、各個撃破が最適の戦術だ」

青葉「だからって、母艦が落とされたら元も子もないじゃねえか！あそこはディフェンスを固めるべきだ！」

ディオ「お前と戦術論をかわすつもりはない。戦場では俺に従え」
青葉「俺はお前の部下じゃねえし、そもそも軍人じゃねえ！従わせたいんなら、ちゃんと納得させてみる！」

渡瀬 青葉と隼鷹・ディオ・ウエインバーグ…。戦闘では凄まじい連携を見せるが、どうにも仲違いをしているようだ。

飛鳥「仁！ちよつとはみんなの事を考えて動け！此処は学校とは違うんだぞ！」

仁「偉そうに言ってるじゃねえよ！そんな事俺だってわかっているんだよ！」

飛鳥「それならもつと協調性を見せろよ！」

仁「お前だって、カッコつける前にもうちよつと力合わせろよ！」

吼児「ちよ、ちよつと落ち着いてよ、二人とも！」

つばき「だから、言っているでしょ、剣児！ビルドアップする時はもつとビッグシューターの動きにあわせてって！」

剣児「つとは言うけどよ…。そもそも空を駆けるビッグシューターと地上戦メインのジークじゃ、動きに合わせるのは無理があるだろう！」

つばき「だからそれを合わせてって言っているの！」

剣児「無茶苦茶過ぎんだろ！」

どいつもコイツも騒がしい奴等だ…。

キッド「若い連中は元気がいいね〜」

ロックオン「そういうアンタもまだ若いだろ？」

キッド「俺達の年齢は企業秘密だぜ、ロックオン」

ロックオン「にしてもアンタのスナイパーとしての腕も高いみたいだな。今度勝負してみるか？」

キッド「いいぜ。気が向いたらな」

刹那「…」

タケル「刹那、浮かない顔をしているけど、どうしたんだ？」

刹那「…何でもない」

刹那「F・セイエイは歩き去った…」

赤木「刹那の奴…前より近寄り難くなったな」

青山「ロックオン達曰く、昔の刹那に戻っていると言っていたけどな」

ジノ「刹那がエクシアに乗っていた時の事か…」

タケル「(刹那…君も感じているのか？この妙な胸騒ぎを…)」

森次「小田切、少し連携訓練をしたいのだが、手伝ってくれないか？」

拓哉「構わない」

俺と森次 玲二は連携訓練を開始した…

↓池波 夏華です。

授業も終わり、私と絵美さんは迎えの車を待っていました。

夏華「もうそろそろ車が来ますね」

絵美「そうね…。それにしても、今日は驚いたなあ…まさか早瀬浩一の方から接触してくるなんて」

夏華「でも、あの言い方は流石にないと思うよ。いくら早瀬さんの事をよく思っていないとしても…」

絵美「それは…でも、確かに今思えばそうね…。まあ、私が潜入している必要もなくなったし、どうせ学校去るのも時間の問題だもんね」

夏華「え…絵美さん、学校からいなくなるの!?!？」

絵美「うん、私はもう彼を監視する必要がなくなった…。社長の命令で学校へ通っていない夏華さんは兎も角ね」

夏華「そ、そんな…」

絵美さんが学校からいなくなるなんて…。

浩一「おーい！城崎ー!!？」

え…!!？早瀬さんがこちらに向かつて走ってきました!!？

夏華「早瀬さん!!？」

絵美「(な、なんなのよ…)」

浩一「あのさ…やっぱり納得いなくて」

絵美「…」

何が納得いかないのでしょうか…？

浩一「俺の事、何も知らないくせにいきなり粗暴呼ばわりはないんじゃない？」

絵美「え…？」

早瀬さん…粗暴だと言われていた事気にしていたのですね…

浩一「そう！だから訂正してよ！確かに城崎とは前に会った気がする的な事言っただけど…」

その様な話をしてしていると突然、何者かが攻撃して来ました。

浩一「くっ…!!？」

城崎「きゃ…」

夏華「わわっ!!？」

何とか早瀬さんが絵美さんを救出しました…。所で私は何故、助けて貰えなかったのでしょうか…？

まあ、自分で避けましたが…。

？「へエ、俺の拳をかわすなんてたいしたもんだよ」

夏華「あ、貴方は…？」

浩一「お前は確か…道明寺！」

道明寺「あ、覚えててくれたんだあ。まあ、俺はお前の事全然知らないんだケドね」

道明寺さんは不敵な笑みを浮かべています。

城崎「…随分、いろんな人から恨まれてるみたいですね」

浩一「いや、俺も知らないって、だってあいつ、2年に進級してすぐに傷害事件起こして施設に入れられたんだし…」

道明寺「先週出てきたんだよ。で、お前さ、俺がいない間に随分と派手にやってくれたみたいじゃない」

浩一「はあ？なんだよ派手って」

道明寺「降矢から色々な。お前のせいで、あいつが酷い目に遭わされたってな」

え？でもそれって…。

夏華「待つてください！アレは降矢さん達が仕掛けて来たのですよ！」

道明寺「あいつには前に一度世話になってな…。ま、要はそういう事だ」

…全く話を聞いて貰えません…。

浩一「…チツ、面倒くさい奴だなあ…（まあ相当強いとは聞いてたけど…こいつも所詮は普通の人間だし…ここはさっさと終わらせた方がよさそうだな…）。城崎、池波。危ないから離れててよ」

城崎「…」

夏華「は、早瀬さん…！」

格好良く私達を守ろうとしてくれる早瀬さんに私は目を輝かせましたが、何故か絵美さんは呆れていました。

浩一「施設に入ってて知らないだろうけどさア、俺は無茶苦茶強いぞ」

道明寺「上等」

お2人は向かい合い、喧嘩を始めました。

先手必勝で早瀬さんが道明寺さんに攻撃を仕掛けましたが…。

道明寺「速い…って事もないか」

浩一「な、何…!?!?」

フア、フアクターの早瀬さんの攻撃をかわして、膝蹴りを入れた…!??

その後も早瀬さんが何度も仕掛けましたが、返り討ちに遭うだけでした…。

道明寺「お前さあ、スピードもパワーもあるみたいだけど、戦い方にセンスが無いんだよ」

浩一「んだと…!??一発も当たってねえからって、調子に乗るなよ…!」

道明寺「おい、自称・最強君。ダラダラやんのも俺の性に合わないからさあ、ちやっちやと終わらせてもらおうぞ!」

道明寺さんが早瀬さんに殴りかかりました…。

早瀬さん…!

しかし横から現れた方が道明寺さんの頬を殴り、吹き飛ばしました。

道明寺「ウグツ…!??」

私達はその方を見て、早瀬さんと絵美さんは驚愕し、私は笑顔になりました。

拓哉「…帰りが遅いと思えば…。面倒な奴と関わっていたとはな」

夏華「リーダー!」

浩一「な、何しに来たんですか、拓哉さん!こんな奴、俺が…!」

拓哉「そのこんな奴如きに負けているお前が大声を出すな」

リーダーの言葉に早瀬さんは何も言えなくなりました。

道明寺「へえ、アンタ強いね。だったら俺も本気を出さないとけないな!」

道明寺さんが手をあげると同時に背後に複数のアルマが降り立ちました。

浩一「アルマ!??やっぱお前加藤機関の!??」

道明寺「…なんだコイツら?…あ!」

拓哉「…どうやら違う様だな」

夏華「あの人…ただ強いだけみたい何ですな」

それにしても…このままでは道明寺さんが危険です…!

道明寺「もしかして…俺達を狙ってるのか?」

浩一「…そうだな。ロボット相手じゃお前は何もできないもんなあ」

絵美「え…」

夏華「は、早瀬さん…!??」

拓哉「待て、早瀬 浩一…！」

私達が制止する中…。

浩一「来いっ、ラインバレル！」

早瀬さんはラインバレルを呼びました…。

立ち尽くすラインバレルを見て、道明寺さんも驚いています。

道明寺「うおお、こりやあ驚いたな…！」

絵美「よ…呼んじやった…!? 民間人が目の前にいるのに関係ないの!?？」

早瀬さん…得意げな顔してますが、これは流石に私でも怒りますよ…?

リーダーも呆れた顔をして私達に視線を戻しました。

拓哉「俺達は避難する。…いいな？」

絵美「(やっぱり…最低だわ)」

リーダーの言葉に従い、ラインバレルを残して、私達は避難しました。

それと、アルマの全てはラインバレルが倒したそうです。

―小田切 拓哉だ。

あの後、道明寺 誠を家に帰し、JUDAに戻ると同時に早瀬 浩

一も戻って来て、石神 邦生達に怒られていた。

石神「困るんだよねエ…。民間人の前で簡単にマキナを呼び出されると」

森次「被害がなかったものの怪我人が出たらどう責任を取るつもりだったんだ？」

浩一「で、でも倒したからいいじゃないですか！」

ケンジ「そういう問題ではない！」

倉光「君の力はね。簡単に他人を傷つける事が出来るんだよ？」

いぶき「それをわかっていない様ね」

自業自得だな。

森次「そもそも小田切…お前がいながら何故、起こった？」

拓哉「原因をこちらに押し付けるな。俺や夏華は止めた。勝手をしたのは早瀬 浩一だ」

浩一「で、でも…！」

拓哉「言い訳は不要だ。…調子に乗るのもいい加減にしろ」

浩一「…！」

森次「…小田切の言う通りだ。今後はもう少し慎重に行動しろ」

浩一「…わ、わかりました…」

俺と森次 玲二の言葉に早瀬 浩一は俯く。

剣児「気にするなよ、浩一！」

青葉「次から気をつけたらいいんだよ！」

浩一「…はい…」

―池波 夏華です。

翌日、私はまた絵美さんと一緒にガーデニングの本を読みながら、花壇の手入れをしていました。

浩一「おはよう、二人共」

夏華「おはようございます！」

絵美「な、何か用ですか!?!」

恥ずかしそうにガーデニングの本を隠す絵美さん…少し可愛いです。

浩一「あ、あのさ城崎…。昨日は驚かせちゃってゴメンね。アクショントっていうか…ほら。あの状況じゃ仕方なかったっていうか…」

ラインバレルで戦った事ですな。

浩一「あのロボット、ラインバレルって言って一応、俺専用のでき。詳しい事は話せないんだけど今、ある組織に協力しながら、俺はラインバレルを使って悪いヤツ等と戦っているわけで」

絵美「(俺…専用…)」

フツ、絵美さんもJUDAに所属していると知ったら驚くでしょうね。

? 「見つけたぞお!!?」

え…？この声は…。

道明寺さんがものすごい速さで走って来ました…。

浩一「道明寺!??何の用だよ、お前!??まさかこの前の続きか!??」

道明寺「…いや、ありやあ俺の負け。全然負けだよ大完敗」

浩一「…へ?」

道明寺「大体、巨大なロボット持つてるヤツに勝てるワケないでしよ?」

夏華「そ、それはそうですね…」

道明寺「今日は筋を通そうと思つてな。おい出て来いよ」

道明寺さんの言葉である人が出て来ました。

それは顔にひどい腫れが出来ていた降矢さんでした。

浩一「降矢!??なんだよ、その酷いツラは…?」

降矢「…許してくれ、浩一!」

浩一「え…?」

道明寺「大体の話は聞いた。コイツ等がお前の事を気に入らないつてだけで集団で襲ったら返り討ちにされただけらしいな。知らずとはいえ、俺もお前に喧嘩を売ったのも事実だ。ホント、悪かったな。

早瀬

夏華「道明寺さん…」

浩一「いや…そのもういいよ。…俺にも非がないワケじゃないし」

道明寺「あ、そうか!??良かったよ良かった!よおーし、仲直りついでに一つ提案があるんだけど、聞いてくれる?」

笑顔で早瀬さんの肩に腕を回す道明寺さん…変わり身が早すぎて笑えます。

道明寺「お前のサポートをさせてくれ」

浩一「は?」

道明寺「お前はあのロボットに乗って悪と戦う正義の味方なんだろう?学生やりながら、正義の味方やるつても大変だ。そこで俺達でできる範囲だけとお前をサポートできればな、と」

俺達…ですか。

絵美「(どうしよう…私今、すごい面倒な事に巻き込まれかけてる

…）な、夏華さん？そろそろ行きませんか？」

夏華「道明寺さん、格好いいです！」

道明寺「はは、ありがとな。池波」

絵美「（あ…もう夏華さんはダメだ）」

浩一「でも、どうしてそこまで？」

道明寺「要は加藤機関つて、ヤツ等が宣戦布告したワケだろ？なに世間はいつとも通りで自分達には関係無えって感じで誰も危機感なんか持っちゃいねえ。…が、俺達は知っちゃった…。だからこそ真実を知った人間の義務つてヤツで見逃してはおけねえんだ」

スツ、と道明寺さんは手を差し出しました。

浩一「…お前、そんなもつともらしい事言つといて、本当は面白半分で首突つ込もうとしてんじゃないのか？」

道明寺「馬鹿野郎！面白全部だ！」

浩一「…面白いじゃないか！」

早瀬さんと道明寺さんは硬い握手を交わしました。

これが男の方の友情…！

道明寺「ホラ、君達も手を出して！」

夏華「はい！」

絵美「（いやあ〜）」

私は自ら手を出しますが、絵美さんは手を引かれました。すると、遠くから何か負の感情を感じました。

理沙子「いいなあ〜」

に、新山さん…!!??

理沙子「あたしはいつも仲間外れです。だから、あたしは疎外感しか感じません」

浩一「理沙子!!??そんな所で何しているんだよ!!??」

理沙子「だつてエ…。最近の浩一おかしいしそれに道明寺が浩一の事探してるって聞いて心配で…。後最近、城崎さんや池波さんと一緒にいるから…」

道明寺「だったら、君も入る？」

浩一「何でだよ!!??理沙子は関係ないだろ!!??」

早瀬さん：新山さんが泣きそうな顔で袖をつかんでますよ。
結局、新山さんも入れ、早瀬軍団が結成されました。

道明寺「それで早瀬。何やるんだ？」

浩一「うーん、そうだな…。よし、決めた！今日はこの花壇の整備をやるぞ！」

道明寺「うしっ！やるか！」

夏華「はい！頑張りましょう！」

私達はみんな花壇の整備を始めました…。

ーサリアよ。

私はアルゼナルの墓に来ていた…。

あの人：アレクトラに会う為に…。

サリア「遅くなつてごめんなさい。アレクトラ…。此処の所ゾギリアの動きが活発で忙しかったの。…おかげで喫茶アンジユにも顔を出せていないし。…それとね、レディ・アンからチーム・アルゼナルに協力要請がかかったから、暫く来れないわ…」

私はアレクトラ：ジルと書かれた墓にそつと、触れた。

サリア「でも、必ず戻つて来るから…待っていてね」

そう言い残した私はその場を立ち去ろうとしたが、目の前にある人物を見つけた立ち止まった。

サリア「…ヒルダ」

ヒルダ「聞いたよ、レディ・アンから協力要請が出たって。…釣れない事するね、言つてくれれば良いのに」

サリア「…言つた所で何も変わらないわ」

ヒルダ「そんな事ないさ。…あたしもアンタと行くから」

な、何を言つて…!?!?

サリア「何を言っているの!?!?もうあなたが戦う必要なんて…!」

ヒルダ「あたしき…アンジュと居て気づいたんだ。アンジュは…私達を大切に思ってくれている。…だからこそあたしはアンジュの笑顔を守りたい。でも、今の世界じゃ、いつかアンジュはまた笑えなくなる。…その為に戦うんだよ」

サリア「ヒルダ…」

ヒルダ「クリスとロザリー、エルシャもついて来るって言っていたし、これでアンタも楽できるだろ？」

サリア「…ええ、そうね。ヴィヴィアンはサラマンディーネと一緒にアウラの世界へ帰っちゃったし。…頼りにしているわ、ヒルダ」

ヒルダ「大船に乗った気分でないよ」

サリア「じゃあ、私…準備があるから」

そう言い残して、私は司令室へ向かった…。

ーヒルダだよ。

サリアが去った事を確認し、私は隠れている人物に声をかけた。

ヒルダ「盗み聞きなんて、趣味が悪いじゃないか」

声をかけられた相手は観念したかの様に物陰から出てきた。

タスク「ははは、流星はヒルダだね」

ヒルダ「アンタがこんな所に来て大丈夫なのかい？アンジュのそばにいないくて」

タスク「今は休憩時間だからね」

ヒルダ「…そっか。…それよりもタスク」

タスク「何？」

ヒルダ「…あたしがいない間、アンジュを頼むよ？」

あたしの言葉にタスクは頷いた。

タスク「勿論だよ。俺はアンジュの騎士だからね。…ヒルダも気をつけてくれ。君に何かあったら、アンジュが悲しむ」

ヒルダ「分かっているよ、そんな事」

私達は別れ、準備を始めた…。

―池波 夏華です。

私達は6時間かけて、花壇の整備をしました。

それはもうドロドロで何故こんなに必死になったのでしょうか？

理沙子「後は種を埋めれば丁度あたし達が卒業する頃にお花咲くね」

絵美「…そっか」

夏華「よかったです！」

そんな私達を見ている影がありました。

陸「フッフ、見つけた。これは使えそうですねエ」

その影は私達に気づかれない様、姿を消しました。

その後、一度解散となり、私と絵美さんは迎えの車を待っていました。

夏華「また車遅いね…」

絵美「…夏華さん」

夏華「何？」

絵美「…大変な事に巻き込まれちゃったけど…何だか、こういうの楽しいね」

夏華「！」

絵美「私…早瀬 浩一の見方を変えないといけないかもしれないわね」

正直嬉しいです。…絵美さんが早瀬さんの事で心から笑顔になってくれるとは…。

道明寺「あれ？ 二人ともこっちなんだ」

夏華「あ、道明寺さん！」

絵美「…」

あ、絵美さんがまたムスツ、とした顔に…。

道明寺「ねえ、池波。昨日一緒にいた拓哉って人にも謝っておいてくれないか？」

夏華「え？」

道明寺「嫌、やっぱり直接会って謝るのが筋なんだが…生憎と居場所を知らないからさ」

夏華「…わかりました。お伝えしておきます！」

道明寺「ありがと。…それにしても君って、あの拓哉って人の事好きなんだね？」

夏華「…ふあっ!!?」

突然そんな事を言われ、私は情けない声を上げ、顔を真っ赤にしました。

道明寺「だって、あの人が現れた時の君の笑顔…あれは惚れていた顔だったからな」

夏華「ちよっ、ち、違います！」

絵美「フフツ、顔を真っ赤にして言っても説得力がないよ、夏華さん？」

夏華「え、絵美さんまで!!?」

うゝ、皆さんで私を弄ってそんなに楽しいんですか〜!

そんな話をしていると突然、地震が起こり、私達の目の前にこの前戦闘したアルマが現れました。

道明寺「な、何だ!!?ロボット!!?」

陸「キヒヒヒヒッ！」

夏華「あの時のアルマ…!!?…キヤアツ!!?」

絵美「キヤアアアアツ!!?」

あの時のアルマ…ヤオヨロズの腕に私と絵美さんは捕らえられてしまいました。

道明寺「城崎、池波！」

陸「この子達はいただいて行きますよ」

道明寺「なっ…!!?待ちやがれ！」

そのまま私達は抵抗も出来ず、連れ去られてしまいました…。
助けてください…リーダー…!

―小田切 拓哉だ。

突然、緒川 結衣から連絡が入った。

緒川『社長、大変です!』

石神「どうしたんだい?」

緒川『加藤機関のアルマが翼学園付近を襲撃、城崎さんと夏華さんが連れ去られました!』

夏華が拐われただと…?

石神「うーん、早瀬君を直接狙ってくると思ったんだが、まさかこういう手を使ってくるとは…」

緒川『相手は社長の情報通り、前回戦闘した八番隊の様です!』

ナオト「あの人質野郎か!」

石神「うむ…相手は民間人でも関係なく、手を出す奴等だ。急がなければ危険だ」

吼児「すぐにでも助けに行かないと!」

青山「そうだな!」

飛鳥「でも、何処へ捕らえられているか、わかるんですか!?!」

森次「今位置を割り出している。少し落ち着け」

青葉「でも、落ち着いていられませんかよ!」

拓哉「…闇雲に探した所で無駄だ」

山下「む、無駄だって…!?!」

剣児「おい…!夏華ちゃんも捕らえられているんだろ?何で、お前はそんなに冷静なんだよ?」

拓哉「誰が囚われようが関係ない。冷静さが欠ければ元も子もない」

剣児「何言ってるんだよ、お前…!?!あの子達が心配じゃないのかよ!?!」

拓哉「心配して何になる?」

剣児「何!?!」

拓哉「心配した所で夏華達が戻ってくるワケでもない。…心配など必要ない」

剣児「ダメエ!」

鏡「やめろ、剣児!」

剣児「けどよ！」

つばき「今は喧嘩している場合じゃないでしょ!!？」

仁「：拓哉兄ちゃん…」

掴みかかって来た草薙　　剣児を離し、俺は社長室から出ようとする。

石神「何処へ行くんだい？」

拓哉「：何処へ行こうが俺の勝手だ」

そう言い残し、俺は社長室を後にした。

剣児「クソツ！何なんだよ、アイツは！」

刹那「…」

キッド「：まったく、素直じゃねえな」

石神「：どうやら、城崎君達が囚われている場所が分かったみたいだ。こちらへ向かっているチーム・アルゼナルの子達には既に伝えてある。君達も出撃を急いでくれ」

お町「キッドちゃん！」

アイザック「我々は一足先に彼と向かいますが、いいですか？」

石神「勿論さ。彼にも場所を伝えて欲しいしね」

ボウイー「あいよ！そんなじゃあ、行きますか！」

ー早瀬　浩一だ。

下校しているとバイクに乗った道明寺が駆けつけた。

道明寺「早瀬、大変だ！」

浩一「何だよ、道明寺？」

道明寺「城崎と池波が拐われた！恐らく加藤機関だ！」

浩一「何だと!?!?!分かった！下がってくれ、道明寺。ラインバレルを呼ぶ！」

道明寺「ああ…！」

浩一「来い、ラインバレル！」

…え?どうして来ないんだ?

浩一「来いっ！来いっ！急いでんだから早く来いよ!!？」

道明寺「どうしたんだ、早瀬!?!」

浩一「ラインバレルが…来ないんだよ!」

どういう事だよ…!?!?

―小田切 拓哉だ。

俺は外へ繰り出し、夏華達を搜索しようとしたが…。

アイザック「何処へ行く気だ、小田切君?」

お町「こんな時間に一人でお散歩は危ないわよ」

拓哉「J9…」

キッド「夏華ちゃん達の居場所が分かったみたいだ。俺達で先に乗り込むぜ!」

拓哉「…気づいていたのか」

ボウイー「ちなみに俺達以外にも何人か、気づいているよ」

拓哉「…お人好しな奴等だ」

俺はそのままJ9の奴等と共に夏華達が囚われている場所へ向かった…。

―池波 夏華です。

私達はある倉庫に連れて来られました。

絵美「…私達を攫ってどうするつもりですか?」

すると、陸という方は不気味な笑みを浮かべました。

陸「5年前、中国上海で起こった大規模な爆破事件をご存知ですか?当初は集団によるテロ行為なんて報道されましたが、実はアレ、僕一人がやったんです」

夏華「ど、どうしてそんな酷い事を!?!」

陸「僕の想像力の高さを知らしめる為です。あの爆発で死んだ人間達はまさか自分が死ぬなんて想像としてなかった。皆が当たり前のように一日が終わり、また明日が来ると思っていた。…つまり…」

絵美「…」

陸「僕はあの瞬間爆発で死んだ人達の想像を凌駕したのです！」

夏華「それと私達を攫う事と何の関係があるのですか!?!?」

陸「前回の戦いで彼に邪魔をされたからですよ。だから、死ぬ程辛い目に遭わせてあげるんです」

絵美「…酷い…」

陸「あなた達には直接恨みはありませんが、どうやら彼とは親密な関係みたいなんですね。彼を苦しめる道具となってもらいます」

夏華「…関係、ないですか?…それは違いますよ」

陸「何がですか?」

夏華「私の声に…聞き覚えはありませんか?」

陸「声…? つ、まさか…!?!?」

夏華「ええ。私はあの赤紫の機体のパイロットの一人なのですよ」

陸「ほ、ほう…!成る程!これは好都合です!あなたにも邪魔をされたのですからね!」

絵美「…では、あなたは私がJUDAの人間だという事も知らないのですね?」

陸「…いへエ…あなたもJUDAの!?!?それはまさに一石二鳥です!あなた方は早瀬 浩一どころかJUDAにとっても大事な人質つて事じゃないですかア!」

絵美「…それはつまり、あなたは私がどんな存在かも知らずに誘拐したという事ですね?」

え、絵美さん…?

絵美「それなら…あなたに一つだけ教えてあげます」

え、絵美さんの目が…ファクターアイに…!?!?

すると、倉庫付近に何かが落下して来ました。

あ、あれは…!

陸「そ、そんなバカな…!?!?ラインバレルだと!?!?」

どうしてラインバレルが…!?!?

絵美「現実はあるあなたの想像を凌駕する!」

まさか…絵美さんが呼び出したのですか…!?!?

第7話 黒の執行者

陸「バカな！ラインバレルのファクターは早瀬 浩一のはず…どういう事だ!?…：一体のマキナに対し、ファクターは一人しか存在できないハズじゃ…クソツ！」

陸「という方はアルマに乗り込みました。」

夏華「え、絵美さん！」

絵美「ごめんね、夏華さん。後で説明するから…。危ないから隠れていて」

そして、絵美さんもラインバレルに乗り込みました。

絵美「…久しぶりだね。行くよ！フィールド固定後カウンタノマシン起動！目標の行動に対し6・7・2・3・5・8ごとにリアルタイムで転送…一気に終わらせるわ！」

陸「ま、まあ多少不可解な状況ではありますが、ラインバレルを破壊してしまえば早瀬 浩一も…。」

え…!??嘘…!??

陸「…な、何だコレは!??黒くなっただと!??」

ラインバレルの装甲の色が…黒に…!??

陸「だ、だから何だと言うのですか！出て来なさい！」

ツ…！大量のアルマ部隊が出て来た…!??

絵美「伏兵を置いていましたか…」

陸「どうですか？それでも僕の想像力は劣ると言いますか？」

何と卑怯な…！

絵美「(問題的に時間はかけられない…。それにあまりこの場を離れすぎると夏華さんに被害が…一体どうすれば…!??)」

すると、現れたアルマ部隊の数機が放たれた銃撃によって破壊されました。

陸「な、何ですか!??」

現れたのは…パラメイルとラグナメイル…!??

ロザリー「石神つて、社長から連絡を受けて来てみれば一体どう言

う事何だよ!?!?」

クリス「女の子二人が誘拐されたって、話だったよね?」

エルシャ「あそこにいるのは情報にあつたラインバレル…?でも…」

ヒルダ「情報で見た時と色が違うぞ!」

絵美「(アレは…社長が言っていたチーム・アルゼナルの人達…?)
チーム・アルゼナルの皆さん!私はJUDAの一員である城崎 絵美
です!今はワケがあつて私が乗っています!どうか力を貸してください!」

サリア「チーム・アルゼナルの隊長のサリアよ。了解したわ、詳しい話は後にして、まずは加藤機関のアルマを止めるわよ!」

陸「チーム・アルゼナルの小娘如き…私の相手ではありませんよ!」

ヒルダ「言ってる!その慢心、後悔させてやるよ!」

絵美さん達は戦闘を開始しました…。

〈戦闘会話 サリアVS初戦闘〉

サリア「アレクトラが夢見た平和の為に…私は戦い続ける!行くわよ、クレオパトラ!」

〈戦闘会話 ヒルダVS初戦闘〉

ヒルダ「待っていてくれよ、アンジュ…。必ず世界を平和にして、戻るから…!アンタが笑える様に!」

〈戦闘会話 ロザリーorクリスorエルシャVS初戦闘〉

エルシャ「久しぶりの戦闘だけど、いけるかしら、二人とも?」

ロザリー「問題ないさ!」

クリス「うん!ロザリー達となら…きつとやれるよ!」

戦闘開始から数分後の事でした…。

突然、私の周りのアルマ部隊が現れました。

夏華 「こちらにもアルマ部隊が…!?？」

絵美 「夏華さん!?？」

陸 「だから、想像力が足りないのですよ。…まずは彼女を殺しなさい！」

ロザリー 「おい、マズイぞ！」

クリス 「でも、ここからじゃ間に合わない！」

ですが、私の周りにいたアルマ達は全て破壊されました。

サリア 「い、一体何が…？」

現れたのは…ブライガー…!?？」

キツド 「ヒュー、何とか間に合ったみたいだな」

お町 「夏華ちゃんは無事な様ね」

アイザック 「だがなぜ、ラインバレルがここにいる？早瀬君か？」

絵美 「いいえ。私です」

ボウイー 「絵美ちゃんじゃないか！どうしてラインバレルに!?？」

キツド 「それに色も黒いしな。…まあ、取り敢えずまずはこの場を

凌ぐか！拓哉！」

え、た…拓哉って…！

すると、私は誰かに抱き寄せられました…。

ー小田切 拓哉だ。

俺は夏華を抱き寄せ、デイシエイドを配置していた場所まで来た。

夏華 「リーダー！」

拓哉 「それだけ元気ならば、怪我はないな」

夏華に怪我を確認し、俺は頷いた。

拓哉 「行くぞ、夏華。…今回ばかりは俺も黙ってはられない」

夏華 「…はい！」

俺と夏華もデイシエイドに乗り込み、戦線に参加する。

それと同時にプレマイオスとシグナスも現れ、他の奴等も出撃して来た。

青葉 「助けに来たぜ！」

赤木「つて…：デイシエイドとブライガーもいるじゃねえか！」

剣児「拓哉、お前…」

拓哉「…手伝え、草薙 剣児」

剣児「…へッ！最初っからそう言えば良いんだよ！」

ロックオン「あそこにいるのは…：ラインバレル、か？」

ジノ「いったい誰が乗っているんだ?!?色も違うしよ！」

夏華「あのラインバレルに乗っているのは絵美さんです！」

翔子「ええっ?!?」

シズナ「絵美ちゃんか?!?」

衛「どうして城崎さんが?!?」

スメラギ「…気になるけど、今は加藤機関の相手が先よ！」

倉光「城崎さん、後で話は聞かせてもらうよ」

絵美「はい」

スザク「いち早く着いていたか、チーム・アルゼナル」

サリア「お久しぶりです、ゼロ。私始め、ヒルダとロザリー、クリ

スとエルシャもいます」

スザク「了解した。後、我々は対等な関係だ。敬語はよしてもらお

う」

サリア「了解！」

一鷹「さてと…：覚悟はできてんだろうな、加藤機関！」

仁「泣いて謝っても許さないからな！」

陸「JUDAの機動部隊も来ましたか…。だが、ここであなた達を

倒せば、加藤さんも僕の事を…！」

夏華「行こう、絵美さん！私達を誘拐した事を後悔させよう！」

絵美「ええ。そうね、夏華さん！」

…：夏華は良き友人を持った様だな。

…：戦闘開始だ。

〈戦闘会話 刹那VS陸〉

陸「僕の想像力の前ではガンダムも無力です！」

刹那「ならば、証明してやる……！お前の想像力というモノを越える俺とガンダムの力を！」

〈戦闘会話　タケルVS陸〉

タケル「お前は何処まで卑怯な手を使うんだ！」

陸「持てる手を全て使う……それが僕なのですよ！」

タケル「この様な奴を野放しには出来ない……！俺の全てにかけてお前を止める！」

〈戦闘会話　剣児VS陸〉

剣児「拓哉の奴……素直じゃないみたいだな。少し、アイツの接し方を変えてもいいかもしれないな」

陸「僕とヤオヨロズを前にして考え事をするとはずいぶん余裕ですね？」

剣児「まあ、それもコイツを倒してからだ！テメエの卑怯な真似も此処までだぜ！」

〈戦闘会話　赤木VS陸〉

陸「サラリーマンがどうして邪魔をするのですか？？」

青山「それはお前が卑怯な真似をするからだ！」

いぶき「サラリーマンだろうと何だろうと卑怯者は許さないのよ！」

赤木「お前のやり方には俺達全員怒ってんだ！覚悟しやがれよ！」

〈戦闘会話　キッドVS陸〉

陸「またしても僕の邪魔を……！いい加減にしてください！」

ボウイー「いい加減につて……懲りないのはそつちでしょう」

アイザック「ここはもう潔く終わらせてやるに限る」

キッド「OK！悪党はさっさと倒してやる！」

〈戦闘会話　絵美VS陸〉

陸「現実には想像を凌駕するだど!?? ふざけやがってエ！僕の想像は常に…常にイ！」

絵美「あなたの想像なんて、所詮ただの思い込みにしかな過ぎない。あなたが私達を倒す事は不可能よ！」

〈戦闘会話 青葉VS陸〉

陸「今後こそ…今度こそあなたの動きを上回ってあげますよ！」

青葉「元バスケット選手の動きと反射神経舐めるなよ！それに俺とデイオの動きに合わせられると思うな！」

〈戦闘会話 仁VS陸〉

飛鳥「仁、卑怯な大人に負けるなよ！」

仁「当たり前だ！夏華姉ちゃん達を怖がらせた分、俺達が怒ってやる！」

陸「子供如きがいい気にならない事ですね！」

仁「その子供に今からお前は負けるんだよ！」

〈戦闘会話 拓哉or夏華VS陸〉

陸「今度はこちらで痛い目を見させてあげますよ！僕を苔にした事を後悔させてね！」

拓哉「…黙れ」

陸「ヒ、ヒイツ!?? な、なんなんですか!??」

夏華「リーダー…」

拓哉「悪いが、今の俺は少々虫の居所が悪い…。お前の言葉を聞くつもりはない！」

黒いラインバレルはヤオヨロズにダメージを与えた…。

陸「くっ…！こんな事が!??」

絵美「生命までは奪いません…あなたみたいな人間の生命…奪うに

値しないから…！」

だが、ラインバレルの色が戻り、膝を着いた。

夏華「絵美さん!?!?」

絵美「(やつぱり連続転送は…負担が大き過ぎるみたいね…)」

陸「色が戻った!?!?…と言う事は…チャンスですねエ。お前達、出て来い！」

…まだアルマ部隊を隠していたのか…!

陸「どうです!…ここまで想像できていなかったでしょう!?!?切り札はア、最後まで取っておくモノで…」

ヤオヨロズのパイロットは最後まで話せなかった…。

なぜなら、自身が命じたアルマ部隊の槍全てがヤオヨロズを貫いたからだ…。

陸「な、何を…!?!?」

沢渡『よお、陸!』

陸「沢渡さん…何故だ…?」

沢渡『お前さあ。誰が女攫うなんて小せえ事しろって言ったよ?やり過ぎだな。完全に想像を履き違いちまつてる。要するに機関の目的とズレが生まれちまつたんだよ。…だから…久嵩に頼まれたんだ。お前が目に余る行動を起こしたら殺せつてな』

陸「嘘だ…司令が…加藤さんが僕を…」

沢渡『シヨックだよな?何たつてお前は久嵩以外信用できなくて部下も持たなかったくらいだもんなあ。だがな、よく聞け子豚ちゃん。そんな久嵩からの伝言だ。…【お前が一番想像を理解していない。何故なら自分自身が死ぬ事を想像していないからだ】ってよ』

陸「…加藤オオオオオツ！」

そのままヤオヨロズは爆発した…。

青葉「アイツら…自分の仲間を!?!?」

ディオ「警戒しろ!まだ攻めてくるぞ!」

だが、敵アルマの全ては撤退した…。

リー「撤退した、のか…?」

アレルヤ「あの部隊はあのアルマを破壊する為だけに出てきたよう

だね」

タケル「どうして簡単に仲間を殺せるんだ…！」

ピーリス「…」

イズナ「…」

そこへ、早瀬 浩一と道明寺 誠がこの場に着く。

道明寺「着いたぞ、早瀬！」

浩一「何なんだよ、これ!??何でラインバレルがいるんだよ…!??」

夏華「は、早瀬さん…これは…！」

浩一「俺が呼んでも来なかつたくせにどうしてこんなところにいるんだよ!??答えるよ、ラインバレル！」

叫び続ける早瀬 浩一…。だが、ラインバレルのハッチが開き、そ

こから城崎 絵美が出て来て、驚く。

絵美「…」

浩一「え…なんで…何で城崎がラインバレルに乗ってるんだよ!??…っ！」

道明寺「早瀬…!??」

浩一「…思い出したぞ…！俺がどこで城崎と会っていたのか」

絵美「…!??」

浩一「3年前のあの事故の時…俺が死ぬ前に見た最後の光景…あそこに城崎はいたんだ!!?」

その後俺達はJUDAへと戻った…。

―早瀬 浩一だ。

俺は社長室で石神社長、緒川さん、道明寺、池波と拓哉さん…そして、城崎といた。

絵美「…」

浩一「知りたくなかった、何て事は言いたくないし、城崎が俺を監視していた事も怒らない…。でも、ラインバレルのファクターだった事を黙っていたのは許せない！でも、もつと許せないのは…俺が死んだ時、城崎がラインバレルに乗っていた事だ！」

夏華「は、早瀬さん！絵美さんだって…！」

池波さんが何かを言おうとしたが、拓哉さんがそれを止める。

夏華「リ、リーダー…！」

拓哉「口を挟むな、夏華。コレは早瀬 浩一達の問題だ」

夏華「…！」

浩一「それはつまり、城崎が俺を殺したと同じじゃないか！」

絵美「そ、それは…！」

道明寺「早瀬…！」

浩一「城崎…君は最低だ…！」

絵美「…！」

石神「早瀬君が怒る気持ちもわかるよ。城崎君、少しの間席を外してもらえないかな？」

絵美「はい…！」

拓哉「夏華…城崎 絵美についていろ」

夏華「わ、わかりました…！」

城崎と池波、緒川さんは外に出た…。

―森次 玲二だ。

我々は今、チーム・アルゼナルのメンバーと話をしていた。

サリア「改めて、私はチーム・アルゼナルの隊長…サリアです。こ

ちらは副隊長のヒルダ」

ヒルダ「よろしくな！」

サリア「そして、ロザリー、クリス、エルシャです」

ロザリー「これから頼むな！」

クリス「よ、よろしく…！」

エルシャ「仲良くしましょうね」

柳生「彼女達がああのエンブリヲという人物を倒したチーム・アルゼナル…！」

ヒルダ「まあ、実際、エンブリヲを倒したのはアンジュだけだな」
ジノ「そのアンジュって子は何処にいるんだ？」

ロザリー「喫茶店をやっている。今はそこにいる」

クリス「だから、私達だけで参加する事にしたの」

エルシャ「勿論、アンジュちゃんにこんな事知らせると自分も行くって言い出すと思うから伝えてないわ」

ゼロ「そうか…。だが、君達の力は頼りにしている。これからはよろしく頼む」

サリア「こちらこそよろしくね」

ゼロとサリアは握手をした…。

シズナ「それにしてもあの道明寺って奴が何でここにおんねん！」

衛「本人は行き掛かり上か何かと言っていました…」

剣児「にしてもよ。二人乗りって事に関してはデイスリーブも似たような感じだろ？」

仁「そうだよな。だったら、ラインバレルのファクターってのが二人いてもおかしくないんじゃないのか？」

森次「デイスリーブの二人乗りはJUDAの技術開発部が後から造ったシステムだ。それにそもそも二人乗りと二人のファクターが存在するのでは意味が全く異なる」

山下「確かにそうですね…」

ゼロ「我々も石神社長から聞く必要があるな」

いぶき「取り敢えず、今はやめておきましょう」

青山「そうですね。早瀬と城崎の事もあるしな」

―小田切 拓哉だ。

石神「早瀬君。君に私の知っていることを全て話そう。その代わりに今から話す事は城崎君には秘密にしておいてもらいたい」

浩一「…」

石神「実はね。彼女自身は自分の身体に問題があると思っているが、私と牧が調べた結果…ラインバレル自身が彼女を拒絶している。…いや、正確に言えば彼女を戦わせないようにしているといった

感じだな」

牧「残念ながら、未だに原因は全くわからないんだけどね」

拓哉「…では、戦闘中に装甲の色が戻ったのもそれが原因か」

牧「決して彼女自身に負担のかかる戦い方だけが理由ではないって事だよ」

浩一「じゃあ…城崎は長時間ラインバレルに乗れないって事なのか…」

石神「それから早瀬君。彼女は君を殺した張本人ではないよ。確かに彼女は君が死んだ時にラインバレルに乗っていた。だが、それは彼女の意思とは無関係だったんだよ」

浩一「どういう事ですか!?」

石神「彼女はずっと眠っていたんだよ。あの事故が起こる瞬間までね」

浩一「ずっと眠ってた…?」

石神「そう。そして目覚めた彼女は…それ以前の記憶をほとんど失っていた。だが…城崎君は死んでいく君を見て、泣きながらラインバレルに君を助けるよう何度も頼んでいた。自分の置かれた状況も理解できていないのだ。その結果、君はファクターとして蘇った」

浩一「…何だよ…! 散々大事な事を黙っておきながら、本当に一番大事な事まで黙っていやがって…」

道明寺「つまり、あれだ。早瀬。…お前がラインバレルと生命を共有してんなら、同じマキナのファクターである城崎とも生命を共有してるって事だ。なら、お前がラインバレルに乗って戦い続けければ結果的に城崎の生命を守り続けるって事になるんじゃないやねえのか?」

石神「彼の言う通りだ、早瀬君。故に君はファクターになった瞬間から、もう一つの生命…つまり城崎君の生命も背負っていたのだよ」

浩一「…俺が城崎の生命を背負っていた…」

生命の重みというやつか…。

拓哉「行け、早瀬 浩一。大切なモノは失ってからでは遅い」

浩一「…はい!」

俺の言葉に頷き、早瀬 浩一は社長室を出た…。

石神「大切なモノは失ってからでは遅い、か…。格好いい事を言うね、拓哉君。それに君が言うのと重みが違う」

拓哉「…俺も失礼する」

そう言い残し、俺も社長室を出た…。

「城崎 絵美よ。」

私は夏華さんと屋上にいた…。

夏華「何か飲み物買ってくるね！」

そう言つて、夏華さんは屋上を出て行つた。

私も最低か…。確かに最低だよね…。

浩一「城崎…」

ツ…早瀬君…！

絵美「早瀬君…」

浩一「大体の話は社長から聞いたよ。その、さつきはひどい事言つてゴメン…最低だ、なんて…知らずとは言え、城崎の生命を背負つていながら俺…何度もラインバレルを…」

絵美「私の都合で黙つていた事です。だから、あなたが謝る必要はありません。私…怖かつたんです。全てを話し、あなたに拒絶されたら…。長時間ラインバレルに乗れない私がこの戦いの中、一人で生きていく事なんてできません」

浩一「城崎…」

絵美「それなのに私はあなたを厳しい目で見続けて来ました。自分の生命を託せる相手かどうか判断する為に…。本当に…ごめんない。」

浩一「…！」

絵美「だつて…それは私の我が儘で身勝手な願いをただ、あなたに押し付けてるだけだった…。本当はそんな事出来る立場じゃないのに…。でも、そんなひどい事したのに…私はあなたしか…！」

浩一「城崎…」

絵美「お願いです、早瀬君…。私を守ってください！」

私は全てを彼に託したいと思いました…だから…！

浩一「…俺は二度と城崎をラインバレルに乗らせる気はない！その代わり、俺は必ず城崎より巧くラインバレルを使える様になってみせる！だから…俺が城崎を守ってやる！」

絵美「…！はい…！」

ありがとう、早瀬君…！

ー小田切 拓哉だ。

俺は缶ジュースを持った夏華と合流し、屋上で早瀬 浩一達を見た。

夏華「よかったね…絵美さん…」

友人、か…。

拓哉「…夏華」

夏華「はい？」

拓哉「…俺達はJUDAとはただの協力関係だ。…いずれその関係が崩れる時が来る」

夏華「…」

拓哉「俺達の目的は世界を救う事でも、戦争を止める事でもない。奴を見つけ出し殺す…ただ、それだけだ。…だからこそ、今の…今のアイツ等との関係を大切にしたい」

夏華「リーダー…！」

拓哉「いつアイツ等と別れてもいい様に記憶に…しっかりと残し、いつでも思い出せる様にしたい。お前はどうか？」

夏華「…私もです…！」

JUDAの奴等との関係がいつまで続くかわからない…。それでも俺は…俺達は進み続ける…。大切な記憶を残す為に…。

第8話 変化する想い

「ネーナ・トリニティだよ。」

私は今、ヴェーダの中にいる彼と連絡を取っているの。

「ティエリア『では…刹那達は本当にJUDAという組織に協力しているのか?』」

ネーナ「うん、そうだよ! 他にもビルドベースや地球防衛組、コ

スモクラッシャー隊や株式会社21世紀警備保障の広報二課、自由条約連合やプリベントーにチーム・アルゼナルとJ9…それと新生黒の騎士団か…。ははっ! トンデモない部隊だね!」

「ティエリア『…笑い事ではないだろう? 僕のスペアボディの完成もしばらく時間がかかる。それにELSの予測できない動き…把握しておかないとこちらも動きを見せられないぞ』」

ネーナ「うーん、ELSについては連邦軍の科学者達が調べているよ。…私が危険視しているのは拓哉達が追っている組織だよ…。全貌も見えないし、動きもあまり見せて来ない。拓哉に奴等を探してくれって頼まれているけど、正直お手上げなんだ!」

「ティエリア『拓哉…? ああ、君が協力している小田切 拓哉の事か。それにしても君が彼に手を貸すとは…人はやはり変わるモノだ』」

ネーナ「褒め言葉と受け取っておくよ?…まあ、拓哉と夏華ちゃんには生命を救われたからね…私も変わらないと」

「ティエリア『ネーナ・トリニティ…』」

ネーナ「それよりも! 他の組織の動きはどうなってるの!?!?」

私の言葉を聞いたティエリア・アーデは情報を提示して来た。

「ティエリア『まず手を結んでいる加藤機関とマリーメイア軍、それからゾギリアは各地で戦闘を行なっている。…と言っても加藤機関はマキナの捜索で主に戦闘行為には参加していない様だ。…ギシン帝国の残党は邪悪獣を引き連れ、各地で暴れている様だが、これを連邦軍が対処している』」

何処も戦闘状態だね…。

テイエリア『邪魔大帝国は動きを見せていないな。…次に宇宙だが…未だ宇宙帝国軍とウルガルは独自に地球を襲って来ている。…今は何とか守りきれているが、いずれ防衛戦も突破される』

ネーナ「うーん…連邦軍も地上の件でいっぱいっばいだからね…。このままじゃ本当にマズイね…。でも、ウルガルの方はMJPが新しい機動兵器を投入予定とか行ってなかったっけ？」

テイエリア『…ああ、確か名前は…アツシユだったな。MJPも今はパイロットを捜索中だそうだ』

パイロットを捜索中、か…。アツシユが投入されれば、戦況が大いに傾くから期待できるね。

テイエリア『取り敢えず僕が与えられる情報はここまでだ。引き続き頼むぞ、ネーナ・トリニティ』

ネーナ「まっかせて！」

敬礼と共に私はテイエリア・アーデとの通信を切った。

ネーナ「さてと、私も早くアイツ等の動きを探さないと…。じやないと、拓哉達が…報われないから…」

私は機体を操作し、動き出した…。

ー小田切 拓哉だ。

俺と夏華は早瀬 浩一達と共に街にいた。

道明寺「いや、それにしても社長と森次さん…太っ腹だよな！」
シズナ「そうやな。絵美ちゃんと早瀬が和解した記念にみんなでご飯食べて来いって言ってたしな！」

飛鳥「まあ、何人か来ていないけど…」

浩一「赤木さん達は資料纏め、タケルさん達は報告、森次さん達は仕事、ゼロ達や刹那さん達もそれぞれ用があるって言っていたよな？」

キッド「まあ、彼等の分まで美味しく頂くこうじゃないの」

剣児「そうだな！腹一杯食うぞ！」

鏡「頼むからある金の分にしてくれよ…」

仁「それにしても意外だなあ。拓哉兄ちゃんが参加するなんて」
イズナ「そうですね。拓哉さんも嫌がってませんでしたね」

拓哉「…夏華の保護者だ」

夏華「なっ!?？ほ、保護者って…私は子供ではありませんよ!?？」

絵美「まあ…絵美さんは目を離すと危ない事をしますからね」

翔子「正義感は強いけど、おつちよこちよいだからね」

衛「拓哉さんが心配する気持ちもわかるよ！」

夏華「う、う〜！」

皆から集中攻撃を受け、顔を真っ赤にする夏華。

ボウイー「あらあら、やっぱり夏華ちゃん心配じゃないの！」

お町「ふふつ、本当に素直じゃないわね」

拓哉「…揶揄われるのは好きではない」

アイザック「いいや、君はいい意味で変化している。その気持ちを大事にすればいい」

…変化、か…。

ノイン「それに拓哉はしっかりしている。保護者としては最適だろう」

カトル「ふふつ、今度は拓哉さんに集中砲火ですね」

…全く…。

拓哉「食事をするなら早く行くぞ」

俺は皆の集中砲火から逃げる様にその場から歩く。

夏華「り、リーダー!?？」

シズナ「あれは確実に逃げたな」

サリア「兎に角私達も早く行きましょう」

ヒルダ「そうだな」

一鷹「よーし、食うぞー！」

夏華達の俺の後を追った…。

? 「随分と変わったわね、小田切 拓哉君…。フフツ、まあ…そっ
ちの方が面白みもあるのよ」

俺達の事をつけていた者にも気づかずには…。

―石神 邦生だよ。

私は今、大塚長官とある事を話していた。

石神「行方不明者…ですか？」

大塚『はい。何でも最近、十代後半の者達が行方不明になる事件が多発しているのです』

行方不明ねエ：確かに少し気がかりだね。

大塚『犯人の実態がわからない今、石神社長にもご注意頂きたいのです』

…まあ、ウチにも十代後半の子達は沢山いるからねエ…。

石神「ご注意承りました。彼等の生命を任された身である事を再認識し、注意して見ます」

大塚『お願いします。では』

私は通信を切った…。

それにしても行方不明者、か…。まさか、拓哉君が探している組織が動き出した…？だとすれば、今変わりつつある彼にどの様な影響を与えるのか…。

全く…興味が尽きないね…。

―小田切 拓哉だ。

食事を終えた俺達はJUDAへ戻る事にした。

吼児「美味しかったね、お寿司！」

青葉「そうだな。なあ、デイオ？」

デイオ「…毎回思うが、お前は馴れ馴れしすぎるぞ」

青葉「何だよ!?俺達はバディだろ!?」

デイオ「プライベートまで踏み込んでくるなど言っているんだ」

青葉「何だと!?!?」

まゆか「あ、青葉さん…!」

アネツサ「静かにしてよね。街の中なんだから…」

奈須 まゆかとアネツサ・ロセツテイに止められ、渡瀬 青葉は引き止まり、ディオ・ウエインバーグは先に歩いていく。

青葉「おい、待てよディオ!…まったく、何なんだよアイツ!」

ボウイー「彼、今回のお誘いにも不参加だったよね?」

キッド「何か気負い過ぎてるっていうか、使命を抱え込み過ぎているな…。あれじゃいつ壊れてもおかしくないぞ」

ディオ・ウエインバーグ…。ゾギリアの影響で奴等を憎む様になっ
てしまったと聞く…。

アイザツク「まあ、彼や渡瀬 青葉君の状態はゆっくりと見よう」

仁「仲間なんだから仲良くすればいいのによ!」

お町「そう簡単なモノじゃないのよ?」

ノイン「特に青葉は過去から来ている…。受け入れるには時間がかかるだろう」

青葉「ディオ…何だよ…!」

確かに仲良くするというのは言葉で言うのは簡単だ…。しかし、受け入れるのに時間がかかるモノだ…。

女性「やめてください!」

…何だ?

突然、女性の嫌がる声が聞こえ、俺達はそこへ駆け出す。

声が聞こえた所に着くと二人の男が一人の女の腕を掴み、強引に引っ張っていた。

男性「だから、嫌がるなよ!」

男性2「大人しく俺達と来いって!」

女性「だから、嫌だと言っているじゃないですか!」

…成る程、これがナンパか。

後ろでは早瀬 浩一が動こうとしていたが…。先に俺が動かせてもらった。

拓哉「…おい」

俺が男達に声をかけ、男達が振り返ると同時に一人の顔面に拳を叩き込んだ。

ゴキツ、という音を上げながら、殴られた男の一人は吹き飛ぶ。

男性2「何だよ、お前!?？」

拓哉「…下らない事をするな」

男性2「この野郎…カツコつけてんじ「ねえよ!」

もう一人の男も俺に殴りかかってくるが、簡単に受け止め、関節技を与える。

痛がるもう一人の男の腕を離すと、男二人は覚えてろよ、という言葉を残して、走り去ってしまう…。

道明寺「ははっ、去り文句が古典的だな!」

青葉「それにしても流石は拓哉さん!」

息を吐いた俺はナンパをされていた女へ歩み寄る。

年齢的には俺とさほど変わらない様だ。

拓哉「…怪我はない様だな」

女性「あ、あの!ありがとうございます!」

拓哉「…礼を言われるほどでもない」

女性「な、何かお礼をさせてください!」

拓哉「…必要ない!」

彼女の下から立ち去ろうとした俺の腕を彼女が掴む。

女性「ダメです!お礼しないと私の気が済まないのですから!」

拓哉「…お、おい!」

夏華「あ、リーダー!」

俺の言葉を見無視し、女は俺の手を引き、連れ去られる形で引っ張られた…。

↓池波 夏華です。

リーダーが助けた女の人に引っ張られてしまいました…。

夏華「…むう!」

連れ去られるリーダーの後ろ姿を見て、私は頬を膨らしました。
お町「あらら？夏華ちゃん、嫉妬？」

夏華「ふえっ!?？」

シズナ「これは否定できひんな！」

絵美「フフツ、夏華さん可愛い」

夏華「や、やめてくださいいいいっ！」

私の叫び声が空にも響きました…。

兎に角…リーダーのバカ…！

ー小田切 拓哉だ。

俺は助けた女に連れられ、ソフトクリーム屋でソフトクリームを食べていた。

女性「ここでソフトクリーム美味しいんですよ！」

…味覚のない俺に言われてもな…。

女性「そういえば自己紹介がまだでしたね。私は天城あまぎ 梨花りかと言

います！」

拓哉「小田切 拓哉…」

お互い自己紹介をし、天城 梨花はソフトクリームを食べ終わる。

梨花「では、拓哉君と呼んでもよろしいでしょうか？」

拓哉「好きにすればいい」

梨花「私…本当に嬉しかったです。拓哉君に助けてもらって…あの人達…怖かったので」

恐らくこの反応ではナンパをされる経験がなかったのだろう。

梨花「どうして拓哉君は私を助けてくれたのですか？」

拓哉「…わからない…」

梨花「え？」

拓哉「わからない…気づけば、身体が勝手に動いていた」

何故…俺は彼女を助けたのだろうか…？

梨花「拓哉君は…優しいんですね」

優しい…？俺が…？

拓哉「…さあな」

梨花「実は恥ずかしながら私…拓哉君の事を一目見た時から…」

頬を赤らめ、モジモジしながら何かを言おうとする天城　梨花

…。

今、不思議と俺達の周りには人はいなかった。

梨花「壊したいと思ったの！」

拓哉「ツ…!?？」

痛みはないが、頬に何かが掠めた感触は覚えた。

頬に触れてみると、血が浅く流れていた。

拓哉「天城　梨花…何の真似だ？」

彼女から距離を取り、俺は彼女を警戒する。

すると、彼女は手に持ったナイフの刃部分についた俺の血を舐め取

りながら、クスクス、と笑った。

梨花「何の真似って…あなたを殺そうとしたのよ？」

これが…この女の本性なのか…!?？」

拓哉「お前は…何者だ？」

梨花「うーん…あのお方の部下なのよ」

あのお方…？

梨花「あなたが探している人…って言えばわかるかしら？」

な、何ツ…!?？」

拓哉「お前は…貴様は…！奴の仲間だというのか…!?？」

梨花「ええ、そうよ」

拓哉「何処だ!?？奴は何処にいる!?？」

梨花「そう簡単に教えると思う？」

拓哉「貴様アツ…！」

俺は天城　梨花に掴みかかろうとするが、首元にナイフを突きつ

けられる。

梨花「痛みを感じないのは知っているわ。でも…これで首を抉ると

どうなるかしら？」

拓哉「…！」

梨花「それにしても…あなたは群れるのが嫌いだと思っていたけれど…結構なお友達がいるのね」

早瀬 浩一達の事を言っているのか…？

梨花「あなたの目の前で…彼等を傷つけるのもまた面白くなりそうね」

拓哉「…アイツ等は関係ない！」

俺の反応を見て、彼女はニタリ、と笑う。

梨花「それじゃあ、あなたがあの場所にいたらダメでしょ？」

俺は…アイツ等についてはダメなのか…？俺がいれば、アイツ等が傷つく…。

梨花「それがわからないあなたではないでしょ？」

拓哉「俺は…！」

梨花「フフツ、池波 夏華ちゃんと二人になった時…また会いましょう」

拓哉「なっ…!??待て…！」

天城 梨花を捕まえようとしたが、逃げられてしまった…。

あの女は確実に来る…。ならば、俺のやるべき事は…！

俺はJUDAに戻り、夏華を連れ、石神 邦生、倉光 源吾、ス

メラギ・李・ノリエガというトップクラスの者達の前に立っていた。

倉光「それで…話とは何かな、拓哉君？」

拓哉「…突然で済まないが、俺と夏華はこの部隊から抜けさせてもらおう」

夏華「リ、リーダー!?？」

スメラギ「本当に突然ね…。理由を聞いてもいいかしら？」

拓哉「…俺の探していた奴の手がかりが掴めた…。それを探したい」

夏華「そ、それは本当ですか!?？」

夏華の言葉に俺は頷く。

石神「ほう、それは良かったね。何なら、私達も手伝おうじゃないか」

…それではダメなんだ…。

拓哉「必要ない。…元々俺は奴等の情報を集めるべく、この部隊に参加していたに過ぎない。…それとも俺の意志は無視されるのか？」
倉光「いいや。君の言った通り、君は元々のただの協力者だ。…君を引き止める権利は僕達にはないよ」

スメラギ「今までありがとうね、拓哉」

石神「また遊びにでも来てくれたら嬉しいよ」

拓哉「…世話になった。また会おう」

夏華を連れ、俺は社長室を出た。

夏華「それでリーダー…私達は何処へ向かうのですか？」

拓哉「兎に角、JUDAから離れる」

そう…出来るだけ遠く…。

俺達はデイスエイドに乗り、JUDAを後にした…。

第8話 変化する想い

JUDAを後にした俺達は飛び続けた。

…結構離れた様だが…。

夏華「もう随分、JUDAから離れましたね」

拓哉「済まないな、夏華…。お前もあそこに居たかったはずだ」

夏華「いいのです。…私はリーダーと共に歩むと決めたので」

…それでも寂しそうだな…。

まあ…当然か。

夏華「…！リーダー！複数の熱源体が接近してきます！」

夏華の言葉通り、量産型アルマと1機のアルマ、自由条約連合の基地で戦闘を行ったヴァリアンサー、それから赤のガンダムが現れた。

デミトリー「ほう、辺りの偵察へ来てみれば…」

ビゾン「噂の赤紫の機体か！」

加藤機関とゾギリア…。未だ手を組んでいたか…。

だが、あの赤のガンダムは何なんだ…？

サーシエス「へっ、何だっついていい！あの機体は敵なんだろう？だったら、倒すに限るぜ！」

夏華「擬似太陽炉搭載型のガンダム…!?？あの様な機体があるとは…！」

拓哉「迎撃するぞ、夏華。相手は見逃してはくれない」

夏華「で、でも…あれだけの数を私達だけでは…！」

すると、奴等に銃撃が襲った。

ビゾン「何だ!?？」

現れたのはアルケーガンダムドライだった。

拓哉「アルケーガンダムドライ…ネーナ・トリニティか」

夏華「ネーナさん！」

ネーナ「やつと見つけた！もう拓哉！連絡も無しに勝手にJUDAを離れて…探すのに苦労したんだからね！」

拓哉「…誰も頼んでいない」

ネーナ「ホント可愛くないなあ！」

拓哉「だが、手伝ってくれるならばありがたい…状況が状況なのでな」

ネーナ「良いよ！私もたたか…えっ？あ、あのガンダムは…!?？」

サーシエス「おっ？その声…あの三兄弟の妹か！生きていたんだな！」

ネーナ「お前は…アリー・アル・サーシエス!?？」

サーシエス「久しぶりだな！まだ兄貴達の後を追っていないかったとはな！」

ネーナ「許さない…！にいにいづを殺したお前だけは絶対に許さない！今度こそ私の手で…仇を取る！」

夏華「ど、どうしたのですか、ネーナさん!?？」

奴が…ネーナ・トリニティの兄二人を殺した男だったのか…。

デミトリ「サーシエス、盛り上がるのは勝手だが、勝手な行動は控えろよ」

サーシエス「わかっているっつての、旦那！」

拓哉「ネーナ・トリニティ…気持ちは分からなくもないが、落ち着

いて相手をしろ」

ネーナ「わかってるよ！あのガンダムだけは私にやらせて！」

拓哉「…いいだろう。だが、無理はするな」

ビゾン「今度こそ俺が奴等を討ち、ヒナの無実を証明させる！」

デミトリー「良き心掛けた、ビゾン・ジエラフィル。協力しよう」

ビゾン「ありがとうございます、デミトリーさん！」

…戦闘開始だ。

〈戦闘会話　ネーナVS初戦闘〉

ネーナ「誰かの為に戦う…か。何だか変な感じがするけど、悪くはないかも…。これも拓哉に生命を救って貰ったおかげだね！よし、やるよ！」

〈戦闘会話　拓哉VS初戦闘〉

拓哉「(天城　梨花…。この戦闘に奴も介入してくるのか…？だとすれば、此処でアイツの居場所を聞き出す…！)」

〈戦闘会話　夏華VS初戦闘〉

夏華「(リーダー…どうして急にJUDAを離れてしまったのでしょうか…？…いえ、理由など関係ありません！私には私の出来る事をするだけです！)」

戦闘から数分後の事だった。

突然、俺達が何度か戦った骸骨の様な量産機が複数現れた。

拓哉「…！」

夏華「あれは…！」

ネーナ「拓哉が探している人の所の量産機だね…」

量産機だけだと…？彼女は…天城　梨花は出てきていないのか…

？

サーシエス「何だ、アイツ等？」

デミトリー「あれが以前の戦闘でゾギリアも襲われた無人の量産機か？」

ビゾン「はい。…ですが、今回は奴らだけを襲う様ですね」

デミトリー「敵意を見せてこなければ結構。この状況を利用してもらう」

ネーナ「この状況…流石にマズイね…！」

夏華「どうしますか、リーダー!?!？」

この場にはいない天城 梨花の動きが気になる中…このままではこちらが確実に不利だ…!

ネーナ「…!待って、何か来るよ!?!？」

現れたのはプロトレマイオスとシグナスだった。

夏華「え…?!? 皆さん!?!？」

拓哉「何をしに来た…?まさか、俺達を追って来たのか？」

倉光「まさか、そんな事ないよ」

スメラギ「加藤機関のアルマの反応が出たから来ただけよ。そこにたまたまあなた達がいただけ」

倉光「そういう事だよ。さて、みんな出撃して」

倉光 源吾の指示に従い、皆が出撃してきた。

剣児「大丈夫かよ、拓哉!?!？」

タケル「俺達も加勢するよ！」

赤木「黙っていないなくなるなんて、水臭い事するなよ！」

浩一「俺達、少しの間でも一緒に戦った仲間じゃないですか！」

夏華「皆さん…！」

拓哉「…お節介な奴等だ…」

フェルト「待ってください！あそこにガンダムがいます！」

アレルヤ「姿がアルケーに似ているけど…一体…?」

ネーナ「やつほ!久しぶりだね、チーム・トレミーのみんな！」

刹那「その声は…ネーナ・トリニティ…!?!？」

ラッセ「どうしてお前が此処にいるんだ？」

スメラギ「それにそのガンダムは何?アルケーガンダムドライ…。」

スローネドライのデータを元に拓哉が開発に協力してくれたガンダムだよ。元々はイノベイドのリジエネって、人が作ってくれていたもの何だよ！」

アレルヤ「もしかして…拓哉の協力者というのは…」

拓哉「彼女だ」

ネーナ「…私は謝っても許されない事をしてきたのはわかってるよ。…でも、少しでも罪を償える様に拓哉と一緒に変わろうとしているの！だから…！」

刹那「それ以上は何も言うな」

ネーナ「刹那・F・セイエイ…」

刹那「ネーナ・トリニティ…お前もガンダムになろうとしている。人は変わる事が出来るのは今のお前を見て、理解できている。共に世界の歪みと戦うぞ」

ネーナ「うん！任せて！」

ビゾン「出てきたか！連合の新型！」

ディオ「アイツ…基地での戦闘の時にいたヤツか！」

青葉「雛の傍にいたヤツだな！」

ビゾン「お前達を捕獲し…ヒナの無実を証明する！」

青葉「無実…？何を言っているんだよ、お前…？」

ビゾン「お前が知る必要はない！」

森次「あのアルマはカグツチ…。社長の言っていた、三番隊隊長か」

浩一「アイツも…加藤機関の一人…！」

デミトリー「貴様が早瀬 浩一か。私は加藤機関施設部隊三番隊隊長…デミトリー・マガロフである」

浩一「俺の事を知っているのか！だったら返り討ちにしてやるよ！」

ロックオン「おい！あそこにいるのは…！」

ピーリス「ガンダム…!?!？」

サーシエス「久しぶりだなあ…ソレスタルなら！」

刹那「アリー・アル・サーシエス!?!？何故貴様が!?!？」

ロックオン「テムエは俺がトドメを刺したはずだ！」

サーシエス「ゾギリアの技術で戻ってきたんだよ！また戦争をやる
為にな！」

刹那「貴様はまだ争いを求めているのか！」

サーシエス「つたりめえだ！この新しいガンダム…ヤークトアル
ケーガンダムで今度こそお前等を殺してやるよ！」

刹那「貴様は…俺が断ち切る！」

ロックオン「地獄から巻き戻って来たんなら…俺が何度だって、撃
ち抜いてやるよ！」

ネーナ「アンタだけは…私が…！」

…戦闘再開だ。

敵機体を確実に撃墜していた時だった…。

アネツサ「艦長、未確認機が来ます！」

レーネ「敵の増援か!?!」

現れたのは桃黒の機体だった。

梨花「待たせて悪かったわね、拓哉君！」

その声は…！

拓哉「天城 梨花か…！」

梨花「その通り！そしてこの機体はリヴァイアサンよ。よろしくね
！」

夏華「こ、この方って…！」

仁「拓哉兄ちゃんが助けた姉ちゃんじゃねえか！」

キッド「どう言う事だ、拓哉？」

拓哉「…彼女は…俺の探している奴の部下だった」

シズナ「な、何やて!?!」

イズナ「それをわかっていて、拓哉さんに近づいたのか！」

山下「なんてヤツだ…！」

梨花「それにしてもダメじゃない拓哉君。私との約束を破っちゃ
…」

夏華「約束…？」

梨花「そう、約束。…じゃあ、それを破った拓哉君にはお仕置きし

ないよね。…勿論力で…！」

ケンジ「拓哉、良くはわからないが、彼女は君を狙っている気を付
けろ！」

拓哉「…わかっている。天城 梨花…貴様を倒し、奴の居場所を突
き止める…！」

戦闘再開だ…！」

〈戦闘会話 青葉VSビゾン〉

ビゾン「白いの！お前の所為でヒナは…！」

青葉「だから、雛に何があったってんだよ!?？」

ビゾン「黙れ！彼女の名前を気安く呼ぶな！」

青葉「意味わかんねえよ！とにかく、挑んでくるなら、容赦しない
からな！」

〈戦闘会話 デイオVSビゾン〉

ビゾン「今度は遅れを取らないぞ！」

デイオ「良い心がけだ。だが、意気込みだけで俺とブラディオンに
勝てると思うな！」

ルクシオンとブラディオンの攻撃でネビロスにダメージを与えた。

ビゾン「クソツ…！ヒナの無実を証明するチャンスなのに…！」

デミトリー「ビゾン・ジエラファイル！無実の証明などはいつでも出
来る！今は下がれ！」

ビゾン「りよ、了解…！」

ネビロスは撤退した…。

青葉「クソツ！勝手に恨んでおいて、結局雛については話さないの
かよ！」

〈戦闘会話 浩一VSデミトリー〉

デミトリー「早瀬 浩一…お前の腕がどれ程のモノか…試してやろう」

浩一「いいぜ。来いよ、加藤機関！悪は俺が倒してやる！」

〈戦闘会話 森次VSデミトリー〉

デミトリー「お前が森次 玲二か。お前を倒せば、JUDAを崩せるというモノだ」

森次「悪いが簡単に倒されるつもりはない。…逆に私がお前を倒してやろう」

ラインバレルはカグツチにダメージを与えた。

デミトリー「ふむ、ラインバレルの動きは見た…撤退する」

カグツチは撤退した…。

浩一「案外早く退いたな…」

森次「加藤機関も慎重に動いているのかも知れん」

〈戦闘会話 刹那VSサーシエス〉

サーシエス「久しぶりだな、クルジスのガキ！嫌、今はもう兄ちゃんだったか!?!？」

刹那「アリー・アル・サーシエス！何故、争いをやめない…!?!？」

サーシエス「愚問だな…戦争こそが俺の生きがいだ！それに戦争しなかつたら戦争屋の意味がねえじゃねえか！」

刹那「貴様は…歪みを正そうとしない…!?!ならば、俺が断ち切る！」

〈戦闘会話 ロックオンVSサーシエス〉

サーシエス「あの時の恨みを晴らしてやるぜ！」

ロックオン「もうテメエの顔を見るのはウンザリなんだよ、大人しく俺に狙い撃たれる！」

〈戦闘会話　　ネーナVSサーシエス〉

ネーナ「殺してやる…！兄い兄いズの仇…！」

サーシエス「おーおー、無邪気から怖い女になったな！それなら優しい俺が兄貴達の下へ送ってやるよ！」

ネーナ「地獄に行くのはアンタだ！アリー・アル・サーシエス！」

アルケーガンダムドライの攻撃でヤークトアルケーガンダムはダメージを受けた。

サーシエス「ハハッ！やっぱ戦争はやめられねえ！次はもつと楽しもうぜ！」

ネーナ「待て！逃すと思っているの!?？」

サーシエス「そう急ぐな！お互い生きてるんだ…。何度でも戦争を楽しめるだろう？」

そう言い残し、ヤークトアルケーガンダムは撤退した…。

ロックオン「アイツは生きている限り、戦争を続けるつもりだな…！」

刹那「奴との対話は不可能という事か…！」

〈戦闘会話　　拓哉or夏華VS梨花〉

梨花「さあ、そのディシエイドの力を見せて」

夏華「あなたは一体何者なんですか!?？」

梨花「だから、あの人の部下よ。…夏華ちゃん？」

拓哉「何者だろうと関係ない…！奴について、洗いざらい話してもらう…！」

梨花「無理」

俺達は天城 梨花のリヴァイアサンにダメージを与えた。

梨花「へえ…案外やるじゃない。でもね」

リヴァイアサンの装甲が…回復した…!??

赤木「ダメージが回復した!?？」

タケル「自己修復機能…!?？」

梨花「次はこちらの番よ」

デイシエイドはリヴァイアサンの攻撃を受けた…。

拓哉「クツ…！」

夏華「キヤアツ!?？」

ヒルダ「拓哉！夏華！」

梨花「それにしてもバカだよ、拓哉君って…。仲間など必要な
いって、言っておきながら、JUDAのみんなを守る為にみんなの下
を去るなんて」

サリア「え…！」

一鷹「何だって…!?？」

拓哉「…！」

夏華「り、リーダー…どういう事なんですか!?？」

梨花「言葉の通りよ。私が彼等を傷つけるって言ったの。すると、
彼はやめてくれて頼み込んできたから、みんなの下から離れろって
言ったら本当に離れるとはね」

夏華「それがあの方が言っていた約束…！」

アリス「拓哉さん…！」

赤木「拓哉、お前…！」

…。

梨花「それにしても…仲間、ね…。笑っちゃうよね！拓哉君は人を
殺そうとしているのに仲間を作るなんて、幸せにでもなろうとしてい
たのかな？」

拓哉「俺は…！」

梨花「あなたは私達やゾギリアなどと変わらないわ。…あなたは犯
罪者だもの」

拓哉「…」

そうだ…俺に仲間なんて…!

夏華「だから何なんですか!?!?」

…!夏華…。

梨花「ん?何かな、夏華ちゃん?」

夏華「確かにリーダーのしようとしている事は人殺し…犯罪です!

それでもリーダーはあなた達とは違います!」

梨花「何が違うと言うの?」

夏華「リーダーは…例え、人助けを断ろうとしても、必ず助け
てくれます!私達の願いを受け入れ、私たちを守ってくれました!例
え、世界がリーダーを拒もうとも私はリーダーを拒みません!私は…
リーダー…あなたとともに生きて行くと決めたのですから!」

拓哉「夏華…」

梨花「ふうん、いい具合に丸め込まれた様ね、夏華ちゃん。…ねえ、

JUDAの皆さん?こんな彼と一緒にいるのはウンザリよね?」

スザク「あなたは何を言っているのかな?」

青葉「ウンザリなんて…そんなワケあるかよ!」

仁「人殺しなのはダメな事だけど…拓哉兄ちゃんはいいい人だ!」

アイザック「例え、不器用でも…彼は誰かの生命を救っている」

刹那「そして、拓哉は…変わろうとしている!」

ネーナ「アンタに拓哉の何がわかるの!?!?私も拓哉に助けられたん
だから…!」

衛「僕やネーナさんがここにいるのは拓哉さんがいたからだ!」

浩一「拓哉さん!俺もみんなも…アンタを拒んだりしない!」

拓哉「お前達…」

梨花「…ハア、とんだ茶番ね。…だったら、良いわ。拓哉君…あな
たを此処で終わらせるわ!」

来る…!

夏華「リーダー!」

ロザリー「拓哉!」

拓哉「…全く、お前達は本当にお節介な奴等だ…。だが、感謝する」

山下「拓哉さん……！」

拓哉「そして、天城 梨花……お前にも感謝をしている」

梨花「何を感謝するの？」

拓哉「……俺は忘れていた様だ……。俺という人間の生き方を……。俺は自分のしたい様にする。誰がそれを否定しようとな俺はそれを貫く……それを邪魔するのなら……俺はその障害を潰す……それだけだ！」

夏華「リーダー……！」

拓哉「夏華……お前にも手伝ってもらおう。拒否権はない」

夏華「はい！では……行きましょう！」

拓哉「ああ……！」

俺達はリヴァイアサンに攻撃を仕掛けた……。

拓哉「天城 梨花……此処で終わらせる。息を合わせろ、夏華」

夏華「はい！デイスエイドのチェンジ連撃……スタートです！」

まずはデイスエイド・ソードのプライム・ソードでリヴァイアサンを何度も斬り裂き、空中で一回転しつつ、デイスエイド・ガンに変わる。

拓哉「お前の番だ、夏華」

夏華「はい！連射で追い込みます！」

二丁のプライム・ガンを連射し、リヴァイアサンにダメージを与えていき、プライム・マグナムによる銃撃をぶつけながら、デイスエイド・ソードに変わる。

夏華「リーダー……！」

拓哉「ダガーで……！」

プライム・ダガーで斬り裂いていき、リヴァイアサンを蹴り飛ばす。

夏華「今度は射撃の時間です！」

再び、デイスエイド・ガンへと戻り、プライム・スナイパーライフルで蹴り飛ばされたリヴァイアサンを撃ち抜いた。

夏華「トドメはお任せします、リーダー……！」

拓哉「任せろ……！」

デイスエイド・ソードへと戻り、プライム・バスターソードを構え、

リヴァイアサンへ接近し…大きく斬り裂いた…。

梨花「キヤアアアツ!!?」

斬り裂かれたリヴァイアサンは大ダメージを受ける。

夏華「良い連携でしたね!」

拓哉「騒ぐ程のモノでもない…」

大ダメージを受けたリヴァイアサンは後方へ大きく吹き飛ばされる。

梨花「これが…デイスエイドの力…!!?」

身堂「ソードとガンの両方を瞬時に切り換えるデイスエイドだけの連携攻撃…」

門子「やるじゃねえか、アイツ等!」

柳生「おそらく、信頼しあっている拓哉君と夏華ちゃんだからこそ出来る連携なのね」

梨花「フフフ…やはり、あなた達は面白いわね。今度もまた遊びましょう」

拓哉「待て…奴は何処にいる…!!?」

梨花「いずれ会えるわ。…あなた達が戦っていれば…ね」

そう言い残し、リヴァイアサンは撤退した…。

夏華「に、逃がしちゃいました…!」

天城 梨花…。彼女の様に奴には何人もの部下がいるという事か…。

倉光「ふう、何とか終わったか…」

剣児「動いたら腹減っちゃったぜ」

つばき「あれだけ食べたのにまだお腹空いてるの!!?」

鏡「お前の胃袋はブラックホールだな」

森次「小田切…お前達はどうするんだ?」

拓哉「…お前達に話がある。…JUDAへ戻らせてもらう」

スメラギ「ええ、きつと石神社長も喜ぶわ」

俺達はそれぞれ帰艦し、JUDAへ戻った…。

ーネーナ・トリニティよ！

私はトレミーのみんなと話していた。

刹那「そうか。お前はヴェーダにリンクして、情報を拓哉に手渡し
ていたのか」

ネーナ「うん。そうだよ！あの時、死んだと思ったんだけど、拓哉
に助けてもらったお礼にね！」

ロックオン「だから、拓哉は俺達並みの情報を持っていたんだな」
ネーナ「…後、私もこれからはみんなと一緒に戦う事になったんだ」
アレルヤ「…」

刹那「…そうか。よろしく頼む」

ネーナ「刹那…」

刹那「お前も立派なガンダムマイスターなのだからな…」

ネーナ「うん！ありがとう！」

いずれ、ルイスって子の所にもいかないとね…。

謝っても許されないだろうけど…罪と向き合うために…。

J U D Aに戻った俺と夏華は社長室で石神 邦生、倉光 源吾、ス
メラギ・李・ノリエガと話をしていた。

石神「やあ、おかえり、拓哉君！」

拓哉「…」

何時迄も元気な男だな…。

俺は今知っている天城 梨花についての事を話した…。

スメラギ「では、結局…あなたが探している人物についての情報は
何も得られなかったのね？」

拓哉「ああ…」

倉光「それで、拓哉君？君はこれからどうするんだい？」

拓哉「…お前達にはまた借りを作ってしまった…。なので暫く、ま
たお前達に協力したい…構わないか？」

石神「勿論、構わないよ！君達の戦力ならば問題なしね。では、こ
れからもよろしくね、拓哉君！夏華ちゃん！」

夏華「よろしくお願いします！」

俺と夏華は社長室を出た…。

夏華「また此処に戻ってきましたね」

拓哉「…夏華。お前にも感謝している…」

夏華「え…？」

拓哉「お前のおかげで目が覚めたんだ」

夏華「そ、そうですか！えへへ、何だか照れますね…！あ、そうだ
！」

何かを思いついた様に夏華が提案をしてきた。

夏華「今の私達なら、私がメインでもあの連携攻撃は出来ますよね
！」

拓哉「恐らくな」

夏華「では、名前が必要ですね…。うーん…：ソードとガンなので…
コンビネーション・S&G…：私がメインの時はコンビネーション・G
&Sというのはどうです!?!？」

…ネーミングセンスが全くないな。

拓哉「ダサいな…」

夏華「良いんです！格好いいのですから！」

…まあ、いいか。

拓哉「…お前の好きにしろ」

夏華「はい！勝手にします！」

俺にはもう忘れられない思い出がたくさん出来た…。だからこそ、
俺はこの思い出を守っていく…。いずれ、奴を見つけ…俺自身が狂っ
てしまう前に…。

分岐シナリオ1

―天城 梨花よ。

私は今、組織の基地に戻ってきたわ。

? 「梨花：お前、小田切 拓哉に負けたみたいじゃねえか」

梨花「本当に私が負けたと思っっているのだったら、あなたは見た目通りの脳筋ね。恭介君」

柿沢 恭介君…。私と同じあのお方の部下よ。

恭介「何!?!」

梨花「アレはワザと負けてあげたの。すぐに倒してしまったら面白くないでしょう?」

恭介「結局お前はそれかよ…。つたく、ちまちま回りくどいやり方せずに力で捻じ伏せたら良いんだよ」

梨花「それでは面白くないモノ。それに、力任せのあなたと一緒にしないで」

私は恭介君に背を向け、歩き去った…。

梨花「でも確かに：彼の本気を想像すると：胸が昂ってくるわ!」
ワクワク感を何とか抑えつつ、私は前回傷ついたリヴァイアサンの修理に参加する事にした…。

―小田切 拓哉だ。

俺と夏華は石神 邦生に呼び出され、社長室にいた…。

他には石神 邦生本人と、スメラギ・李・ノリエガ、倉光 源吾、ゼロ、飛鳥 ケンジ、森次 玲二が集まっていた。

倉光「宇宙でのウルガルの動きが活発になった…?」

石神「そうという通信をGDFの上の人から受けたのですよ」

ケンジ「GDF：国連から発展され、結成された軍事組織ですね?」

石神「そうです。最近になって、ウルガルの進行が活発となり、やはり、彼等も手を焼いている様です」

ゼロ「そこで我々にも協力要請を仰いで来た…というワケか」

倉光「それは良いのですが…こちらでもゾギリアの動きも活発になり、今、新国家日本は大きな痛手を受けているのですよ」

森次「マリーメリア軍や加藤機関という組織の協力を得て、元々大きな力を持っていたゾギリアの戦力が更に増した…。それは厄介ですね」

スメラギ「このまま彼らに勢いをつかせると…世界を更に恐怖で包み込む事になってしまいます」

ゼロ「とは言いつつもこちらの日本は安全というワケでもない。…それにマキナの件もある」

夏華「何処の地域も問題だらけですね…」

ケンジ「こんな事では我々の手が間に合わない…!」

石神「そうなると思ひ、各代表の皆様と話し合いを行った結果、一度部隊は三つに分けようと思っているのです」

拓哉「…この状況で部隊を分ける事は戦力の低下に繋がらないか？」

スメラギ「拓哉の言い分も最もだけど、一箇所を守り切っても別の場所を狙われたらそれはそれで終わりなの」

ケンジ「それで…どう部隊を編成したのですか？」

石神「まずは日本残留部隊ですが…これをJUDA特務室、広報二課の皆さん、J9、ビルドベースです」

ここは主に日本の防衛とマキナの回収部隊という事か。

石神「次に新国家日本へ向かう部隊ですが…これをシグナスを母艦に自由条約連合、新生黒の騎士団、地球防衛組、コスモクラツシャール隊、チーム・アルゼナルです」

ここは新国家日本へ向かい、ゾギリアの進行を食い止める部隊という事か。

石神「最後に宇宙へ向かう部隊ですが…これをプロレマイオスを母艦にソレスタルビーイング、プリベンター、それからファフナー2機と考えております」

ここは宇宙へ向かい、ウルガルの猛威を防ぐ部隊という事か。

ゼロ「なるほど、見事にバラける事が出来たな」

…だが、違和感がある。

夏華「アレ…？デイスエイドとラツシユバードの名前が上げられませんでした、私達は何処へ向かうのですか？」

石神「君達は戦力的に何処でも行けると思い、君達に判断を委ねろうと思っただよ。ちなみに一鷹君達に聞いた所、判断は拓哉君に任せる様だよ」

三つの部隊か…。

夏華「確か、日本には早瀬さん達特務室の方々と赤木さん達広報二課の方々、J9の方々、剣児さん達ビルドベースの方々…新国家日本には青葉さん達自由条約連合の方々、ゼロさん達新生黒の騎士団の方々、仁君達地球防衛組の皆さん、タケルさん達コスモクラツシャー隊の方々、そしてサリアさん達チーム・アルゼナルの方々…宇宙には刹那さん達ソレスタルビーイングの方々、ノインさんとカトルさん、翔子さんと衛さんですね…」

拓哉「では、俺は…」

※此処からは分岐です。

〈日本ルート選択〉

拓哉「奴が日本にいる可能性も考慮し、俺達は日本に残る」

石神「おっ！君達がいれば、百人力だよ！よろしくね！」

ゼロ「では、皆からは私から報告しておこう」

ケンジ「頼んだぞ、ゼロ」

森次「皆さんの無事を祈りつつ、今日はもう解散にしましょう」

そのまま俺達は解散した…。

「妃魅禍だ。」

妃魅禍「銅鐸を持つモノ達が動き出した様だ……」

阿磨疎「へっ、それはいい！ジীগの奴を倒すチャンスだ！」

壬魔使「今度こそ、我等の力を奴等に教えてやる！」

壱鬼馬「落ち着け、お前達……して、妃魅禍様……如何なされるのですか？」

妃魅禍「無論、奴等を潰し、銅鐸を手に入れる……必ずこの手で……！」

？「ならば、俺達も協力しよう」

何……？

壬魔使「何奴!?？」

妃魅禍「オロチ衆の者か……」

阿磨疎「オロチ衆だと!?？」

ツバサ「俺達も動き始める……。ならば、手を組むのが妥当だろうか？」

妃魅禍「良いであろう、オロチの者よ……」

ふん、精々馬車馬の如く扱ってやろう……。

【このルートに以下の機体とパイロットが編成されました】

- ・ 鋼鉄ジীগ／剣児
- ・ ビッグシューター／鏡
- ・ ビルドエンジェル／柳生
- ・ ダイガード／赤木
- ・ ブライガー／キッド
- ・ ラインバレル／浩一
- ・ ヴァーダント／森次
- ・ ハインド・カインド／山下
- ・ デイスイープ／シズナ
- ・ ラツシュバード／一鷹
- ・ デイシエイド／拓哉

〈新国家日本ルートを選択〉

拓哉「奴の動きがわからない以上、止まっても仕方がない。俺達も新国家日本へ向かう」

倉光「了解だ。よろしく頼むよ、拓哉君」

ゼロ「では、皆からは私から報告しておこう」

ケンジ「頼んだぞ、ゼロ」

森次「皆さんの無事を祈りつつ、今日はもう解散にしましょう」
そのまま俺達は解散した…。

ーC・C・だ。

私は今、ジェレミアが埋葬したルルーシユの場所を探していた…。

C・C。「全く、ジェレミアの奴…どれ程遠くにルルーシユの遺体を埋めたんだ…?」

歩き疲れ、近くの岩に腰掛ける。

ウオズ「君がC・C・君…かな?」

C・C。「誰だ?」

突然、本を持った男に話しかけられ、私は立ち上がると同時に身構えた。

ウオズ「私はウオズ。君に忠告しに来たんだ」

C・C。「忠告…?」

ウオズ「君の愛しの魔王の身体を狙う者がいる」

C・C。「何…ルルーシユを…?」

ウオズ「まだ動きは見せていない様だが、君も気をつけたまえ。…では」

C・C。「おい待て!」

私の制止も聞かず、ウオズという男は姿を消した…。

C・C。「ルルーシユ…」

ルルーシユは…死んでも世界にかき乱されると言うのか…!

【このルートに以下の機体とパイロットが編成されました】

- ・シグナス／倉光
- ・ゴッドマーズ／タケル
- ・コスモクラッシャー／ケンジ
- ・クレオパトラ／サリア
- ・テオドーラ／ヒルダ
- ・グライブ　ロザリー・カスタム／ロザリー
- ・ハウザー　エルシャ・カスタム／エルシャ
- ・ハウザー　クリス・カスタム／クリス
- ・ランスロット・アルビオンゼロ／スザク
- ・トリスタン／ジノ
- ・ルクシオン／青葉
- ・ブラディオオン／ディオ
- ・ベリルコマンダー／リー
- ・ライジンオー／仁
- ・ラツシユバード／一鷹
- ・デイシエイド／拓哉

〈宇宙ルートを選択〉

拓哉「奴が宇宙へ上がっている可能性を考慮し、俺達も宇宙へ上がる」

スメラギ「わかったわ。頼りにしているわね、拓哉」

ゼロ「では、皆からは私から報告しておこう」

ケンジ「頼んだぞ、ゼロ」

森次「皆さんの無事を祈りつつ、今日はもう解散にしましょう」
そのまま俺達は解散した…。

ーゾリグだ。

このままではウンディーナ基地が落とされるのも時間の問題か…

！

地球のJUDAへは協力要請を出したが…！

スミス「このままではウンディーナ基地は全滅です！UPI軍も撤退すべきです！今の戦力ではウンディーナ基地は守りきれません！

全員無駄死にしろと!?!？」

ゾリグ「落ち着け！」

スミス「…ご決断をお願いします、長官！」

ゾリグ「…撤退する。UPI軍もウンディーナ基地を放棄する。直ちに撤退作戦へ移行せよ！」

スミス「兵の補充をお願いします」

ゾリグ「わかってる…シモン！」

作戦室に一人の男が入って来た…。

ゾリグ「紹介する。特務機関MJPのシモン司令だ」

スミス「MJP…？」

シモン「…」

どうか…彼等の力で戦況を変えられる事を祈っている…！

【このルートに以下の機体とパイロットが編成されました】

- ・ プトレマイオス2・改／スメラギ
- ・ ガンダムサンドロック改／カトル
- ・ トーラス／ノイン
- ・ ダブルオークアンタフルセイバー／刹那
- ・ ガンダムサバーニャ／ロックオン
- ・ ガンダムハルト／アレルヤ
- ・ アルケーガンダムドライ／ネーナ
- ・ マークゼクス／翔子

・マークフユンフ／衛
・ラツシユバード／一鷹
・デイシエイド／拓哉

新国家日本ルート

第9話 迷える再会

―小田切 拓哉だ。

新国家日本に着いた俺達は首相の扇 要と補佐の玉城 真一郎と話を始めようとしていた。

倉光「初めまして、扇首相。僕はシグナス艦長、倉光 源吾大佐です」

扇「話はゼロから聞いています。新国家日本の首相、扇 要です」

玉城「補佐の玉城 真一郎だ！」

ゼロ「扇首相、守備はどうだ？」

扇「そうだな…。かなりの地域をゾギリア軍にやられてる。一応、藤堂さん達やブリタニアの兵士達が進行を食い止めてはくれているが…」

ジノ「時間の問題…ってワケですか…」

玉城「カレンがツツジ台って所に行っちゃまって、戦力が下がっているからな…」

ゾギリア：世界の覇権を握りつつあるという事か…。

ゼロ「そういえば、ナナリー様は？」

玉城「日本で藤堂さん達と合流して、民間の飛行機でこっちに向かっているぜ」

青葉「何だ、ブリタニアの皇女様を見れるチャンスだったのに…」

仁「ガツカリだぜ…」

扇「いずれ会う事が出来るさ」

ナオト「でも、何でまた民間の飛行機に？」

アキラ「うん。ブリタニアの皇女様なら専用のジェット機とかあると思うけど…」

玉城「何でも、民間の人と交流を深めたいらしいぜ」

ジノ「あの方らしいですね」

扇「それに藤堂さん達と共に旧ミスルギ皇国のある方が護衛についているから安心できる」

サリア「旧ミスルギ皇国の？」

ヒルダ「誰だ一体……？」

ミスルギ皇国は過去の事件で事実上壊滅したと聞いたが……。

扇「それにコーネリア様とギルフォード様もKMFで護衛についているから大丈夫だ」

ケンジ「ブリタニアの魔女が護衛についているなら、安心だな」

ミカ「では、私達はナナリー様が着くまで観光でもしましょうか」
クリス「賛成！」

ロザリー「買い物に行こうぜ、クリス！」

エルシャ「あらあら、はしゃいじゃって」

俺達は街へ観光を始めた……。

ーナナリー・ヴィ・ブリタニアです。

私は今、民間の飛行機で新国家日本に向かっています。

千葉「ナナリー様、お疲れではないですか？」

ナナリー「大丈夫ですよ、千葉さん」

藤堂「何かあったら遠慮なく言ってください」

ナナリー「はい！藤堂さん！」

シルヴィア「少しいいですか、ナナリーさん？」

あ：護衛を引き受けてくれたシルヴィア・斑鳩・ミスルギさんですね。

ナナリー「何でしょう？」

シルヴィア「あなたのお兄様……逆賊皇帝だったルルーシュ・ヴィ・ブリタニアという方はどの様な方だったのですか？」

逆賊皇帝……あのゼロ・レクイエムの真相を知らない方は未だお兄様は魔王と罵られています。

真相を知る藤堂さん達も視線を強めますが、私が笑いかけ、彼等は

領きました。

ナナリー「逆賊皇帝となる前のお兄様は…とてもお優しいお方でしたよ。足が動けなくなった私を気にかけてくれました」

シルヴィア「そう、ですか…」

ナナリー「シルヴィアさんも前は車椅子に乗っていたと聞きましたか…」

シルヴィア「…いえ。実は随分と前に歩けていたんです。ですが、私は自分の地位に酔いしれ、誰かを頼る事ではか生きる事が出来なかつたんです。…そのせいでお姉様を傷つけてしまいました」

ナナリー「…それでも、今のシルヴィアさんは自分の足で…自分で物事を考えられる様になりました。凄いですね、シルヴィアさんは！」

シルヴィア「…ふふつ。ありがとうございます、ナナリー様」

フィオナ「あ、あの…ブリタニア皇女のナナリー様ですよね？」

ナナリー「そうですが…どなたでしょう？」

フィオナ「申し訳ありません！私はフィオナ・ヴェインバーグと申します。この機にナナリー様がお乗りになると聞いて…お会いしたかったのです」

ナナリー「そうですか！初めまして、フィオナさん。私がナナリー・

ヴィ・ブリタニアです！」

フィオナさん…この方も車椅子に…。

シルヴィア「あなたも足に怪我を…？」

フィオナ「過去にゾギリア軍の攻撃の後遺症なのです…。お母様も失ってしまい…その事で責任を負った兄には気負ってしまう様になりました…」

この方のお兄様も…。

シルヴィア「そう…フィオナさん。何か困った事があったら言つてね」

ナナリー「力になりますよ」

フィオナ「ありがとうございます！」

藤堂「(未来は彼女達のモノだ…。その道を作ってくれたルルー

シユの分まで我々が手を尽くすしかない」

すると、飛行機が音を上げて、揺れました。

千葉「何だ!?!?」

藤堂「これは…外からの攻撃…!?!?」

ゾギリア軍が攻めてきたという事なのですか…!?!?」

―小田切 拓哉だ。

街を観光していた俺達だったが、ナナリー・ヴィ・ブリタニア達が乗る飛行機がゾギリア軍に襲われているという通信が来たのでシグナスに戻った。

飛鳥「ナナリー様達がブリタニアに襲われているって本当ですか!?!?」

倉光「うん。SOSも受信したよ」

ロゼ「民間人にまで手を出すなんて…ゾギリアは…!」

倉光「これより僕達は先に先行しているコーネリアさんと協力する為に向かうよ」

リー「了解!」

夏華「どうして彼等は簡単に生命を奪えるのでしょうか…?」

ディオ「それがゾギリアだ。おい、青葉。また勝手な事はするなよ。お前の言う雛という女が出てきてもな」

青葉「だけど、雛は…!」

ディオ「ゾギリアは敵だ!」

青葉「雛は敵じゃない!」

睨み合う渡瀬 青葉とディオ・ヴェインバーグ…。

拓哉「言い合うのは勝手だが、後にしろ」

ディオ「はい…」

青葉「何だよ…! 拓哉さんの言う事は素直に聞きやがって…!」
俺達は出撃の準備をした…。

第9話 迷える再会

「コーネリア・リ・ブリタニアだ。

まさか、私が護衛する機がゾギリアに狙われる事になるとは…！」

ギルフォード「姫様！自由条約連合にはSOS信号を送りました
！」

コーネリア「了解した。これ以上、ゾギリアの好きにはさせん！」

マルガレタ「連合側の飛行機を見つけられて、一石二鳥です。アレを餌におびき出せば、新型2機も出てくるでしょう」

ギルフォード「あのヴァリアンサー…親衛師団か…！」

コーネリア「何故奴らが狙ってくるかは知らないが…罪もない民間人に手を出すと言うのなら、相手をするしかない！ギルフォード、お前は私の指揮下に入ってもらおうぞ」

ギルフォード「了解しました！」

コーネリア「行くぞ、ゾギリア！いつまでも貴様達の好きに出来ると思うな！」

私は戦闘を開始した…。

〈戦闘会話　コーネリアVS初戦闘〉

ギルフォード「姫様！クインローゼスの調子はいかがですか？」

コーネリア「いい調子だ。では、ギルフォード。我々の連携をゾギリア共に見せてやるとしよう」

ギルフォード「了解！」

コーネリア「ゾギリア…！見せてやるぞ、ブリタニアの魔女の實力を…！」

戦闘開始から数分後の事だった…。

ギルフォード「姫様……！複数の機体が接近してきます！」

ギルフォードの言葉通り、複数のヴァリアンサーと指揮官機か……！

マルガレタ「アルフリード中佐……！部隊の展開が遅いではないですか！」

アルフリード「申し訳ありません、マルガレタ特務武官」

タルジム「あの女…… 行政局から派遣されて来たからって威張りやがってよ……」

ラーシャ「今回の命令もアルフリード中佐としては拒否したかったんだらうけど……」

マルガレタ「では、手筈通りに……！」

アルフリード「…… 最後に確認します。我々が邪魔者を叩けば、あの民間機を無血解放させる事も可能です」

マルガレタ「これは行政局の決定です。今後の戦略を考えれば、あの民間機を狙う事は無意味とは言えません。恐怖により、後の戦略を円滑にする……。そこそが最小の犠牲で最大の効果を発すると行政局は判断したのです」

アルフリード「……了解」

ギルフォード「此処で敵の増援とは……！」

コーネリア「心配するな、ギルフォード。……どうやら来たようだ」
白い戦艦が現れた。……アレがシグナスか。

ー小田切 拓哉だ。

どうやら、コーネリア・リ・ブリタニア達が食い止めてくれていたようだな。

俺達が出撃した。

スザク「無事か？コーネリア中将」

コーネリア「無論無事だ。それより協力感謝するぞ、ゼロ」

ジノ「あの民間機にはナナリー様も乗っていますからね……。必ず守り抜いてみせます！」

コーネリア「連合の皆も感謝します」

倉光「いえいえ、ゾギリアの悪行を見逃せないのは僕達も同じですから」

ディオ「…！」

ブラディオオンが民間機を見ている…？

青葉「どうした、ディオ？」

ディオ「何でもない…。それよりも人の心配をしている場合か？」

青葉「何だよ!?？せつかく、心配してやったのにその態度は!?？」

ディオ「誰が心配しろと言った？」

青葉「何だと!?？」

ケンジ「いい加減にしろ！こんな時まで喧嘩をしている場合か！」

ディオ「…兎に角、ゾギリアの好きにはさせん…！」

ブラディオオンが前に出た…？

青葉「アイツ…勝手な事しやがって！」

続いて、ルクシオンも…あの二人は…。

タケル「落ち着くんだ、二人とも！」

一鷹「アレはもう意地の張り合いですよ！」

スザク「仕方ない…。各機、ルクシオンとブラディオオンに気をつけ

ながら戦え！」

アリス「了解しました！」

仁「それにしてもいつもと違うヴァリアンサーがいるぜ？」

倉光「アレはゾギリア親衛師団のものだね」

青葉「その親衛師団ってのは何なんですか？」

リー「ゾギリアの行政局…。つまり、政治上のトップが直接管理す

る戦力だ。これまでに戦った国防軍とは別管轄だ」

青葉「兎に角敵には変わりないんだろ？やってやるぜ！」

戦闘開始だ…。

〈戦闘会話 青葉VS初戦闘〉

青葉「ディオの奴…どうしてそこまでゾギリアの事を…？…いや、

考えるのは後だ！民間機は俺が守る！」

〈戦闘会話　　ディオVS初戦闘〉

ディオ「あの民間機に乗っているのは……！何としてでも守り抜かなければならない……！ゾギリアにはもう何も奪わせない！」

〈戦闘会話　　スザクVS初戦闘〉

スザク「待っていてくれ、ナナリー……！君は必ず僕が守る……！」

親衛師団のヴァリアンサーにダメージを与えた。

マルガレタ「クツ……！此処で不覚を取るとは……！」

アルフリード「このままでは危険です。退いてください、マルガレタ特務武官殿！」

マルガレタ「まだです！私はまだ……！」

青葉「よし……一気に押せ押せだ！突っ込むぜ！」

ディオ「待て、青葉！迂闊に出るな！」

ルクシオンが突っ込むと、そこに伏兵のヴァリアンサーが数機現れた。

青葉「げっ！待ち伏せかよ！」

ディオ「何をやっている!?？」

ルクシオンのカバーをするべく、ブラディオンもルクシオンに並ぶ。

夏華「ディオさん！」

ヒルダ「馬鹿、お前まで敵の包囲網に入ってどうするんだよ!?？」

マルガレタ「これはチャンスだ……！各機、新型二機を攻撃しろ！」

奴等……！ルクシオンとブラディオンに集中攻撃を……！

青葉「うわっ!?？」

ディオ「くっ……!?？」

タケル「青葉！ディオ！」

青葉「こいつ等の狙い……俺達なのか！」

ディオ「くっ……！俺達は罠にはまったのか！」

ジノ「後退しろ、二人共！」

吼児「それにこれ以上、カップリングを使うのは危険だよ！」

青葉「だけど、カップリング無しでこれだけの敵と戦うのは……！」

ディオ「泣き言を言っている暇があったら、一機でも多く敵を落とせ！」

青葉「簡単に言うなよ！」

ディオ「諦めるな、渡瀬 青葉！お前はその程度の男だったのか？！」

青葉「！」

ディオ「お前はバカだ！それも救いようのないな！だが、自分で決めた事を曲げるような、そんな男ではなかったはずだ！生きて元の世界に帰りたいのならさっさと戦え！このウスノロ！」

青葉「ディオ……。てめえ……。！言わせておけば、調子に乗りやがって！お前が、そんな事言える立場かよ?!?!」

ディオ「何っ?!?!」

青葉「偉そうな事言っておいてまんまと罠にはまってんじゃねえかよ！結局、お前も俺と同レベルって事だな！」

ディオ「言うに事欠いて……。！さっきまでほとんど諦めかけていたくせに！」

青葉「煩えよ、このガミガミ野郎が！」

ディオ「このウスノロのメソメソが！」

青葉「俺がウスノロかどうか、その目で確かめてみやがれ！」
ディオ「出来るものならやってみろ！」

二人は喧嘩をしながら、隊長機以外の敵機を落としました。

一鷹「あれだけの敵をあつという間に……。！」

飛鳥「あの二人……。！ケンカしながら敵を……。?!?!」

仁「凄えぜ！青葉兄ちゃんもディオ兄ちゃんも！」

拓哉「連携が取れている……」

ディオ「やるじゃないか、ウスノロのメソメソ！」

青葉「まだまだだ、ガミガミ！」

マルガレタ「ひ！」

ルクシオンとブラディオンは隊長機に接近した。

青葉「行くぞ、ルクシオン！コネクティブ・ディオ！」

ディオ「アクセプション！俺の指示に従え、青葉！」

青葉「黙ってる、ディオ！」

ディオ「黙るのは、そちらだ！」

青葉&ディオ「うおおおおおっ！！？」

マルガレタ「いやあああつ！！？」

ルクシオンとブラディオンの攻撃に隊長機は吹き飛ぶ。

マルガレタ「わ、私は、こんな所で終わるわけにはいかない…！」

どうやら、隊長機は撤退した様だな…。

レーネ「艦長、これは…」

倉光「うん。どうやら心配する必要はないみたいだね」

アルフリード「前線で指揮を執るという熱意は買いますよ、特務武官殿。ですが、戦場には戦場の流儀があるので。後はお任せください」

ディオ「…おい、メソメソ。やれば出来るじゃないか」

青葉「うるせえ、ガミガミ」

ディオ「残りの敵を倒すぞ！」

青葉「お前に言われなくてもやってやる！」

戦闘再開だ。

〈戦闘会話 青葉VSアルフリード〉

アルフリード「君は随分と腕を上げた様だな」

青葉「当たり前だ！いつまでも素人であるつもりはないからな！」

アルフリード「そうか。ならば、教えてやろう。上には上がいると」

青葉「俺だって教えてやるよ！上の人間が追い抜かれる悔しさをな
！」

〈戦闘会話 デイオVSアルフリード〉

ディオ「アルフリード・ガラントか…！」
アルフリード「新型の片割れ…。君の方が操縦技術を上と見た」
ディオ「流石だな。だが…それを分かったところで俺達を止められると思うな！」

〈戦闘会話　コーネリアVSアルフリード〉

コーネリア「お前がアルフリード・ガラントか…！」

アルフリード「コーネリア・リ・ブリタニア…。ブリタニアの魔女と戦える日が来ようとは…」

コーネリア「私の事も把握済みか…。ならば、これ以上の言葉は不要だな？」

アルフリード「勿論だ。早速始めるとしよう！」

ルクシオンとブラディオンの攻撃でアルシエルはダメージを受けた。

アルフリード「不本意な作戦とはいえ、失敗は認めなくてはならない…。この借りはいずれ返させてもらおうぞ」

アルシエルも撤退した…。

コーネリア「終わったな…」

アネツサ「敵機の増援もありません」

青葉「…ディオ」

ディオ「何だ？」

青葉「助かったよ。俺のカバーに入ってくれて」

ディオ「気にするな。お前を止めるのは俺の役目だ」

倉光「兎に角、みんな。民間機が千歳基地に着くまで護衛よろしくね」

リー「了解！」

この後、俺達は民間機が千歳基地着陸するまで護衛をした…。

―渡瀬 青葉だ。

青葉「どうやら、無事に護衛は完了した様だな。なあ、ディオ？」
ディオ「…」

ディオは俺に言葉を返さず、ブラディオンから降りて、民間機に向かった。

青葉「おい、ディオ!?!?」

俺もその後を追うと民間機の入り口に車椅子に乗った少女がいた。

フィオナ「ディオ!」

ディオ「フィオナ!」

見た事もないディオの嬉しそうな表情…あの子、何者なんだ…?

フィオナ「やつぱり、あのヴァリアンサーに乗っていたのはディオ
だったのね!」

ディオ「ああ!」

もしかして…ディオの…。

青葉「妹…?」

貞道「ディオ、何をしている?」

フィオナ「あ…お父様…」

ディオ「…!?!?」

フィオナって子の後ろに男の人が…?

貞道「お前のするべき事はこんな所で油を売る事ではないはずだ」

ディオ「…」

青葉「お父さん…?」

ディオ…お前に何があつたんだよ…?

―小田切 拓哉だ。

俺達はコーネリア・リ・ブリタニア達と話をしていた…。

コーネリア「改めて…協力感謝するぞ、ゼロ。お陰で民間機を守る
事が出来た」

ゼロ「民間人を守るのは当然の事だ。礼には及ばない」

コーネリア「今日から私達も皆と戦う事になった。コーネリア・リ・

ブリタニアだ。…こちらはギルバード・ギルフォード共々、よろしく頼む」

倉光「こちらこそ、よろしく願いします。ブリタニアの魔女のあなたが力を貸してくれるのなら心強いです」

ナナリー「皆さん！」

そこへナナリー・ヴィ・ブリタニアが来た。

ジノ「ナナリー様！」

藤堂「助けてくれた事を感謝するぞ、ゼロ」

ゼロ「久しいな、藤堂。ナナリー皇女の護衛ご苦労」

藤堂「何、このぐらい当然の事だ」

仁「ほ、本物のナナリー様だ…！」

吼児「は、初めてテレビ以外で見た…！」

ナナリー「初めまして、皆さん！私はブリタニア皇女のナナリー・ヴィ・ブリタニアです！」

倉光「自由条約連合、シグナスの艦長…倉光源吾大佐です。お会いできて光榮です」

拓哉「…」

ナナリー「あ、あなたはあの時の…！」

ゼロ「拓哉、君はナナリー皇女と知り合いだったのか？」

拓哉「知り合いという程のモノでもない」

ナナリー「前に一度助けて頂いたんです！」

ジノ「そうか。あの時、ナナリー様が助けてくれたと言っていたのはお前だったのか」

ナナリー「あの時は本当にありがとうございます！」

拓哉「感謝される程の事はしていない」

俺は少し顔を逸らすとヤール・ドウランがニヤけた顔で肩に手を回してきた。

ヤール「何だ、拓哉？照れてんのか？無愛想のお前でもナナリー皇女の前では形無しか？」

ニヤけた顔が腹ただしく思い、彼の腹に肘を入れた。

拓哉「照れてなどいない」

コーネリア「それよりもナナリー。怪我はないか？」

ナナリー「はい！藤堂さんや千葉さん…シルヴィアさんが守ってくれました！」

クリス「えっ…!?？」

ロザリー「シルヴィアって…！」

シルヴィア「お久しぶりですね、チーム・アルゼナルの方々」

サリア「アンジュの妹の…！」

シルヴィア「はい。私はシルヴィア・斑鳩・ミスルギ…元神聖ミスルギ皇国第二皇女です」

エルシャ「確かミスルギ皇国はアウラ解放と共に崩壊したと聞いたけど…」

シルヴィア「その通りです。ですが、私は立ち上がった同士達とこの世界をよりよくする為…そして、差別の無い世界にする為に活動を続けています」

ヒルダ「お前…」

シルヴィア「まあ、かつてノーマを差別していた私が言う立場ではありませんが…」

サリア「そんな事ありません、シルヴィア皇女…。あなたは変わろうとしています。…私達のように…」

シルヴィア「…ありがとうございます。…それよりも、お姉様はご元気ででしょうか？」

ヒルダ「元気にしてるぜ？たまにお前の事も気にかけていたぜ」

シルヴィア「え…!?？お姉様がですか…!?？」

ヒルダ「おう。あの子…元気にやっているか、ってな」

シルヴィア「お姉様…」

サリア「…今アンジュは喫茶アンジュをやっています。また時間がある時にでもアンジュに会いに来てください。きっとアンジュも喜びます」

シルヴィア「わかりました。…それなら、サリア様、私はもうミスルギの皇女ではありません。一人の少女として、接してください」

サリア「わかったわ、シルヴィア」

ヒルダ「(アンジユ…心配しなくてもシルヴィアはお前の様に元気にやっていた様だぜ…)」

この後、ナナリー・ヴィ・ブリタニアは藤堂 鏡志郎達と共に待避所へ戻った…。

第10話 本当のバディと友達

―池波 夏華です！

私は今、青葉さんと一緒にシグナスの入り口付近を掃除しています！

青葉「(昨日のあれ…：ディオの父親と妹だったよな…？そう言えば、ディオに家族に着いて聞きそびれちゃったな…)」

夏華「青葉さん？どうかしましたか？」

青葉「え…？」

夏華「浮かない顔をしていたので…もしかして体調が悪いとか!?？それなら、私に任せて休んでください！」

青葉「い、嫌大丈夫だよ！それに掃除を女の子一人にさせられないよ！」

青葉さんはお優しい人なのですね！

夏華「それなら、早く終わらせてお茶にでもしましょう！」

青葉「そうだな…ん？あれは…」

フィオナ「…」

あの子は…？

青葉「ねえ、君…あの民間機に乗ってた子だよね？」

フィオナ「あなたは…：ディオと一緒にいた！」

青葉「渡瀬 青葉！ルクシオンのパイロットだよ！」

夏華「私は池波 夏華です！」

フィオナ「フィオナ・ヴェインバーグと言います。そして、ディオの妹です！」

ディオさんの妹さん…!?？た、確かに顔立ちは似ていますね…。

青葉「ディオに会いに来たんだよね？アイツ呼ぼうか？」

フィオナ「いえ、良いのです…。父にあんな事を言われて、きつとディオは私に会いたがらないと思います」

夏華「どういう事ですか？」

フィオナ「ディオは負い目を感じているんです…。私に、いえ…私

達家族に…」

青葉「負い目…?」

フィオナ「はい…。実は前にゾギリア軍が私達家族の住む街を襲ったんです。ヴァリアンサーに乗っていたディオは街を守る為に奮闘しました…。ですが、ゾギリア軍の前に撤退を余儀なくされ、その時の攻撃により母は亡くなり、私の足も…」

そんな事が…。

フィオナ「敵は大群でした…。だから、誰にも責任はないんです。でも、父はディオを責め、ディオ自身も母や私の事で自分を責めてしまつて…私、そんなディオの事が心配なんです!」

夏華「フィオナさん…」

青葉「よし…わかった!俺達がディオに会わせてあげるよ!」

フィオナ「え…?!?ほ、本当ですか?!?」

夏華「青葉さん、どうやって…って、俺達…?!?」

青葉「うん。勿論、夏華ちゃんもフィオナちゃんをシグナスの中に入れる様に手伝ってくれるよね?」

夏華「ふえっ?!?で、でも勝手に民間の方を入れては…」

青葉「見てよ、フィオナちゃんのあの悲しそうな顔…」

青葉さんに言われて、フィオナさんを見ると確かに悲しそうな顔をしています…。

夏華「で、でも…!」

青葉「それとも君はあんな悲しい少女を見捨てるというのかい?」

夏華「そ、それはですね…!」

青葉「よし、フィオナちゃん!俺と夏華ちゃんに任せて!」

夏華「待ってください!だから、怒られちゃいますよ〜!」

倉光艦長…申し訳ありません…。

ー小田切 拓哉だ。

俺はディシエイドのメンテナンスをしていると隣にブラディオンを見に来たのか、ディオ・ヴェインバーグがいた。

拓哉「…」

ゼロ「彼が気になるのか？」

声をかけられたと思い、振り返るとゼロがいた。

拓哉「倉光 源吾から聞いた。…離れていた妹と出会ったと」

ゼロ「…そう言えば、君も妹を…」

拓哉「…」

俺が弱かったからアイツは…。

ディオ「珍しいですね、拓哉さんとゼロが一緒にいるなんて」

ディオ・ヴェインバーグが俺達に気づいたのか、歩み寄ってきた。

ゼロ「君の事を話していたんだ、ディオ」

ディオ「俺の…？」

ゼロ「君はゾギリアの猛攻を止められず、母親を失い、妹は足を失った…」

ディオ「…」

ゼロ「実は私も同じ様な境遇を持っていた兄妹を知っているんだ。母親を殺され、妹は目が見えなくなり、足も歩けなくなつた…。そして、その二人は…世界をかけて、戦う事となつた。…しかし、二人の目指す先は同じ様なモノだった」

やり方が違えども…目指す道は同じだった…。

ゼロ「最終的に兄は妹の目の前で討たれ、世界は平和になりつつある…。人の生命とははかないモノだ。だからこそ、我々はそのはかない生命を守る為に戦っているのではないか？」

ディオ「はかない生命…」

拓哉「ディオ・ヴェインバーグ…。お前の妹や父親はまだ生きている。無理をしろとは言わない。…だが、今を大切にしろ」

ディオ「拓哉さん…」

ゼロ「…君が言うのと重みが違うな」

拓哉「茶化すな」

茶化してくるゼロを軽く睨んでいると、ディオ・ヴェインバーグは口を開いた。

ディオ「わかりました…。少し、考えてみます」

？「へえ、大勢の人達がいて、気負っていると思っただけど、大丈夫みたいだね、ディオ」

誰だ…？

ディオ「お前は…！」

ゼロ「君は？」

フロム「本日よりシグナスへ配属されたフロム・ヴァンタレイです」

ディオ「フロム…！」

拓哉「知り合いか？」

ディオ「カップラー養成機関での同期です」

フロム「会うのは久しぶりだけだね。…それはそうと、君のバディ

の子は何処かな？」

ディオ「青葉の事か？」

拓哉「渡瀬 青葉なら、今夏華と艦の掃除をしている」

フロム「倉光艦長が呼んでいたんだけど…」

拓哉「ならば、俺が呼んでくる」

ディオ「俺も行きます」

俺とディオ・ヴェインバーグは渡瀬 青葉を探し始めた…。

―池波 夏華です。

青葉さんの案で何とかフィオナさんをシグナスの中に入れる事が出来ましたが…。

フィオナ「あの…本当に良かったのですか？」

青葉「何が？」

フィオナ「だって…青葉さん達が怒られるのでは？」

青葉「家族と会うのに一々許可なんていらないうって」

私は巻き込まれましたけどね。

夏華「理由はどうであれ、大切な人とは話せる時に話したほうがいいと思いますよ。…何が起こるかわかりませんから…」

青葉「夏華ちゃん…」

私の様に記憶を失う人もいますしね…。

青葉「それにしても、ディオのやつ何処にいるんだ…？」

ディオ「此処にいたのか、青葉」

拓哉「夏華も一緒だったか。…？彼女は？」

フィオナ「ディオ…」

ディオ「フィオナ…!? どうして此処に!?？」

青葉「俺が連れてきたんだ」

ディオ「何故、お前が…！」

彼女がディオ・ヴェインバーグの妹…。

拓哉「夏華、無断でシグナスに民間人を入れたのか？」

夏華「そ、それは…その…」

青葉「なあ、ディオ。フィオナちゃんと話をしろよ」

ディオ「…それどころじゃない。艦長がお前を呼んでいる」

青葉「それどころって何だよ!?？妹より、任務を優先するのかよ!?？」

ディオ「軍人に私情を挟んでいる余裕はない」

青葉「軍人なら、家族を置いておくつてのかよ!?？」

夏華「ちよ、二人とも…！」

拓哉「…後にしろ二人とも。倉光 源吾が待っている。…フィオナ・ヴェインバーグ、だったな？話ならまた今度つける。今日のところは帰ってくれ」

フィオナ「はい…。あ、でもこれだけはいいですか？」

拓哉「何だ？」

フィオナ「ディオ…あなたは何も悪くない。誰かがあなたを責めたとしても…私があなを許すわ」

ディオ「…！」

青葉「フィオナちゃん…」

フィオナ「…終わりました」

拓哉「そうか…夏華、彼女を頼む」

夏華「わかりました」

フィオナ「またね、ディオ！」

フィオナ・ヴェインバーグは夏華に連れられていった…。

青葉「…お前、最低だな」

ディオ「お前には関係のない事だ」
睨み合う二人を連れ、艦長室へ向かった…。

ーヒナ・リヤザンよ。

私は一応、身の潔白を証明され、解放されたわ。

マルガレタ「リヤザン少尉、あなたを解放します」

ヒナ「ありがとうございます」

マルガレタ「…ですが、言っておきます、リヤザン少尉。あなたの容疑は完全に晴れたわけではありませんから」

ヒナ「…」

マルガレタ「戦闘中に敵パイロットと私的な通信をしていた事は事実であり、それは私に疑念を抱かせるのに十分です」

ヒナ「何度も述べたようにあれば、あのパイロットが一方的に意味のわからない事を言っていただけです」

マルガレタ「そこまでです。あなたからの弁解を聞く気はありませんから」

ヒナ「…」

マルガレタ「もう一度、言います。リヤザン少尉…あなたの嫌疑は完全に晴れたわけではありません。今は一人でも多くの戦力が必要です。それが、あなたの釈放の理由です」

マルガレタ「原隊への復帰も許可しましたが、あなたには監視が付いている事を忘れてください」

それだけ言って、マルガレタ特務武官は歩き去った。

私は…。

ヒナ「…」

ラーシャ「気にしない方がいいよ、ヒナ」

タルジム「そうそう。特務武官殿は前回の作戦失敗でヒスを起こしてんだよ」

ヒナ「ありがとう、二人共」

ビゾン「心配するな、ヒナ。お前は…俺が守ってみせる」

ヒナ「ビゾン…」

タルジム「へえ…ビゾンの場合、ヒナのために戦っているみたいだな」

ヒナ「え…」

ビゾン「タ、タルジム…！」

ラーシャ「いつも一言多いよ、タルジムは」

タルジム「はは…悪い、悪い！」

すると、今度はアルフリード中佐が来た。

アルフリード「全員、揃っているな」

ヒナ「アルフリード中佐…。ヒナ・リヤザン少尉、原隊に復帰いたしました。私が戻ってこられたのも中佐のお口添えがあったからだろうかっております。ありがとうございます」

アルフリード「礼には及ばん。それに…納得はしていないようだな」

ヒナ「マルガレタ特務武官殿にはまだ信用されていないようです」

アルフリード「身の潔白は、自分の働きで証明してみせろ。すぐに攻撃になる」

ヒナ「了解です」

アルフリード中佐の為に今度の任務…負けられない…！

―小田切 拓哉だ。

艦長室に入った俺達はフロム・ヴァンタレイと話をしていた。

青葉「えつと…一応話は拓哉さんから聞いた。お前が、フロム…だよな？」

フロム「ああ、よろしくね。それにしても聞いたよ！予備調整なしでいきなり、デイオとカップリングしたって！凄いね、君！」

青葉「あ、ああ…」

倉光「それでね、デイオ、フロム。君達のエンファティア波形を計ろうと思うんだけど、いいかな？」

フロム「いいですよ」
ディオ「了解です」

これでフロム・ヴァンタレイもカップリングを使えるという事が
…。

ジノ「何か、随分と気のいい男の様だな」

コーネリア「お前と似た様な男かも知れぬぞ？」

ジノ「なっ…!?？」

仁「なあ、拓哉兄ちゃん？夏華姉ちゃんは何処にいるんだ？」

…遅いな、アイツ…。

―池波 夏華です。

私はシグナスの外までフィオナさんをお連れすると、ヴェインバ
グ家の使用人さんが迎えにきました。

フィオナ「ありがとうございます、夏華さん」

夏華「いえ、大丈夫ですよ。こちらこそすみません、お力になれず
…」

フィオナ「そんな事はありませんよ。青葉さんと夏華さんのおかげ
でディオにも会えましたし」

夏華「また落ち着いた時に来てください。きっとディオさんも待つ
ていますから」

フィオナ「はい！それにしてもあの拓哉さんという方…あの方は夏
華さんのお兄さんなのですか？」

夏華「…いえ。リーダーは…私を助けてくれた方なのです。それに
…私には過去の記憶が存在しません」

フィオナ「記憶喪失…という事なのですか？」

夏華「そうですね。だから、家族の事は何もわからないのです」

フィオナ「夏華さん…」

夏華「でも、私は今を大切にしています。記憶が戻った時…今も楽
しいのだと思える様に。ですので、フィオナさんも今を大切にしてく

ださいね」

フィオナ「はい、約束します！」

その後、私はフィオナさんを民間機に乗せました…。

ー小田切 拓哉だ。

俺達はシグナスのメディカルルームにいた…。

エルヴィラ「ディオとフロムのエンファティアレベルが安定しない…？」

レール「つまり…二人ではカップリングができないと？」

フロム「でも、候補生だった頃の僕達は同じ波形だったはず…」

エルヴィラ「ええ。実はディオの波形が以前より大きく変化しているの」

ディオ「俺の波形が変わった…？」

エルヴィラ「そう。基本波形から逸れ始めてるの」

レール「原因は？」

まゆか「ひよつとして…実戦経験を得たから…？」

エルヴィラ「可能性はあるわね…」

フロム「じゃあさ！青葉…次は君とやってみようよ！」

青葉「…え？俺？」

エルヴィラ「…そうね。少し試してみましようか」

渡瀬 青葉とディオ・ヴェインバーグが交代する。

…すると。

まゆか「凄い…何この数値…!!？」

レール「初めてのカップリングテストでこれだけのマッチングを見せるとは…」

仁「よくわかんないけど…青葉兄ちゃんが凄えって事なのか？」

エルヴィラ「ええ…そうね」

ゼロ「(何故、彼は此処までの力を…)」
すると、警報が鳴り響いた。

サリア「敵襲…!?？」

アネツサ「艦長！千歳基地上空にギシン帝国の残党と邪悪獣の軍団が現れました！」

ケンジ「何故、千歳基地を…？」

青葉「考えたって、仕方ないですよ！すぐに行きましょう！」

まゆか「待つてください、青葉さん！ルクシオンとブラディオンは調整の為、まだ出撃できません！」

ディオ「くっ…！」

コーネリア「兎に角、我々は行くぞ！」

俺達は出撃の準備をした…。

第10話 本当のバディと友達

俺達が出撃すると、既に敵の軍団は展開していた。

飛鳥「まだギシン帝国は邪悪獣を…！」

仁「俺達が止めてやるぜ！」

タケル「気持ちはわかるが、仁。落ち着いていこう！」

仁「大丈夫だぜ、タケル兄ちゃん！」

スザク「まだ民間人の避難が終わっていない。何としてでも基地を守り抜くぞ！」

ジノ「了解！」

戦闘開始だ。

〈戦闘会話 タケルVS初戦闘〉

タケル「(ズール皇帝を失った今のギシン帝国…。邪悪獣を従えて、一体何をするつもりなんだ?)」

〈戦闘会話 仁VS初戦闘〉

吼児「アークダーマを悪用して…ギシン帝国は何を企んでいるんだろう？」

飛鳥「さあな。でも、きつとんでもない事だと思っぜ」

仁「そんな事、俺達地球防衛組がさせるかよ！」

〈戦闘会話 拓哉 or 夏華 VS 初戦闘〉

夏華「フィオナさん…無事に脱出できたでしょうか…？」

拓哉「倉光 源吾から彼女の乗った船の脱出が成功したと言う知らせが来た」

夏華「良かった…」

拓哉「フィオナ・ヴェインバーグとの出会いで夏華にも何かの変化が起きたという事か…。妹、か…」

戦闘から数分後の事だった…。

ギシン星兵士「くっ…このままではラチがあかん！お前の出番だぞ…！」

タイダー「い、嫌だ！地球防衛組と戦いたくないだ！」

ギシン星兵士「お前に拒否権などない！崩壊したお前達、ジャーク帝国は我々に従えばいいんだ！」

ギシン星兵士はタイダーという男にアークダーマを呑みこみました。タイダー「グッ…！そ、そんな…！逃げるだ…！地球防衛組の子供達…！」

っ…邪悪獣の増援か…！

ヒルダ「また来やがったか…！」

ロザリー「待て！中心になにかいるぞ！」

クリス「アイツが親玉…？」

ブラックタイダー「ウエアアアッ！」

マリア『そ、そんな…！』

飛鳥「あ、あれは…！」

仁「タイダー…?!？」

タケル「アイツも邪悪獣か…?!？」

吼児「ち、違うよ！タイダーは…！」

仁「アイツは…五次元人だけど、俺達の友達なんだ！」

コーネリア「だが、どう見ても暴走しているぞ！」

飛鳥「まさか、アークダーマを飲み込んだのか?!？」

ナオト「嫌、お前達の様子を見るとギシン星の奴等に無理矢理飲まされたに近いだろうな」

ミカ「酷い…！」

ロゼ「コレが今のギシン星のやり方…！」

ブラックタイダー「グアアアアアツ!!？」

アキラ「こ、このままじゃ、千歳基地が危ない！」

エルシャ「でも、倒してしまつては彼が…！」

レーネ「艦長…！」

倉光「仁君、君達は一度、彼を救い出しているんだよね？」

勉『はい！方法は覚えています！』

仁「艦長、俺達が絶対にタイダーを助ける！だから…！」

倉光「…わかつたよ。でも、このまま被害が広がるなら、倒す事になるけど…いいかな？」

飛鳥「はい！時間が惜しい、すぐにでも助け出すぞ！」

仁「ああ！タイダー…俺達が助けるから我慢してくれよ！」

戦闘再開だ。

―渡瀬 青葉だ。

俺とテイオ、フロムはエルヴィラさんから話を受けていた。

フロム「テイオのエンファティア波形が変わった…？」

エルヴィラ「ええ、そうよ。それだけでなく、調整の為に試した影

響でフロムのエンファティア波形にも変化が生まれた…」

青葉「どうしてそんな事が…？」

エルヴィラ「どうしてかは、わからないわ。つまり、ディオもフロムも違う人とはカップリングできなくなつた…それだけは確かよ」

ディオ「…でも、青葉とならできる」

エルヴィラ「その通りよ、ディオ。でもね、それは逆に言うと青葉君以外とのカップリングは出来ない…。再訓練をすれば、何とかなると思うけれど…」

すると、まゆかちゃんから通信が入った。

まゆか『エルヴィラさん。ルクシオンとブラディオンの調整が終わりました』

エルヴィラ「…ちようどいいわ。ねえ、三人とも。時間がないから素早く決めましょう。今後、誰と誰がバディを組むのかを」

…つまり、選ばれなかつた人はバディから外れる、つて事か…。

フロム「わかつた。じゃあ、1、2の3で決めよう！」

ディオ「…わかつた」

青葉「ああ…」

俺達は指を上に向ける。

青葉&ディオ&フロム「1、2の3！」

俺達はそれぞれ決めた相手に指を刺した…。

エルヴィラ「…！」

そして、指を刺した方を確認すると…。

青葉「ディオ…」

ディオ「…！」

俺はディオに、ディオは俺に指を刺し、フロムは指を上に掲げたままだつた。

エルヴィラ「決まりね。バディは青葉君とディオよ」

ディオ「フロム…」

フロム「あの訓練を無駄にはしたくないんだ。…わかるだろ？」

ディオ「ああ…」

フロム「僕はベルリで出撃するよ！」

そう言いフロムは格納庫へ向かつた。

青葉「ディオ！お前はいいのかよ？」

ディオ「…確かに訓練が無駄になるのは惜しい。だが、不確定なフロムとのカップリングを戦場で行うわけにはいかない」

青葉「ディオ…」

ディオ「…再訓練が出来ないと決まったわけじゃない。それに、お前をベルリに乗せても戦力にならないだろ？」

青葉「…それどう言う意味だよ!?!」

ディオ「そう言う意味だよ!?!」

俺達も格納庫へ向かった…。

ー小田切 拓哉だ。

ブラックタイダー「ウオオオオオツ!!?」

タイダーの攻撃に俺達は苦戦を強いられていた。

ヒルダ「くそっ! 何てやろうだ!」

リー「このままでは千歳基地が…!」

アリス「!この反応は…!」

ルクシオンとブラディオオン、それからベルリが現れた…?

タケル「青葉! デイオ!」

青葉「遅れてすみません!」

ディオ「俺達もやります!」

フロム「初陣だからね…派手に行こうか!」

ベルリにはフロム・ヴァンタレイが…。

青葉「仁! あの敵の動きを止めればいいんだよな? 任せろ!」

仁「ま、待ってくれ、青葉兄ちゃん!」

ディオ「待つんだ、青葉!」

ルクシオンはタイダーに接近したが…。

ブラックタイダー「ウガアアアツ!!?」

青葉「うっ…!」

タイダーの攻撃にルクシオンは吹き飛ばされた。

夏華「青葉さん!」

一鷹「ルクシオンの動きに追いつくなんて…！」

ディオ「体制を立て直せ、青葉！」

ブラックタイダー「ウガアアアアツ!!？」

タイダーがルクシオンに接近する。

青葉「まずい…！」

間に合わない…！」

仁「ウオオオオオツ！」

だが、ルクシオンとタイダーの間にライジンオーが割り込み、タイダーの攻撃を防いだ。

仁「青葉兄ちゃん、無事か!?!？」

青葉「仁…！」

仁「タイダーは…俺達が…！」

タイダーの攻撃を防ぐライジンオーだったが、タイダーが力を込め、徐々に押され始めた。

飛鳥「不味いぞ、仁…！」

仁「まだまだ…！タイダーの苦しみに比べたら…！」

青葉「仁、お前はそこまで…！」

仁「タイダー！アークダーマに負けるな！お前は…俺達の友達だ…！」

ブラックタイダー「…！」

タケル「アイツの動きが止まった…!?!？」

吼児「タイダー…！」

ブラックタイダー「ウオオオオオツ!!？」

いや…やはり、言葉だけでは止まらないか…！」

仁「ぐっ…！」

青葉「仁！」

ディオ「もういい！離れろ！」

仁「い、嫌だ！」

拓哉「日向 仁…！」

仁「俺達は絶対に逃げない！タイダーを…友達を助けるんだ！？」
「その心意気、感謝するぞ！地球防衛組の子供達…！」

仁「そ、その声は…！」

現れたのは紫の機体…？

ベルゼブ「行くぞ、ファルゼブ！」

ファルゼブ「ええ、ベルゼブ！」

紫の機体は攻撃を仕掛けた…。

ベルゼブ「タイダー…！必ず救い出してみせる…！ジャークフラツシュ！」

ブラツクタイダー「ヌアアアアツ…？」

紫の機体は頭部からクリスタルを撃ち出し、タイダーにダメージを与えた…。

ブラツクタイダー「グウウウウツ…！」

ファルゼブ「やはり、あの程度では戻らないか…！」

吼児「グレートサタン…！という事は…！」

飛鳥「ベルゼブとファルゼブか！」

ベルゼブ「久しいな、地球防衛組の子供達」

仁「どうして2人が…？」

ファルゼブ「今は話している場合じゃないわよ！」

ベルゼブ「それもそうだな。行くぞ、ライジンオー！タイダーを助け出すのを手伝ってくれ！」

仁「おう！行くぜ、ベルゼブ！」

リー「あの機体は一体…？」

倉光「どうやら、味方のようだね。フロム、君はリーの指揮に入つて！」

フロム「了解です！」

ディオ「おい、青葉。俺達も負けてられないぞ！」

青葉「ああ！仁達と一緒に、タイダーって奴を助け出すぞ！」
…戦闘再開だ。

〈戦闘会話　ベルゼブVS初戦闘〉

ベルゼブ「ギシン帝国…！我らが受けた屈辱、倍返しにして、返す！」

ファルゼブ「私達の部下に手を出した事も含めてね！」

〈戦闘会話 リーVS初戦闘〉

ヤール「おい、やれんのかよ？ フロム」

フロム「勿論、いつでも行けますよ！」

リー「よし！合わせていくぞ、ヤール！フロム！」

〈戦闘会話 青葉VS初戦闘〉

青葉「（ディオオ：最初は薄情な奴だと思っていたけど、本当は違うんだな…。俺はこれからも戦う…！お前が選んでくれた事を無駄にしないように！）」

〈戦闘会話 デイオVS初戦闘〉

デイオ「（フィオナ、ありがとう。…そして、待っていてくれ。俺は必ずお前の下に帰る。その時は父さんとも…！）」

〈戦闘会話 タケルVSブラックタイダー〉

タケル「すまない、君もギシン帝国の被害者なんだな…。必ず、救い出してみせる！」

〈戦闘会話 仁VSブラックタイダー〉

飛鳥「くっ、こんな時にゴッドライジンオーになれないなんて…！」

仁「苦戦はするけど、そんな事は関係ない！友達は絶対に助ける！待っていてくれ、タイダー！」

〈戦闘会話 ベルゼブVSブラックタイダー〉

ファルゼブ「タイダー…！」

ベルゼブ「すまない。私の不甲斐なさでお前は…！その責任はしっかりと取る！だから、堪えてくれ、タイダー！」

〈戦闘会話 青葉VSブラックタイダー〉

青葉「戦いたくない奴を無理やり戦わせて…。許さないぞ、ギシン帝国！その前に、仁の為にもあんたは必ず助け出すからな！」

〈戦闘会話　　ディオVSブラックタイダー〉

ディオ「お前は助ける。…二度と誰かを悲しませない為にも！」

〈戦闘会話　　拓哉or夏華VSブラックタイダー〉

拓哉「奴を止める」

夏華「リーダー…！仁君の為に戦うなんて、感動モノです！」はい行きましょう、リーダー！」

俺達はブラックタイダーにダメージを与えたが…。

ブラックタイダー「グアアアアアツ!!？」

サリア「ダメ、止まらない！」

ヒルダ「これ以上じゃ、消耗戦になるぞ！」

ファルゼブ「お腹部分を狙えば、何とか大量のアークダーマを吐き出させられるのだが…！」

ロザリー「でも、どうやってアイツの出す触手を避けるんだよ!!？」

青葉「俺が…嫌、俺達がやる！」

ディオ「青葉…」

ジノ「俺達って…青葉とディオでか!!？」

スザク「だが、奴の攻撃…！幾ら、カップリングシステムがあつたとしても…！」

ディオ「いえ、心配はありませんよ、ゼロ。俺は大丈夫です。少なくとも俺は」

青葉「いやそこは俺達が、だろうが！」

ディオ「…怒鳴るな。だったら、見せてみる！青葉！」

青葉「言われなくてもやってやる！お前こそ、遅れんなよ！」

ディオ「誰に言っている！いいからやるぞ！」

ルクシオンとブラディオンはブラックタイダーに攻撃を仕掛けた

…。

青葉「タイダー！仁達の為にも助け出すから待ってる！コネクティブ・ディオ！」

ディオ「アクセプション！遅れるなよ、青葉！」

青葉「まかせろ、ディオ！」

青葉・ディオ「うおおおおおっ！！？」

ルクシオンとブラディオンの合体攻撃でタイダーを斬り裂いた。

ブラツクタイダー「グオアアアッ！！？」

ルクシオンとブラディオンの攻撃でタイダーの腹に斬り目が入り、そこから大量のアークダーマが飛び出て、塵となり消滅した…。

アークダーマが身体から完全に消えた瞬間、タイダーの身体は縮小化していき、人間と同じサイズになった。

ベルゼブ「まずい…！」

ジャークサタンは落下しそうになったタイダーを受け止めた…。

仁「エグゼブ、タイダーは!?？」

ファルゼブ「安心して。息をしているわ」

吼児「良かった…」

飛鳥「コレで一件落着だな！」

ちようど他の敵も撃墜できたな。

コーネリア「増援は無さそうだな」

ファルゼブ「艦長、タイダーをお願いするわ！」

倉光「了解です」

スザク「取り敢えず、各機は艦に戻り、すぐさまこの地域から離脱する」

サリア「いつギシン帝国やゾギリアがまた攻めてくるかわかりませんからね」

夏華「了解しました！」

ディオ「おい、青葉」

青葉「どうした？ディオ」

ディオ「妹が世話になった」

それだけを言い、ディオ・ヴェインバーグは通信を切った。

青葉「素直じゃないやつ」

俺達は帰艦し、五次元人であるエグゼブとファルゼブと顔を合わせ
た。

タケル「タイダーという人の容体は…？」

エルヴィラ「生命には別状はないようよ。暫くすれば起きるわ」

青葉「良かった…」

ベルゼブ「これで一安心だ…。地球防衛組の子供たちはタイダーの
所か」

ケンジ「聞かせてくれないか？何故、君達のアークダーマがギシン
帝国の残党の手に渡ったのかを…」

ファルゼブ「ワルーサを倒して、五次元世界へ帰還した私達の前に
ギシン帝国の残党が現れ、私達は襲撃を受けたんだ」

ベルゼブ「情けない話…ジャークパワーが少なくなった私達では奴
等の襲撃には敵わず、大量のアークダーマを奪われてしまい、タイ
ダーも…囚われてしまった…」

倉光「そうだったのか」

サリア「これからあなた達はどうするの？」

ベルゼブ「勿論、ギシン帝国の好きにさせるわけにはいかん。私達
もお前達と共に戦うぞ」

ファルゼブ「迷惑をかけてしまったお礼もしないといけないしね」

タイダー「ワシもやりますダ！」

アイツは…タイダー…。

タケル「タイダー！」

ヒルダ「もう動いて大丈夫なのかよ？」

仁「エルヴィラの姉ちゃんも大丈夫だつてよ！」

ベルゼブ「タイダー、すまない。私は…」

タイダー「気にしないでくださいダ、ベルゼブ様。あなたはこう
やってワシを助けてくれたじゃないですダ！」

ファルゼブ「タイダー…」

ベルゼブ「ふっ…私は素晴らしい部下を持ったな…。では、タイダー。これからも私達についてきてくれるか？」

タイダー「勿論ですダー！」

フロム「あ、ついでにですけど、僕も皆さんと同行する事になりました！」

アネツサ「ホントに!?？」

フロム「うん、この艦は可愛い子も多いしね。だから、これからもリー大尉の直庵で戦うのでよろしくお願いします！」

ベルゼブ「改めて、よろしくと言わせてもらおうぞ、日向 仁」

仁「仁でいいぜ？これからもよろしくな！ベルゼブ！」

ベルゼブ「ああ、仁！」

新しい仲間が増えた所でゼロに向けて通信が入った。

ゼロ「私だ」

カレン『ゼロ、カレンです』

ゼロ「カレンか。お前が私に通信をするという事はツツジ台で何かあったのか？」

ツツジ台：確か、霧に囲まれた街、だったな…。

カレン『はい。実は突然、街の至る所に動きを見せない怪獣が出現しました』

ゼロ「怪獣だと…？」

ジノ「動きを見せないとはどういう事だ？」

カレン『言葉通り、街を破壊しようともせず、その場で立ち止まっているの。…一応生体反応を調べた所、生きている事は確認しました』

ゼロ「了解。では、私達もすぐに向かう」

カレン『待っています』

ゼロは通信を切った。

ゼロ「話した通りだ、倉光艦長」

倉光「わかったよ。シグナスはこれからツツジ台へ向かうよ」

俺達はツツジ台へ向かう事にした…。

―新条　アカネだよ。

アカネ「あー、何か楽しい事はないかなー？」

アレクシス『怪獣のフィギュアを作りながら、言う事じゃないよ、アカネ君。…えーつと、イントライザーだったかな？その怪獣』

アカネ「インペライザーだよ。ウルトラマンメビウスと戦ったロボット怪獣の！」

アレクシス『それにしても…凄い量を作っているね』

アカネ「インペライザーは沢山いるからね。それに…何か起きるよな気がしてるんだ！」

アレクシス『それは、嬉しい事だね。（そろそろ、彼も目覚める事だと思うしね…）』

ウフフ、楽しくなりそうだよ！

第1話 覚・醒

「俺は…誰だ…？」

それよりも…声が…嫌、歌が聞こえる…？」

俺が目覚めると歌を歌っていた女の子が俺に気づいた。

六花「…あ。起きた」

裕太「おはよう、ごさいます…」

六花「三十分ぐらい寝ちやつて、起きなかつたよ？具合悪いの？」

裕太「嫌、特に痛い所とかは…」

六花「急に倒れて寝ちやうから、ホントビックリしちゃつたよ。…とりあえず顔洗って来なよ。洗面所、あっちだから」

俺は顔を洗う為に洗面所へ向かい、鏡に映る自分を見た。

裕太「…あの子誰だ…？つてか、俺、誰…？何なんだよ、これ…？」

？『(裕太…！)』

裕太「え…？」

何、この声…？」

？『(裕太…！裕太…！)』

裕太「裕太…？これ、俺の名前…？」

俺はその声に導かれるようにある古いパソコンがある部屋にたどり着いた。

いまだ聞こえてくる謎の声…。

もしかして…。

裕太「パソ、コン…？」

このパソコンから声が聞こえてきているのか…？」

パソコンを眺めていると突然、モニターがつき、まるで特撮ヒー

ローの様な何かが映った。

？『私はハイパーエージェント、グリッドマン』

裕太「おお…グ、グリッドマン…？」

グリッドマン『思い出してくれ。君の使命を…！』

裕太「俺の…使命…？」

すると、さっきの女の子が歩いてきた。

六花「何してんの？」

裕太「いや、あのパソコンに映るアレに呼ばれて…」

六花「アレ？」

裕太「その…グリッドマン…」

六花「…何も映ってないじゃん」

裕太「え…？いやいや！…って、もしかして…俺だけにしか見えてない…？幻覚…？」

六花「響君…何か変」

裕太「グリッドマンが使命を思い出せって」

六花「しめい…？フルネーム…？」

裕太「多分、違う」

六花「は？何の話？」

裕太「ここ、何処？」

六花「ウチ。ウチの店」

裕太「誰の？」

六花「私の！」

裕太「だから、誰なのって！」

六花「え？誰なのって…誰が？」

裕太「君が」

六花「あのさあ…ふざけてんの？」

話が全然噛み合わない…。

裕太「真面目に！何も、思い出せなくて…」

六花「…ふざけてんの？」

裕太「き、記憶が…」

六花「記憶喪失…？」

裕太「そう、それ！」

六花「ふざけてんの？」

ダメだ、話にならない…。

六花ママ「おーい、君達煩いよ」

俺は六花と呼ばれる女の子のお母さんにも事情を話した。

六花ママ「六花。一応、病院に連れて行ってあげたら？」

六花「ええー!? あたしー!?」

六花ママ「当たり前じゃん。同級生なんでしょ?」

六花「ええ…」

結局、俺と六花は家を出て、病院へ行く事になった。

というか、なんか外の霧が濃いな…。

裕太「なんか、霧濃くない?」

六花「そう?」

裕太「うん…って!?」

六花「何?」

裕太「上上! デツカイ怪獣!」

六花「えー…? 何処?」

裕太「霧の向こう!」

六花「…何も無いじゃん! ハア…早く行かないと病院閉まるよ!」

…あの怪獣も俺にしか見えてないのか…?

六花「ねえ。記憶がないって事は今日の事、全部覚えていないって事?」

裕太「…うん」

六花「そっか…。でも、もし記憶喪失のフリだったら、最悪だからね」

裕太「え? 何かあったの?」

その答えに彼女は答えなかった。

そして、病院に着き、俺は診断してもらったが…。

六花「どうだった?」

裕太「よくわかんなかったけど、時期に良くなるんじゃないかって」

六花「…何それ? っというか、保険証とか持ってたの?」

裕太「…何それ」

六花「…ハア…。もう帰っていいんじゃない?」

裕太「うん。色々ありがとう。じゃあ、また」

そう言い残し、俺はその場を後にしようとしたが、動かなかった…

嫌、動けなかった。

六花「…どうしたの?」

裕太「…………俺ん家、わからない…」

六花「ハアアッ!? それも忘れてんの? ……私も知らないしな…。あつ、携帯貸して!」

裕太「う、うん」

俺から携帯を受け取ると、彼女は携帯を操作しだした。

六花「響君の家を知ってんの内海君かな…」

彼女が誰かと連絡を取り合っているようだ。

六花「あー…わかった。でも、わりと遠いなあ…。つてかもう7時じゃん!? ……もう、お腹空いたあ…」

結局、俺達は家に帰る前にコンビニに寄る事になった。

裕太「なんで俺、女子の部屋で寝てたの?」

六花「女子じゃない。宝多 六花。私の名前。響君、私の家の前で倒れて寝ちやって、起きなかつたんだよ」

裕太「何、それ…? ど、どういう関係…!? …? と、友達…?」

六花「…。悪いけど、響君とおんなじクラスになって、初めてこんなに話したよ」

裕太「そうっすか…。ん?」

? 「…」

うわあ…なんだアレ…?

六花「先行くよ!」

裕太「あ、ああ、何でもないッス!」
? 「…」

俺と六花は暫く歩き、響と書かれたアパートの一室の前まで辿り着いた。

裕太「おお、ここだ」

六花「じゃあ、あたしは帰るね。明日、内海君つてのが迎えに来てくれるから」

裕太「うん。色々ありがとう」

六花を見送った後、俺は家に入り、軽く夕食を食べた。

家の中を調べた結果、俺の両親は出張中で、三か月くらいは帰って来ないらしい。

他人事みたいで現実味がない。

裕太「グリッドマン…。やっぱり、アレ…幻覚かなあ…？」

とにかく、学校もあるみたいだし、寝ようか…。

俺は、早めにベッドに横になった…。

ー小田切 拓哉だ。

俺達はシグナスの格納庫で話をしていた。

青葉「それで、どんな街なんですか？ツツジ台って」

ヤール「どんなって…至って普通の街だぜ？」

青葉「え？でも、濃い霧に覆われているんですよね？しかも、その街だけって怪しくないですか？」

ディオ「勿論、怪しいと思った政府も直々にツツジ台を調べに行つたが、特に霧には毒性は見られなかったようだ」

リー「それも街の中じゃ、霧一つないと来た。だから、結局、霧が濃い理由は分からずじまいなんだよ」

フロム「街の人達も特に気にしていないみたいだからね」

青葉「そうなのか…」

拓哉「紅月 カレンを派遣したのも詳しく霧の街を調べる為か？」

ジノ「そうだ。彼女は潜入調査を得意としているからな」

夏華「聞いた話によるとカレンさん…という方は旧黒の騎士団のエースだったのですよね？」

コーネリア「うむ。我々とも何度もぶつかりあった。イレヴン…嫌、あの頃の日本人の中ではキレ者だったぞ」

タケル「それに旧と言っても今の黒の騎士団でもカレンはエース級だよ」

夏華「わあ！会ってみたいです！」

仁「でも、どうして、街に動かない怪獣がいても誰も逃げないんだ？」

飛鳥「それに今まで街に怪獣なんていた情報もないけど…」

ベルゼブ「それは行ってみればわかるだろう」

怪獣…まさか、クレナイ　ガイも関わっているのか…？

―夢野　ナオミよ。

私達、SSPはスクープの為にツツジ台に来た。

ジエッタ「ほ、本当に怪獣だ！」

シン「ですが、妙ですよ？」

ナオミ「うん…。街の人達には見えていないみたい」

ジエッタ「とりあえず手分けして、話を聞いてみよう！」

私達は手分けして情報を得る事にした…。

♪♪

このハーモニカの音…もしかして、ガイさん…？

―響…裕太だ。

部屋のインターホンが鳴り、玄関の扉を開けると眼鏡の男の子が立っていた。

裕太「君が、内海…君？」

内海「…記憶喪失つてのは本当みたいだな。俺の顔まで忘れるとはなねえ」

裕太「すみません…」

内海「まあいいか。4月に知り合ったばかりだし。もう一回友達になつたつて事で！」

裕太「ありがとう。でき。俺ってさ…どう言う人間だったの？」

内海「ええー、何そのめんどくさい質問？てか、どんなつて言われてもなあ…普通…まあ、悪い奴じゃないよ」

裕太「…もしかしてさ。グリッドマン…とか知ってる？」

内海「何それ？流行つてんの？」

裕太「い、いや…そう言うんじゃないよ…」

雑談を挟みながらも俺も内海は学校の教室に着き、席に座った。

昨日あつた宝多さん…？も友達2人に揶揄われていたけどなんなんだろう…？

すると、赤髪の女の人が話しかけてきた。

カレン「おはよう、響」

裕太「えっ？…ええつと…？」

内海「ああ、悪いなカレン。裕太は実は記憶喪失みたいなんだ」

カレン「え！？記憶喪失！？それって大丈夫なの！？」

裕太「…多分…」

カレン「多分って…まあいいや。改めて、私は紅月 カレン。よろしくね！」

裕太「よろしくね、紅月…さん」

カレン「カレンでいいよ。私も裕太って呼ぶ事にするから」

裕太「わかった」

そんなこんながあり、お昼休みになった。

内海「悠太、外で食おうぜ」

裕太「…お弁当なくって…。正直学校の事で頭がいつぱいでき…」

アカネ「これあげる」

…え？

アカネ「響君。武士は食わねば高笑い、だよ？」

裕太「あの…えつと…」

アカネ「新庄 アカネ。なんか記憶喪失っていうより、転校生みたいだね」

裕太「いや、本当に何も覚えてなくて…」

アカネ「スペシャルドッグ…余ってるから上げる！」

裕太「あ、ありがとう…」

しかし…。

問川「あ、ヤバイ…！」

俺が新庄さんからスペシャルドッグを受け取ろうと手を伸ばしたその時、飛んできたボールが新庄さんの手にぶつかり、スペシャルドッグは地面に落ちてしまった。

アカネ「…」

裕太「あ…」

問川「ご、ごめん！手が滑って…！」

カレン「裕太もアカネも大丈夫!?？」

アカネ「問川、外でやれやあ…」

良かった…。

どうやら、新庄さんも怪我してないみたいだな…。

裕太「大丈夫だよ！」

もう一度新庄さんを見ると彼女はニコリ、と笑みを浮かべて来た…。

その後、授業も終わり、俺と内海は下校する事にした…。

内海「なあ、裕太。俺もグリッドマンってやつ見たいんだけど？」

裕太「えつと…」

そこへ六花が来た。

…丁度いいかも…。

俺達は六花の家に行き、ジャンクの前に立った。

内海「裕太、どれがグリッドマンなの？」

裕太「このパソコンだよ」

すると、パソコンのモニターが点き、グリッドマンが映る。

グリッドマン『私はハイパーエージェント、グリッド…』

裕太「嫌、それは昨日聞きましたから」

グリッドマン『裕太、急いでくれ。この世界に危機が迫っている』

裕太「危機って何…？それにこの世界って…」

内海「…誰と話してるの？」

裕太「えつ…内海にも見えないの!?？」

内海「見えない」

グリッドマン『急いでくれ…。危機はすぐそこまで迫っている！』

危機って…いつたいなんなんだ…？

―新庄 アカネだよ。

私は今、怪獣を作っていた…。

アレクシス『また怪獣かい？何か嫌な事があつたんだねえ…。どうしても許せない子とか』

アカネ「うん、まあね…。よし、出来た！」

アレクシス『おお！超動的で素晴らしい姿だねえ。では、動かそう…。インスタンス・アブリアクション！』

ふふっ、覚悟しなよ…。

問川…！

―響 裕太だ。

裕太「…！」

こ、この気配は…！

内海「どうした？」

裕太「なんか…ヤバい感じがする…！」

内海「嫌、お前も相当ヤバいけどな」

裕太「そうじゃなくて…！怪獣が来る…！」

すると、辺りが激しく揺れ始めた…。

第11話 覚・醒

突然の地響きと甲高い鳴き声の様なモノが聞こえて、俺達は外に出た。

そして、俺達が見たのは…街を破壊している怪獣だった…。

内海「何だよコレ…。マジで怪獣じゃん！」

六花「アレが響君の言っていた怪獣…？」

裕太「わかんないけど…！」

すると怪獣は複数の火の玉を放った。

その激突した場所は…！

六花「学校の方だ…！」

ど、どうすれば…！
そこへ、赤色のロボットが空中に現れ、怪獣を見下ろした…。

―紅月 カレンだよ。

突然怪獣が現れて、暴れだすなんて…！

それに…学校が…！

カレン「怪獣め…！これ以上好き勝手にはさせないよ！」

裕太「なんだアレ!?？」

内海「アレは…黒の騎士団のKMFじゃないか！」

スザク達が来るまでに…何とか倒す…！

戦闘開始だよ！

〈戦闘会話 カレンVS初戦闘〉

カレン「今まで怪獣が暴れる事なんてなかったのに…！でも、これ以上は進ませないからね！」

怪獣…やっぱり手強いわね…！

―響 裕太だ。

あのKMFが怪獣と戦ってくれているけど…！

グリッドマン『裕太…裕太…！』

裕太「グリッドマンが呼んでる…！」

俺は走って立花の家へ戻ると六花達も後をついてきた。

そして、俺はジャンクの前に立ち、グリッドマンを見る。

裕太「グリッドマン、俺を呼んだよな!?？」

グリッドマン『そうだ。私と君は覚醒しなければならぬ』

裕太「覚醒…？それって…」

グリッドマン『説明は後だ!』

裕太「ええっ!?!?」

俺は驚きながら、ジャンクに吸い込まれてしまった。

内海「裕太!?!?…ジャンクに喰われちゃった…」

六花「昔のパソコンって怖っ…」

そのジャンクの中で俺とグリッドマンは見合う。

内海「俺もなんか見えた…」

六花「私も見えちゃった…」

そして、俺はグリッドマンと一体化…巨大化して、怪獣の前に立つた。

六花「今度は巨人…!?!?」

内海「裕太の言っていたグリッドマンか…?」

裕太「止めなきや…俺が…!」

内海「ジャンクから裕太の声がする…!?!?」

裕太「内海の声…?二人とも俺の声が聞こえるの!?!?」

六花「うん、聞こえるよ!」

ジャンクを通して、内海達にも戦闘の状況が見えるのか…!

グリッドマン「裕太!力を合わせて、あの怪獣を倒すぞ!」

裕太「わ、わかった…!」

すると、赤色のロボットが隣に来た。

カレン「ちよっと!あんたいったいなんなの!?!?」

この声って…!

裕太「カレン?カレンなの!?!?」

カレン「えっ…その声…裕太!?!?」

内海「どうしてカレンがKMFに!?!?」

六花「もうホントどういう事…!?!?」

カレン「内海に六花まで…!?!?」

えっ…カレンの声…内海達にも聞こえているんだ。

グリッドマン「突然で済まない。私は、ハイパーエージェント、グリッドマン」

カレン「グリッド、マン…?」

グリッドマン「共に怪獣を倒す為、力を貸して欲しい！」
カレン「よくわかんないけど…わかったよ！行くよ、裕太！」
裕太「ああ！」
戦闘開始だ！

〈戦闘会話　グリッドマンVSグルグルギラス〉

裕太「よ、よし…！来い！」

グリッドマン「私と君の初戦だ！合わせていくぞ、裕太！」

俺とグリッドマンは怪獣にダメージを与えるが、すぐに反撃を受けてしまう。

グリッドマン「ぐっ…!!？」

すると、ジャンクの方も激しく火花が散った。

六花「な、何々!!？」

内海「もしかして…ジャンクとグリッドマンが連動しているのか!!

?気を付ける、裕太！」

裕太「う、うん…！」

グリッドマン「…！まだ何か来る…！」

すると、そこに現れたのは戦艦だった…。

―小田切 拓哉だ。

霧の街に来てみれば、街では怪獣と赤いKMF、そしてウルトラマンに似た巨人が戦っているだと…?

カレン「シグナス…！やっとなてくれた！」

レーネ「怪獣…？動かないのではなかったのか？」

倉光「うーん、なんかワケアリみたいだね。とりあえず、機動部隊に出撃してもらおうか」

俺達が出撃した…。

スザク「無事か、カレン？」

カレン「勿論です、ゼロ！」

コーネリア「紅月、一緒に戦っている巨人は何者だ？」

裕太「な、なんか沢山出てきた!?!」

カレン「大丈夫だよ、みんな、私の仲間だから」

グリッドマン「そうか…。私はハイパーエージェント、グリッドマン！」

吼児「ハイパーエージェント…」

飛鳥「グリッドマン…?」

仁「ウルトラマンに似ているな！」

夏華「格好いいです！」

拓哉「騒ぐな。…その巨人は味方と捉えていいのか？」

グリッドマン「ああ！君達が正義の為に戦うというのなら、味方だ！」

タケル「信じるよ、グリッドマン！」

青葉「今はあの敵を倒すだけだ！」

内海「凄え！ゴッドマーズにライジンオーまでいやがる！」

六花「でもコレでグリッドマンも安心だね…」

アレクシス『ふむ…。コレは多勢に無勢だね』

アカネ「それならこつちも大量に作ったインペライザーで勝負だよ！」

アレクシス『了解だ。インスタンス・アブリアクション！』

裕太「皆さん、気をつけてください！まだ来ます！」

大量のロボット怪獣が現れた…?

ナオト「ちっ、そう簡単にはいかないか…！」

ベルゼブ「すぐさま倒さなければこの街に被害が増えるぞ！」

すると、ハーモニカの音色が聞こえてきた。

ミカ「ハーモニカ…?」

この音色は…。

やはり来ていたか…！

ガイ「光の力、お借りします！」

現れたのはウルトラマンオーブだった…。

オーブ「俺の名はオーブ！闇を照らして、悪を撃つ！」
アキラ「ウルトラマンオーブだ！」

ロゼ「彼もこの街に来ていたのか！」

裕太「グリッドマンと同じ、巨人…？」

グリッドマン「君は…」

オーブ「(グリッドマン…。ウルトラマンではない様だが…)」

スザク「各機、ウルトラマンオーブ並びにグリッドマンと協力して、
敵怪獣の対処に当たれ！」

ディオ「了解！」

戦闘開始だ。

〈戦闘会話　オーブVS初戦闘〉

オーブ「謎のエネルギーを感知してこの街にきたが…やはり、何か
ある様だな。新しく手に入れた力でお前達を倒す！」

オーブは新たな姿となり、敵ロボット怪獣を倒した。

リー「またオーブの新しい姿か…」

ヤール「随分とキレのある動きを見せてくれるじゃねえか！」

〈戦闘会話　グリッドマンVSインペライザー〉

グリッドマン「裕太、数は多いが、一体一体確実に倒していくぞ！」
裕太「わかった！」

〈戦闘会話　仁VSグルギラス〉

仁「街の人達を困らしてんなら、退治してやるぜ！覚悟しろよ、怪
獣！」

〈戦闘会話　青葉VSグルギラス〉

青葉「あの火球にだけ気をつけないとな…！だけど、バスケット部の動
き舐めんなよ！」

〈戦闘会話　タケルVSグールギラス〉

タケル「何だ、あの怪獣…？動いているのにまるで生命力を感じない…？一体、どういう事なんだ…？」

〈戦闘会話　スザクVSグールギラス〉

スザク「ランスロットの動きで翻弄してみせる…！これ以上、街を壊させはしない！」

〈戦闘会話　オーブVSグールギラス〉

オーブ「あの怪獣…何か妙だ…。まるで心がない…そんな気がする…。だが、それで攻撃をやめる俺じゃない！」

〈戦闘会話　グリッドマンVSグールギラス〉

内海「裕太！その怪獣は首が脆いはずだ！そこは狙っていけ！」

裕太「ありがとう、内海！」

グリッドマン「ならば、首に連続攻撃を叩き込む…！」

〈戦闘会話　拓哉or夏華VSグールギラス〉

夏華「首が長い怪獣ですね…」

拓哉「その分、脆いのだろう…。容赦なく斬り落とす」

周りのロボット怪獣全てを倒し、もう一体の怪獣もグリッドマンが倒した…。

フロム「増援はない様だね」

オーブ「シエアッ！」

敵が居なくなった事を知るとオーブは飛び去ってしまった…。

それと同時にグリッドマンも消えてしまった…。

そして、俺達は紅月　カレンと共に帰艦する事にした…。

―新庄 アカネだよ。

アカネ「…！」

私は悔しさのあまり、持っていたカッターナイフで机を叩いた。
アレクシス『どうやらお客様が来た様だね…』

今度は負けない…！

―響 裕太だ。

戦いが終わると俺はジャンクの中から出る事が出来た。

内海「おお、裕太！良かった！」

裕太「た、ただいま…！」

内海「凄えよ、裕太！怪物と戦って勝ちやうなんて！」

裕太「い、嫌…。俺だけじゃなくて…」

グリッドマン『裕太、君の使命を果たすんだ』

えっ…？

裕太「たった今、やったんじゃ…？」

グリッドマン『全ては始まったばかりだ』

始まった、ばかり…。

内海「なあ、あのロボット達のおかげでもあるけど、俺達三人とグリッドマンで勝ったんだ！あれだ！…こう言うの絶対名前があつた方がいいん！グリッドマン同盟とかそういうの…」

六花「ねえ、ちよつと！」

六花…？

六花「ごめんだけど…ちよつと、今日はもう…」

内海「えっ？」

六花「今、頭の中ぐちゃぐちゃで…グリッドマンとかワケわかんないし…友達とかも心配だし…ちよつと、ごめんだけど…」

内海「…帰るか」

裕太「…うん」

よくわかんないけど…俺はコレからも戦わなくちゃならないって事だよな…。

「小田切 拓哉だ。」

俺達は帰艦し、シグナスの格納庫に集まった。

ジノ「元気そうだな、カレン」

カレン「ジノもね！」

ギルフオード「我々の到着が間に合って良かった」

青葉「まさか、怪獣が暴れていたとはな…」

ディオ「だが、コレであの霧の向こうの怪獣もいつ動きだすか、わからない状況になったな」

夏華「カレンさん、あのグリッドマンという巨人は何者なのですか？」

カレン「わかんない…」

拓哉「あのグリッドマンという巨人から複数の声が聞こえたが…」

カレン「彼等…私が潜入先にしてる学校のクラスメイトなの…」

ナオト「マジかよ…!?？」

ゼロ「詳しく調べてみる必要があるな…」

エルヴィラ「グリッドマンの戦闘データも見ておくわ」

リー「倉光艦長は暫くこの街に居座ると言っていた。また怪獣との戦闘になるかも知れん。各自、休める時には休んでおけよ」

それから俺達は各自休息に入った…。

あの場にオーブも現れた…。

クレナイ ガイならば…あのグリッドマンと呼ばれる巨人を知っているのか…？

第12話 戦・士

「小田切 拓哉だ。」

俺と夏華とサリア、紅月 カレンは倉光 源吾とゼロに呼び出された

倉光「突然、呼び出してすまないね」

夏華「どうかしたのですか？」

倉光「うん。昨日一緒に戦った巨人：グリッドマンだったかな？そのグリッドマンと関係しているであろう生徒がカレン君の潜入している学校にいた様なんだ」

カレン「はい、それもクラスメイトです」

ゼロ「既にカレンが我々の仲間だと言う事はグリッドマン達にも知られている。だから、今日の登校で彼等に詳しい話を聞いて欲しいんだ」

拓哉「それと俺達が集められた理由とどう繋がっている？」

ゼロ「君達も気付いているだろう？この街の異変を…」

サリア「…はい。街の人達は霧や霧の向こうの怪獣を認識していない様です」

夏華「そればかりか、昨日の怪獣騒ぎも知らないと言っています…。壊された街も何事もなかった様に修復されていましたし…」

倉光「その異常を調べる為…。そして、カレン君の支援の為にも拓哉君とサリア君も学園に潜入して欲しいんだ」
何…？

拓哉「サリアは兎も角、何故俺だ？渡瀬 青葉やディオ・ヴェインバグの方が適切な気がするが…」

倉光「本当は彼等に頼もうと思っていたんだけど、ディオは青葉君の訓練で参加出来なそうにないからね…。年齢的にも考えて、君しかないと思ったんだ」

拓哉「…」

ゼロ「勿論、無理にやれとは言わない。はん判断は君に任せる」

拓哉「…出来るだけの事はする。…だが、期待はするな」

倉光「ありがとう。では、早速登校してね」

…まさか、俺が学生になるとは…。

夏華「頑張ってくださいね、リーダー！」

拓哉「…お前がやれるのに俺がやれないワケにはいかないからな」
…やれる所までやるとするか。

―池波 夏華です！

リーダー達もお見送りした後、私はシグナスの格納庫へ向かうと青葉さんがデイトさんの指導を受けていました。

デイト「なかなか様にはなつて来たな」

青葉「へっ、ざっとこんなもんだぜ！」

デイト「調子に乗るな。お前なんてまだまだだ」

青葉「褒めてくれたと思ったら、今度は貶してくるのかよ!?!?」

デイト「事実を言ったまでだ」

あの二人は本当に仲がよろしいですね！

ロザリー「あの二人、よくやるよな」

クリス「うん。もう結構時間が経ってるよ」

エルシャ「何か差し入れでも持って行ってあげようかしら」

ヒルダ「青葉はやる気があるから、続けるのはわかってたけど、デイトがずっと付き合ってるのも驚きだね」

タケル「それ程、彼等の仲が深まっていると言う事だね」

仁「喧嘩するほど、仲が良いって奴だな！」

夏華「お二人とも楽しそうです！」

こうやって絆が深まっていくんですね。

ヤール「なあ。夏華、聞いたぜ？拓哉も学園に潜入する事になつたってな」

ナオト「あの拓哉を？コミュニケーション能力がほぼないアイツに務まるのか？」

アキラ「ジノの方が向いてたんじゃないの？」

ジノ「済みませんが、私にはゼロの補佐という責務がありますので…」

ミカ「ふ、二人とも…!」

ロゼ「此処には夏華もいるのよ!」

アキラ「あつ…!ご、ごめん!夏華!」

夏華「何も心配ありませんよ、皆さん!リーダーなら…大丈夫です!」

吼児「そうだね!」

飛鳥「それにサリアさんもいるんだし、大丈夫だよ!」

お願いしますね、サリアさん。

リーダーのお手伝いを…。

ー響 裕太だよ。

俺と内海は一緒に登校していた。

内海「それにしてもウルトラマンオーブ!格好良かったぜ!」

裕太「内海がよく言っていたウルトラシリーズ…だったよね?ウルトラマンって…。あのウルトラマンオーブもテレビでやってたの?」

内海「嫌、俺が知っているのはウルトラマンエックスまでだ。間違はなく、オーブもウルトラマンなんだけどな…。それにしても、オーブって二体のウルトラマンの力を合わせてる様だな!初代ウルトラマンとティガとか、メビウスとタロウとか!」

…ヤバイ、何言っているのかわからない。

そして、俺達は学校に着いたけど…。

内海「…」

裕太「…」

内海「…何で、何で…?どうなってるの…?昨日、学校…燃えてたよね?」

裕太「うん…」

内海「なのに、どうして学校がなんともなっていないわけ…?」

裕太「学校だけじゃない…。街もだよ…」

内海「それだけじゃない…。昨日現れた戦艦…。どうして、誰もツツコまないんだよ…」

裕太「うん…」

内海「いくら、この街がこれまで戦いに巻き込まれた事がなかったと言っても、無関心すぎるだろ！」

裕太「うん…」

そこへ、六花も来た。

俺達同様驚いてる。

六花「…うつそ…。学校、直ってるじゃん…」

裕太「さすがに…おかしいでしょ…」

六花「…教室に行こう。みんなの話も聞きたいし」

俺達は教室に着き、みんなから昨日の話を聞いたけど…。

なみこ「…怪獣やロボット？」

裕太「うん…。昨日の夜、怪獣出て、ロボット現れて大変な事になってたじゃん」

なみこ「響君…。記憶喪失と一緒にどこかおかしくなっちゃった…？」

裕太「え…？ええ…？」

ど、どう言う事…？

内海「誰も怪獣やグリッドマンやウルトラマンオーブとあのロボット部隊の事を覚えてない…。街どころか、記憶ごとリセットされてる…」

はつす「急接近の六花…その辺り、どうなの？」

六花「急接近って…」

なみこ「隠しても無駄だって。ここ数日、六花と響君が一緒にいるのを何度も見たから」

カレン「それよりも！教室も変じゃない？問川達の机もなくなってるし！」

えっ…？

やっぱりカレンは記憶があるんだ…。

なみこ「問川…？誰、それ？」

六花「誰って…だから、バレエ部の…。ほら、昨日の昼休みもバレエボールで遊んでて響君のパンを落として…」

はつす「うちのクラス…バレエ部なんていないじゃん」

カレン「え…」

問川さん達が…いない事になってる…？

カレン「(やっぱり変だよ…。私や裕太達以外の記憶が消えるなんて…)」

すると、先生が入って来た。

先生「…そろそろHRを始めるぞ」

なみこ「先生！六花がやばいんだけど〜！」

先生「あくそう…」

裕太「何が、どうなってんだよ…」

先生「それじゃまず…このクラスに転校生が二人来てる。入ってきて」

入って来たのは二人の男女だった。

先生「じゃあく自己紹介」

サリア「皆さん、初めまして。サリア・テレシコワと言います。よろしく願います！」

拓哉「小田切 拓哉…」

先生「はい。じゃあ、二人は紅月の隣に座って」

二人はカレンの隣の席に座った。

…ん？一瞬、新条さんの顔が険しくなった様な気がしたけど、気のせいだよね…？

二時限目の授業が終わって、俺は渡り廊下の外を見る。

…みんな、昨日の事は覚えてない…。って言うより、なかった事になってる…。きつと、あの空の向こうの怪獣の姿もみんなには見え
てないんだな…。

裕太「やっぱり、グリッドマンに聞いてみるしかないか…」

アカネ「響君…」

裕太「新条さん…」

アカネ「朝、面白そうな話してたよね？怪獣が出た…って」

裕太「う…」

アカネ「何か隠してる？」

裕太「隠してるわけじゃ…ないんだけど…。ごめん…！俺、内海と約束があるから！」

俺はその場から走り去った…。

―新条 アカネだよ。

アカネ「…行っちゃった」

さつき言ってたグリッドマン…お客様と関係があるのかな…。

それに小田切君とサリアさん…一体何者なの…？

考え込んでいると誰かとぶつかった。

アカネ「いったく！」

先生「…」

アカネ「ちよつとく先生く！歩きスマホは危ないじゃくん！」

先生「…」

先生は謝りもせず、携帯に釘付けで歩き去った…。

アカネ「何よ…」

懲らしめちやうかな、先生を…！

―小田切 拓哉だ。

放課後となり、俺とサリア、紅月 カレンは下校していた響 裕太、内海 将、宝多 六花を呼び止めた。

カレン「ねえ、三人とも。少し話があるんだけど」

内海「ちようど良かった。俺達もカレンに話があったんだ」

六花「取り敢えず、ここじゃ話せないから屋上に行こうよ」

裕太「そうだね」

そして、俺達は屋上で話す事にした。

内海「って…どうして、小田切とサリアさんもいるんだよ？」

カレン「それは…」

サリア「騙す様な真似をしてごめんなさい。本当の私はチーム・アルゼナルのリーダー、サリアなの。昨日現れたロボット部隊…そこに私と拓哉は所属しているの」

裕太「昨日助けてくれた…」

カレン「そして、私は新生黒の騎士団のエース…紅月 カレンよ」

内海「黒の騎士団って…！カレンはゼロの仲間だったのか…？」

カレン「ごめんね、黙ってて」

裕太「三人はどうしてこの街に来たの？」

拓哉「霧に覆われたこの街を調査する為だ」

六花「霧…？」

サリア「この街は外部から見れば、霧に覆われているのよ」

拓哉「そして、霧の向こうには怪獣がいる…」

裕太「三人はあの怪獣が見えるの…？」

カレン「うん。私もこの街に来た時には見えていたよ」

サリア「私と拓哉は…昨日現れたグリッドマンと呼ばれる巨人に係しているであろう貴方達と話をする為に学園に潜入したの」

内海「関係してるって、言われてもなあ…」

六花「うん。私達もよくわかってないし…」

カレン「巨人から裕太の声が聞こえたのは？」

裕太「…俺はグリッドマンと一体化して戦ったんだ」

カレン「一体化…!?!？」

拓哉「つまり、あのグリッドマンはお前自身でもあったと言う事か？」

裕太「そう、みたい…」

サリア「随分、曖昧ね」

裕太「俺もよくわかっていないから…」

六花「とりあえず、グリッドマンに話を聞くのがベストじゃない？」

内海「そうだな」

俺達は宝多 六花の家に向かい、ジャンクの前に立った。

裕太「それで、どうする…？」

内海「俺達で謎を解き明かせばいい。俺達で敵の正体を探るんだ。」

俺達、グリッドマン同盟で！」

六花「何よ、グリッドマン同盟って気持ち悪……」

裕太「まあまあ……」

まさか、俺達もメンバーに入っただけじゃないだろうな……。

内海「この状況……宇宙人の仕業かも知れないし」

カレン「宇宙人、か……」

内海「ああ。策を巡らせるタイプ……。そう……ウルトラシリーズに出ってくる様な奴だ！」

裕太「宇宙人……」

すると、誰かが店に入って来た。

？「……」

六花「あ、すみません。今日、お店……お休みなんですけど……」

サリア「な、何……この人……？」

拓哉「……ただ者ではない様だな」

裕太「もしかして……宇宙人!?!？」

キャリバー「お、俺は……サムライ・キャリバー」

カレン「サムライ?！」

内海「絶対、宇宙人だろ……」

キャリバー「き……危機が迫っている……。だから、俺達は来た」

裕太「俺達って……」

拓哉「どう見てもお前一人の様だが……」

キャリバー「俺と他の奴等だ。まず……」

キャリバーという男はジャンクを操作しだした。

六花「何するんですか?このパソコン……一応商品なんですけど……」

キャリバー「さ……最適化だ。グリッドマンは今のままではダメだ」

裕太「グリッドマン……知ってるんですか!?!？」

キャリバー「終わった……」

何が終わったと……。

グリッドマン『……聞こえるか?聞こえるか、みんな!』

内海「聞こえる……!グリッドマンの声が!」

六花「ホントだ…」

グリッドマン『急いでくれ。君達にはやるべき事がある』

裕太「やるべき事…」

内海「グリッドマン！俺達に任せてくれ！まずは行方不明になったクラスの奴等を調べる！」

その後、俺達は消えたクラスメイトの自宅へ向かい色々話を聞いたが…。

内海「まさか…問川が中学生の時に死んでいたとはな…」

カレン「つて事になってるみたいだね…。私達以外には…」

サリア「問川さんだけじゃないわ。他の子達も同じようなものだった…」

裕太「何で、みんな死んじゃった事になってるの？昨日元気だったじゃん…」

キャリバー「か、怪獣に襲われた結果だ」

六花「あの子達…もう会えないって事…」

内海「死んだ事になってるって言っても実感わかないなあ」

裕太「うん…」

内海「グリッドマンが見えるようになったように空の向こうの怪獣も見える様になったけどな」

拓哉「…」

？「あれ？拓哉君…？」

振り返るとそこにはSSPの三人がいた。

ジェット「やっぱり、拓哉君だ！」

シン「君もこの街に来ていたんだね！」

拓哉「SSP…」

サリア「拓哉、知り合いなの？」

拓哉「ああ」

ナオミ「初めまして！夢野 ナオミよ！こっちはジェットとシン君！」

カレン「あなた達は此処で何をしてるんですか？」

ナオミ「この街って不自然なんだよね…」

ジエツタ「誰も昨日の怪獣騒ぎを知らないし、街は修復されてるし…」

シン「これは何か、特ダネが眠っているかも知れませんね！」

…空の向こうの怪獣や機能の件もSSPのメンバーは覚えている、か…。

危険だと伝えても彼女達はこの街に居座るのだろうな…。

するとそこへクレナイ　ガイが来た。

ガイ「よう、お前さん達もこの街にいたのか」

ナオミ「ガイさん！」

拓哉「クレナイ　ガイ…」

ジエツタ「ガイさんは昨日の怪獣騒動、覚えてる？」

ガイ「ああ。…SSPのお前達は帰った方がいい。この街、普通じゃない」

ナオミ「帰れって言われて、帰るワケないでしょ？」

サリア「私達にもやるべき事があるので」

ガイ「そうか…。拓哉、お前と話がある。少しいいか？」

拓哉「構わない。…サリア、少し席を外す。後で合流する」

サリア「え、ちょっと！」

ガイ「ん…？お前さん…」

裕太「え、な、何ですか？」

ガイ「いや、何でもない。邪魔したな」

裕太「は、はあ…」

六花「何だったんだろう、あの人？」

サムライ・キャリバー「(あの男…：もしや…)」

俺はクレナイ　ガイと共にその場を後にした…。

俺とクレナイ　ガイは公園で話をする事にした。

ガイ「お前、この街の事をどう思っている？」

拓哉「正直な所…：気味が悪い。不可解な点が多過ぎる」

ガイ「昨日現れた怪獣…あの怪獣も不自然だったんだ」

怪獣も…不自然だった…？

ガイ「動いているのに…まるで心を持っていない…そんな気がした」

拓哉「…人工的に作られた怪獣の可能性があるという事か…？」
考えてもわからない事だらけだ…。

拓哉「クレナイ ガイ…。お前はあのグリッドマンという巨人を知っているのか？」

ガイ「いや、知らないな。…だが、アイツは…ウルトラマンに近い何かを感じる…。何かはわからないがな」

拓哉「そうか…。俺は他の奴等と共にもう少し探ってみる」

ガイ「ああ。だが、気を付けろよ」

拓哉「わかっている」

話を終え、俺はサリア達の元へ向かった…。

―響 裕太だよ。

拓哉やSSPの人達と別れた後、俺達は少し休憩する事にした。

内海「にしてもホントにパツとしないよな…。まだ実感がわかねえっていうか」

六花「…ねえ、何で、そんな平気そうなの？」

内海「俺だって、この状況…飲み込めてないんだって。…てか六花って、そんな間川達と仲良かったっけ？」

六花「だから、何なの？そういう話してるんじゃないんだけど」

カレン「ちよつと二人とも…！」

六花「ツ…！」

サリア「六花！」

六花は走り去ってしまった…。

裕太「行っちゃった…」

キャリバー「お、俺に任せろ…」

その後をキャリバーさんが追った…。

内海「任せろって…大丈夫なのか、あの人…」

裕太「さあ…」

カレン「さあつて…」
サリア「今はキャリバーさんに任せるしかないわね」
これからどうしよう…。

―新条 アカネだよ。

私は怪獣を作っていた。

アレクシス『…また何か嫌な事があつたんだねえ、アカネ君』

アカネ「うーん…でも、収穫もあつたよ」

アレクシス『ん、何だい？』

アカネ「お客様の事。グリッドマンっていうらしいよ」

アレクシス『ほう、グリッドマン…』

アカネ「あのロボット部隊の方はどうする？」

アレクシス『私としては、あちらよりもそのグリッドマンが気になるねえ』

アカネ「それに関係するのかな…。記憶が消えてなかった子がいるっぽいし。どう考えてもグリッドマンと関係しているよね」

アレクシス『おもしろいねえ』

アカネ「でしよ〜？」

アレクシス『新作のフィギュアも完成したしねえ』

アカネ「うん。自信作だよ」

アレクシス『いいねえ、素晴らしい！何に使うんだい？』

アカネ「イヒ、イヒヒヒヒ。うちの担任、殺そうかな〜…って思つて。人にぶつかつといて謝らないのは、非常識だよ」

アレクシス『よくないねえ』

アカネ「でしよ〜？今回は初めから複数の怪獣で行くから、よろしく〜」

アレクシス『はいはい。（それに、今回はまた新しいお客さんが来た様だしね…）それでは…インスタンス・アプリアクション！』

先生…。

覚悟していてね。

―宝多 六花だよ。

私の元にキャリバーさんも来た。

キャリバー「…だ、大丈夫か？」

六花「ありがとうございます…」

キャリバー「…」

六花「…もうこれ以上、友達が消えて、楽しかった事も全部消えちやつて…。なのに、私だけずっと忘れられないなんて…そんなの絶対やだ」

キャリバー「誰だって、そうだ。だ、だから、戦うしかない」

六花「もし、また怪獣が出るなら戦って欲しい…。友達を守るのは、響君とグリッドマンだけだから…」

キャリバー「それは本人に言え」

六花「言えないよ…」

すると、街の警報が鳴り響いた。

六花「これって…」

キャリバー「来るか…!」

六花「怪獣…」

そこへ一人の男の人が来た。

タケル「大丈夫か？」

六花「あ、貴方は…?」

タケル「俺は明神 タケル。拓哉達の仲間だよ。君達を助ける為に来たんだ」

六花「小田切君達の…」

キャリバー「…」

拓哉「明神 タケル…?何故、此処にいる?」

小田切君…。

タケル「倉光艦長の指示で彼女達を助けに来たんだ」

拓哉「何故、彼女が此処にいるとわかった?」

タケル「何となくの感だよ。それともう一つ…」

突然、タケルという人は何か不思議な力で小田切君を吹き飛ばした。

拓哉「…ぐっ…!?何の真似だ…!?」

タケル「今ので死なないのか…。タフだな」

? 「拓哉、伏せて!」

すると今度は声が聞こえ、タケルさんという人が吹き飛び、現れたのは…タケルさんという人だった。

キャリバー「な、何…?」

六花「同じ人が…二人…!?」

タケル「超能力を感じて来てみれば…お前だな、グール!」

すると、もう一人のタケルさんという人は女の人に姿を変えた。

グール「ふっ、久しぶりだな、マーズ」

タケル「どうしてだ!お前は死んだはず…!」

グール「かろうじて生きていたのだ!他の超能力者と共にな!」

タケル「ズール皇帝がいない今、お前達は何を企んでいる!?」

グール「これから死ぬ貴様達を知る必要はない!マーズ!今度こそ息の根を止めてやるぞ!」

そう言い残すとグールという女の人はテレポーションで消えた。

タケル「くっ…!ギシン帝国との戦いはまだ終わっていないかったのか…!」

拓哉「彼女はギシン帝国の一人だったのか…」

タケル「行こう、拓哉!俺達も準備しないと!」

拓哉「わかった。…宝多 六花」

六花「何?」

拓哉「早く戻れ。グリッドマンに…響 裕太にはお前が必要だ」

六花「…うん!」

小田切君はタケルさんという人と走り去った…。

私達も早く戻らないと…!

ー響 裕太だよ。

怪獣が来るのか…！

サリアさんとカレンも戦艦に戻った様だし…！

裕太「…また怪獣が来る。また何人も死んじゃうんだ…！グリッドマンと一緒に戦わないと！」

内海「カレン達に任せるってのもありだと思うけど…」

裕太「俺がやらなきゃダメだと思うんだ。理由は特にないけど…」

内海「お前…なんかキャラ違うぞ…」

裕太「そうかも知れないけど、俺達、グリッドマン同盟なんだろう？」

内海「ああ…！」

そこへ六花とキャリバーさんも戻って来た。

六花「…もしもの時の事を考えて、鍵、預けておいてよかった…」

裕太「六花！」

六花「私も…やるから…」

裕太「え…」

六花「…」

裕太「わかった。グリッドマン…！俺と一緒に戦ってくれ！」

グリッドマン『この世界では、私は実体のないエネルギーに過ぎない。裕太と合体しなければ、戦う事が出来ない』

裕太「俺にしか出来ない事…それが、俺のやるべき事…！」

覚悟を決めた俺の左腕に何か装着された。

裕太「これは…」

グリッドマン『それが、私と君のプライマルアクセプター…。君の意思でアクセスフラッシュしてくれ』

裕太「ああ…！アクセス…フラッシュ!!？」

俺はジャンクに吸い込まれた…。

「小田切 拓哉だ。」

街に複数の怪獣が現れ、暴れ始めた。

先生「あ…ああ…」

アカネ「ダメだよ、先生…定時に帰っちゃ。もっと生徒と触れ合わないと」

怪獣が攻撃を続ける…。

アカネ「ちよつと雑過ぎ〜！ちゃんと狙って撃つてよく！先生、死んだかな？ま…どっちでもいいけど…」

そこへギシン帝国のロボット軍団と邪悪獣軍団…そして、二機のロボットが現れた。

ゲル「ほう、マーズがいると聞き、出撃してみたが…面白い事になっているな」

グール「あの怪獣達…我々に仕掛けてくる気は無さそうだが…」

アカネ「昨日出てきたロボット部隊とはまた違うロボット軍団だ！」

アレクシス『アレは…ギシン帝国だね』

アカネ「ギシン帝国って…ゴッドマーズが倒したんじゃ…」

アレクシス『どうするんだい、アカネ君？彼等もお客さんの様だが…』

アカネ「私の怪獣に攻撃してくる気配はないし、放置でいいよ」

レーネ「突然現れた怪獣にギシン帝国か…！」

倉光「タケル君の話では倒したはずのギシン帝国の兵士達が生きていた様だね」

アネツサ「艦長！サリアさん達及び、タケルさん達も帰艦した様です！」

倉光「それじゃあ、機動部隊出撃して！」

俺達は出撃した…。

ナオト「あそこにいる二機のロボットは…！」

ロゼ「グルグルにグルダー…！本当にギシン星人の超能力者達が生

きていたとは……！」

ゲル「マーグの副官がギシン帝国を裏切るとはな」

グルル「ならば、マーズ共々消すとしようじゃないか」

タケル「ゲル……！お前まで生きていたのか！」

ゲル「左様。今度こそ、お前の倒してやるぞ、マーズ！」

タケル「あの頃より、俺の超能力も格段に上がっている……。もうお前達に苦戦する俺じゃないぞ！」

グルル「ほぎくな！我がズール皇帝の無念……此処で晴らす！」

仁「あの怪獣達……俺達ばかり見てるぞ！」

飛鳥「まさか、あの怪獣達もギシン帝国の……？」

スザク「嫌、たまたま標的が同じだけの様だな」

コーネリア「ならば、纏めて相手をしてやろう！」

ベルゼブ「ギシン帝国……！これ以上、アークダーマをお前達の好き

勝手にはさせない！」

そこへ色が変わったグリッドマンが現れた。

カレン「アレは……！」

サリア「グリッドマン！」

拓哉「だが、前回と色が違う」

裕太「身体が軽い！これがグリッドマンか！」

内海「色も動きも違う！これが最適化したグリッドマン……！」

キャリバー「うん」

サリア「そうか！キャリバーさんがしようとしたのはこれだったのね！」

ヒルダ「アレがグリッドマンの本当の姿みたいなものか」

内海「頼んだぜ、裕太、グリッドマン！街を守ってくれ！」

ミカ「エネルギーを検知……このエネルギー反応は……ウルトラマンオーブです！」

すると今度はウルトラマンオーブが現れた。

内海「ウルトラマンオーブも来てくれた……！」

アカネ「もうホント、ウルトラマンって怪獣の邪魔ばかり……！」

アレクシス『ハハハ……。宿敵という奴だねえ』

グリッドマン「ウルトラマンオーブ…」

オーブ「お前が何者かはわからないが、正義の戦士なのは間違いないな。行こうぜ、グリッドマン！」

グリッドマン「ああ！」

サリア「裕太、戦える？」

裕太「勿論だよ！」

ケンジ「各機はグリッドマンとウルトラマンオーブと協力し、怪獣やギシン星人と交戦しろ！」

裕太「行くぞ！もう誰も死なせない！」

戦闘開始だ。

〈戦闘会話　グリッドマンVS怪獣系〉

裕太「(もう誰も死なせない…！だから…！俺のすべき事を…俺にしか出来ない事をやるんだ…！)」

〈戦闘会話　グリッドマンVS邪悪獣orギシン帝国系〉

裕太「侵略者の好きにはさせない！俺がみんなを守るんだ！」

〈戦闘会話　オーブVS初戦闘〉

オーブ「どの様な街だろうと守ってみせる！俺の力で！」

〈戦闘会話　カレンVS初戦闘〉

カレン「悪いけど、この街をこれ以上破壊させない！みんなを守る為にも！」

〈戦闘会話　サリアVS初戦闘〉

サリア「例えこの街が変でも…みんな笑顔で生きているわ。その生命を散らす様な事はさせられないのよ！」

〈戦闘会話　拓哉or夏華VS初戦闘〉

夏華「この街の人達を悲しませるなら、私達が相手になります！」

拓哉「少しでもいた街だ。壊させはしない」

戦闘開始から数分後の事だった。

裕太「このまま打って出る…！」

グリッドマンは怪獣軍団の中心にいた白い怪獣に接近した。

グリッドマン「グリッドオオビイイム!!？」

グリッドマンのビームを…吸収しただと…？

裕太「あ、あれ…？」

内海「ビームが効いていない！」

アカネ「フフフフ…！ビーム対策、完璧済みーっ!!？いつけえ！グ

リッドマンを血祭りにあげろ！」

今度は白い怪獣がグリッドマンにビームを放ち、グリッドマンはビームを受けてしまった。

裕太「う、うわっ！」

オーブ「グリッドマン！」

カレン「裕太！」

必殺技が無効化された状態では…！

六花「このままじゃ負けちゃうよ！あの怪獣、弱点とかないの!!？」

内海「わかんねえ…」

六花「何とかならないんですか!!？」

キャリバー「ならない…」

六花「うっそ…。グリッドマンの知り合いなら、グリッドマンを助けてください！」

キャリバー「それなら出来る」

裕太「こ、このままじゃ…」

キャリバー「グリッドマン！そのまま攻撃を仕掛けろ！」

裕太「キャリバーさんの声…!!？…グリッドマン！」

グリッドマン「よし！」

グリッドマンは攻撃を仕掛けた…。

裕太「守る…！みんなを…！」

キヤリバー「アクセスコード、グリッドマンキヤリバー！」
突然、大きな剣が現れた。

キヤリバー「俺を使え！グリッドマン！」

グリッドマン「ああ……！」

グリッドマンは巨大な剣を握る。

グリッドマン「電撃大斬剣グリッドマンキヤリバー!!?グリッドオオオオツ……！」

キヤリバー「キヤリバアアアツ……！」

グリッドマン&キヤリバー「「エエエエンドツ!!?」」

デバダダン「……！」

グリッドマンの攻撃で白い怪獣は吹き飛ばす。

アカネ「何よ、あれ!?!?武器とか、あんの!でも、そんなんで負ける怪獣じゃないよ!」

キヤリバー「まだまだ叩き斬るぞ、グリッドマン！」

グリッドマン「ああ……！」

戦闘再開だ。

〈戦闘会話　グリッドマンVSゲル〉

ゲル「その力……我等が貰い受ける!」

裕太「グリッドマンをお前達なんかに渡すもんか!」

グリッドマン「私は悪の手先の仲間などにならない……!生命を奪うのならば、相手になるぞ!」

〈戦闘会話　タケルVSゲル〉

ゲル「マーズ!此処が貴様の墓場だ!」

タケル「そうは行くか!俺は絶対に死なない!そして、誰も死なせない!お前達の野望は俺が阻止してやる!」

〈戦闘会話 ケンジVSゲル〉

ゲル「我がグルダーに苦戦していた戦闘機ではないか」

ケンジ「あの頃の我々と違う所を見せてやろう…。攻撃開始だ！」

コスモクラツシャアの攻撃でグルダーにダメージを与えた…。

ゲル「おのれ…！許さんぞ、マーズ！次はこの様に行くと思うな！」

グルダーは撤退した…。

アキラ「分かりやすい捨て台詞だね」

ナオト「そう何度もお前らの思い通りに行くかってんだ」

〈戦闘会話 グリッドマンVSゲル〉

ゲル「邪魔をするな、巨人め！」

裕太「街を襲うなら、邪魔するに決まっているだろ！」

グリッドマン「生命ある者を危険に晒すと言うのなら私はお前を倒す！」

〈戦闘会話 タケルVSゲル〉

ゲル「裏切り者のマーズ！ズール皇帝の仇は取らせてもらう！」

タケル「ギシン帝国との戦いを此処で終わらせる！行くぞ！」

〈戦闘会話 拓哉or夏華VSゲル〉

夏華「ギシン星人…！まだ生き残りがいたとは…！」

ゲル「あの時の男か！マーズと勘違いしていたお前は滑稽だったぞ！」

拓哉「それ程俺も見る目が落ちたという事か…。恥を晒される前に潰す」

ゴツドマーズの攻撃でグルグルはダメージを受けた…。

グルル「くっ…！危険分子はマーズだけではないという事か…！」
タケル「答えろ、グルル！ズール皇帝のいない今、お前達は何を企んでいる!?？」

グルル「それで私が口を割るとでも思ったか！だが、マーズ…お前は
いずれ絶望を知るだろう」

そう言い残し、グルグルは撤退した…。

タケル「(絶望…。何だ、この嫌な予感…?)」

グリッドマンの攻撃で白い怪獣を倒した…。

アカネ「何、あの剣…！あんなのズルイじゃん！それにあの戦艦…
！土足で入ってきて、好き放題やってくれちゃって…！」

裕太「ありがとうございしました、キャリバーさん…。助かりました」
キャリバー「仲間は他にもいる…」

裕太「え…」

キャリバー「その内、奴等も来る…と思う」
これで全ての敵を倒したな。

裕太「終わった…」

グリッドマンは消えた。

おそらく、響 裕太に戻ったのだろう。

オーブ「シユア！」

そして、オーブも飛び去っていった。

俺達もそれぞれ帰艦した…。

―新条 アカネだよ。

私は今、苛つきで机を何度も叩いている。

アカネ「ムカつくく！ムカつくくよ！グリッドマン！それにあの口
ポット部隊も！」

アレクシス『うーん、確かに見逃しては置けないね。それにグリッドマンに関係している三人はあのロボット部隊と手を組む様だよ』
アカネ「まあ、それは何となく分かってたよ。一緒に戦っていたし…でもそうなると結構厄介だね…」

アレクシス『だからこそ、こちらもお客さんと協力しようじゃないか』

アカネ「お客さんって…ギシン帝国と手を組むって事？」

アレクシス『その通りだよ。残党とはいえ、協力すれば、戦力は充分に補充出来るよ』

アカネ「…わかった。アレクシス、ギシン星人達は何処にいるの？」
グリッドマンを倒すためにやるしかない！

ー響 裕太だよ。

俺はジャンクから出て、息を吐いた。

裕太「…俺のするべき事を…俺にしか出来ない事をやった…。グリッドマンと一緒に…」

内海「裕太…」

裕太「でも、壊れた街…そこに住む人達の記憶は、きつとまた…」

六花「ありがとう」

裕太「え…」

グリッドマン『裕太…。君のおかげで私は戦う事が出来た』

裕太「でも、きつと守れなかった人達もいるんだよね…」

キャリバー「だ、だが、お前がやらなければ、もつと死んでいた。これからもやれる事をやれ」

裕太「やれる事…。わかりました！」

グリッドマンと戦う…。

それが俺のやれる事だから…！

「グールだ。」

バレン「お帰りなさい、お二人とも」

カッチ「マーズと交戦してどうだったんだ？」

ゲル「奴の超能力は格段に向上している」

グール「更に奴は様々な協力者と手を組んでいる。どの力も侮れないぞ」

ゲル「こちらにも何かの手を考える必要があるという事だな……」

カッチ「だが、こちらの戦力などたかが知れているぞ……」

どうするべきか……。

すると、足音が聞こえ、私達は足跡の方を振り向く。

カッチ「誰だ!?!?」

アカネ「ちよつと警戒しないでよ!怪しくはないからさ!」

バレン「地球人……?」

アカネ「私は新条 アカネ。よろしくね」

ゲル「小娘、なぜ此処がわかった?」

アカネ「わかるよ。だって、私はこの街の管理者だから」

グール「何……?」

カッチ「お前の様な小娘が……?」

アカネ「その言い方は少しムカツてくるけど……まあいいや。そう、そしてあのグリッドマンとかロボット部隊っていうイレギュラーが現れて、困ってるの」

バレン「早い話、私達と何をしよう?」

アカネ「それはね……」

すると、彼女の背後に何者かが現れた。

アレクシス『初めまして、私はアレクシス・ケリヴ。まあ、アカネ

君の協力者だね』

コイツ……何者だ?

アレクシス『簡潔に纏めよう。我々は君達、ギシン帝国と手を組みたい』

グール「何だと?」

アレクシス『君達の敵、ゴッドマーズと我々の敵であるグリッドマンは協力態勢を取っている。ならば、こちらも手を組んだ方が妥当だと思っただけ』

ゲル「ほう……。だが、お前達には何が出来るんだ？」

アカネ「今日暴れ回ったあの怪獣達……呼び出したのは私達なの」

バレン「貴女方は怪獣を操れると？」

アカネ「そう捉えてもらって構わないよ」

アレクシス『悪くない話だと思うよ？今の君達の戦力で彼等を相手にするのも困難だと思うよ。……勿論、あのロボット部隊がこの街にいる時だけでもいい』

グール「……」

どうすればいい……。

？「その話、乗らせてもらおう」

あの方は……！

カッチ「良いのですか!?？」

？「マーズを倒す為には協力出来る者と啾み合っているも仕方がない。……だが、寝首を搔こうとするのから、容赦はしないぞ」

アカネ「……」

アレクシス『まあ、それはお互い様だよ』

アカネ「そうだね！じゃあ、よろしくね！改めて、新条 アカネと

アレクシスだよ！」

？「そうか、俺は……」

この方は不適に笑みを浮かべ、新条 アカネと握手をした……。

マーズ「マーズだ」

フフフ……マーズよ。

お前は再び、絶望を見る。

兄と戦うと言う絶望をな……。

第13話 運・命

―新条 アカネだよ。

私の家の前にアンチ君がいた。

アンチ「…」

アカネ「頑張って！期待してるぞ？アンチ君」

アンチ「必ず、倒す…！」

フツツ、ギシン帝国の件もあるし…今度こそ、グリッドマンを…！

―小田切 拓哉だ。

俺は次の授業の準備をしていた。

カレン「裕太、そう言えばどうなの、記憶は？少しでも戻った？」

裕太「嫌、全く…」

サリア「経験がないから、わからないけど…大変ね…」

裕太「ううん！もう慣れてきたし」

内海「慣れてきたって、お前…」

裕太「…あれ？そう言えば六花は？」

…確かに来ていないな。

内海「心配なら、かけてみるよ！」

裕太「う、うん…」

響 裕太は宝多 六花に電話をかけるが…。

裕太「…出ない」

カレン「(ねえ、裕太って、もしかして…)」

サリア「(そうみたいね、これは…)」

紅月 カレンとサリア…。

何の話をしているんだ？

内海「ちよつと気づいたんだけど…あの時見たんだけど、キャリバーさんが巨大な剣に変身していたんだ。だとすると今まで現れた怪獣も人間が変身していた可能性もあるんじゃないかって…」

裕太「ええっ…?!?そんな、な…俺は人を…!」

内海「俺達が戦っていたのは人間だったのかもな…つてやつ!」

裕太「嫌、笑えないわ…」

カレン「ちよつと、冗談でもそういうのやめてよね」

内海「悪い、悪い!」

人間が怪獣か…。

考えたくないな…。

―池波 夏華です。

私達は精神統一をしているタケルさんを心配していました。

タケル「…」

青葉「タケルさん…もうかれこれ1時間ぐらいあーやつてるぜ」

ディオ「凄まじい集中力だな…」

リー「何でも精神を統一すれば、超能力を高める事が出来るようだ」

飛鳥「集中力のない仁には無理だな」

仁「お、俺だってあれぐらい…!」

ヒルダ「無理するなって、仁!」

ロザリー「仁を見てたら、無理だってわかるからよ!」

仁「ヒルダ姉ちゃん達まで!」

クリス「嫌、二人も無理だと思っよ」

エルシャ「フフツ、そうね」

ケンジ「タケル」

タケル「隊長…」

ケンジ「気持ちはわかる。だが、無理はするな」

タケル「分かっています。…ですが、何か物凄く嫌な予感がするんです」

ケンジ「超能力者の直感、か?」

タケル「はい…」

タケルさんは俯いてしまっています…。

ケンジ「確かに今後、お前にとって辛い未来を突きつけられるかも知れない。…だが、これだけは忘れるな。お前は一人ではない」

タケル「え…」

ケンジ「お前はギシン星人のマーズではなく、明神 タケル…
我々の仲間だ。何があっても私達がお前を守る」

タケル「ありがとうございます…！」

たえ住む星が違っても手を取り合える…。

ケンジ隊長の言葉…身に染みしました！

―宝多 六花だよ。

私は公園にいた少年が気になっていた…。

そのせいで響君からの電話も出なかった。

アンチ「…」

六花「あの…お腹空いてるなら、お弁当食べますか？」

アンチ「…」

すると、少年の持っていたスマホが鳴った。

少年はスマホを持ちながら、公園から立ち去った…。

―アンチだ。

新条 アカネから電話がかかってきたか。

アカネ『アンチ君、いいよ！やっちゃって！』

アンチ「…わかった。ハアアアアツ!!？」

そして、俺は怪獣態に変身する…。

―小田切 拓哉だ。

突然、響 裕太の腕から何かが鳴った。

裕太「えっ!?!? な、何これッ…!?!？」

音を気にして恥ずかしがる響 裕太。

…だが、その時、地響きが起こった。

裕太「か、怪獣…!?」

それと同時に窓を突き破り、サムライ・キャリバーが飛び込んできた。

サリア「キャリバーさん…!?」

カレン「け、結構大胆だね…」

キャリバー「じ、時間が…ない」

そう言い残し、サムライ・キャリバーは響　裕太と内海　将を担いで窓から外に飛び出してしまった…。

カレン「えっ…？ちよつと、私達は…!?」

サリア「…スルーみたいね…」

拓哉「取り敢えず行くぞ」

俺達三人も宝多　六花のジャンクショップへ向かった…。

ー響　裕太だよ。

キャリバーさんに担がれ、ジャンクショップに向かう。

途中、登校途中だった六花も捕まえて、俺達はジャンクショップに放り込まれた。

六花「あ…響君、おはよう…」

裕太「おはようございます…」

六花「あの…さっきさ…」

六花「何か言いたげだな…」

グリッドマン『裕太、また怪獣が現れた。急ごう！』

裕太「ああ！アクセス、フラアアツシュ!!」

内海「頼んだぜ、裕太！」

六花「(帰ってきてからでいつか…)」

俺はグリッドマンと一体化した…。

グリッドマン「裕太！被害が広がる前に倒すぞ！」

裕太「わかった！」

戦闘開始だ！

〈戦闘会話　グリッドマンVSアンチ〉

裕太「怪獣…！何度来ても俺が倒してやる！（人間が怪獣だなんて…そんな事、あるワケがない…！）」

戦闘開始から数分後の事だった。

アンチ「グリッドマン…！貴様は俺が倒してやる！」

グリッドマン「…!?？」

裕太「か、怪獣が…喋った…!?？じゃあ…この、怪獣は…！」

アンチ「喰らええええつ!!??」

グリッドマンは怪獣の攻撃を受ける。

グリッドマン「ぐっ…！??」

六花「な、なんか…押されてない…?？」

内海「裕太！しっかりしろ！」

裕太「人間は…倒せない…！」

六花「人間って…なんの話？」

内海「そ、それは…その…」

尚もグリッドマンはダメージを与えられていく…。

ークレナイ　ガイだ。

グリッドマン…何故か戦いに戸惑いを感じている…？

ガイ「何やってんだよ！」

オーブに変身するためにオーブリングを取り出すが、何者かの奇襲に遭い、攻撃を防いだ。

ガイ「…ジャグラー」

奇襲を仕掛けた犯人…ジャグラーを睨み、身構える。

ジャグラー「おいおい…。アレはあの怪獣とグリッドマンの戦いだ。イレギュラーなお前がそう何度も介入するのは筋違いってもんだらう？」

ガイ「イレギュラー…？お前、この街や現れる怪獣について、何か知っているのか？」

ジャグラー「さあな。…ただ言えるのは、この街も面白い事になりつつあるって事だな！」

そう言い残しながら、ジャグラーは消えた…。

―響 裕太だよ。

どうしたらいい…！

人間は…倒せないのに…！

六花「あ、あの…！この前みたいに剣に変身するやつ、やってください！」

キャリバー「わ、わかった」

このままじゃ…！

グリッドマン「しつかりしろ、裕太！仕掛けるぞ！」

裕太「…！」

グリッドマンは攻撃を仕掛けた…。

裕太「俺は…！俺は…！」

キャリバー「アクセスコード、グリッドマンキャリバー！」

巨大な剣に変身したキャリバーさんが現れた。

キャリバー「行くぞ、グリッドマン！」

グリッドマン「ああ…！」

グリッドマンは巨大な剣に変身したキャリバーさんを握る。

グリッドマン「電撃大斬剣グリッドマンキャリバー！！？グリッドオオオオツ…！」

キャリバー「キャリバアアツ…！」

グリッドマン&キャリバー「エエエエンドツ！！？」

アンチ「貴様の攻撃など…当たるものか！」

しかし、怪獣はグリッドマンの攻撃を避けた。

裕太「よ、避けられた…！？？」

アンチ「殺す…！」
今度は怪獣が攻撃を仕掛けてきた…。
アンチ「死ね！死ね、死ね、死ねえええっ!!?」
怪獣は全身を光らせ始める。
アンチ「トドメだああああっ!!?」
全身から無数の光弾を発射し、光弾はグリッドマンを襲う。
グリッドマン「グアアアアッ!!?」
光弾を受けたグリッドマンと俺の意識はそこで途切れた…。

―宝多 六花だよ。

六花「えっ…?どうなったの…?」

内海「…」

六花「何で、戻ってこないの…?響君も、キャリバーさんも…」

内海「負けた…?嫌…！」

―新条 アカネだよー！

遂に…遂にやったんだね！

アカネ「死んだ…死んだね。やった…やっと勝った…！やったアアアアアッ!!?あはははハハッ!!?」

これはアンチ君にご褒美をあげないとね！

―小田切 拓哉だ。

グリッドマンが…負けた…?

敗北したグリッドマンを確認しながら、宝多 六花の店に入る。
するとそこには俯く宝多 六花と内海 将の姿があった。

カレン「六花！内海！」

六花「…」

サリア「あれ…?裕太とキャリバーさんは…?」

もしや、二人は…！

内海「ふ、二人は…もう…！」
サリア「そ、そんな…！」

辺りに重苦しい空気が流れる…。
紅月カレンもサリアも…そして、俺もかける声を見つけれず
いた。

？「やつぱり…未来なんて変えられないんだ…！」

カレン「えっ…？」

突然、声が聞こえて、店の入口のほうへ視線を移すとそこには女性
が立っていた。

？「未来がわかっていたのに…！」

そう言い残すと女性はその場を走り去って行った。

カレン「ちよっ…?!?!？」

拓哉「俺が追う」

サリア「た、拓哉…?!?!？」

俺はサリアの制止を振り切り、先程の女性の後を追った…。

↓霧島 ハルカよ。

本当は知っていた…。

あの巨人が今日敗れる事を…。

でも、私にはどうする事も出来なかった…！

ナオミ「ねえ、貴女…。霧島 ハルカさんね？」

ハルカ「貴女は…？」

私に声をかけてきた女性の後ろには二人の男性がいた。

ナオミ「私達はこう言う者よ」

渡された名刺に名前と会社名が記入されていた。

ハルカ「サムシングサーチピープル…取材ならお断りしますが…」

ナオミ「大丈夫、記事にはしないから。私の個人的な興味だから…」

ハルカ「興味…？」

ナオミ「貴女の夢日記を見てね。実は私も幼い頃に不思議な夢を見
て、現在頻発する怪獣やウルトラマンオーブについて、調べているの。

だから、私は貴女に特別なシンパシーを感じたの」

ハルカ「そうなん、ですか…」

ナオミ「それで、いつから予知夢を見るようになったの?」

ハルカ「子供の頃から不吉な前兆をよく夢に見ていたんです。それが最近、怪獣の夢ばかり見るようになって…」

ナオミ「じゃあ、さっきの巨人の事も?」

ハルカ「…はい」

ナオミ「そういえば、今日も夢日記を更新していたわね。明日の朝。この街に怪獣が現れるって事よね?」

ハルカ「…でしようね」

ナオミ「…でしようねって…」

ジエツタ「それって凄い力じゃんか!」

シン「怪獣の出現を予知出来るなら犠牲者を減らせるじゃないですか!」

ハルカ「…無理」

ナオミ「え…?」

ハルカ「明日が見えても…明日を変える事なんてできない」

ナオミ「どう言う意味…?」

ハルカ「運命には逆らえないって事。こんな力があっても今までい
い事なんて何もなかった。…ナオミさん、あなたは違うんですか?」
ナオミ「私はね?小さい頃に光の巨人の夢を見たの。SSPを建ち
上げたのもその不思議な夢がキツカケなの。あの夢にどんな意味が
あるのか…それはまだわからないけど、ウルトラマンオーブと何か運
命的な繋がりを感じるの」

ハルカ「…」

ナオミ「ハルカさん、あなたの見る予知夢ももしかしたら誰かの運
命に関係があるんじゃないかな?」

ハルカ「…そろそろ失礼します」

ナオミ「え、ちよっ…!??」

私は逃げる様にその場を走り出した…。

ガイ「…」

それをある人に見られていた事にも気付かずに…。

―新条 アカネだよ！

私とアンチ君はレストランに来ていた。

アカネ「とうわけで！頑張ったアンチ君にご褒美だよー！」

中に入って、早速アンチ君はご飯を食べ始めた。

アカネ「昨日、内海って言うクラスの男子がさ…怪獣の正体が人間じゃないかって言ってたんだけどさ！ホント、的外れも良いところでさ…怪獣に正体なんてあるわけないのにねー。怪獣は怪獣なんだしー」
アンチ「俺も怪獣なのか？」

アカネ「うん、怪獣！一緒に朝ご飯を食べてくれる怪獣！」

ジャグラー「へえ…それはまた、ユニークな怪獣だな」

突然、真横に気配を感じて私は距離を取った。

そこにはスーツを着た男の人がいた。

同じくアンチ君もご飯を食べるのを辞めて、男の人を警戒する。

アカネ「誰よ、アンタ？」

ジャグラー「コレは失敬…。俺はジャグラス・ジャグラー…以後お見知り置きを」

アカネ「ジャグラス・ジャグラー…？あなた、人間じゃないの？」

ジャグラー「流星は怪獣を生み出して、この街を破壊している張本人…察しがいいな」

気づかれてる…！

アカネ「あなた…何者？」

ジャグラー「お前はグリッドマンの敵だった…。そして、俺はウルトラマンオーブの敵…みたいなもんだ」

アカネ「ウルトラマンオーブの…？」

ウルトラマンオーブの名前を聞いて、私は先ほどの警戒を解き、ジャグラーって人に食いついた。

アンチ「お前も怪獣なのか？」

ジャグラー「嫌？異星人ではあるがな」

異星人…。

アカネ「そのウルトラマンオーブの宿敵が何しに来たの？」

ジャグラー「怪獣の創造主に一度でも会いたいなと思つてな」

アカネ「あなたは怪獣を操ったりできるの？」

ジャグラー「嫌、力を使う事はできる。コレらを使つてな」

ジャグラー「って人は何かの機械と怪獣が描かれたカードを数枚出した。」

アカネ「何これ!??カード!??レッドキングにゴモラ!それにアストロモンスもいる!」

ジャグラーさんの持つているカードを奪い取る様に眺める私…。

アカネ「怪獣が描かれたカード…じゃあ、この機械にカードを読み込ませると怪獣の力が使えるって事!??もしかして、ウルトラマンオーブも似た様な機械で歴代のウルトラマンの力を使つてるって事!??」

ジャグラー「おい…」

興奮する私をジャグラーさんは止めようとするが、私は止まらず語り続ける。

アカネ「オーブの姿を見てて分かったんだ!だって、オーブの姿には初代ウルトラマンとティガ、タロウとメビウス!ゼロと…わかりにくかったけど帰りマンの姿を合わせていたもん!」

ジャグラー「帰りマン?」

アカネ「え、わかんない?じゃあ、新マン!」

アンチ「新しい饅頭か?」

アカネ「…ウルトラマンジャックだよ」

最近、ジャックって名前で浸透しすぎだよ。

ジャグラー「それよりも!…明日にはもつと面白い事が起きるぞ」

アカネ「面白い事?」

ジャグラー「明日、この街に怪獣が現れる。…ホーと言う怪獣がな」

アカネ「ホー…?それつてもしかして、硫酸怪獣のホー!??嘘!??」

誰かのマイナスエネルギーで生まれるの!??いつ!??何処で!??」
ジャグラー「…まあ、楽しみにしてるんだな」

そう言い残すとジヤグラーさんは消えた…。

アカネ「ああ…もつと怪獣のカードを見せて欲しかったのに…」

アンチ「ライバル…宿敵、か…」

取り敢えず、食事の続きをしようかな！

―霧島 ハルカよ。

ナオミさん達から離れた私は公園のベンチに座り、見た夢を思い出していた。

ウルトラマンオーブが怪獣に立ち向かい…そして、敗北した夢を…。

ガイ「平和だなあ…。明日この街に怪獣がまた現れるなんて、誰も知らない。こんな穏やかな日常が明日も明後日もずっと続けばいい。アンタもそう思わないか？」

この人って…！

ハルカ「ウルトラマンオーブ！」

それを聞いた男の人は飲んでいたラムネを吹き出した。

ガイ「い、いきなり何言い出すんだ！」

ハルカ「夢で見たの！明日、あなたがウルトラマンオーブになって、怪獣と戦う姿を！」

ガイ「そ、それはただの夢だろ？」

ハルカ「あなた、不思議なリングを持っていた。その力でウルトラマンになるんでしょ？」

ガイ「す、凄いな…。そ、そこまでお見通しなのか!?？」

ハルカ「じゃあ、本当にウルトラマンオーブなの!?？」

ガイ「ちよ、声がデカイ！」

ハルカ「すごい！あなたは救世主とか光の巨人って言っているけど、その正体は人間だったんだ！そりゃ、誰も気がつかないわけよね」

拓哉「…漸く見つけたぞ」

嬉しがる私にある人が声をかけてきた…。

「小田切 拓哉だ。」

「漸く先ほどの女性を見つける事が出来た。」

「ハルカ「あなたは…」」

拓哉「お前は先程、未来は変えられないと言ったな？どう言う意味だ？お前は何者だ？」

「ハルカ「それは…」」

「ガイ「拓哉？拓哉じゃないか」

拓哉「クレナイ ガイ…。何故ここに？」

「ガイ「お前こそ…」」

「ハルカ「さつき会ったの。…ねえ？デイシエイドって言うロボットのパイロットさん？」

「何…!?!?」

拓哉「何故、貴様がデイシエイドの事を…!?!?」

「ガイ「まあ、待て拓哉。話を聞いてくれ」

「それから俺はクレナイ ガイや女性…霧島 ハルカから色々な話を聞いた。」

「霧島 ハルカが予知夢を見て、夢日記と言うものをネットに挙げていた事…。」

「明日、怪獣が現れる事…。」

「予知夢でクレナイ ガイや俺の正体を知っている事…。」

「拓哉「では、グリッドマンの敗北も予知夢で…」」

「ハルカ「うん」」

「拓哉「そして、明日…。また違う怪獣がこの街に現れる…」」

「ガイ「その事でハルカ…アンタの力を借りたい」

「ハルカ「え？」」

「ガイ「明日現れる怪獣からこの街を怪獣の救いたいんだ。夢の事、詳しく聞かせてくれないか？」」

「ハルカ「…さつきも言ったけど明日が見れても明日を変える事はできないって」

「拓哉「どうして言い切れる？」」

「ハルカ「子供の頃から見るのは決まって不吉な夢ばかりだった。」

：初恋の男の子が転校して失恋した夢とか、パパとママが喧嘩して家族がバラバラになる夢とか：しかもそれは全部現実になった。：運命はあらかじめ決まってるんだと思いき知らされた」

運命は：あらかじめ決まっている…。

そうだ：だから、俺たち兄妹も…！

ハルカ「どうせ運命を変えられないんならこんな力、初めからなかったら良かったのに…」

ガイ「本当にそう思うか？」

ハルカ「え…」

ガイ「だったら、何故絵を描き続けてる？何故夢日記のサイトを始めた？アンタは心のどこかで信じてるんじゃないのか？その絵が：いつか誰かの運命を変えられるかもしれないって」

ハルカ「私は救世主じゃない！あなたの様に運命を変える力なんて…！」

ガイ「俺だって同じだ！救世主なんかじゃない…。かつて救えなかった生命だってある。その時に本当の姿も力も失っちゃった…」

クレナイ ガイ…。

ガイ「今は他のウルトラマンの力を借りて戦っている。過去は変えられない…けど、未来は変えられる。頼む、アンタの力が必要なんだ」

ハルカ「…」

誰にだって辛い過去がある、か…。

―宝多 六花だよ。

翌日、私達は響君の家にまで来ていた。

内海「裕太の家ここ。：押すよ」

内海君がインターホンを鳴らそうとしたけど…。

六花「待って！やっぱり、帰ろう…」

内海「はあ？何しに来たんだよ、確かめに来たんでしょ？」

六花「確かめて！…もし、響君がずっと前に死んだ事になったら？問川達みたいにな…。だから、誰にも聞かなかつた。みんなが響君の

事、忘れてたらって…」

サリア「六花…」

六花「怖いから…私は無理！」

「そう言うとは私は逃げる様に走り出した…」

カレン「六花！」

それを追う様にカレン達も走り出した…。

そして、家に戻ってきた。

六花「何でジャンクつかないの？」

内海「聞かれてもわかんねえよ。俺、パソコン詳しくねえし」

六花「キヤリバーさんがいたら直してくれるのに…」

内海「居ねえんだからしようがねえだろ」

六花「言ってみただけじゃん。しようがないとか言わないでよ」

内海「…何突っかかってきてんの？」

カレン「ちよっと、二人とも…!」

六花「昨日、グリッドマンが負けそうになった時、なんか誤魔化したでしょ？」

内海「何も誤魔化してねえし！説明したところでわかんねえだろうよ」

六花「やっぱりバカにしてるんだ。私の事…」

内海「何でそんな話になるんだよ！」

カレン「ちよっと、内海！」

サリア「六花も落ち着いて！」

内海「はあー、もうめんどくせえ！わかりました！…グリッドマン同盟は解散だよ」

解散…？

カレン「…それ、本気で言ってるの？」

内海「え…」

突然、カレンが内海君の胸ぐらを掴んだ。

カレン「本気で言ってるのかって聞いてんのよ！」

サリア「カレン！」

サリアがカレンを止めようとするがカレンは止まらない。

カレン「何？ちよつと嫌な事があったり、ムカついたから解散する？ふざけんじやないわよ！チームってのはね…そう易々と解散できるもんじやないのよ！」

カレン…。

カレン「怪獣を倒す為に…この街を守る為に…裕太とグリッドマンが戦って、六花がみんなの支えになって、内海が怪獣の弱点を教えて…そうやってグリッドマン同盟は戦ってきたんでしょ？…それなのに少し嫌な事があったからって解散？…内海、アンタ…遊びのつもりでグリッドマン同盟を建ちあげたの？」

内海「違う！…ってか、カレンに何がわかるんだよ！」

カレン「わかるよ…。あたしだって、前からずっと黒の騎士団に居たんだもん…。でも、組織のリーダーが追放された…。たった少しの疑惑をたてられただけで、アイツは…！追放された」

内海「…」

カレン「遊びじやないってんなら、解散なんて口にしないで！逃げないで！」

六花「ねえ、内海君。解散は違うじゃん…。だってそしたら、響君が帰ってくる場所がなくなっちゃうじゃん。普通に帰ってくるって思っていたから…戻ってきたら電話に出れなかった事を謝ろうと思っていたのに…」

内海「…六花…」

すると、辺りが激しく揺れ始めた…。

第13話 運・命

―霧島 ハルカだよ。

ガイさんに言われ、ネットで怪獣の事を言ったけど…結局デマだと言われた…。

やっぱり運命は…！

そこにガイさんと拓哉君が駆けつけてくれた。

拓哉「現れたか……！」

ガイ「奴は人間のマイナスエネルギーに反応して暴走する。早く止めないと……！」

ハルカ「待つて！あなたはあの怪獣には勝てない！」

拓哉「何……？」

ハルカ「あなたはあの怪獣に敗れて……やっぱり、明日は変えられない！運命には逆らえないの！」

ガイ「良いか、ハルカよく聞け。奴を暴走させているのはアンタ自身……その悲しみと絶望なんだ。運命には逆らえない……その思いこそがマイナスエネルギーの正体なんだ」

ハルカ「嘘よ……私がああ怪獣を……」

ガイ「嘘なんかじゃないしっかりしろ！アンタ自身の心から明日を闇に染めてどうする？アンタが夢に見た運命なんて……俺が変えてやる……拓哉、ハルカを頼む」

拓哉「クレナイ ガイ……！」

俺の制止を振り切り、クレナイ ガイはウルトラマンオーブに変身した……。

六花「昨日とは……別の怪獣……!!?」

内海「アレは硫酸怪獣ホー……!!?もしかして、俺達の悲しみがマイナスエネルギーに……!!?」

六花「頑張つて、ウルトラマンオーブ！」

オーブ「いくぜ……！」

ウルトラマンオーブは戦闘を開始した……。

〈戦闘会話 オーブVS初戦闘〉

オーブ「運命なんて変えてやる！その為にお前を倒す！」

怪獣と戦うオーブだが、少しずつ押され始めた。

ハルカ「やっぱり勝てない！運命を変えるなんて無理なのよ！」

尚もオーブは攻撃を受け続ける。

ハルカ「このままじゃ、ガイさんが…もうだめ…！」

拓哉「…霧島 ハルカ…よく聞け。確かに運命は簡単に変える事など出来ないのかも知れない。だが、変える為に戦う奴だっている。…アイツの様に」

ハルカ「…」

拓哉「目を背けるな！お前が目を背けてもアイツは戦い続ける…この街を守る為…そして、お前の為に！」

ハルカ「私の、為に…。運命は…変えられる…！変えなきゃ…！」
霧島 ハルカの雰囲気が変わった…。

ハルカ「負けないで…！ウルトラマンオーブ！」

それを聞き、オーブは怪獣を吹き飛ばした…。

ー宝多 六花だよ。

オーブが押されてる…。

カレン達も出撃の為にこの場から居なくなっていた。

内海「このままじゃオーブが…！」

すると複数の人達が店に入って来た。

ボラー「あー、はいはいはい。いかにもって感じの店だな」

六花「…今日、お店休みなんですけど…」

マックス「それは困るな。此処が閉まっていたら我々がグリッドマンを支援できない」

六花「グリッドマン…？」

な、何なのこの人達…。

ボラー「てか、キャリバーは何処だ？此処で待ち合わせのはずだろ？」

内海「あつ…キャリバーさんは…死にました…」

マックス「キャリバーは死んでいない。当然グリッドマンも」

六花「え…じゃあ響君も!?？」

ボラー「誰だよ、それ」

内海「俺の友達です！」

ヴィット「友達なら…本人に聞いてみたらいいんじゃない？」

内海「え…聞いてみたら…どうやって？」

マックス「君は友人の事を初対面の相手に尋ねるのか？連絡手段ならいくらでもあるんじゃないのか？」

六花「あつ…スマホで電話してみる！」

スマホで通話をかけると響君が出た。

裕太『もしもし、六花？』

六花「響君、今どこなの？」

裕太『何処って…何処だろ』

ボラー「おーい、キャリバー。いるんだろ？」

キャリバー『ボ、ボラーか…』

ボラー「一度戻って来いよ」

キャリバー『わ、わかった…』

すると、ジャンクからキャリバーさんが出て来た。

内海「キャリバーさん！」

マックス「グリッドマン…我々は集まった。もう一度戦えるな？」

グリッドマン『勿論だ』

すると、ジャンクがついて、グリッドマンが現れた…。

―新条 アカネだよ。

アレクシス『アカネ君、残念なお知らせだ。あのお客様が生きていた』

アカネ「嘘!??グリッドマンが!??」

アレクシス『だが、また楽しむべ良いじゃないか。その為の怪獣だらう?』

アカネ「わかった。…アンチ！」

私はアンチに連絡を送った…。

「響 裕太だ！」

俺達は再び戦いの場に立った。

ハルカ「アレは…あの時の巨人…」

拓哉「グリッドマン…！響 裕太、生きていたのか…！」

オーブ「グリッドマン！無事だったのか！」

グリッドマン「心配をかけてすまない、オーブ」

すると、昨日の怪獣が現れた。

アンチ「グリッドマン！今度こそ消えてもらう！」

紫の怪獣の出現の隙を突き、ホーという怪獣がオーブの背後に出現した。

グリッドマン「…！オーブ！」

ハルカ「後ろよ！避けて！」

すぐさまオーブは反応し、ホーの攻撃を回避した…。

ハルカ「運命が…変わった…！」

裕太「あの…ウルトラマンオーブ！」

オーブ「何だ？」

裕太「もし…戦う相手が人間だった場合…どうしますか？」

オーブ「人間とは戦いたくない…。だが、人間が人間の手で誰かを傷つけるというなら…俺達は戦わなければならない」

裕太「人間が、人間の手で誰かを…」

オーブ「何も生命を奪うだけが戦いじゃない。相手を止めるのも立派な戦いだ」

裕太「殺すんじゃないくて…止める…！」

アンチ「死ぬ死ぬ死ぬエー!!？」

紫怪獣が迫って来た…！

内海「アイツ、やっぱり早い…！」

マックス「私が行こう。そのまま行け、グリッドマン！」

グリッドマン「わかった！」

グリッドマンは攻撃を仕掛けた…。

裕太「みんなを守る為に…俺は！」

マックス「アクセスコード、バトルトラクトマックス！さあ、行くぞ、グリッドマン！」

グリッドマン「ああ！」

突然、装甲車が現れてグリッドマンと合体した。

グリッドマン&マックス「剛力合体超人、マックスグリッドマン！超電撃、キイイック!!？」

高く跳躍したグリッドマンは飛び蹴りを怪獣に浴びせ、グリッドビームの体制に入った。

マックス「決めるぞ、グリッドマン！」

グリッドマン&マックス「マックスグリッドビイイイイム!!？」

アンチ「グアアアアッ!!？」

強化されたグリッドビームを受け、怪獣は吹き飛ばされた…。

アンチ「な、何だと…!!？」

オーブ「やるじゃないか、グリッドマン！」

グリッドマン「これなら行ける…！裕太！」

裕太「うん！行こう、グリッドマン、オーブ！」

すると、ギシン帝国のロボットや戦闘機、邪悪獣が現れた。

カッチ「手助けに来たぜ！」

アカネ「ちよつと、遅いよ！」

バレン「こちらにも事情というものがあるのですよ」

カッチ「というわけで行くぜ？怪獣さんよ！」

アンチ「好きにしろ！だが、グリッドマンは俺が倒す！」

バレン「その執念、見事ですわ」

カッチ「心配すんな！俺達はお前の邪魔をする相手だけを倒すからよ！」

オーブ「ギシン帝国は俺達だけに仕掛けてくるみたいだな」

グリッドマン「あの怪獣と手を組んでいるというのか…？」

六花「でも、コレってヤバくない？」

内海「ああ、数だったらこっちが圧倒的に不利だ！」

オーブ「…嫌、来てくれたみたいだ」

現れたのは…カレン達か！

そして、戦艦からロボット達が出撃してきた。

サリア「グリッドマンがいるって事は…無事なの、裕太！」

裕太「うん！俺もキャリバーさんもグリッドマンも無事だよ！」

カレン「もう、心配したんだから！」

サリア「それよりも聞いて、裕太」

裕太「サリア…？」

サリア「私がかつて、ドラゴンと戦っていたの。ドラゴンを倒したら、その分の報酬としてお金を貰って生活していた」

裕太「ドラゴン…」

サリア「でも後にそのドラゴンの正体が別の世界の人間ってわかったの」

裕太「ドラゴンが…人間…!?？」

サリア「私は…私達は知らなかったとはいえ、人を殺していた…でもね？そのドラゴンを倒さないとみんなが危険に晒されていたのは事実なの」

裕太「…」

サリア「人殺しになれなんて言わない。でも、あなたには誰かを守って欲しい…。その為の力があるんだから…」

裕太「…大丈夫だよ、サリア」

サリア「え…」

裕太「俺はもう迷わない！誰かを守る為…あの怪獣を倒す！」

カレン「強くなつたじゃない、裕太！」

サリア「(コレで良いのよね？アレクトラ…)」

バレン「来ましたわね、マーズ！」

タケル「バレン！カッチ！お前達も復活していたのか！」

カッチ「そうだ！貴様を地獄に叩き落とす為に俺達は舞い戻ってきたんだ！」

タケル「俺は負けない！何度だってお前達を倒す！」

仁「所で何で、デイスエイドは出撃していないんだ？」

ケンジ「夏華、何をしている!?？」

夏華「それが…まだリーダーが戻って来ていないんです！」
ナオト「アイツ、こんな時に何やってんだよ！」

―小田切 拓哉だ。

ハルカ「ロボット部隊も出てきた…」

拓哉「…」

ハルカ「行くの？」

拓哉「ああ。お前が変革の意志を見せたのに俺だけ行かないのは筋が通っていない」

ハルカ「ふふっ、頑張っつてねお節介さん？」

拓哉「言ってる。…済まない夏華、指定した場所まで来てくれ」

そう言い残し、俺は走り出した…。

？「…オセツカイ…」

そして、俺はデイスエイドに乗り、戦線に現れる。

アキラ「もう！遅いよ拓哉！」

リー「用事は済んだのか？」

拓哉「ああ」

ヒルダ「それならキッチリ働いて貰うぜ！」

戦闘開始だ。

〈戦闘会話　タケルVS初戦闘〉

タケル「（この嫌な予感…一体なんなんだ…？何かもうじき現れる…？）」

〈戦闘会話　オーブVS初戦闘〉

オーブ「ハルカは運命に抗った…。俺も負けるわけにはいかねえな！」

〈戦闘会話　グリッドマンVS初戦闘〉

グリッドマン「行くぞ、裕太！」

裕太「ああ！この街は俺が守る！」

〈戦闘会話　拓哉VS初戦闘〉

夏華「リーダー、先程まで何処にいたんですか？」

拓哉「そこまで気にする程ではない。…少し、運命に抗う少女と共にいただけだ」

夏華「しよ、少女…!? その方とは一体…!?」

拓哉「話は終わりだ。戦闘を開始するぞ…！」

戦闘開始から数分後の事だった…。

タケル「…!?? こ、この力は…!??」

青葉「どうしたんですか、タケルさん!??」

コーネリア「何か来るぞ！」

現れたのは…ロボット…?

ロゼ「あ、アレはガニメデス…!?? も、もしかして…！」

タケル「マージ…! 兄さん…なのか？」

マージ「久しいな、マーズ! そう、貴様の兄マージだ！」

タケル「どうしてだ…? どうして兄さんがギシン帝国の奴等と…！」

マージ「何を分かりきった事を言っているんだ? 俺はギシン帝国の

一員…そして、裏切り者のお前を倒す！」

タケル「まさか、兄さんはまた操られて…!??」

スザク「彼は何者だ？」

ロゼ「彼の名はマージ…。マーズの…実の兄だ」

ロザリー「何だって!??」

クリス「でも、どう見ても敵だよ！」

ディオ「ギシン帝国に操られている可能性があるという事か…!」
ベルゼブ「だが、衝撃を与えれば洗脳が解かれるやも知れん！」

フアルゼブ「タケル！その役目はあなたがするのよ！」

タケル「はい！俺は…今度こそ兄さんを助ける！」

アカネ「あの人自ら出てくるなんてね」

アレクシス『それほど、ギシン帝国も本気という事だろうねえ』

ハルカ「みんな！負けないで！」

アカネ「それにしてもさつきからワアーワアー五月蠅いなあ！いい加減耳触りだよ！」

…！霧島 ハルカの周りに怪獣が…!??

拓哉「まずい…！」

オーブ「ハルカ！」

ハルカ「こんなので…負けないから！」

アカネ「何が負けないから…だよ。お節介な正義の味方は迷惑なんだよ！」

…「メイワク…オセツカイナ……セイギノミカタハ…メイワク…」

このままでは間に合わない…！

…だが、突然現れた影が霧島 ハルカの周りにいた怪獣を全て倒した…。

ハルカ「え…」

拓哉「何が…起こった…？」

アカネ「え…どうして怪獣達がやられたの!?？」

そして、その影が姿を現す。

オセツカイザー「ハーツハツハツハツハ！正義の味方！オセツカイザー、参上！」

ヤール「何だありや？」

フロム「物凄く濃いキャラが出てきたね…」

エルシヤ「アレもグリッドマンと関わりがあるのかしら…？」

裕太「グリッドマン、あの人が知ってる？」

グリッドマン「いいや、私は知らない」

仁「あー！オセツカイザーじゃないか！」

ジノ「オセツカイザー…？」

タイダー「お節介な正義の味方は迷惑という言葉に反応して生まれ
た邪悪獣ダ！」

ミカ「え、邪悪獣なんですか!?!?」

飛鳥「まさか、オセツカイザーまで出てくるなんてな」

吼児「もしかしたらギシン帝国の奴等がアークダーマを落としたの
かも知れないね」

アカネ「何なのよ…何なの、あのふざけた奴！」

アレクシス『うーん、何か親近感溢れる声をしているねえ』

オセツカイザー「ハーツハツハツハ！オセツカイザー！」

夏華「えつと…あの言葉しか発せないでしょうか？」

タイダー「ワシらに協力するみたいダ！」

一鷹「邪悪獣なのに味方って…よくわからないな…」

オーブ「成る程な。つまり、お前もこの街を守るヒーローってわけ
だ？」

グリッドマン「ならば、共に戦おう！オセツカイザー！」

オセツカイザー「ハーツハツハツハ！オセツカイザー！」

オーブとグリッドマンとオセツカイザーが並んだか…。

それにしても…オセツカイザーのテンションには何か調子を狂わ
せてしまう…。

マーグ「いつまでも茶番を…！マーズ！決着をつけてやるぞ！」

タケル「兄さん！俺がアンタを止める！」

アンチ「グリッドマン！今度こそ、お前の息の根を止めてやる！」

裕太「あの時と違って、今はたくさんの仲間がいるんだ！俺達はも
う負けない！」

戦闘再開だ。

〈戦闘会話　オセツカイザーVS初戦闘〉

オセツカイザー「フン…！フハハハハツ!!?」

タイダー「貴様等には負けないぞ…！つと言っているようですダ」

ファルゼブ「何故、通訳の様になっているの…?」

〈戦闘会話　タケルVSカッチ〉

カッチ「あの時の恨み…！此処ではらす！」

タケル「もう誰も傷付けさせない！ファイナルゴッドマーズを使わずともお前を倒してみせる！」

ゴッドマーズの攻撃でコールガッチはダメージを受けた。

カッチ「俺の力はこんなものではない！覚えている、マーズ！」

コールカッチは撤退した…。

タケル「カッチ…。やはり、強力な相手だ…！」

〈戦闘会話　タケルVSバレン〉

バレン「あの頃の私と同じだと思わない事ね！」

タケル「俺の超能力だって、あの頃より格段に強化されている！お前にだって負けないぞ、バレン！」

ゴッドマーズの攻撃でバキュームにダメージを与えた…。

バレン「まだ私の力ではマーズには遠く及ばないというの…？これからだわ！コレからあなたを…！」

バキュームは撤退した…。

タケル「バレン…。彼女はまた戻ってくるのかもしれない…！」

〈戦闘会話　タケルVSマーズ〉

タケル「兄さん！本当の心優しい兄さんに戻ってくれ！」

マーズ「しつこいぞ、マーズ！俺を止めなければ俺を倒してみろ！」

タケル「やはり、そうするしかないのか…！」

〈戦闘会話　ケンジVSマーズ〉

ロゼ「マーズ様…！」

マーズ「ロゼ…。お前が地球人達と共に生きていたとはな」

ロゼ「幾らあなたであろうと私は……！」
マーグ「いいだろう。その地球人達と共に挑んでこい！」

〈戦闘会話　ベルゼブVSマーグ〉

マーグ「ほう、ジャーク帝国のベルゼブ……。いつの間にか姿を消したと思えばマーズ達といたとはな」

ベルゼブ「ギシン帝国の戦士、マーグよ！あの頃の我々と同じだと思ふな！」

タイダー「今では頼もしい仲間もいるダ！」

ベルゼブ「そういう事だ。覚悟しろ、マーグ！」

ゴッドマーズの攻撃でガニメデスはダメージを負った……。

マーグ「くっ……！まさか、俺がマーズよりも劣るとも言うのか……

!?？」

タケル「兄さん！もう止めよう！兄さんは操られているんだ！」

マーグ「黙れ、マーズ！俺はまだ負けていない！今度はお前に勝つ

てみせる！」

そう言い残し、ガニメデスは撤退した……。

ロゼ「マーグ様……マーズ……」

タケル「兄さん……どうしてなんだ……！」

〈戦闘会話　グリッドマンVSホー〉

グリッドマン「この怪獣……今まで戦ってきた怪獣とは何か違う……？」

裕太「どう言うことなの、グリッドマン……？」

グリッドマン「すまないが、上手く言葉にはできない……」

内海「裕太！あの怪獣は硫酸怪獣ホーだ！口から出す硫酸に気をつけろ！」

裕太「わかってる！さあ、行くぞ！」

〈戦闘会話　オーブVSホー〉

オーブ「ホー！これで終わりだ！覚悟しろ！」

〈戦闘会話　拓哉VSホー〉

拓哉「次は俺が彼女に見せる番だ…。悪いが倒されてもらう…！」

オーブの攻撃でホーは倒された…。

裕太「やった！」

オーブ「次はお前の番だぜ、グリッドマン！」

グリッドマン「了解だ、オーブ！」

〈戦闘会話　オセツカイザーVSアンチ〉

オセツカイザー「オセツ…カイザー…！」

アンチ「何度も名前を呼ばなくてもわかっている！グリッドマンとの勝負を邪魔するなら、お前から消えろ！オセツカイザー！」

〈戦闘会話　オーブVSアンチ〉

アンチ「ウルトラマンオーブ…！俺の邪魔をするな！」

オーブ「悪いが邪魔すると言われて黙る俺じゃないんだ。お前が怪獣なら野放しには出来ないんでな！」

〈戦闘会話　グリッドマンVSアンチ〉

グリッドマン「お前は…人間なのか…!?？」

アンチ「人間…？ふざけるな！俺は怪獣だ！俺はお前を倒すために生まれた！お前を抹殺する事が俺の使命だ！」

グリッドマン「ならばもう迷いはない！私がお前を倒す！」

〈戦闘会話　カレンorサリアor拓哉VSアンチ〉

アンチ「お前達…俺の邪魔をする気か！」

サリア「ええそうね。今度は私達も相手になるわ！」
カレン「裕太を痛めつけてくれた借りも返さないかね！」
拓哉「怪獣は怪獣らしく倒されろ」

グリッドマンの攻撃で怪獣はダメージを負った…。

アンチ「クソツツ…！グリッドマン…お前が憎い…！」

そう言い残すと怪獣は忽然と姿を消した…。

スザク「消えた…？」

コーネリア「倒した…ワケではないようだな」

全ての敵を倒した俺達…。

グリッドマンは消え、オーブも空高く飛び去った…。

夏華「ギシン帝国が本格的に動き出しましたね…」

青葉「タケルさん…」

タケル「(兄さん…)」

俺達は帰艦した…。

―池波 夏華です。

帰艦した私達はシグナスの格納庫に集まりました。

リーダーとサリアさん、カレンさんは響 裕太さんの元へ向かった
ようです。

タケル「…」

エルシャ「タケル君…大丈夫かしら…」

青葉「俺…ちよつと行ってくる！」

ディオ「待て、青葉。今は一人にさせた方がいい」

青葉「何で止めるんだよ、ディオ!?？」

ディオ「実の兄と戦ったんだ。今は一人にして休ませた方がいい」

青葉「わかった…」

仁「それにしてもオセツカイザーはこつちに来たんだな！」
アリス「小さくも大きくもなれるって便利ですね！」

一鷹「あまり会話にならないけどな」

オセツカイザー「ハーツハツハツハ！」

タイダー「えつと…私はこれからも君達と戦うぞー！…と言っているみたいですよ」

コーネリア「…ま、まあ戦力が増える事は望ましい事だ」

夏華「これからよろしくお願いしますね！オセツカイザーさん！」

オセツカイザー「フハハハツ！」

リー「取り敢えず、今艦長とゼロが別働隊の奴等と話してるみたいだ。指示があるまで俺達は部屋で休もう」

私達はそれぞれの部屋へ戻りました…。

ー明神 タケルだ。

みんなが格納庫から居なくなり、俺は深く息を吐いた。

…また、兄さんと戦う事になる…！

ロゼ「マーズ…」

タケル「ロゼ、残っていたのか…」

ロゼ「私は決心したわ。あの方を止める。そして、必ず救い出すと」

ロゼも兄さんの事を…！

ロゼ「実の兄と戦うと言う事の辛さはわかるわ。でも、あの方を止められるのは私達しかいない…違うかしら？」

タケル「…そうだな。確かにそうだ。ありがとう、ロゼ！少し挫けそうになっていた」

ロゼ「それでこそ貴方よ、マーズ」

そうだ…！倒すのではなく、救い出す…！あの時の様な悲しみはもう沢山だから…！

ー響 裕太だよ。

戦いを終えた俺は戻ってきた。

内海「裕太！おかえり！」

六花「生きてるなら連絡しなよ！私…響君の電話出なかった…ごめん！」

そう言い残すと六花は店の奥へと消えていった…。

ボラー「めんどくさそうな女だな…」

ヴィット「うん…」

キャリバー「電話は生命と繋がっている」

裕太「つとと言うか…なんか人多くない？」

グリッドマン『彼等は新世紀中学生…。私と君達の味方だ』

裕太「味方…？」

内海「ちゆ、中学生…？」

マックス「響 裕太。これからも共に闘おう」

裕太「…はい！」

すると、拓哉達が来て、案の定驚かれた…。

―新条 アカネだよ。

私は目の前に立っているアンチに向かって、弁当を放り投げた。

アンチ「…」

この役立たず…！

雨に打たれるアンチも目に暮れず私は家へと戻っていった…。

ジャグラ―「あーあ。怪獣虐待、だな」

―倉光 源吾だよ。

僕とゼロ君は別働隊と連絡を取り合った後、ケンジ君やレーネ君と共に通信について話し合う事にした。

ケンジ「別働隊の皆も厳しい戦いを強いられた様ですね」

ゼロ「そして、石神社長の提案で部隊を全て戻す様だ」

レーネ「それで、艦長。お話とは？」

倉光「もう一つ、石神社長の提案があつてね。別働隊が合流すると

僕達、相当な規模の組織となるんだ」

ゼロ「そこで我々だけの部隊を結成しようという事らしい」

ケンジ「つまり、クラツシャー隊などではなく、我々一つの組織という事ですね」

倉光「レーネ君とケンジ君にも新たな部隊名を考えていて欲しいんだ。…これが何かと苦勞していてね」

レーネ「了解しました」

大きな組織…。

なんて言う名前にしようかな…。

―小田切 拓哉だ。

翌日…。俺とクレナイ ガイは公園にいた。

隣にいる俺に構わず、クレナイ ガイはハーモニカを吹く。

ハルカ「素敵な曲ね」

ガイ「…おお、ハルカ！元気にしてるか？」

ハルカ「うん。…あなた達の未来を夢で見たの。…とても不吉な夢」

拓哉「不吉な…夢…？」

ハルカ「でも心配しないで！あなた達が教えてくれた通り、どんな運命もきつと乗り越えられるから！…あなた達ならきつと」

ガイ「ソイツは頼もしいな」

ハルカ「ガイさんも拓哉君もしっかりね」

拓哉「ああ。お前もな」

すると、霧島 ハルカは俺とクレナイ ガイの耳元である言葉を呟いた。

ハルカ「ウルトラマンオーブさんとお節介さん」

そう言い残すと霧島 ハルカは歩き去ろうとした。

ガイ「ハルカ！もしもし明日を見失ったら、探せばいい。あんたの明日はそのスケッチブックみたいに真っ白だ」

ハルカ「明日を探す…素敵な言葉!」

拓哉「霧島 ハルカ…。最後によく聞け」

ハルカ「？」

拓哉「お節介はやめろ。せめて、デイシエイドのパイロットと呼べ」
ハルカ「フフツ、はい!」

そう笑みを浮かべ、霧島 ハルカは歩き去った…。

ガイ「ハルカには敵わない様だな、お節介さん」

拓哉「黙れ」

夏華「あ!見つけましたよ、リーダー!」

そこへ夏華やサリア達や響 裕太達が歩いてきた。

カレン「やっと見つける事が出来たわ…」

サリア「そろそろこの街を後にするわよ、拓哉。支度して」

ガイ「何だ、お前もこの街を出るのか？」

拓哉「…その口ぶりだと、お前も出る様だな」

ガイ「ああ。どうせ地球は丸いんだ!また何処かで会うだろうな」

裕太「あ、あの!名前…聞いてもいいですか？」

ガイ「俺の名はガイ。…クレナイ ガイだ!」

クレナイ ガイは名を名乗ると響 裕太の肩に手を持ち、耳元で何

かをつぶやいた。

ガイ「この街を頼んだぜ?…裕太」

裕太「…はい!」

響 裕太の返事を聞いたクレナイ ガイは少し微笑み、ハーモニカを吹きながら、その場を歩き去った…。

拓哉「相変わらずの奴だ…」

夏華「リーダー。彼の方とはどう言う知り合いですか？」

拓哉「言わなかったか?俺の数少ない友人、だ…」

夏華「友人、ですか…」

六花「それより!サリア達、元気でね」

内海「この街は俺達に任せろ!」

サリア「ええ、頼んだわ」

カレン「グリッドマンや新世紀中学生のみんなにもよろしく言つと

いてね」

裕太「また会おうね、拓哉！」

拓哉「ああ。負けるなよ、響 裕太……。嫌、グリッドマン同盟」
彼等なら大丈夫だろう……。

俺達に負けていない絆が存在しているのだから……。

女性主人公

プロローグ 目覚める巨神

《2年前…日本暦5年、日本エリア》

赤い地球…。

「私は井崎いざき 萌香もえなよ。私は過去に起きたある事件をきっかけに妹の井崎 萌菜と従姉妹でお姉ちゃんの存在の井崎 波美と一緒に世界を旅していた。

ある物とある人を探すために…。

私達は波美姉の所持品である輸送戦闘支援機、ライノスに乗っていた。

波美「萌香、萌菜、もう少しで遺跡につくわよ!」

萌菜「わかったよ、波美姉さん」

萌香「お姉ちゃんが研究のために使っていた遺跡…波美姉は何も聞いていないの?」

私と萌菜のお姉ちゃん…。井崎 萌実…。

ある研究をしていたけど、2年も前にある事件で亡くなってしまったんだ…。

私達は萌実姉の部屋にあった資料を全て読んで、このライノスや今から向かう遺跡の存在を知った。

…遺跡に行けば、お姉ちゃんが何の研究をしていたのか、掴めるかもしれない。

波美「萌実が死んでから4年…。あの日から私達の全てが変わったわ。…萌香、気負いすぎない様にね」

萌菜「大丈夫だよ、波美姉さん。萌香姉さんの側には私がついていくから!」

萌香「波美姉、萌菜…。ありがと!それから大丈夫だよ…萌実姉の分まで生きるって、決めたから」

私の言葉を聞いて、波美姉は安心した様に笑った。

波美「…着いたわよ」

私と萌菜は窓から下を見下ろすと立派な遺跡があった。

ここで萌実姉は研究を…。

ライノスを着陸させて、私と萌菜は降りた。

波美「私はライノスで待機するわ。何かあったら、連絡するのよ」

萌菜「うん、波美姉さん」

萌香「行ってきます!」

私達は遺跡の中へと入っていった。

萌香「すごい遺跡だねえ…」

萌菜「この遺跡もセカンドインパクトや翔龍クライシスの影響で生まれたみたいだよ」

セカンドインパクトと翔龍クライシス…。

どちらも世界を大きく変えた現象…。

今から13年前に起こったセカンドインパクト…具体的に何が起こったのかはわからないけど、これにより、全世界の海が赤くなって、海洋生物がほとんど絶滅した事件…。

そして、翔龍クライシス…中国の翔龍で起こった正体不明の爆発…そののせいでセカンドインパクトから復旧しようとしていた世界は再び、大ダメージを負ってさらには世界に謎の壁…オーロラウォールが出現して、世界を複数のエリアに分けられてしまう。

エリアはそれぞれ、私たちの住む日本エリア、そして螺旋エリア、魔法エリア、アーストエリア、Z i (ズイー) エリア、翔龍エリア、機竜エリアの七つのエリアに分かれてしまう。

勿論他エリアとの通信もできず、世界はそれぞれのエリアに孤立してしまう。

日本エリアでは復旧の為にクリーンエネルギー、エネトロンが使われている。

だけど、この地球にも数年前に出現したフェストウム、正体不明の飛翔体、ザイ災に襲われている。

日本エリアの人々は多くの厄災に立ち向かいながら、生きている。

萌菜「姉さん、どうしたの?」

萌香「えっ…？な、何でもないよ！」

考え事をしていた表情が険しかったのか、萌菜が心配した表情で話しかけてきた。

今とはとにかく、この遺跡の調査をしないと…！

暫く歩いているとある廊下を見つけた。

廊下の壁には古代の文字が描かれている。

萌香「…な、なんて書いてるか、読めない…」

萌菜「もう、姉さん…あれ程古代文字について勉強してって、言つたのに…」

萌菜が呆れた様にため息を吐くと、古代文字にをそつとなぞりながら、読み始めた。

萌菜「古代に記されし、巨神…。ここに眠る。―巨神を操る者、悪しきものならば、巨神は悪となり、善あるしきものならば、巨神は善となる。…覚悟のない者ここを通るべからず…。だつて…」

「古代に記されし巨神…。」

これが萌実姉が研究していた物なのかな？

萌香「巨神は人によつて、正義か悪かで変わるんだね…。じゃあ、奥に行こ」

私達はさらに奥へ進み、最深部へと辿り着いた。

そして、その最深部には…悪魔の様な姿をして、黒き光沢が輝く、巨大な何かがあった。

見たところ、ロボットの様だけど…これが記されていた巨神…？

萌香「巨神つて、ロボットなの…？」

萌菜「そ、そうみたいだね…」

あ、波美姉に通信しないと。

波美『どうしたの、萌香？何かあった？』

萌香「遺跡の最深部にロボットがあったの。古代に記されしと書いてあった巨神だよ」

波美『…古代に記されし巨神…。まさか、メルガラム…？』

メル、ガラム…？

萌菜「知っているの？波美美姉さん」

波美『萌実から渡された資料の中にそんな名前があったわ。…何とか持ち出せない?』

萌香「持ち出すって…こんな運ぶ事は出来ないよ!」

波美『それもそうね…。っ…?!? 複数の熱源反応…?!?』

萌菜「波美姉さん、どうしたの?!?」

波美『2人とも、早くその遺跡を出て!…ここに複数の熱源反応が接近しているの!』

熱源反応…?!?

萌香「新国連の人達…?!?」

波美『いえ…違うわ!』

私と萌菜はライノスから送られてきた映像を見るとそこには複数の骸骨の様な機体がいた。

量産機…?!?

まさか、あの人の組織の…!

すると、複数の量産機がライノスに砲撃を放った。

波美『くっ…! 撃ってきた…?!?』

萌菜「波美姉さん!」

どうしよう…このままじゃ波美姉が危ない…!

萌香「ダメ! 波美姉、そこから逃げて!」

波美『そんな事、出来るわけじゃないでしょう?!? ここを離れば、あなた達に危険が及ぶのよ!…私は萌実と約束したのよ…あなた達を必ず守るって…!』

萌香「波美姉…」

波美『キヤアアアツ!!?』

さらに敵機がライノスを襲う…!

萌菜「ど、どうするの、萌香姉さん?!? このままじゃ、波美姉さんが!」

…どうして…また私は何も出来ないの…?

また…大切な家族を失ってしまうの…?

そんなの…そんなの…そんなのダメ!

…そうだ!

私はメルガルムというロボットを見る。

萌香「メルガルム…私はあなたが求める覚悟が足りないかも知れない…。でも、お願い！波美姉を助けたいの！…少しだけでも…今回だけでもいいから…力を貸して！」

私の叫び声が遺跡中に響くと私の叫びに呼応したのか、メルガルムの目が輝きだし、光を纏う。

萌菜「う、動いた…!??きやあつ…!??」

突然、メルガルムの額から光が放射され、それを浴びた萌菜はメルガルムに吸い込まれてしまう。

萌香「も、萌菜…!??きやあつ！」

今度は私も吸い込まれ、目を開けると私と萌菜はメルガルムの中…所謂操縦席に座っていた。

メルガルムが…私達を認めてくれたの…?

…考えるのは後！今は波美姉を助けないと…!

萌香「…それで、どうやったら動くの…?」

考えたら、メルガルムの動かし方なんて、わからないじゃない!

萌菜「…姉さん。動けと頭で思えば、メルガルムは動くよ」

萌香「えっ…?わ、わかった…」

動けっ…!

頭でそう思った時、メルガルムが少し動き出した。

萌香「動いた！」

萌菜「姉さんと私はメルガルムと一つになっているの。メルガルムが私達で私達がメルガルム…。姉さんがメルガルムになったと思えばいいよ！」

自分の身体のように動く…それなら!

萌香「行くよ…メルガルム！」

メルガルムは遺跡を突き破り、外に出た…。

―井崎 波美よ。

ライノスは敵機から攻撃を何度も受ける。

波美「このままじゃ、やられる…！」

萌香達を残して死ぬわけにはいかない…！

そう思っているのと遺跡が突然、揺れ始める。

波美「な、何…?!?!？」

そして、遺跡を突き破って、巨大ロボットが現れた…。

あれが…メルガム…。確かに資料通りね…。

って、どうしてメルガムが動いているの…?!?!？

萌香と萌菜は…?!?!？

萌香「無事?!?!?波美姉！」

通信…?!?!?メルガムから…しかもこの声って…！

波美「萌香?!?!?萌香なの?!?!？」

萌菜「大丈夫、波美姉さん?!?!？」

波美「萌菜まで…?!?!？」

どういう事なの…?!?!？

ー井崎 萌香だよ。

や、やっぱり波美姉に驚かれちゃったか…。

波美「2人とも、どうしてメルガムに乗っているの?!?!？」

萌香「せ、説明するから、落ち着いてよ、波美姉！」

萌菜「今はここの敵を倒さないと…！」

波美「わ、わかったわ…！でも、操縦できるの?!?!？」

萌香「何とかね…！波美姉は援護よろしく！」

萌菜「行こっ！萌香姉さん！」

萌香「うん…！初めてだけど、何とかやってみせる！」

戦闘開始よ！

〈戦闘会話 萌香VS初戦闘〉

萌香「よーし！行くよ…！それより、萌菜。何か武器はないの？」

萌菜「…ないよ」

萌香「…は？嘘っ!?!?どうして!?!?」

萌菜「知らないよ！素手で戦うみたいだよ。その代わりに、エネルギーを纏った攻撃ができるみたいだけど」

波美「じゃあ、援護は任せて！トドメは任せるから！」

萌香「了解！三人でこの場を乗り切るよ！」

私達は全ての敵を撃墜させたよ。

波美「増援は…ないようね」

萌菜「ひとまず、整理しようよ」

萌香「そうだね。…波美姉にも説明しないとイケないし…」

私達はそれぞれ機体から降り、波美姉に遺跡の中で起こった話を話した。

波美「私を助けたという覚悟が…メルガルムを目覚めさせたというの…?」

萌香「そ、そうみたい…」

波美「原理が理解できないけど…ありがとね、2人とも」

萌菜「波美姉さんが無事でよかったですよ！」

波美「それで…これからどうする?」

萌香「あの人の追跡を続けるよ」

波美「それはいいけど…メルガルムはどうするの?」

萌菜「心配ないよ」

萌菜が指を刺した方向を見るとメルガルムの下に魔方陣が現れて、メルガルムはゆっくりと吸い込まれていき、魔方陣は消えた。

萌香「き、消えちゃったよ!?!?」

萌菜「大丈夫だよ、萌香姉さん。呼び出したら、メルガルムは出てくるよ。それにあの魔方陣内だったら、メルガルムは修復されるみたいだし」

…へエ、そうなんだ！

波美「…萌菜、どうしてそんなに詳しいの?」

萌菜「萌香姉さんが戦っていた時に頭の中に情報が全て流れてきた

の。…私の扱いはサブみたいだから」

兎に角、これで戦う事が出来るね…！

萌香「じゃあ、あの人の搜索を再開しよっか。…必ず見つけ出すよ。

…見つけ出して、必ず…罪を償えさせるから」

メルガルムとの出会い…。ここからが私の…いや、私達の本当の始まりだよ。

…だけど、この2年後に、私達の戦いだけじゃなく、三つの地球の戦いに巻き込まれるなんて、この時の私は知る由もなかったわ…。